

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装した
真の革命党を建設しよう

総括資料集

共産主義者同盟赤軍派
日本労働党建設準備委員会

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装した
真の革命党を建設しよう

総括資料集

共産主義者同盟赤軍派
日本労働党建設準備委員会

目 次

人民日報社説「各国の革命的人民の勝利への針路」		4
日本における反スターリン主義運動と 共産主義者——その組織論的総括	佐久間 元	6
自由への道	花園紀男	39
勝利への道	花園紀男	58
◇ 声明文 ◇ 「連合赤軍」の総括と 自己批判・闘争宣言	共産主義者同盟赤 軍派 / 日本労働党 建設準備委員会	97
総括の深化のために（そのⅠ）	花園紀男	113
総括の深化のために（そのⅡ）	花園紀男	139
川島豪同志への意見	花園紀男	154
A同志への手紙	花園紀男	157

各国の革命的人民の勝利への針路

一九六八年九月十八日

一九六二年九月十八日、毛沢東主席は、「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践とを結びつけること、これを真剣になしとげさえすれば、日本革命の勝利はまったく疑いない」という題辭をみずから書いて、日本の労働者の友人たちへ贈った。きょうはこの輝かしい題辭の書かれた六周年記念日にあたり、本紙は才一面に毛主席の筆になる題辭をのせた。毛主席のこの題辭は、日本人民の革命事業にとってだけでなく、世界各国人民の革命事業にとつてもきわめて重要で深遠な意義をもっている。

革命の理論がなければ、革命の運動はありえない。マルクス・レーニン主義は、世界プロレタリア階級のもっとも正しく、もっとも革命的な科学的思想の結晶であり、世界のどこにでもあてはまる普遍的真理である。各国のプロレタリア階級と広範な革命的人民は、ひとたびマルクス・レーニン主義を把握すれば、くみつくせない知恵と力を生みだし、革命事業の勝利の発展を促すことができる。マ

ルクス・レーニン主義と各国の革命の具体的実践とを結びつけること、これこそ各国人民の革命的事業が勝利をおさめるためのもっとも根本的な保証である。

毛主席は中国革命を指導する過程で、「マルクス主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践を完全に適切に統一しなければならぬ」「マルクス・レーニン主義の理論を中国革命の実践に密接に結びつけること、それがわが党の一貫した思想的原則である」とくりかえしわれわれに教えてきた。中国共産党は、まさにこのようにしてきたのである。マルクス・レーニン主義の普遍的真理は、ひとたび中国のプロレタリア階級と広範な人民大衆の革命闘争の実践と結びつくと、中国人の百戦百勝の武器となるのである。

毛沢東同志は、理論と実践とを結びつけることを、「的があつて矢をはなつ」ことに生きいきとたどっている。毛沢東同志は、まさに、マルクス・レーニン主義の「矢」で中国革命の「的」を射て、

中国の民主主義革命、社会主義革命の時期の、またプロレタリア独裁のものでひきつづき革命をおこなうことについての一連の系統的な理論、路線、方針、政策および戦術問題を解決し、それによって中国革命を勝利から勝利へと向かわせたのである。

マルクス・レーニン主義と自国の革命の具体的実践とを結びつけるというこの原則は、中国革命にも適用することができるし、日本とすべての国ぐにの革命にも適用することができる。いいかえれば、各国のプロレタリア階級の党は、一方では、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を堅持しなければならず、同時に、実生活から出発して、大衆と密接に結びつき、大衆闘争の経験をたえず総括し、自国の情況に合致する政策と戦術を独自の制定し、実行しなければならぬ、ということである。フルシチョフ修正主義集団は、「マルクス・レーニン主義を創造的に発展させる」などという口実で、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を放棄した。これは、かけ値なしの日和見主義、つまり現代修正主義である。

日共官本修正主義裏切り者集団は、日本をめぐる「内外の条件」の相違を口実にし、「自主独立」などという看板をかかげているが、その実、これはすべてウソ八百である。かれらも口先ではマルクス・レーニン主義をとなえているが、かれらがやっきになって攻撃し、反対しているのは、マルクス・レーニン主義のもっとも根本的なものにほかならない。かれらは極力、マルクス・レーニン主義をねじまげ、骨抜きにし、暴力革命に反対し、武力による権力奪取に反対し、「平和革命」なるものを鼓吹し、「議会の道」なるものをおしすすめている。これは、実際には、革命を望まず、革命を裏切り、

革命に反対することなのである。かれらはまぎれもなく一群のマルクス・レーニン主義の恥すべき裏切り者であり、日本の革命事業の恥すべき裏切り者である。

こんにち、日本人民の革命闘争はすさまじい勢いでまきおこっている。日本人民の革命的自覚はたえず高まっており、真のマルクス・レーニン主義の左派の隊列は日とともに成長し、強大になってきている。日本のプロレタリア革命派と広範な革命的人民は、官本修正主義集団に大いにむほんをおこして、真のマルクス・レーニン主義を、アメリカ帝国主義に反対し、日本の独占ブルジョア階級に反対し、現代修正主義に反対するかれらの強力な武器にしている。日本革命の情勢はますますよくなってきている。日本のプロレタリア革命派は、いっそう真剣な態度で真のマルクス・レーニン主義を日本人民の革命闘争の実践に具体的に適用し、日本の具体的情況から出発して、日本革命の一連の戦略・戦術問題を解決し、日本革命をたえず前進させることが自分たちのまえにおかれている栄光で敵敵な任務だということを認識してきている。日本革命が勝利をおさめる過程は、必然的に、マルクス・レーニン主義と日本革命の具体的実践とが日ましかたかく結びつく過程である。

われわれは、マルクス・レーニン主義で武装した日本の真の革命党が必ず革命闘争の烈火のなかから生まれるにちがいない、と確信している。この党は日本のプロレタリア階級と広範な人民を指導し、長期にわたる曲がりくねった闘争を経、あらゆる苦難や危険にうち勝って、革命の最後の勝利をたたかいとるであろう。

日本における反スターリン主義運動と 共産主義者——その組織論的総括

佐久間 元

まえがき

安保闘争の敗北とほとんど時を同じくして表面化したブンドの分裂抗争は、ついにその崩壊にまで達した。一つの闘争において、勝利こそは最高の賞讃であるというるならば、その敗北と挫折こそは最強力を批判であるといえることができる。崩壊してしまったブンドの運命に関するこれほど適切な表現が他にありうるだろうか。

敗北と挫折には、終始、つきまとうた誤謬に対する痛恨の想いだけがこびりついてはなれない。だからこそ、敗北とわれわれの挫折とを必然ならしめた諸原因を分析することこそが、いま必要なのである。肝心なことは、分析することなのであって、「蛙の面に小便」のたとえよろしくふるまって自己弁護にうつつをぬかすことでも、大仰な身振りで悲痛な言葉を吐きちらし、自己批判めいた道化の役をわが身にふりあてることでもないであろう。

いまでは、ブンドの破産を認めまいとする一切の詭弁はかけをひ

そめてしまった。ブンドの破産と崩壊の事実こそは、もはやまぎれもないことである。しかし、それにしてもなお、この疑問の余地のないことを虚心に直視すること、その必然的な諸原因を分析することとは、おのずから別なことに属する。反スターリン主義運動の前途に横たわる困難さを一べつするだけでも、このような分析、われわれの運動の客体的主體的条件的条件を考察することの必要はうなづけられずである。

そしてこのことは、「自らの責任」「主体的態度」などと、心地よくひびく言葉をはきだしながら、われとわが身を鞭打ってみせることでは決してない。それならばザン梅の場に足を踏み入れるだけで事足りる。ブンドの崩壊にともなう様々な「自己批判」があらわれた。悲痛なトーンをもったそれは、その無類の卒直さを貫くものとして誇るべきだ！だが、それが俗にいう、意地も張りも失い見栄も外聞も忘れた見地心理のヒダの、ただそれだけの産物でし

かなかつたとすれば、これはまたなんとたたえられるべきであろうか？

ブンドの崩壊は、まさに全反スターリン主義運動の危機としてとらえ返される必要があるとはしばしば語られている。だが、その際にある人々は、ブンドの崩壊（破産の、ではない！）の感覚から一足とびに、革共同全国委員会の一貫した「正当性と正統性」（黒田）への絶対的承認へと向ってしまった。ここにおいて、一切の思弁はその活動を停止し、今後、知的活動はもっぱら革共同全国委員会のみ継続され、栄光はここによりみかえる。全反スターリン主義運動の危機の時期に於て自覚されるべき現在を、われわれは、反スターリン主義的プロレタリア運動の萌芽の、苦難にみちた時期として、言葉の全き意味における過去として把握しなければならぬ。この矛盾と混乱にみちた過渡期はこれからもたえずくりかえされるにちがいないのであって、これはつねに、より高い次元における過渡をよびますことによつてしか批判されないであろうことも自覚しなければならぬ。

この意味からすれば、一方は誤謬の山なす堆積、他方は正当性の栄光にみちる体現、などと思ひこむのはなほだしい錯誤といわねばならない。ブンドに対して「小ブル急進主義」「ブランキスト集団」などと命名するだけの批判は、実は、そのことによつて批判者それ自身を批判する通路を閉ざさざるをえなくなるであろう。

ブンドが活動したことの必然性を、その必然性において深刻に反省するのでなければ、反スターリン主義的プロレタリア運動をより高い次元に実現することはできなくなるであろう。ブンドの批判は、

ブンドと他の反スターリン主義諸組織、公認の左翼指導部との現実的にかかりあいの中において、運動の過程それ自体との接点において、そこに存在した矛盾と混乱にみちた一切のものを、たんに否定されるべき象徴だけに見たされたものとしてではなく分析することによつてだけ、前述の課題に込めることをよくしえよう。

ブンド崩壊の後にまたもや発生した無謬性の絶対化は、「いままではお恥かしいほどまちがっていたが、今度こそは！」という気負の勇壮さに比例して、今後の我々の運動の困難さへの軽視をやすやすと許すことになるばかりである。それだけは絶対にさけなければならぬのだ。

われわれの意図はすでに明瞭である。すべての運動、すべての組織を同次元におし並べておいて、過去の総括を試みる意図は、われわれにはいささかもない。われわれの試みは、現在、公認指導部の猛々しい復活を目の前にみながら、個々分散的に地方的サークル化の状況に追いこまれ、なおかつ、公認指導部に対して執拗な闘争を挑んでいる反スターリン主義的前衛部分を、現段階でささむしい前衛にまで高め、かつ戦線を統一していくための、現実的だが困難な課題を推進する一つの試み以外のものではない。過去の神聖視と同時に過渡期の機械的抹殺は断乎としてこれを拒否しなければならぬ。それが今後におけるすぐれた実践的な課題だからである。われわれは、この総括のための試みを自己の活動の深い反省と責任のうえに提出する。

(一)

一九五八年の十二月十日に共産主義者同盟が結成された時、すで

に存在した日本革命的共産主義者同盟（一九五七年十二月一日、日本トロツキスト同盟から改称Vの内部で、このことをめぐって異なる見解の対立が生じた。一つの見解は、ブンドの成立を目して「探究理論」に責任をかせ、さらにもう一つの見解では、「いわゆる学連フラクに対するわれわれの組織戦術の失敗にもとづく」(1)ものとされた。われわれは、このようなやりとりの、いわば身勝手さを笑おうとは思わない。ただ、現実の運動の中でブンド成立の根拠を探ってみようと思えるだけである。

〔(1)例えば、黒田寛一「革命的マルクス主義とは何か?」(一九五九年一月二八日執筆V参照)〕

日本の反スターリン主義運動は当然のことながら、突如として生じたものではなかった。それはブンドの成立以前にいわば前史ともみられる長い歴史をもっている。すなわち、主として、マルクス主義哲学の領域でつづけられてきたイデオロギー闘争の執拗なくりかえしが存在してきた。

それは、「マルクス主義の創造的發展」をスローガンとする公認のマルクス主義が、実は、その客観主義的歪曲に他ならぬことに對する追求であり、戦後の民科哲学部会が、戦前の唯物論研究会の継承者であることに對する異端的な部分としてたとえば、梯明秀、梅本克己、武谷三男、三浦つとむ、田中吉六、および黒田寛一などの人々によって展開された。このような哲学上の理論闘争の成果が、日本の反スターリン主義運動にひきつがれ、またひきつがれていくこととしていることは、この運動の本質的な特徴として、確認されることが必要である。われわれは同時に、ブンドの全發展史の中で、

動の撰取の上に立った国際共産主義運動の批判的検討にまで漸やく進しようとしていた。

日共東大細胞機関紙「マルクス・レーニン主義」才九号(一九五八年一月Vに掲載された山口一理の論文「十月革命の道とわれわれの道は、その先駆的なものとなったのであり、与えた影響は非常に大なるものがあつた。同時に、この号は細胞委員会の主張において禁句となつていた「プロレタリア世界革命万才!」のスローガンを掲げて決意のほどを示した。さらに、同年三月の日共東大細胞総会は、平和共存の立場を放棄し、同年五月、日本反戦学生同盟は社会主義学生同盟と改称された。

山口一理はすでに「マルクス・レーニン主義」才四号(一九五七年四月Vにおいて、「客体化した歴史法則から人間をしめ出して客観主義化したマルクス主義」(2)とかいて、黒田寛一の「経済学と弁証法」(一九五六年七月発行Vなどを撰取しつつあつたが、才九号の論文では次のようにかいてレーニン主義とトロツキズムを和解させようと試みた。「今日の日和見主義に對する闘争と共に、レーニンの弁証法的な、具体的現実即した論理まで水に流してしまつて、絶對的に労働民主独裁論を否定しようとする反スターリン主義の闘士たち」(3)と。

(2)「マルクス・レーニン主義」才四号一五頁

(3) 同二八頁

明らかに、トロツキスト連盟に對するこの挑戦は思想サークル的な組織の現状に對する否定の意味を含むものであつた。われわれは、このことの結果論的にみた場合の弱点を十分認めると同時に、いま

この根幹的なことの批判的撰取の希薄さを確認しておきたいと思う。だが、スターリン主義に對する哲学的批判が、すでにそこにとどまりえず、革命戦略における批判として現実政治の領域にまでつき進むためには対馬忠行、宇野弘蔵、などの理論的成果を自己のものとするとも一九五六年の「スターリン批判」とハンガリー革命が必要であつた。反スターリン主義的思想的発酵は、ここにトロツキスト連盟(才四号)インターナショナル日本支部結成のための準備会Vとして組織的な実を結ぶことになつた。それは機関紙「叛逆者」

(一九五七年五月「才四号)インターナショナル」と改題Vなどを宣伝の武器として、日共京都府委員会の周辺、全学連内部などで、日共内部の左翼反対派へのオルグを開始した。

このような活動はトロツキスト運動の紹介などで一定の効果をあげたにはちがいがなかったが、運動自体としては、同時に、才四号)インターナショナルの枠内における左翼反対派の連合組織としての限界をバクローしていくこととなつた。すなわち「反帝、労働者国家無条件擁護」の才四号)インター教条派(バプロ派)と「反帝、反スターリニズム」の探究派との間に、ソ連論を契機として始まつた論争は、一九五八年八月の日本革命的共産主義者同盟の分裂を生むこととなつたのである。

他方、トロツキスト組織内部の理論的組織的分裂を背景にしたが、代々木中央に對する左翼反対派としての党内分派闘争を推進していた学生戦線の日共細胞は、平和運動をブチブル平和主義の運動から反帝、反戦のプロレタリア運動へ転換させるべく左翼スターリン主義的に戦う立場から、さらに歩を進めて、トロツキズム運

少し事実の検討を行なおうと思う。いわば、この対立が、この時期において思想宣伝的活動を余儀なくされてきたトロツキスト運動と、代々木の党内反対派として現実の大衆闘争を推進していた学生戦線の革命的左翼との間を微妙に區別する底流をなしたのであるから。

一九五八年の半ばに現実化した学生運動の転換ならびに同年暮のブンドの成立に對して革共同の宣伝活動が与えた影響は、絶対に否定されるべきではないであらう。しかし、それにもかかわらず、新しい組織成立の根拠を、それに影響のあつた既存の諸組織の働きかけだけから考察しようとするならば、組織成立の裏の根拠、歴史的意思を看過することになるであらうことは容易にうなづけるはずである。

革共同のいわゆる才二次分裂(一九五九年八月全国委員会派と関西派が生れたVの直後にかかれた革共同全国委(黒田執筆)の一文書は、ブンドの成立に對して次のようにかいてある。「もし我々の内部の一部の同志がとつた無原則的な行為と陰謀をただちに我々の組織力で断乎として粉砕しつつ、「学連新党」に對するわが同盟の原則的に統一した組織戦術をうちだし、この方針のもとに、上部でのとりひきではなく下からのたたかひが組織化されさえしたならば、我々は、革命的左翼の再編成のヘゲモニーをにぎりつつ四分五裂をくいじめ、没理論的な陰謀によってではなく、公然たるイデオロギー闘争を通じて、わが同盟を飛躍的に發展させたいにちがいない。だが、それは、もちろん過去における学生戦線の内部へのわれわれの浸透力にかかる問題である。そしてまた関西派トロツキストのよる組織方針への公然たる批判が欠如していた(……………)以上、

わが同盟と対立した「共産主義者同盟」の成立を許す結果とならざるを得なかったことが自己批判されなければならない」(4)と。

(4) 黒田寛一「組織論序説」二二頁

これはまた、なんと歯切れの悪い「自己批判」というべきであろうか。明らかに、事の本質は「……さえしなれば」ではなく、「なぜ出来なかったか？」を究明することのうちにあるのだ。

才一に、関西派のいわゆる「エセ革命方針」である組織方針を粉砕することが何故出来なかったのか？

才二に、才四インターの方針をめぐる理論的対立は、そもそも革共同の内部においてだけ議論されるべき性質のものであったのだろうか？

才一の問題に関しては、関西派のいわゆる「たえざる下からの組織づくり」という困難を聞いてほとんど行なわず、ただ上から、大衆組織の指導部の革命的分子を大量にあやつり、かつ背後取引によって彼らそのまま前衛組織の成員に横すべりさせるといふ組織方針」(5)を「エセ革命の方針」と呼ぶことの原則的正しさを現実の具体的過程においていかに貫らぬか、かつ貫らぬきえたか、ということなのである。

(5) 同 二二頁

周知の如く、日本学生運動は砂川闘争、勤評反対闘争を独自の勢力として最も果敢な闘いを挑んだのであるが、これには一九五五年七月の日共六全共以後の日共学生細胞の独自の方針によるところが多分であった。この革命的左翼は、代々木中央の右翼日和見主義的戦略方針に叛旗をひるがえして党中央と対立抗争しつつ、きびしい自

己変革を経験させられていた。一九五八年五月の全学連才一回大会における左右両翼の衝突と「六・一事件」は、その端的な現われに他ならず、ことに代々木党本部における全学連フラクションと党中央との衝突、いわゆる「六・一事件」は当然起るべくして起ったのであった。だが同時に、この事件は党内分派闘争における明確な方針の欠如の故に、結果的にみるならば、党中央の仕掛けたわなにおとしこまれたといえないこともなかった。代々木の官僚どもは、これを契機にして一層の締めつけを開始し、学生細胞は党中央に屈服して党内にとどまるか、ほんのわずかな党中央からの逸脱にも加えられる弾圧に抗して党から排除されるかの岐路に否応なくたたされたのである。

すでに、この時期には学生戦線における革命的部分が、数人数十人の規模ではなく、全国的な規模で代々木の党内闘争の枠を越えることを余儀なくされていたのである。だから、事態はすでに組織問題を日程にのぼらせるところにまできていたということができよう。このような大きな転換が、たんに日共の全学連フラクションだけのものと考えるのはまちがっている。それはまさに、せいぜいのところ全学連大会代議員中の学生細胞の内部での転換というのでは決してなく、学生運動を支えていた全学生細胞員の焦眉の課題となっていたのである。その中心をなしたのが、東京においては日共東大細胞であり、早稲田大学細胞であったことはその通りだが、反スターリン主義の思想的確立の努力は、早稲田においても一九五七年早々に、ある程度大衆的な規模において行なわれていた。全国的には程度の差こそあれ、同じような努力は続けられていたわけで、全

国的には数ヶ月にわたって、われわれの左翼反対派フラクション機関紙が統一の指導を開始していた。

一九五八年の後半を通じて、内部にこのような自己変革の努力を積み重ねながらきた我々が、現実の加速度的な進歩に対処するべく、代々木の外部におけるなんらかの全国的組織を必要とするに至った際に、それが全学連フラクションの問題として浮かび上ったのも、しごく当然のことであったといわねばならない。

たしかに、革共同の一部Aあるいは多数か？Vによって執拗な陰謀は行なわれた。他方、全学連中央フラクションにおける逡巡も明らかであった。だが、それにもかかわらず、ブンド成立の事情を全学連指導部との取引においてみようとするのは、すでにのべたような転換の特徴を看取することのない皮相な観察といえるであろう。多少とも学生運動の事情に通ずるものならば、全学連指導部が、現象的にはともかくとして本質的には、いくつかの地方、及び東京の拠点大学における圧力ないしは支持なしには、殆んど無力であることがわかるであろう。

このことを確認すれば、革共同の黒田のいうところは、まさに「過去における学生戦線の内部へのAかれらのV浸透力にかかわる問題」だったのであることがわかる。それゆえに、このことは内部分裂をはらんだ思想宣伝団体としての、当時の革共同が大衆運動の前衛部分を結集する政治組織の設立に対して、いかにかわるべきかという問題に他ならなかったのである。

黒田のいかたように、一九五八年秋の革共同は革命的学生の間にスターリン主義批判が次第に浸透を始め、トロツキズムが受け入

れられていくにつれて、すでに組織としての最低の機能すら喪失してしまい、分裂抗争する一握りの秘密めかした組織となってしまう。このことは、革共同が才四インターの枠内における左翼反対派の連合世帯であったことから必然的だったのである。それはこの時すでに、自己の役割を果たした組織にすぎず、その発展を保證する生命力は、かりに黒田派を除いたところで、すでに枯渇してしまつたのである。

しかも尚、これをもって「前衛組織」というならば、その物神化はここにきわまるものといわねばならないであろう。すでに必然的に機能を喪失してしまつた革共同の内部にしがみついていたきわめて少数の実体しかもたなかつた「探究」派こそは、この幻想的な、「前衛組織」への物神化のために、この時期にはなんらなす戦術をもたなかつたのである。このことの中に、原則的には正しい前掲の黒田の「自己批判」が、ひとりよがりの自己弁護にすぎないこと理由がある。

明らかに現実には、革共同の内外を問わず才四インター教条主義との闘争、主として学生戦線の前衛部分を結集する全国的な政治組織創設のためのイデオロギー闘争を必要とする段階に入っていた。反スターリン主義の思想的獲得と、そのための学習活動は看過することが出来ないにもかかわらず、その組織のための闘争は、その学習活動自体の中にそっくりそのまま含まれるものでは決してない。

次に才二の問題にうつらう。最初トロツキスト連盟として組織された革共同は、国際的な反スターリン主義組織として存在する才四インターナショナルの日本支

部を創設するための準備活動とみなされていた。そして最初から、オ四インターナショナル内部の対立を自己の内部に反映していたのである。

オ四インターナショナルは、トロツキーによって一九三八年に創設されたときの壮大なる展望にもかかわらず、その後の歴史において、ただの一度たりとも現実的勢力とはなりえなかったのであるが、同時に、フランスにおけるドゴールとの闘争において救い難い改良主義を露呈し、「反帝労働者国家無条件擁護」を掲げる主流のトロ派は、そのプロ・スターリニストの性格を顕著に示していた。このようなオ四インターナショナルの日本支部として、日本における反スターリン主義の組織化を議論することは、トロツキズム運動の初期に現われたトロツキスト連盟などのような宣伝的組織の場合にはその歴史的条件からみて必然的なものがあつたとはいふもの、一九五八年秋の時期には甚々しいセクト主義でしかなかった。オ一には、オ四インターの主流を占めるパブロ派の革命方針におけるトロツキー教条主義の性格は、すでに日本の反スターリン主義運動の内部で現実的に障害となり越えられようとしていたからであつた。そのうへ、パブロ派は「加入戦術」（この戦術はオ四インター、フランス支部によって、かれらが人民戦線運動において無惨に敗退した後、方針を深刻に検討する代りとして採用された組織的な一歩後退を原則にまで高めたものである）と「労働者国家無条件擁護」とを、支部結成のための承認事項としていたのであるから、そもそも日本支部は問題にすらなりえなかったのである。

オ二には、オ四インターがこのようなものであるにもかかわらず

革共同全国委が、今日にいたって、ソ連邦に歪曲せる労働者国家説を放棄することになったのと同時に、かれらがオ四インターの限界をつぎとめるに到つたのかどうか明らかではないが、「まずもって：われわれのなすべき任務は、：オ四のV分裂の止揚という革命的展望のもとに、日本プロレタリアートの真実の前衛をうちたて、その解放闘争の先頭にたつべきだといふ点」にあるのだなどという主張は、国際的なスターリン主義組織と現実的に闘争し、それにうちかつことの出来るインターナショナルをいかにして創設するかの展望の全き放棄に通ずるものといわねばならない。

果して、オ四インターの二十年の歴史においてその「限界」は見出しえないのか？今後さらに、数年あるいは数十年のオ四インターの未来において、それが更に手ひどく破綻するであろう時まで待てというのか？あるいは、もっとよくその歴史に通じてから態度を決定しても遅くないとでもいうのか？

だが、オ四インターの最初の三ヶ年の革命的精神にのっとり、その現実の分裂抗争を止揚する方途は、決してオ四インターの組織的限界の中に、現在の反スターリン主義の諸潮流を統一することではないことは明白ではないだろうか。革命運動の歴史において、一つの組織の「正統性」を容認することは決して必要ではないのである。むしろ現実的な展望は、日本における反スターリン主義運動も含めて、「スターリン批判」以後、殊に現実化してきた公認指導部をのみだしつつある革命的左翼を、オ四インターの諸潮流を含めて国際的に統一することのうちにこそある。してみれば、「オ四インター政治綱領の正当性」という黒田の理解の中にこそかれらの秘密を解

革共同の一部の人々によって行なわれた「加入戦術」と「無条件よろご」とを承認して日本支部を結成するという組織戦術の非現実的な観念性である。

この非現実性は、後になって一九五九年九月に発表された革共同委の論旨にもうかがわれる。ここでは、ブンドの「新しいインターナショナル」の展望が「極左主義」として批判されている。ブンドは「日共から分離しつつもオ四インターナショナルをゴミ箱に投げすてた」とされており、真に正しい方針は「今日のオ四インターナショナルの分裂を止揚するという組織方針」であり、「このためにこそわれわれは、オ四インターナショナル、パブロ官僚に盲従することも、またキャンノン派と直結することもいま直ちに行なわず、分裂し抗争しつつある今日のオ四インターナショナル最初の三ヶ年の精神をよみがえらせ、その現状を止揚するために、実践的にも理論的にも全力をあげて闘うべきである」(6)と主張されている。

(6)黒田「組織論序説」七〇、七三頁

かれらはブンドの展望に対して「いかにしてつくるか？」がない非現実的な展望だと非難し、「そもそも、われわれは無から有を創造することはできない。レーニンがオ二インターナショナルの内部において、そしてトロツキーが墮落したオ三インターナショナルの内部において、そうしたように、我々は、オ四インターナショナルそのものの内部において、その限界をつぎとめることなしには、新しいインターナショナルを提唱することは決してできない。」(7)と主張した。

(7)同 七四頁

く鍵が存在してはいないだろうか。

ブンド結成をめぐる陰謀には確かにさまざまのものがあつた。こうしたことに影響されて、ブンドはその成員が個々の日共細胞において激しい内部闘争の結果として形成されるという本来的に正しい形を含みつつ結成されながら、なおかつ若干の雑多な要素を含ませるをえなかったのである。

「探究」派は、革共同への物神崇拜（「長子権」と「正当性」とをもった「前衛組織」というわけなのだ）のために、その官僚的規律と機能喪失とによって活動力を奪われてしまい、反スターリン主義運動の大衆的基盤の獲得というより高い段階において、その内部におけるイデオロギー闘争を有効に組織しえずに終つてしまふことになった。

ブンド成立の根拠は、まさに、日本における大衆闘争の発展と代々木党内闘争の発展とによってブチブルの学生運動内部の反スターリン主義運動が自己の政治的指導部を必要とし、またそのことよって、初期の思想宣伝団体的革共同を止揚しなければ一歩も前進しえない時期を迎えていたことであつたのである。その意義もまたここにあつた。

それ故、この現実がすでにブンドの破産をまつまでもなく、反スターリン主義的プロレタリア党創結のための困難な活動の過渡的性格、多少とも雑多な要素のまじりあうにえざる危険性を示すものであり、いかにそれを克服するかという組織戦術の必要性を語るものであつた。

だが、ブンドの成立過程から当然に予想された、多少とも雑多な

要素（最も多くスターリン主義残滓をつけて、後に関西派を通じて革共同に入りこんだ都学連グループはもちろん、残余の部分における思想的把握の濃淡に至るまで）をもって、ブンド成立の意義自体を否定することは決して現実的ではありえない。すでに明らかにしたように左翼反対派の政治的組織的結集はなによりもまず闘争の現実からの要請であったのであり、その綱領的課題は成文化された政治綱領がなかったにもかかわらず、基本的な一致においてかちとられていた。それは、一国社会主義論にもとづく平和共存戦略を否定して永久革命の立場にたつた世界革命、二段階革命戦略を否定するプロレタリア革命の主張に他ならなかった。階級闘争の現実における代々木の一切の日和見主義は、すべて、この基本的なわれわれの立場からとらえ返され、弾劾された。

われわれの多少とも大衆的キバンをもった政治組織の創造は、なによりも反スターリン主義の思想的確立を中核としてもちつつ同時に、このような綱領的課題における一致をもってまず行なわれる他はないのである。そうではなくて、反スターリン主義の思想的獲得（学習活動による）による組織づくりの展望をもつことは、それが百％トロツキズムの主張であろうと、百％革命的マルクス主義の主張であろうとにかかわらず、現実の客観的推移によって必要とされる前衛主体の組織化から立ち遅れざるをえないのであろう。

革共同全国委の組織的展望は、それが言葉としてはいかように語られていようと、現実には、かれらの運動論の把握の浅さによって純粹思想の組織化への傾斜を示していることは、のちほど明らかにするであろう。

今日になって革共同全国委の機関紙「前進」の才二号は次のようにかいている。「わが同盟の理論的影響力が広汎な学生生活動家を把握えつつある中で、全体の学生戦線のイニシアティブを掌握した全学連日共東大細胞の指導的學生党員は探究派理論の剽窃をこととしながら五八年末擬似革命家集団、共産主義者同盟をつくりあげていったのである」と。

このような発想こそが複雑な歴史を観念的に単純化し、自己の活動を合理化してみせる典型的なやり方であろう。そもそも「わが同盟」とはなにを指しているのであるか？ もちろん、全国委が結成された時期が一九五九年九月であったということに主張するつもりはまったくないが、それにしても、ブンド結成の歴史の必然性に視点をすえつつ革共同全国委の活動を結成以前にまでさかのぼって見るならばそれは黒田その人と、ほんの一握りの同志的結合であったにすぎず、およそ政治的潮流たりえなかったのではないか。

この際「探究」理論について云々することは見当ちがいがいというものである。すでに現実には、具体的な政治方針の確立を要求していたのである。今日の全国委の中心的メンバーが一九五九年の三月に至る頃まで、「労働者国家無条件擁護」を含む才四インテリパブロ派が積極的擁護者であったことは周知の事実である。

また、革共同の「探究」派が安保闘争においてその思想的えいきより力以外の点では、その初期の活動において具体的な闘争方針を提起しえなかったことも、かれらの自己批判を待つまでもないことである。

当時、安保闘争の把握をめぐる日共と我々の間には、アメリカ帝

公認の左翼指導部の存在が非常に大きく、労働者階級そのものが容易にその指導を拒否できないでいる状態にあっては、反対派の立場を思想的に獲得すること、反スターリン主義のイデオロギー闘争を行なうことは、もちろん絶対に無視しえない重要性をもっている。それは、これをなくしてはいかなる組織的結果も語りえないほどのものである。しかしながら、革命的なプロレタリア前衛による反スターリン主義のためのイデオロギー闘争は、不断の学習による革命的マルクス主義の把握であると同時に、それが階級闘争の場への適用（政治的実践）と新しい理論の創造（理論的実践）との活動に媒介されておしすすめられるものであることを忘れてはならないのである。学習活動による革命的マルクス主義の把握がそれ自体として自己目的的に主張されるならば、これは政治組織にふさわしくないものとなってしまふ。そこにあるのは、このような学習活動そのものが過渡的な政治活動の段階として固定的に把握されるか、あるいは現段階における政治活動のすべてであると把握されるかという錯倒した認識さえ生れよう。ブンド成立の意義はすでに明らかにならうに、このような段階を政治的、組織的に革命理論の大胆な創造としてのりこえるところにあったのであり、ここにおいて左翼反対派のイデオロギー闘争が新しい段階に入ったことを示すものであった。だから、それが挫折したことをもって、そもそも初めからにおける思想的把握の弱さ、スターリン主義からの脱却の不十分さを指摘することは、それ自体として正しくあっても、この新しい段階を理解せず、この段階におけるイデオロギー闘争の形態を理解することのない結果論的批判でしかないのである。

国主義に対する日本ブルジョアジーの従属の問題、あるいは中立化をめぐる問題などが、現実の闘争と不可分の重要性をおびて激しく闘われていたのであって、殊に闘争方針のなかでこれを具体化することなしには、我々の活動は一步たりとも前進させることができなかったという事情が存在した。

このような状況の中で一九五九年八月、当時、革共同の内部でいわゆる関西派に対抗するべく「探究派」によって綱領草案の対案として提出された「M草案」は、ついに綱領として日の目をみるに到らないうちにむられたとはいえないものの、その間の事情を多く鍵を与えるであろう。

すなわち、この時期に彼らは日本国家権力の規定を次のように提出している。「今や日本資本主義は、アメリカ帝国主義者の軍事戦略のもとに再編成され、世界資本主義の一環としての地位が与えられた。このような軍事的、経済的従属化、政治的表現が、日本国家の形式的独立であった。「しかも日本資本主義は、世界帝国主義の一環をなし、経済的軍事的には、アメリカ帝国主義に侵略されている」（共産主義者才二号一〇一頁）と。

この規定がかれらがいかに強弁しようとも日共中央の「現在日本を基本的に支配しているのは、アメリカ帝国主義と、それに従属する同盟関係がある日本の独占資本であり、わが国は、高度な資本主義国でありながら、アメリカ帝国主義に半ば占領された事実上従属国となっている」という規定と五十歩百歩のものであったことは否定すべくもないであろう。このような規定は決して偶然ではなく、戦後の日本資本主義の壊滅、復活の過程を全てアメリカ帝国主義の

恣意によるものとする把握の必然的産物である。

これとブンドの分析（例えば「共産主義」才二号とを比較するならば、この問題に関するブンドの正当性は明白である。今日、かれらは右の規定に正しく変更を加えている（「安保闘争」武井健人）が、一九五九年の八月の時期に、他ならぬ全国委の基本的立場を確立することを目的とした重要な文章に現われた、このような決定的な誤謬は、かれらの現実の闘争方針に重大な影響を及ぼしたにちがいない。

安保闘争が成長しつつあった日本の反スターリン主義的左翼の真価を問う闘争であったことを考慮するならば、この点にはなしくずし的な自己批判を加えて素通りしつつ、他方において自己原則性の「正当性と正統性」とを抽象的に高主張するやり方をとる全国委の態度は不毛なものに終るにちがいない。

なぜなら、反スターリン主義左翼の理論的統一は、革命理論の創造活動によってたえず媒介され断絶に具体的な政治方針としてプロレタリアートに提起され、その階級闘争によって媒介される運動をぬきにするならば、そのかぎりでは正しくあっても観念的抽象性を一歩たりともぬけてくることは出来ないからである。

まして、現実の現実の闘争において反スターリン主義左翼を試していたのである。したがってこの新たな段階を自覚することのない原則性の強調は、はなはだしい欺瞞であるか、思想宣伝サークルにふさわしい不毛の神話でしかないであろう。

本論は主として組織論的観点からの総括であるが、今後、政治的総括ならびに、革命の戦略、戦術の具体化のための活動がいっそう

活発に行なわれることが必要であろう。われわれもこの活動の一担をになおうと思ふ。

〔二〕

一九五八年の階級闘争は前年から進められた不況下での合理化によって凄惨な色彩を帯びることになった。

夏から秋にかけて、日教組、全通の闘いと共に、共同製本、日産化学、王子製紙、小西六などの闘いが続発した。

それらの闘いは、いわばブルジョアジーの攻撃によって余儀なくされたいわば受身のものだったのであり、個々に分断され、撃破されていくこの闘いの性格を、防衛から積極的攻撃的なものとするうえには日教組と全通との闘いが鍵を握るものであった。しかしその日教組の勤評闘争は、九・一五のヤマを越えて小ブルの動揺を見せはじめ、清算主義的偏向におおわれはじめていた。

このような時に、共産党は道徳教育研修反対闘争に全力を挙げていた全学連を極左的挑発として誹謗し、他方では長谷川理論を支持して、事実上の闘争停止を再才した。この党七回大会をはじめとして、国鉄、日教組、総評など、いずれの大会も「低姿勢」を打ち出すことによって下部労働者の不満をかっていた。

十月十五日に岸政府が警職法を提出したときのプロレタリアートの状況はこのようなものであった。だが十月十五日が事態を大きく変えることとなった。分断されていた労働者の闘いが、炭労の攻撃に支えられつつ、中間層を巻きこんで一斉の進撃に移っていった。だが労働運動の指導部がこのような闘争の阻止のために躍起となつたのはいつもの通りであった。十月二十八日のゼネストが十一月五

日迄のばされ、四日の晩には電車ストップの計画が一つ一つつぶされていった。その上、このストライキによって政府の動揺が始ったときに、十一月六日、七日、の追撃戦を忽然と取止め二十六日まで延期してしまつたのも彼等であった。

闘争における公認指導部の数々の裏切と闘った左翼反対派の内部にもいくつかの相違が生れていた。革共同の才一次分裂によって別個に組織されたトロツキスト同志会は十一月五日のゼネストによって生じた階級状況の中で「国民会議に責任を持つ社会党政府」なる方針を提起した。周知のように十一月六日以降の国会を自然休会とすることによって冷却期間を設け、プロレタリアートの闘争を議会主義の枠内に押し込めようとしたブルジョアジーの陰謀に応えたものは、六日以後の闘争を自ら中止して妥協を成立させ、岸内閣打倒のスローガンを下して「警職法から安保へ」を掲げた公認の指導部であった。この時にあたって唯一の革命の方針たり得たのは、追撃の手をゆるめることなく、岸内閣打倒のために出来るだけ早く、強力なゼネストを組織することだけであったが、それは真の前衛組織の存在と、その指導によるプロレタリアートの階級意識の昂揚とがあつてはじめて可能であるような闘争に違ひなかつた。

トロツキスト同志会の方針は、このことを看過して議会主義的幻想に自ら組み直すことではなかつたばかりか、労働官僚の牛耳るところであった国民会議の本質を見ることのできない改良主義に他ならず、社会党への加入戦術の悪しき結果でしなかつたのである。革共同そのものは、このトロツキスト同志会の方針には反対しながらも、二・五以後の状況において革命的学生の指導するゼネスト

によって労働運動を前進させようとする目論み、この時期にゼネストそのものが空語に終る必然性を理解し得ず、「今や資本制打倒のスローガンが必要だ」などの主観主義に走ってしまった。

これらとちがってブンドに結集しようとした部分は、「前衛党の欠如を、運動としての学生運動によって代置しよう」と試みるのは小ブルジョアの「空想的社会主義への転落を物語るものである」ことを理解し、「次の行動を一層プロレタリアートが自覚的な行動として闘える素地を作る」ために学生を革命的中核に組織し、育成することを提起していたのであったし「闘争を通じて獲得さるべき唯一無二の成果」は個々の改良的闘争の成果でなくして、「それらの闘いを通じて最終的にブルジョア支配を打倒するまでに到るプロレタリアートの階級意識」をいかに錬磨していくか、いかに階級の連帯と闘争の訓練を積重ねていくかであること、「革命指導部が存在していかないという事実」(1)などを主張していた。のちに見るよう、ブンドの歴史に於て失なわれた思想がここにはあつたのである。

(1)坂田静明「共産主義」才一号、二七頁。姫岡玲治（同九三—四頁）

したがって一九五八年の秋における論争は「加入戦術」や「労働者国家無条件擁護」などの才四インターの限界をめぐる原則的論議だけにとどまらず、すぐれた政治的な、大衆闘争の指導にかかわるものであった。ことに革共同の成員、あるいはシンパ（都学連グループの一部）などによって全学連才十三回大会をめぐり、三役を彼らだけで独占しようとする策動が行なわれたりしたため、対立は一層激しいものとなつていったのであった。

この論争にあっては、トロ同は「加入戦術」の絶対化及び「過渡的綱領」の教条主義的適用による改良主義への転落を示していたし、また革共同の場合は、主観的極左的偏向に犯されていたわけである。このことは、全学連才十三回大会で彼らが中央指導部を掌握した際に次のような形をとることになった。すなわち、彼らはイデオロギー活動の重要性を強調することによって大衆団体である全学連の内部へ、彼等のパブロ主義的方針をそのままの言葉で持込むと同時に、他方、行動に於ては、ストライキなどの闘争を一揆主義としてしりぞけ、後退期の戦術として「体制整備」の必要を強調して全国的政治闘争そのものを、放棄してしまつたのである。

このような状況にあったから、動評、警職法などの諸闘争を革命的に闘い抜き、この闘争であらわになつた公認指導部の日和見主義を現実粉砕し、暴露することが非常に重要な課題となつたのであつた。こうした闘争が日本の労働者運動の前進のために、有する意義は極めて大きく、生れたばかりの反スターリン主義左翼がこの意義ある役割を担うことなしには、それは自らの任務を放棄したものと、いわねばならなかつた。

一九五九年三月二十五日に開かれたブンドの全国細胞代表者会議は、ブンドを革共同から正式に完全に分離することを決定した。この決定には、若干の考察が必要であらう。この決定は現在では革共同全国委によって「理論的分離主義」あるいは「前衛組織論を欠如した「大衆運動主義」として批判の対象とされている。

ブンドのいわゆる大衆運動主義なるものについては、とくに安保闘争の過程で問題となるわけであるが、それについては後にふれる

立といふことさえも、それが革命的实践によって媒介されねばならない、といふ問題を含んでいるのであり、主体の確立が今日の状況下における特殊に重要な課題であるとしても、それ自体独立させられるならば、完全な学習主義となるか、あるいは党を創造する活動と大衆運動の並列化とならざるを得ないであらう。

この意味からは、指導性の恒常的獲得とは左翼反対派による党建設の欠かすことのできない過程として把握されるべきであり、大衆運動主義なるレッテルはまさに結果的な批判のやり方にすぎないであらう。

「理論的分離の主張にしても、才四インター教条主義者の原則にまで高められた「加入戦術」にたいする批判として当時提出されたものであつて、理論の純粹化による機械的分離の主張などは決してなかつた。まして左翼反対派の統一行動、公認指導部の呪縛の下にある革命的部分への働きかけなどを排除するものではなかつた。

それは「日和見主義からの組織的分離に必然的にもなり過渡期の一時期における戦術、日和見主義的組織の内部に存在する革命的部分を自己の側に決定的に引きつけるために、その組織の内部において革命的宣伝、煽動をおこなわねばならない、といふ戦術」を否定したものでなく、それを「加入戦術として固定化し、絶対化して「原則問題」を把握し過渡期の一時期を、長期的な歴史的一時代にまで不当に拡大する第四インターナショナルの組織方針は基本的誤謬である」ことを指摘したものであつた。したがつてそれは「この過程において不可避的に存在する過渡期の一時期は、革命運動の利

として、この時期における問題点の考察にうつらう。ブンドが常に大衆運動の指導、そこにおける「指導性の恒常的獲得」(2)を重要視したのは、明らかにその成立の過程に帰因するものであることはずで見たとおりである。そしてこれが「全学連指導部をそっくりそのまま「反代々木化」させた」(3)結果であるといふ一義的に弾劾できない理由も明らかにした。

- (2) 佐久間元 「共産主義」才五号
- (3) 黒田寛一 「組織論序説」一九二頁

問題の核心はまさに左翼反対派の組織戦術はいかにあるべきかという点に存した事はうたがいない。しかしながら、左翼反対派がまさに少数の先駆的分子による宣伝活動から一歩前進して、プチブル層とはいふものの、特殊に革命的指導によって大なる役割を果し得る日本の学生運動の内部において大いなる浸透を示した時期に、学習活動あるいは外部からの宣伝によるだけでなく、その運動そのものを現実的に指導し得る能力と組織力を必要とするようになったのは当然であらう。

そしてこの場合運動を指導するという事は何よりも政治方針によって大衆を把握するという運動論の問題に他ならないのであるから、それにとえば反スターリン主義の主体的把握ということを対置するのは奇妙なことであるといわねばならない。

たしかに、新しい前衛党は大衆運動によって創造されはしないのであるが同時に新しい前衛党は大衆運動をはなれた真空の中でたゞ十分主体的に反スターリン主義思想を把握した人々によってだけ作られるといふわけでもあるまい。いわゆる革命的マルクス主義の確

益のために少しでも短縮されることが必要」(4)であるという主張なのである。

- (4) 佐久間元 「共産主義」才三号、六、七頁

したがつて、事の本質は、左翼反対派が現実にとつた大衆運動(全学連)に深くかかわり合つた時期における指導性の恒常的獲得という焦眉の課題をいかなる組織戦術の下に推進するのか、ということなのであつた。これが「中核組織が従来の形式を進んで破棄することにより、新しい形態を創造する」(5)ためにまさに必要であつたのである。

- (5) 黒田寛一 「革命的マルクス主義とは何か」一七頁

そして左翼反対派の統一行動ないし統一戦線は、この反対派内部における分派闘争とそれに起因する組織的分裂を絶対に排除するものでは決してありえない。このことはブンドによる革共同のしめ出しが革共同の一部分によって行なわれた分派闘争以前のセクト主義的陰謀の不可避的な結果であり、決議はたゞ現実の状況を確認したにすぎなかつたことを考えるときにはなおさらのことである。

この陰謀はブンドの成立以前から、ならん理論的説得性をしにいわばチラッチラッとのめかされる才四インター支部への試みに他ならず、すでに現実の闘争方針に於て大きな喰いちがいを見せていた革共同は自らをブンドの組織の外においてこの陰謀を行つていたのである。

しかしながら、分裂がこのような陰謀において不可避でもあつたといふことは、同時にその後の過程に影響を与えずにはおかなかつた。すなわち左翼反対派統一行動の絶対的拒否は主張されなかつた

としても、なおかつこの間にかもしだされたセクト主義的感情は反スターリン主義諸組織間の理論闘争、交流のかたくなな排斥を生みだし、かつ反スターリン主義のための行動の統一を細心に組織することすらも彼方へと追やる結果を生じましたのである。

これらのことこそが、まさに分裂が不可避とされたときに、最も慎重に配慮されねばならないことであったにもかかわらず、そのための指導性はそう失ってしまった。

対外的にも劣弱なものであったから情勢の移りかわりの中で留意されるのが大切であったろう。もちろんこのことが当時の具体的状況において組織の分離を拒否し得るものではあり得ないとしても、後に安保闘争の渦中において一つの現実的意味を帯びることになったのであるから。

なお今日にいたってたとえば革共同全国委が一九五八年当時における彼らによる左翼の学生への働きかけの一貫した正統性を主張するのは奇妙なことである。「探究派」は言ってみればブンド成立時の激烈な反対派内部の論争の中では幻の集団でしかなかった。その上このこと自体が彼らの革共同への組織物神化によって招来されたものであったから、彼らが反スターリン主義運動の新たな段階における適切な変り方を自ら封じてしまったのであった。

かくして事実を以って語らせるならば、今日までの反スターリン主義運動における正統性を強調することは、今日において政治的マヌーバー以外のなにものをも意味しないのである。それは反スターリン主義運動における発展のためには悪しきセクト主義として作用する以外の道を持たないであろう。

後になって「合理化反対」が次第に欠落し、安保でゼネストというスローガンに政治主義の偏向を濃厚に帯びさせていったのであった。オ三は「合理化反対」と安保闘争を結合せよと主張する革共同全国委の方針であるが、これはすでに明らかにしたように具体的な方針となることが最後まで遂になかった。

われわれは、ここではブンドの安保闘争の把握と密接にからみあった組織問題に限って考察してみようと思う。

一九五九年の春闘を闘うにあたってブンドは、革命的労働者の反幹部組織として「社会主義青年労働者同盟」なる大衆組織を結成した。しかしながら労働者階級の内部では警職法闘争をヤマ場として、一定程度の反幹部潮流がぼんやりとできつつあった状況であった。この組織化そのものは非常に困難な活動であるほかなかった。したがってその組織は革命の影響下にある労働組合指導者などとの取引をも含んだものとして、再出発することになり、なかなか組織の拡大はできない状態に追込まれていたわけである。

そして同時に、ブンド自体の労働者階級への滲透は、それ以上に困難なものではあったが、多少とも根底的で慎重なオルグ活動によって徐々にびてゆきつつあった。

このような状況のもとで一九五九年六月のブンドオ二回大会は、労働者階級の内部にブンドを組織することを決定したのであったが社青労同に於ける活動の困難さは、労対内部に陰性の対立を招来しこの組織そのものの意義はブンドのカムフラージュ的なものにまで低められてしまった。そして労対活動の転機は十一・二七国会突入以後やってきたのである。

ブンドは学生運動というプチブル層を通じて行なわれた反スターリン主義左翼への転換の組織的表現であった。このことの必然性を把握するときそれは、いわれるようにその成立自体において非前衛的集団でしかないと簡単にかたづけられるようなものでは決してなかったのである。

しかしながら、その成立時における複雑な条件は後にブンドが小ブル急進主義の集団に停滞していく上に文字通りあずかって力があつた。

それは右の過程において濃厚にかもしだされたセクト主義的感情によって拍車をかけられ、絶ざる自己点検と理論的思想的内部闘争との放棄の傾向がこの感情によっていっそうかたくななものとなったことであつた。

安保闘争の昂揚が始まる以前、左翼反対派の内部には大別して三つの見解が存在した。

オ一の方針は労働者階級の闘争の中心課題を「合理化反対」の闘争として安保闘争に対立させる経済主義の方針であつた。これは革共同関西派の立場であり、彼らはこの観点から、国会をめぐる街頭政治デモを議会主義の一変種と見なし、民同主流と歩調を合わせる生産点主張によってこれに対置するという態度に終始したのであつた。

オ二はブンドの方針であり「合理化反対闘争」を闘わない公認指導部を突き破り労働者階級を立ち上らせる上で、政治闘争としての安保闘争が重要な契機をなしているという把握に最初たちながらも、

すなわち警職法闘争で萌芽的なものを見せながらも一九五九年の春闘の裏切などを経てくすぶり続けてきた下部労働者の組合幹部にたいする不満はこの闘争を契機として爆発的な様相を帯びてきた。殆んど自然発生的な二万の労働者大衆が闘争史上初の国会構内占拠を待って喜びに全身をひたっている時、総評、社会党、共産党の公認指導部が、百度、千度目の裏切りを彼等の面前で行ったのであるから、下部労働者の反幹部的空気は、ここに頂点に達し、いたるところで反幹部闘争が行われて、明確に一つの潮流をなすまでになっていたのは当然であつた。

このような状況をむかえた時、果敢に反代々木の闘争を行い全学連の指導組織と認められていたブンドが下部の革命的労働者の注目をひいたというのも故あることである。それまでわずかに社青労同の名で宣伝、組織活動を行ってきたながら、それなりの組織実績をあげることができずブンドと社青労同とのジレンマにおちいついたブンド労対は、この状況を見るや直ちに社青労同を名目的にも解体し、ブンドとしての組織、宣伝活動にとりこんでいった。しかしこの活動においては、労働者の中にある反幹部的潮流をバネとして、ブンドの政治主義的な方針によって彼等を街頭デモに投入することが、戦略的課題とはならん結合されることもなくおこなわれたにすぎない傾向が見られた。

この時すでにブンドの方針は、学生運動を通じて最も戦闘的デモを組織し、その闘争をもって労働者階級の一部をも巻き込み、社会的混乱を招来することに全力を傾注する兆を見せ始めた。

労働者階級を革命的闘争に立ち上らせるのは非常に困難なこと

ある。それはプチブル的な学生のように自己の頭で地上に起つことはできない。彼らはいわば胃の腑で起つ他ないのである。つまり日常の灰色の生活をなかにしか彼らが決起する要因はない、だから彼らは非常に鈍重である。そしてそれ故に一度けつ起するならその力は爆発的な脅威をブルジョア秩序にもたらし得るのである。

後になって戦旗派が主張したように、ブルジョアジーとプロレタリアートは相互に依存する関係にはおかれている。しかしこのことだけを強調する時には、即自的プロレタリアートと向自的プロレタリアートとの間には越え難い深淵が横たわることになり、即自的プロレタリアートに階級の自覚をもたらし、それを階級として形成するための革命化したインテリゲンチヤの役割が度はずれに拡大してしまい、幾百万大衆によって行なわれるべき革命を全く主観主義的に把握することを余儀なくされるであろう。

即自的プロレタリアートは自然成長的に階級として形成されることはないとしても、そこに越え難い深淵は存在せず、プロレタリアートは疎外された労働を行なわざるを得ないことによって自己の生産物からも疎外され、その存在そのものにおいて人間本質のそう失であることから歴史的に革命的な最後の階級である。

したがってプロレタリア前衛組織は、革命の根柢をこの点において深く洞察することによって自己の役割を度はずれに拡大する誤謬をさけ、革命を労働者階級の大众的行為として把握することができるのである。この意味においては、ブルジョアジーとプロレタリアートの相互依存の面からだけ即自的プロレタリアートと向自的プロレタリアートとの間の深い断絶を見出し、プロレタリア的自覚の論理

を觀念的に主張するものは、自然発生的闘争の意義を全く評価できないばかりかプロレタリアの前衛組織を思想家集団にまで矮小化してしまう結果になるのである。

が、ブンドの陥った誤りは、プロレタリアートの存在からくる運動のあり方を学生運動からの類推によって判断してしまったことであつた。日共港地区委員会や、長船日共細胞などの諸組織が反代々木にふみ切りはじめたとき、それが実はこれらの組織における闘争の長い過程から次第に形成されはじめた自己変革を含んでいたにもかかわらず、それを単純にブンドの指導による全運動の戦闘的行動に触発された結果と単純に把握する錯誤に客観的にはおちいっていた。

したがって労働者階級の転換に内包されているはずの複雑な内容は買重な経験として摂取されることもなく、遂に学生運動に特徴的な運動形態が無条件に労働運動の内部に持込まれることとなったのであつた。このことは後に見るように学生の尻尾に労働者をくっつける方針として現実化した。反スターリン主義的にプロレタリア運動を展開することが非常に困難であろうことは、プロレタリアートの存在の後方から来ると同時に、共産党、社会党、総評などの巨大な日和見主義勢力によってプロレタリアートの革命性の発揮が官僚的に締めつけられている点からも疑う余地はないであろう。

しかるにブンドはこの真に困難な課題を安易に切り抜けようと思つた。すなわち社青労同のぶつかった壁はそのなしくずしの解消によって、労働運動の困難さには学生運動の特殊性を一般化することによって乗り越えていったのである。

したがって、労働運動の把握の仕方における誤謬は、ブンドをその政治主義的偏向において一貫させ、殆んど学生運動にだけ基礎を保持したブンドを唯一の前衛組織そのものにする主観主義に道を開くことになつたのである。

このことと関連して才三回ブンド大会（一九五九年八月）を準備する過程において顕著なものとなつてきた二、三の特徴的な傾向を考察しよう。

一九五九年の春闘は警職法闘争に継起する闘いであつたにもかかわらず、いやそれが奇妙な勝利に終つた闘いに続くものであつたから、六月の参院選挙への地ならしのためのカンパニア的闘争、要求を貫徹しようがし得まいがいかかわらず終息の時期を予め設定された闘争であつた。かくして既成の組合指導部の右傾化は、ブルジョアジーによる安保攻勢を前にして、もはやおおうべくもないものとなつていた。日教組大会を皮切りに開かれた主要単産の殆んどが闘争の教訓を明らかにすることなく、「政支支持の自由論議に終始し、指導部の裏切は、明白であつた。だが同時に、下部労働者の闘いが国鉄、全通、末端の中小企業において激しく爆発を見せていたことも事実であつた。

このような現実の分析の上になつて、当時ブンド労対を中心に強調されたのは次のような諸点であつた。

一つは、労働者階級の前衛党を新たに創造することの必要性である。たとえば「すでに今日迄の経験でも、われわれは闘争の中で方向を見出しかねている労働者と徹底的に討議し、彼が革命のために闘うという点でスッキリさせて、新しい闘争方針を考え同時に我々

の戦列に彼らに加わるといふ経験をいくつももっている。従つて彼らに我々がさしめさねばならぬものは、単に彼らの闘争方針だけではない。

それと同時に、否それより前に、平和共存反対、世界革命の戦略思想であり、そして前衛組織なのだ(1)と。

(1) 森茂「共産主義」才六号、二五頁。

この前衛組織とは「完全に共産主義的な素質、思想、世界観における、活動スタイル、大衆との接触に於ける、完全な革命家としての原則性」をもった人間の集団だ、といわれるだけであるが、このことは単純に、組合の必要性は認めるが党の必要性を認めず闘争の壁にぶつかつて右傾化せざるを得ない「日和見主義的有害な労働組合主義」という今日の組合活動家に対置するものとして云われたにすぎなかつた。と同時に他方では「労働者階級はただストライキとストライキ基金、あるいはストライキ団体とだけにとどめてよい、ストライキだけを手段として労働者階級は自分たちの状態の真剣な改善や自分たちの解放さえもかちとることができると考えていた二十世紀初頭のロシアの経済主義者にたいするレーニンの批判が上つただけ学ばれようとしていた。

このような主張からは、ただ原則的な正当性を持ち得るだけの抽象的な前衛党創設の要求が、ゼネストの現実的神聖視と結合した政治主義偏向を帯びた方針と結合する契機が用意されたにすぎなかつたのである。すなわち公認指導部の右傾化なるものと、下部労働者の反幹部闘争による左傾化が、その内容の深い検討のないままに抽象的な前衛党の主張を媒介としてとどまらざるを得なかつた。

しかも丁度同じ頃、ブンド綱領草案を準備するための拡大中央委員会八一九五九、七月頃Vの席上において提唱されたもの、現代の政治闘争の把握に関する主張は、多かれ少かれブンド全体の気分を反映するものであった。

すなわち次のように云われたところの理解である「革命的學生からの結集―それは公認されたマルクス主義の理論的潮流への全面的批判が絶対に必要であったが故に必然であった。この革命的學生の結集は、革命的労働者の結集へと進んだ。すでに部分的にも労働運動の現実の指導部隊としてさえ、登場するに至った。基幹全産業への同盟は確立された。さらに進め！ 極度に集中された資本の存在する、しかも中央集権化する国家を有し、国家独占資本主義として発展している日本資本主義の現状では、地方グループの形成から全組織化の過程は、ロシヤ、ポリシェヴィキとは比較にならない速度を以って進んだ。しかも全国的な強固な學生運動を指導下に置いた現在の段階では、われわれはロシヤの経験を真似る必要はない。だが満足するな―現在では一つの企業の経済闘争でも、一つの工場の労働者の闘いも、直ちに国家権力と衝突する―闘いは全産業のもとに統一された闘いなしには進み得ない」(2)

(2)「共産主義」才四号、巻頭論文、十頁

この中には、革命的労働者の結集にたいするひじょうな誇張があると同時に、十一・二七闘争以降の下部労働者の憤懣の爆発が、ブンドに反映し、労働者の組織的結集が、若干の前進を見せるにしたがって、次第にこうした組織活動の困難さの軽視をもたらすような要素を含んでいた。

現代の国家独占資本主義下の闘争がプロレタリアートの集中化を容易にし、国家権力の存在を速やかに意識させる条件を持っていることは事実であるとしても、このことは逆にプロレタリアートの闘いを自然成長性の前におしとどめるようにも作用する。

だから前衛的部分が闘争の全技術的側面に目的意識性を埋没させることでもなろうものなら、闘争の急激な展開力が、まさにそのことによって、自然発生的な闘争を共産主義的政治闘争に転化させる契機を見失わせてしまおうであらう。

この後におけるブンドの活動はこのことを如表に示したものであった。そしてこのことを看取し得なかつたために、この論文において「自然成長性の理論と労働組合主義！ 我々はレーニンと共にこれに反対して目的意識性と共産主義的政治意識を声を大きくせねばならぬ」とも、真の革命的な前衛政党建設せよ」とも云われながら、それを背理にまで転化してしまつたのである。

ブンドの活動の結果、才三回大会はあらたに三つの課題を提起した。すなわち同盟綱領の確定、職業革命家を中心とした組織への発展、及び全国的、単一の政治新聞の発行の三つがそれである。このことの原則的正しさ、必然性については、いうまでもないであろう。われわれがここで扱おうと思うのは、職業革命家の組織への発展という課題がいかに受とめられたかという点に関連するだけのものである。

強固な共産主義的思想を持ち、理論を持ち、さらに政治技術に高度な能力を持った専門的な訓練された革命家が、二十四時間を革命のために捧げ得る時間を作りだし、このことによって、我々の活動

を強化することはまさしく必要であった。

しかし、我々はこのことがまさに職業革命家だけの組織―ブンドという理解の傾向を示したということとをただ事実の問題として指摘しておこうと思う。このようなことは当然有り得ないことのように思われるであろうが、ブンドの中央委員の中にもこのような理解をすることによって下部組織を脅やかしていた者が現われたという悲劇的な事実、ブンドの政治方針の反映以外のなものでもないものである。

プロレタリアートの階級意識の最高の形態を、前衛党という組織的表現を通じてプロレタリアート一般から区別して現すということは、このことを媒介することによってプロレタリアートの革命的意識を作り出すことを目的としているのであり、そこにおける区別と同一性を見失うことは許されない。

その意味では、前衛党内部の職業革命家は、その組織内部にいる成員、更にプロレタリアート内部の前衛的活動家との生きた相互関係を保ち続けることなしには官僚化せざるを得ないわけである。

ブンドの発展とは、このような意味において、主として政治技術的に特徴づけられた専門家を作り出すことに他ならなかったにもかかわらず次第に現実の階級相互間の関係から背離しつつあったことによつてこの関係を一つの混乱を見せていったのである。

(四)

安保闘争の巨大なピークの一つを形成した十一・二七(いわゆる「国会突入事件」)から一・一六(羽田調印阻止闘争)までの闘争がブンドに影響したものは非常に大きいものがあった。それは安保

闘争を闘うブンドの姿勢を決定的なものとする事となつた。

大まかに言えばブンドはこの間に於ける一連の闘争から四つの点にわたつて教訓をひきだしたのである。それは才一にプロレタリアートの闘争はいかなる形で国家権力と対決することになるか。才二に、今日の闘争における政治的街頭デモの意義はいかなるものか。才三に下部労働者の左傾化はいかなる点にまで進み得るか。才四に闘争の自然発生的性格はいかにして乗越えられるのか。このように要約することができるであらう。

国家権力の対決ということに関して云うならば、十一・二七闘争こそは公認指導部が他ならぬ「生産点における闘争」を裏切るために画策した「秩序ある請願」をまさにその与えられた場に於て徹底的に踏み越え、指導部と下部労働者との分裂を現実のものとしたばかりか、更には一・一六にいたるまで流動化した下部労働者の昂揚の起点となつたものであった。

しかしこの闘争の意義をこれ以上のところに見出そうとすることは正しくなかつた。正に右の限定された意味での起点にすぎなかつたのであり、一・一六闘争によつてはしなくも暴露されることとなつた限界を、そのまま突破し得る要素に欠けていたのである。つまりそれは、現存秩序をいかにふみ破り、国家権力といかに対決するかという問題である。

ただ単に権力と衝突し、現存秩序をふみ破る、というだけなら、それを共産主義的実践―革命的変革と呼ぶことが出来ないのは言うまでもないことである。しかしながら現代の国家独占資本主義の下での対権力闘争にたいする前述のようなブンドに一般的であつた把

握は、このような現代の特殊の条件が同時に、革命闘争を組合主義的政治闘争により埋没させる方向に作用するであろう危険性に気づかなかつたのである。更に又、これに前衛の中核（ブンド）の指導性の度はずれた強調があいまって、十一・二七闘争の本質的側面に見られた自然発生的な限界を看過するように作用した。

ブンドとこれに指導された全学連がいち早く「戦闘的国会デモ」の方針を宣伝し、自らデモの先頭に立って指導したことは事実である。それに又これらの前衛的部分が、労働者階級の解放と資本主義秩序の革命的転覆とを熱烈に希求していたことも事実であったのである。

しかしながらこの情熱と意志とが、いかにしてブルジョア権力を打倒するかの革命的戦略によって、科学的に裏付けされない限り、そのこと自体は闘争の自然発生的性格を打ち破れないばかりか、逆にこの自然発生的な闘争をそのまま指導することによって自らをその限界に押しとどめてしまふ結果になるだけであつた。

正に革命は一握りの革命家集団の願望によってだけ行なわれるわけではない。このような前衛は、自己の革命にたいする情熱を、科学的な戦略によって確りと把えた場合にのみ、巨大な大衆的規模の闘争において共産主義的革命的意識性を物質化された指導力として持つことが可能となるのである。

従つてブンドと労働者階級とのあいだに、この生々とした相互の關係が樹立されていなかったにもかかわらず、自己の希求を戦術方針の中へ矮小化することによってブンドの革命的意識性、指導性が強調された時、ブンドは十一・二七闘争の限界を見失うことになつた。

たばかりでなく、また自己の組織力を万能のものとする幻想のとりこになつてしまつたのであつた。

革命的街頭デモの評価においても事態の本質は同じであつた。よく組織されたデモが大衆的昂揚をよびまじし、先進的な末端の労働者の戦闘的な行動が遅れた根幹部分をひきつけ前進させるといふ事は事実である。だが十一・二七闘争自体が、生産点での闘争を抑圧された末の行動であつたばかりか、ヴェトナム賠償をめぐる議会の暴挙に直接に触発された怒りの爆発であつた限りに於ては、この闘争はいわばブルジョアジーと日和見主義的な公認指導部によつてしつらえられた土俵の上での闘争だったのである。それにもかかわらず、下部労働者の怒り（ブルジョアジーと公認指導部に対する）が爆発したことの意義を評価しえないものは労働者大衆から見放されるであろう。この意味からは、自然発生的な闘争が革命的意識的な闘争の直接の源泉であり、革命の深部の力がここに横たわつていゝということを理解しなければならぬのである。このことのうちにいゝわゆる運動の力学を看取しえない勢力は、単にこのことだけによつて、大衆闘争を指導し、自らの革命戦略を物質化する能力をそつ失した思想団体にとどまるはかないだらう。

しかしながら、自然発生的な闘争が革命闘争の直接の源泉であるといふことは、それが革命的闘争にまで発展しうるためには、科学的な革命戦略として表現された共産主義的意識性の媒介を必要とするといふことを意味している。だから戦闘的街頭デモの絶対的強調はそのことによつて直ちに、資本主義的秩序を革命的に変革せんとする労働者階級の生産点における闘争・ゼネストの威力、およびその

行動によつて労働者階級の内部に生起する意識上の変化などを事実上無視する結果とならざるをえない。もちろんあれかこれかの区別を證議だてすることにはいささかの意味もない。ただ単にこれら両様の闘争形態の結合を主張するだけで、昂揚する闘争の現実的意味を正しく把えて、それを指導する決意と能力に欠けるならば、まさに

共産主義的意識によつて媒介されねばならないところの自然発生的な闘争そのものの、消極的評価におちいることになつて孤立してしまふだらう。

革命家の任務は、自らの指導によつてそれを革命闘争へと媒介する自然発生的な闘争の昂揚の渦中であつてその先頭にたち、この現実的な運動そのものの中に革命闘争への必然的な通路を発見することなのである。このような条件の下におかれていゝならば闘争は戦闘的であればあるだけ、敵への打撃は強ければ強いほど良いことはいふまでもないことである。

しかし前衛の中核の力がまだ弱ければ闘争を正しく指導することは不可能なのであつて、その限りではいゝゆる真の前衛をプロレタリアートの内部につくりだすための独自の活動の意味を抹殺することは決して許されない。だが現実の大衆的規模の闘争の敗北を、ただこの前衛の活動の不足にだけ求めようとするならば「プロレタリア党のための闘争」は評論家的な闘争評価の万能の切り札にまで墮落させられてしまい、真空の中での党づくりを生み、反動的な役割を果たすことになつてしまふであらう。

現実的な大衆闘争の勝利及び敗北と運動主体の挫折とに於て、労働者大衆が自ら学ぶ通路を切開く精力的な闘争指導なしには、形成

された前衛中核部分の革命理論の正当性（科学性）は物質化しえないばかりか、現実から遊離した抽象的理論に転落する危険を防止する保障をどこにも見出しえなくなつてしまふのである。

公認指導部に対する下部労働者の左からの分裂は十一・二七闘争によつて顕著になり、一・一六闘争の準備の中でいゝそう昂揚していった。だが、このような反幹部闘争は、それが革命戦略と結合されて闘かわれる執ような活動なしには、強大な現在の官僚機構を突き破ることが出来なかつたのであり、それは一・一六闘争を頂点にして挫折を経験することになつてしまつた。

それ以後の安保闘争に於て、ブンドによつて提起された方針は、以上四点の意義のプラスとマイナスの拡大再生産だつた。しかもそのマイナスは怪物じみたふくれあがりを見せていき、プラスを圧倒しさせた。ブンドは客観情勢の科学的な把握にたつて昂揚しつづける闘争の限界を自覚し、現実の闘争を革命的戦略的課題へと結びつけるための活動にとりくむことが全く出来なかつた。

それはブンドを唯一の前衛組織と考えただけでなく、この組織の意義を異常に度はずれに評価することによつて、自らの方針が完全にブチブルの意識に呑みつくされてしまつた大衆的昂揚の限界内にとどまつていゝことすら自覚できずに、指導性、計画性の全体的技術的側面に埋没してしまふ過程であつた。

ブンドの中央における政治指導が、安保闘争が昂揚するに従つてますます全技術的問題への熱中を顕著にしながら、もっぱら闘争への情熱だけを鼓吹することになつていゝたことは見逃せない事実であつた。一九六〇年四月のブンド四回大会において、三池闘争の教訓

を学ぶと称して「権力獲得の思想によって武装する」と強調されたとき、その主観的意図はともかくも、それが現実にも及ぼした影響はすでに述べた限界を一層濃くいろうとただけであった。

たんに経済分析にとどめられた内外情勢の評価によるのではなく流動する諸階級の相互の関係政府と国家権力とに対するそれぞれの関係にいたるまで、その意識まで含めて把握することによって戦闘的で、かつ柔軟な戦術指導を行うことは全くなおざりにされてしま

った。

一九六〇年四月二十六日、羽田闘争の挫折を経た下部労働者が公認指導部の官僚的統制の下でか悪名高い「お焼香請願」に封じ込められてしまったとき、ブンドの指導する全学連の学生は、国会正面にズラリと並べられた鉄の装甲車を全くの徒手空拳で乗り越え、その後には初めて労働者の若干の部隊が続ぎ、二つの闘争形態の相違がこのような明瞭にされることになった。

だが、この頃には、ブンドの四回大会でうかび上ってきた情勢把握の相違などが次第に表面に出て来た。それは現実の困難な闘争局面を反映したものであって、容易に看過することのできないほどの重要性を裏はおびていたのである。

この間に開かれたブンド中央委員会、労対、学対の会議において、若干の中央委員から安保闘争の基礎的性格を改めて検討する必要性が提出されたし、また若干の他の中央委員からは労働者階級の闘争形態及び現状の検討、さらには、次第に柔軟さを欠きつつあった戦術の検討などを要求する声が上がられた。

最初の問題に関しては、日本資本主義の安定と拡大の局面及び資

をめぐる評価のくい違いを萌芽的に含むものだったのである。しかし現実には、このことが五・一三の「国会構内大集会」方針の反対者にあっても十分に意識されず、論争がこのことに関連して集中されることになかったために、ただ単に、行動における右翼的日和見の発生と烙印される結果になったことは、ブンドにとって象徴的なことであつたといわねばならない。

この時期こそが、ブンドが自らの誤謬を注意深く検討し、安保闘争の重大な局面を正しく指導する方針をねり上げる最後の機会であつた。しかしながら、おまよそ二つの潮流が双方の当事者によって十分に意識的に把握されていなかったために闘争の急テンポな展開の渦中で一切が未分化のままに五月十九日が迎えられることになった。

五月十九日の自民党の安保単独採決の強行が、膨大な大衆を国会周辺にひきつけたときに、ブンドは運動のヘゲモニーが、まさにこの瞬間に「民主主義擁護」「国会解散」を高唱する小ブル層（典型的には市民主義者）の手に握られたことを理解することができなかつたばかりか、逆に階級性を喪失した「社会的混乱」の幻想的なイメージのとりことなつてしまったのであつた。

六月十五日の闘争は、六月四日の労働者のストライキが盛り上りきれないもどかしさと、六月十四日のハガチー事件という敗北主義を助長し、打倒目標を見失わせる反米闘争の後の沈滞とを、流血の中に同志権美智子の生命を官憲の手によって奪われるという凄惨な闘争によって打開する契機をなした。だが安保闘争を呑みこんでしまったブチブル的意識は、すでに闘争全体の相に強く刻印されてし

本主義ののびきならない危機においてではなく、一定の好況局面でのブルジョアジーの政治的攻撃としての安保闘争の性格などをめぐりきわめて重要な指摘があつたにもかかわらず、それは深く検討されることになつた。また労働者を全学連の尻尾につけること、可否をめぐることは、それをブンドの追求する絶対的方針と決めることに対して重大な疑義が提出されたりした。

もちろん、ここに提起された安保闘争の局面の評価は、ブンドの戦術を一挙に後退させようと試みる危険性からまぬがれていない弱さを含むものであつた。つまり、現局面が革命情勢にはないという状況において、それを理由にして、宣伝活動やより低い闘争を行なうことだけを主張するならばそれは現実に生起する大衆闘争の放棄につながるかねないであろう。

エンゲルスが指摘した如く、「健闘してなお敗北したのは、容易に勝利をえたのに劣らぬ革命的な重要性をもつ事柄である。」のだから「革命においては、決定的地位を占めながら、敵を強襲してその腕をためすかわりこの地位を明け渡す者は、何人にせよ常に裏切者として遇せられても不当とはいえない」ということを忘れてはならないであろう。

だが、安保闘争が革命か革命でなかったかの論議だてはせぬまでも、すべての階級の状況への戦略的な配慮なしに右の教訓が際限なく拡大解釈されるならば、それは背理にまで転化するであろうことを理解するのは容易である。したがって、この間の闘争の戦術をめぐってブンド中央に最初の漠とした対立が表われたことは、まさに労働者階級内部において挫折させられた一・二六闘争後の全情勢

まい、六月十八日を迎えたブンドはもはや従来の闘争戦術の無力を自覚させられたのであつた。

かくしてブンドが、五・一八から六・一八に至る闘争に「最大打撃」の戦術を固執するにいたつたことは、そのことによつて戦術指導部の域を自ら踏みこえる可能性を封じてしまうことになつたのである。今日になって、ブンドのブチブル性と安保闘争の限界とを容認しながらも、なおかつ、ブチブル的闘争の意義を認めたりえでブンドの戦闘性の保持の不徹底さを云々することは、右の意味から誤りといわねばならない。

つまり、前衛的部分がブチブル的急進的行動の意義を深く理解するということとは、その運動がいついかなる条件において、いかにしてプロレタリア的行動によつて革命的に受けつがれるべきなのかを常に現実的に探し求めるということ抜きにしてはありえないのである。したがって、ブンドは発生条件からみて必然的にブチブル的集団以外の何ものでもありえないという口実から、われわれはその限界内で徹底的な闘争を行なう以外にはなく、その後で今度こそはプロレタリア運動のための指導部を創造していくのだという段階的思考方法では、現実的運動の複雑多岐な相互浸透を把握することは不可能であり、歴史の発展を観念的に中断させてみるだけに終るのである。

事実の問題としては、ブンドの破産は、ブチブル急進主義的闘争からプロレタリア的闘争への転化の結節点において、それを目的意識的に追求する必要性を看過し、そのための組織活動への努力を客観的に放棄してしまつたときに顕在化したものといえよう。比喩的

にいうならば、ブンドは諸戦の局部的勝利に酔って彼我の兵力の差を失念し、進むべきときに進むと同時に、退くべきときに隊列を整えつつ敵を一兵でも多く殲滅しながら退却する術を知らない指揮官のような存在になってしまったのであった。

〔五〕

安保闘争が明らかに敗北の様相を呈したとき、この闘争に全力をうちこんできたブンドの一切の誤謬、一切の内部対立が一斉に顕在化し、はげしい勢いでほとぼらした。はじめ、ブンド中央が安保闘争の政治総括を「政治的勝利」と、たとえ限定づきのうえとはいえ規定したというこの内に、その安保闘争の把握における誤謬は明白であった。しかしながらこの反省がなかったところに発生した内部対立は、必然的に個々の行きすぎや「日和見主義」に対する弾劾として、あるいは個々の指導的同盟員の資質に基礎をおいた指導的交替の要求としてしか公然化することがなかったのである。しかも、ブンドの情勢把握の弱さは、池田内閣の登場後の情勢評価においても混乱したままで、いわゆる「高姿勢論」も度々現われては消えた。これは分派闘争に大きく影響した。ブンドの内部対立は安保闘争の敗北後に次第に相互の関係を明白にしていき、ほぼ三つの理論的潮流が形成された。最初にブンドの闘争指導における不徹底さを日和見主義として指弾することによって「革命の通達派」が生れ、次には、この通達派の濃厚なブチブル急進性への反発によって、ブンド中央の連帯を感情的基底とした「戦旗」派が発生し、最後に全学連書記局に依拠し、前二者に反発する「プロレタリア通信」派が形成された。

ブンドのブチブル急進主義への埋没を明らかにしようとして試みたので、明らかに他の二潮流とは異なる傾向を示していた。しかし、この潮流はブンドの破産をその根拠にまでさかのぼって批判するという名分の下にブンドの存在意義そのものの機械的抹殺にまで突き進むことによって「プロレタリアの主体的形成」の主観主義的強調を旨とする革共同全国委へと吸収されてしまったのである。それは過去のブンドの裏返しのかかった。

かくして、ブンド内部の三潮流がいずれも全国的に組織的分派闘争を展開しえずして、主としてブンド中央の派閥的抗争の波の中に姿を没してしまつたことの根拠は、三派がともに現実の階級闘争の中でブンドの活動の全体的意義を反省し、その自己合理化や機械的抹殺の安易な方法を断乎として拒否して反スターリン主義運動全体の展望を背後に据えることを没却したことにある。そして、このことを容易に現実化した事情こそは、ブンドの方針の急進主義的ブチブル性と組織的展望の欠落であった。

さらに、この分派闘争を分析するさいには、これらの分派が、就中戦旗派が現実の階級闘争に深くかかわりながら、そこに責任をもつたやり方で分派闘争を推進することを事実上放棄したことを反省することが必要である。

したがって、この分派闘争は、現実に関わざるを得ないブンド内部の労働者からも、地方組織からも切り離されて、中央の派閥争いの相をおびざるをえなかつたのである。対立を現実の闘争に責任をもつという口実でなく、ずしに妥協させようとする試みは拒否される必要があるとしても、もし右の観点に立った分派闘争が展開さ

革通派は安保闘争敗北の根拠を、もっぱら主体的原因に、ブンド内部にだけ求める心情をバネとしつつ、その理論的粉飾を現代資本主義論において首尾一貫させた。ここにおいて彼らは現代資本主義の根本矛盾を金融財政政策のうちに求め、その政策遂行の破綻をもって革命の条件とみなすことから「絶対決戦論」的傾斜を示す反政府闘争の重要性に到達し、安保闘争をもって「階級決戦」と把握する立場を示したのである。このような理解は、まさにブンドが闘つたことの直接的な理論化にほかならず、そのブチブル急進主義的色彩をいっそう濃くするものでしかなかった。

オ三の潮流であるプロ通派は、革通派の強い観念性への現実主義的反発に支えられながら、安保闘争の敗北の根拠を同様にブンドの内部だけに求めようと試みた。この派は「権力奪取のための武装闘争」の思想的意義を強調することによって、それを戦略的方針として一般化し、この方向からブンドの不徹底さを指摘したのである。この二潮流がともに安保闘争の敗北の根拠をブンドの内部に見出していったことは、それぞれにニュアンスの相異はあったものの、かれらが三池闘争に一切をかけることを企図したことにおいて再びあらたな挫折を経験することになったのである。これが、異つた形によってではあったが、ともにブンドのブチブル急進主義を拡大再生産することを試みた二つの潮流がもう一度の破産をとげた時点であることを自覚することが必要であろう。

これに反してオ二の潮流であった戦旗派は、安保闘争敗北の根拠をまず客観的な階級情勢に求め、同時にこの闘争の過程におけるプロレタリア党建設のための活動の欠如を指摘することによって、ブ

れたならば、それは必然的に全組織をあげた下からのブンドの革命化として多少とも発展する契機となりえたにちがひなかった。

日本の反スターリン主義運動は、ブチブル・インテリゲンチヤ就中急進運動を伝統的に有していた学生運動を捉えることから出発せねばならなかった。反スターリン主義運動が、公認の左翼指導部に対するイデオロギー闘争として始まる以外になつたとすれば、これは必然的なことであつたのである。だが、困難もまたこのうちにあるといわねばならなかつた。すなわち、日本の学生運動がその急進的行動によって最左翼の位置を占めつづけてきたことからまず初期の反スターリン主義運動の体的担い手となつたとすれば、それは更に発展させられねばならず、反スターリン主義的なプロレタリア運動にまでいきつく必要があつた。

このことのために、いかなる活動が必要であるかつまり、なにをなすべきか、これが欠落してしまひあるいは誤って理解され、ブンドが急進主義的學生運動に一切を没入させてしまひ、自己の組織的力量を過信するセクト主義に犯され、安保闘争の本質的性格を見失つてブチブル的組織とそれにふさわしい運動形態に固執していったときに、ブンドは破産せざるをえなかつたのである。

このようにして、安保闘争の敗北後、日ならずしてブンドが自己の歴史を終わらざるをえなかつたことに対して、そこにおける反スターリン主義的共産主義思想の希薄さ、その発生条件からくるブチブル急進主義への心情的傾斜等々を数えあげることとはもちろんである。否、必要でさえあろう。だがその際にも、一切をそこに還元してみせる結果論的批判や、反スターリン主義そのものを理解しえ

ない批判は不毛なものとなるであろう。

最近現われたブンド批判の典型は、構造的改良派による批判の型であろう。この型の批判の最近のもの一つ（「現代のイデオロギ―」1、三一書房版）によれば、ブンドの「極左主義」が、過去の極左的偏向の現代における一現象形態として歴史的に位置づけられている。たとえば、一九一八―二三年のドイツ革命に現われた極左的偏向、一九五〇年の日本における国際派分派などの系譜にたつものであるというわけだ。たしかに、ブンドのいくつかの特徴をもって、かつての国際派分派と比較することは容易である。だが、こうした類推は、その現象的類似を指摘することに終るだけでブンドの反スターリン主義的特徴を全く見ることができない。

スターリン主義の本質である一国社会主義と二段階戦略に反対することによって反革命的な平和的共存を根底的に拒否し、永続革命にそった世界プロレタリア革命を主張することによって反スターリン主義的左翼は公認の指導部を弾劾する。このことに対する反省のないところで、才七回コミンテルン大会と人民戦線戦術に基礎をおくかぎり、ブンドを現象的には批判しえても、根本的に批判することはできない。なぜなら、かの人民戦線戦術こそは、二段階戦略と一国社会主義戦略との醜悪な結合以外の何物でもないのであるからである。したがって、ブンドの戦術左翼の偏向を反スターリン主義の立場に必須のものとしてみることは、なんら事態の本質を理解するものとはならないのである。これは決してその反スターリン主義から生れてくるものではないのだから。

ブンドに対するもう一つの痛烈な批判は革共同全国委員会からの

導部に反対して現実的に闘わざるをえなかった時期を現実的なものとして把握することだけが必要であろう。つまり、少数のブチブル・インテリゲンチヤの思想の内部に形成された反スターリン主義が、いかにして階級としてのプロレタリアートを把握するの新しい前衛党はいかにしてプロレタリアート全体からの分離をなしとげ、そのことによって即自的プロレタリアートを向自的なプロレタリアートに形成しようのかということなのである。

特定の歴史的条件において一個の反スターリンの前衛集団が結成されるためには、もちろん、公認の共産党の日和見主義に対する断片的な批判にとどまらず、スターリン主義戦略の本質的側面に対する根底的な批判を原理的な統一として持たなければならぬ。しかもそれは同時に、階級としてのプロレタリアートの存在およびプロレタリア革命の本質的把握にまで徹底されることがなければならぬであろう。しかし、このことは次のような意味において把握されることが必要である。すなわち、思想的立場が完全に獲得され、たゞ、自己の観念においてこの理論的、思想的立場を完成させたもののみによって前衛党が形成されるというわけでは決していないことである。つまり、反スターリン主義的前衛集団は一国社会主義と二段階革命戦略を拒否し、永続革命の思想によって捉えられたプロレタリア世界革命を自己の戦略に据えて「反帝国主義・反スターリニズム」を基本スローガンとする戦略的立場を獲得せる革命的前衛の集団以外の何物でもないということなのである。

そして個々の成員に対して反スターリン主義思想をその根底にいたるまで把握させることは、この組織の組織的努力によって、また、

ものである。その批判は多くの点で正当なものであることは、決してこれを否定することを許されない。だが、それにもかかわらず、この批判の「正当性と正統性」に対して茶坊主的に対処することは、今後の反スターリン主義的プロレタリア運動のいっそうの展開にとって有害無益であろう。このことについて若干の考察を試みることに絶対が必要である。

革共同全国委によるブンド批判の特徴的な点の一つは、ブンドが「早産児」であるということである。このような評価のうちには、反スターリン主義運動がまずブチブル・インテリゲンチヤによる運動として物質化せざるをえなかった必然性を理解していないからである。つまり、ブンド発生時における原理的統一の不十分さ、スターリン主義からの思想的脱却の不十分さについてならば「早産児」なる規定もあながち誤謬というわけではないだろうが、反スターリン主義的思想が現実を把握する時に形づくられる前衛的集団が純粹に原理的統一を求めることを最初から完全にできるわけではないという点では、正しいものだと呼ぶことはできないであろう。

こうしたことは、前衛党をいかにしてつくりあげていくかという間に密接にかかわるものなのである。形成された時点において最初から原理的統一の完全さを求めることが不可能な前衛的組織をいかにして純化し、強固な思想的統一をかちとるべきかという問題は、し烈に闘われる階級闘争との現実的なかかわりあいの中で追求されることが必然なのであって、先駆的集団の「正当性と正統性」に基く宣伝によるというわけでは決してあるまい。

そうであるならば、最初にブチブル的な学生運動が公認の左翼指

基本的戦略の一致のうえでおかつ予想される意見の相違に対しては組織的討議の自由を保障する活動によって、たえず強固な原則的統一の方向を見出すことが必要とされる。いうまでもなく、プロレタリアートの前衛党は向自的なプロレタリアを成員とするプロレタリアートの階級意識の最高度のものの組織的表現である。だがそれは一回的に完成された最高の階級意識の固定的表現では決してあり得ない。それは過程的であり、同じ成員のうち思想的、理論的水準の高低を有しながら、かつ基本的な点において即自的プロレタリアから区別されている部分を組織の成員としているにすぎない。だから、プロレタリアートは絶えず新しい成員をその組織に流入させるとともに、他方では組織の成員からの転落をも事前に拒否しようわけではない。

レーニン主義のいわゆる「外部注入論」を、革命は階級自体の達成するものであるという点で拒否することはまったく正しいことであるが、それは党と階級との流動的な階級闘争の内部での生きた関係から切りはなされて論じられてはならないのである。

この問題を論じる際に、職業的革命家を軸とした前衛党による指導を拒否するだけに終るならば、階級全体の活動としての革命というものは一つの空語となるであろうし、また、前衛党と階級との指導と被指導との関係としてだけ論じるならば、この生々とした関係を保障する最重要の紐帯が次の問題になってこよう。

黒田寛一は次のように云う。「プロレタリア前衛党は、もちろん直接には「革命家の組織」として党に結集され、革命運動の指導部、プロレタリア階級の先頭部隊の役割をはたす。けれども、本質的に

は労働戦線の内部においてプロレタリアを革命的前衛＝革命的プロレタリアとして創造し、その政治的結集として前衛党が存在することなしには、革命闘争を勝利に導くことは決してできない。……要するにプロレタリア階級とその前衛党の区別において、それらの同一性の度合いを重度化し、そうすることにによって両者の交互媒介を実現しうるような形態と機構をそなえた前衛党、これがプロレタリア革命の真実の姿でなければならぬ」(1)と。

(1)「組織論序説」二二九—三〇頁

このこと自体は非常に正しいのであるが、このような前衛党を創造し維持していく保障はいかなる点に存在するのであるか。それはプロレタリア階級をその本質において把握し、自己のプロレタリア的主体性を現実変革の実践的闘争から切り離して確立することなどにはありはしない。学習によるこのような方法では、ブチブル・インテリゲンチヤにふさわしい道なのであって、プロレタリアートはこれを階級闘争の実践において、そこにふさわしい理論的普遍化によって学びとるより他はないのである。プロレタリアートの即自的階級から向自的階級への道はこれ以外には絶対ないのであって、ブチブル・インテリゲンチヤのように学習による自己変革の方法を普遍化することはできないであろう。努力の方向と現実的に達成しうるこの可能性はまさに異なったものなのであるから。

だとするならば、前衛党の個々の成員において、かれらが一樣に理論家になることも、そのような成員だけが前衛党に加わりうるということも正しくないのである。前衛党をこのようなものと考えるときには、それは必然的に思想集団のセクト主義におちいらざるを

題が政治問題である」ということの中こそある。真の前衛党創造のための闘争は無媒介に大衆闘争と並列されて、そのどちらも軽視してはならないなどとするのではなく、本質論的、原理(一五字不明)媒介されることによって客体的主体的条件に照応した現実の前衛組織として原理論的に確立されるべきなのである。

これを保障するものは、反スターリン主義的な真の共産主義的意識の獲得と同時に、プロレタリア大衆を把え、自己の活動を物質化せざるをえない前衛組織が、自己の戦略戦術を常に階級闘争の実践の過程で正しく具体化していく活動である。

前衛組織の主体的にかちとられたプロレタリア意識も、その組織的実体も、この組織の闘争方針がプロレタリアートを把えず、それが物質化しないときには、必然的に左右の日和見主義に犯されることになり、孤立化した小集団に留まらざるをえなくなろう。ブンドの破産はすでにみたように、反スターリン主義的立場の主体的獲得の弱さと同時に反スターリン主義運動の一般の方針を具体化することに失敗したことに根拠をもつものであり、その組織論的誤謬はこれと不可分である。ブンドの破産に対する反省はこのような統一的观点なしには不可能である。「プロレタリア的主体性獲得」の一面的強調は、ブンドの機械的抹殺と現実の階級闘争を没却した主観主義的党建設の絶対化にいきつく以外にはない。あるいはせいぜいのところ、試行錯誤的な大衆闘争を並行させる二元論におちいるのである。また、政治方針の正当性だけが一面的に強調されるときは、それがジグザグと大ゆれをくりかえすばかりか、そもそも政治方針の正当性をいかにして保障するかという解決のつかないジレンマに

えなくなり、労働者階級との相互の関係は「内」「外」との交互媒介による闘争としか把握されないのである。

このような把握の上にたった組織的展望は、前衛党創造の過程をいくつかの段階に分ける図式に終るのがせいぜいである。かくして、反スターリン主義運動のいっそうの発展は、新しい前衛党の存在するかないかあるとして組織の体的構造のいじくりまわしにおいてしまわなければならないであろう。

このような意味においては、「組織問題は政治問題である」というレーニンの言葉が重要な意義をもってくる。もちろん、ブンドにあっては、この規定は有効な組織戦術の欠如を隠蔽する役割を担わなかったわけではなかった。しかしながら、こうした事情は、組織問題を至上のものとして、独り歩きさせてよいことを意味しはしない。もともとプロレタリアートの前衛組織とは、革命達成のための過程的な手段以外の何物でもないのであって、それ故に階級闘争の客体的、主体的条件に左右される具体的な政治方針を物質化するためにも、その時々組織戦術がうち出される必要が生じてくるのである。

だから、プロレタリア革命の原理的なところで組織される前衛党は、その戦略戦術及び体的構造を現実媒介とする具体性において実現するわけであって、これから切りはなされた前衛党の組織づくりは観念の産物でしかありえないのである。本質論的、原理的組織論はこのような媒介をへることによってはじめて現実的党建設のための活動に役立ちうるといわねばならない。

すなわち、現実的で具体的な党づくりのかなめはまさに「組織問題」に達着してしまふ。

唯一の解決は統一の把握である。すなわち、反スターリン主義的左翼の思想の原理的把握と戦略の原則的一致に立脚した前衛の中核の存在と同時に、その原則性を階級闘争の現実によってたえず媒介される具体的方針として確立する活動を統一的に把握することが必要なのである。この媒介なしには、獲得された原理も物質化しえな

いばかりか、一個の教条と化してしまふであろうことは明白である。

(六)

ブンドは内的に破産し崩壊した。直接的には、権力の抑圧によるものでもなく、代々木の圧迫によるものでもなく安保闘争の敗北を契機とする内的緊張のために傷つき倒れてしまった。ここにおいて我々はブンドと日本の労働者階級との関係に想いをめぐらざるをえないであろう。

日本の反スターリン主義運動は、その底流において日本労働者階級の比類ない戦闘性に支えられながらも、特殊に培われたマルクス主義理論の土俵のうえに革命的運動の先駆性を担った学生運動を主体として発展してきた。公認指導部の神話の権威は、悪しき日本の伝統であったとしても、安保闘争後の今日では弾劾の対象たることをまぬがれない。だがしかし、今日の状況はいかにも困難である。日本労働者階級が左翼の公認指導部の呪縛からとき放たれるためには、反スターリン主義的左翼のさらけにいっそうの前進が要求されている。われわれは、この簡単な総括においてブンドの破産の根拠を探ってきた。それは安保闘争の渦中にみずから投入することによって、政治主義的偏向に犯され、ブチブルの急進主義を真のプロレ

タリ運動ととりちがえてしまうことによって打ち破りがたき壁に頭をぶつけて孤立し、その事からくる焦躁のために崩壊してしまつた。ここに我々は、反スターリン主義左翼における革命戦略の具体化を焦眉の問題として提出せざるをえない。なによりもここにブンド破産の理由をみることによつて、このことはいっそう切実な課題として浮びあがってくるのである。プロレタリアートの前衛党がプロレタリアートを大衆的に把握しうるのは、その方針が情勢を正しく把握しうるものであり、プロレタリアートの直感によって把えられて一つの物質力となつたときなのである。原理は宙に浮いたものでは決してなく、階級としてのプロレタリアートを把えるためには何よりもその方針の具体性においてでなければ不可能なのである。ブンドが自己の方針によってプロレタリア大衆を決定的に把えることにおいて挫折をみた今日、相対的に革共同全国委の存在がクロージアップされたもののこのことをもつて反スターリン主義運動が全体として前進したといふことはできない。それは今日、まさに現代革命の戦略を具体的に仕上げる点において過渡期の新しい段階をむかへたことを意味するにすぎないのである。ブンドがプランキスト的偏向を犯したというのは、それが真のプロレタリア的主体性を確立できなかったからというのでは、ましてや平和共存の否定や世界革命戦略を投げすてたからというのでは、このことの指摘だけはひどく不十分であろう。その根拠は、われわれがこうした基本的原則的立場を現実の階級闘争の中で具体化するところでぶつかった困難さの問題として同時に反省されることが必要である。でなければ不可避的に「プロレタリア主体性形成主義」とか図式的な「組織

の資本制国家権力の粉砕を、それぞれ意味する、根本的で統一的概念である」(2)としたり、「一九世紀ドイツの現状において、西ヨーロッパ資本主義の政治経済的構造から帰結されたマルクスの世界革命論は、直接には現実の本質論として展開されていることは否定しがたい事実だとしても、今日のわれわれは、これを本質の本質論つまり、普遍の本質論としてとらえかえすのでなければならぬ。しかるにO.Lのエセ理論家たちは、本質の本質的現象も、本質の現実形態も区別できない」(3)などといつたりする。

(2) 同 一九五頁
(3) 「共産主義者」二号 二四頁

これらには、現代革命の具体的考察が全く欠如し、ただこれらの直感に支えられた論理の操作があるだけである。だから、このことが次のような場合には、その観念性のゆえにひどい過誤を犯すのである。たとえば、「サンフランシスコ条約により形式的に独立を与えられた日本資本国家権力は、安条約などで経済的・軍事的にはアメリカ帝国主義ブルジョアジーに完全に従属化されている。まさにかかる日本権力アメリカ帝国主義とそれに従属した日本独占ブルジョアジーとの「同盟」によって維持されているところの日本資本制国家権力の打倒をわれわれはわれわれの戦略とする」(4)と。

(4) 黒田前掲書、二〇一頁、日本革命的共産主義者同盟綱領
M草案(「共産主義者」二号、一九五五年九月)

最近では、ソ連邦を「新しい範疇の社会」などといつたりすることからもうかえるように、事実の具体的分析ぬきに抽象的な論理の操作によって革命戦略をつくりあげたと称することは、それが

論」の見取図を観念的に描くか或いはせいぜいの所これと大衆運動重視のかけ声との並列化に終らざるをえないであらう。

ブンドの政治主義は、社会全体が怒濤のように荒れ狂っているときにはともかくとして、比較的安定した時期には、その欠陥をいかになくバクソラせざるをえない。反対に、革共同全国委のごとき、プロレタリアの自覚に基づき「プロレタリア党建設」の原則的主張は、シュトルム・ウント・ドラングの時代には、一個の政治勢力たりえず、一定の思想的影響を与えうるだけの存在にすぎないとしても、運動の停滞期(労働運動の一方の右傾化)にはふさわしいものである。だがこの活動だけで、反スターリン主義のプロレタリア運動の躍進を担うことは不可能である。

革共同全国委の思考にはぬぐいがたい抽象性がある。

たとえば、ソ連論のばあいには「労働者国家あるいはプロレタリアート独裁の歪曲形態」「スターリン主義者の特権官僚政府は、歪曲された労働者国家の直接性であり、官僚主義的集中制の政治的形態である」(1)と、かつて規定されていたが、これは国家権力の本質実体、機能の関係を直感に支えられて適用したものにすぎず、本質的に今日のソ連邦がプロレタリアート独裁の権力であるという規定への実証的説明をまったく欠いていた。

(1) 黒寛「現代に於る平和と革命の論理」 一六二―三頁

さらにこの抽象性は次のような場合にも顕著である。即ち、「オ四インターの政治綱領の正当性」という直感に支えられつつ「そもそも「反帝国主義」という概念は、普遍的には、世界革命の完遂を特殊的には実現された労働者国家の擁護を、個別的には各国の種々

観念性を一歩ぬけてよとするときには、試行錯誤をくりかえすだけに終るか、あるいは具体的な方針としてはただの一步たりとも前進しえないということになるのである。

こうした観念性は、全学連の方針にも反映しつつある。すなわち、ILO問題を直接的に全学連の方針にも反映しつつある。すなわち、任務方針に、スターリニスト組織全自連打倒を生じる形で掲げるなどの方向は、かつてのバプロ教条主義者の愚を再現する以外のなものでもない。われわれの戦略方針は、個別の闘争や特定の革命的大衆団体に於ては、その客体的主体的条件に応じて具体的な戦術をもたねばならない。そのような方針を提起することによって、現実の闘争を昂揚させ、学生大衆の意識を高め、かくして全学連の分裂を反スターリン主義左翼のヘゲモニーによって止揚することは明日とはいわず、今日の問題なのである。

したがってこのような状況では「反帝、反スターリニズム」のローガンも観念的なものでしかありえず、革命的マルクス主義の主体的把握なるものもブチブル・インテリゲンチヤの革命化の方途として観念的図式的組織論の枠内におしどめられることを余儀なくされるはかないわけである。前衛党が、自己の方針によってプロレタリアートを把えなければならぬのは、これによってのみ現実的にプロレタリア大衆と前衛党との生々とした相互関係が樹立されるからなのであり、われわれの基本的な戦略はここにおいて具体化されることになってより正しく、豊富なものとなり、一歩一歩具体性を確立されて現実的な力となることができる。

したがって、われわれはブンドの破産を反省することによって、

我々の現代革命の戦略戦術を確立することの焦眉の急を自覚し、このための努力を全活動においていっそう促進しようと考えるのである。これこそが、真のプロレタリア的自覚を正しくもたらさうな中心の課題であらう。しかしこの課題は観念的な「プロレタリア党のための闘争」によっても、硬直した「唯一の前衛」の活動によっても成功的に遂行されるわけではなく、プロレタリア的主体性と反スターリン主義の戦略・基本綱領とを不断に現実の闘争の媒介によって豊富に確立することを意識的に追求する前衛的組織の活動を必要とするであらう。

☆ ☆ ☆

今日までのところ全面的にブンドの活動を総括する試みは、残念ながら現われていない。このことは反スターリン主義的左翼のいっそうの発展にとってきわめて重大なこと、いわざるをえない。したがって、この小論は、この空白を埋めるための一つの試みである。今日の状況においては、組織的討議の可能性があまりないところから不可避的に生じてくる困難を適切に回避する方途はない。こうした事情によって、この小論はブンド中央に位置したものである。

任を可能なかぎり反省しようと企図しつつも多くの錯誤を犯す危険からまぬがれてはいないであらう。十分な検討を要請する次第である。

最後に蛇足ながら一言つけ加えるならば、この小論は、現在の反スターリン主義運動の焦眉の急を要する課題が、現代革命の戦略を具体化することであり、このことと結合された組織戦術の具体化が必須のものであるとする立場にたつて、革共同全国委「正当性と正統性」なる伝説の事実に基づく打破と、プロレタリア的自覚や、それに基づく「プロレタリア党」の物神崇拜的傾向の危険性の指摘とを意図したものである。今こそ、セクト的感情を大胆に放棄して焦眉の急を要する課題に全力をあげてとりくみ全反スターリン主義的潮流の行動の統一とイデオロギー闘争を活発に展開する必要がある。(了)

自由への道

— 前段階蜂起の総括 —

パビエーカ 何でおぬしは、そんなにやせているんだ、ロシナンテ？
ロシナンテ 何も知らずに働くからさ。
パビエーカ そんなら表や裏はどうしたね？
ロシナンテ おれの主人はひと口だつてくれやしなよ。
パビエーカ ほほう、おぬしは育ちが悪いぞ、主人の悪口をいう舌は驢馬にそっくり。
ロシナンテ 誰しも生まれてから死ぬまで驢馬をつくりさ。その証拠には恋しているやつを見るがよい。
パビエーカ 恋をするのは阿呆かな？
ロシナンテ 大して利口とは言えないね。
パビエーカ ひどく悟ったもんだね。
ロシナンテ 食うものを食わんからさ。
パビエーカ 従士をうらむさ。

花園紀男

ロシナンテ それだけじゃあ足りないよ。なにしろ主人も従士も、いやさ番頭も、ロシナンテにおとらぬ駄馬だとしたら、おれのつらさをこぼそうにもこぼしきれなからうじゃないか？
はじめに

われわれは、昨秋、安保決戦を前段階蜂起として貫徹しようとした。だが、できなかった。そして、われわれの多くの同志は、今、獄中にあり、いやおうなく総括に総括をかさね、考え続けることを強制されている。その中であつて、その総括を真に自らのものとしたとき、この獄中でのわれわれの総括を、敢然として、部厚くのしかかる壁を越えて公表することが許されるだろう。

われわれは行動したのであり、明日もまた行動するのだ。だから、この小文は、何よりもわれわれ自身のために書かれるのであり、ま

た、少なくともわれわれとは一時的には違った道を、あるいは数歩お
くれて来るとしても、われわれと同じく行動するために苦しんでいる
革命的プロレタリアートとその前衛達にのみ提起される。断じて日和
見主義者達、昨日おしやべりし、きょう革命的行動の挫折を自己の正
当化のために利用しガナリたて、明日また、ピーチク、パーチク、た
言うに違いない日和見主義者達に提起されるのではないのだ。繰り返
そう、われわれは行動したのであり、明日もまた行動するのだ。その
ためのみこの文章は書かれる。

ここに四・二八破防法公判ニュース第二号、一九七〇・八・二五日
という四ページの新聞がある。そこに次のような記事がある。

「赤軍派にも破防法、(略) 今回の赤軍派への適用は明らかに革命的
左翼総体の潰滅を狙いとする、恒常的な破防法攻撃としての第二弾
であり、七月二十日のわれわれの第一回公判に被告側が万全の体制で
臨んだことに恐怖した権力はなにも有罪判決を引き出さねば
ならない階級の使命感から、まず反撃力のほとんど喪失した赤軍派に
有罪を下すことによって、この裁判の有罪への布石とせんとしたもの
である。」

確かにもつともな言である。だが、われわれ赤軍派の獄中組はこの
記事を読んで、氣も狂わんばかりの怒りを覚えた。たしかにわれわれ
は潰滅同然かもしれない。反撃力もないように見えるやしない。だ
が、それは一つの革命的行動の挫折の結果であり、闘いの場から尾っ
ぽをまいて逃避した結果ではないのだ。そして、一つの革命的行動の
挫折という結果は、闘いの一過程での一つの結果でしかない。この結
果がもし新しい闘いの展望を何一つ持ち得ないものであるならば、あ
るいはわれわれへのかかる批判は正しいかもしれない。だが、それな

されたわれわれの政治(軍事)路線を、われわれの実際の闘いの経緯
の中で点検し、そこからわれわれの総路線である第一のスローガンを
点検していくつもりである。

A 「安保決戦を前段階武装蜂起として貫徹し、世界革命戦争を開始
せよ」という政治(軍事)路線の中に、私は、われわれ赤軍派誕生
の全秘密と、またわれわれ赤軍派の挫折の全秘密を見つけることがで
きる。

何よりも、この政治(軍事)路線は矛盾していたのだ。安保決戦を
前段階蜂起として貫徹すること、前段階蜂起を貫徹し世界革命戦争
を開始することは矛盾し、対立する、あい入れない二つの政治(軍
事)路線なのである。前者の政治路線は、われわれの従来の政治路線
であり、大衆運動(敵密には間違っているが、通念化された意味では
武装闘争に対して一般に用いられている)の政治路線であり、われわ
れは従来、六〇年安保闘争の総括として書かれた関西ブンドの「政治
過程論」にちなんで、政治過程論的政治路線と呼んできた。ブルジョ
アジーの政治過程(スケージュール)が国民の中に生みだす反政府運動
を一つの全国的な運動に組織することを媒介として、党组织を強化・
拡大し「来るべき政府危機、政治危機」のその日に備えるという、多
かれ少なかれ、日本や西欧諸国、それに、世界中で、武装闘争を政治
軍事路線としない諸党派の持っている路線である。

後者の、前段階蜂起を貫徹し、世界革命戦争を開始する政治(軍
事)路線は、今日、日本や西欧を除いては、一つの世界的潮流、一つ
のインターナショナルとして存在し活動している武装革命路線であ
る。この政治軍事路線は、今日では革命戦争という形態をとって遂行
されている路線である。ベトナム、カンボジア、ラオスの人民の闘い

らば、まず、そのことを明らかに証明し、そして、それにかわる方針
を提起しなければならぬはずだ。果して、著名人を連ねた一大弁護
団を構成し、公判に向けて大動員をかけることが「反撃力」だと言
うのか? 私は、われわれは「そうじゃない」と大声で叫ばなければ
ならない。

闘いに挫折や一時的潰滅は常にあることである。われわれは、その
革命的行動の挫折からこそ教訓を導き出さなければならぬ。そし
て、何ものにも恐れることなく、再び不死鳥のごとくよみがえり、鋭
く力強い具体的な力でもって自己の志向する地平へと歩み続けるの
だ。その一歩一歩が、そのみが真の「反撃力」なのだと言おう。わ
が同盟議長の法廷は彼一人で充分である。威敵をもって倒れるのに道
づれなどはいらぬのだ。彼は雄々しき不死鳥なのだから。

さて、総括をはじめよう。

(一) 政治路線について

われわれは、まず第一番に、われわれの総路線としての政治路線を
再検討してみなければならぬ。

われわれの政治(軍事)路線(注・政治軍事路線としてもいいのだ
が、なぜ(一)に入れたのかは総括の進行が明らかにするであろう)
は、われわれの綱領である赤軍(機関誌)において体系化され
た全内容であるが、その第一ページに次のようにスローガン化されて
いる。即ち「なし崩しファシズム侵略Ⅱ反革命戦争との闘いを世界
革命戦争へ」である。この総路線は、もつと具体的に次のように書き
かえることができる。即ち「安保決戦を前段階武装蜂起として貫徹
し、世界革命戦争を開始せよ」である。私は、このもつとも具体化

がそうであり、中南米において日々発展している闘いがそうであり、
アフリカで、中近東で、また、今日では北アメリカ帝国主義の本国で
のブラック・パンサー党の闘いがそうである。

つけ加えておこう。前者の路線は、ソ連派共産党の平和革命を路線
とする組織も、また反スターリン主義を掲げるトロツキスト諸組織
も、武装闘争を開始していない限り、実践的には同じくとっている政
治路線である。

この前者、後者の二つの政治路線は対立する、決してあい入れるこ
とのない路線である。われわれの矛盾はここに存在していたのだ。こ
の二つのからみ合ったままの、未分化な政治(軍事)路線であった。
そして、特に、後者の路線にとって、この前者の路線との未分化は、
とりわけ致命的なものである。それは敵の土俵のうちで闘うことを意
味し、ついには自殺を意味する。前者の政治路線には前者特有の法則
があり、後者もまた然りである。そして、その両者には同一基盤は何
一つ存在しないのである。

それでは、なぜこのような矛盾した政治(軍事)路線をわれわれは
自己の路線としたのか?

われわれはまず「政治過程論」を疑うことを知らなかった。われわ
れは、大衆運動しか知らなかったのだ。——そしてわれわれは、安保
決戦をむかえた。すでに、従来の方法(デモやスト、また、棍棒と投
石)では闘い得ないことは、余りにもはっきりしていた。武装が要求
され、われわれは武装した。だが、あくまで「安保決戦を闘うため
に」であった。安保決戦で何が起らなければならなかった。それが
日本のプロレタリアート、人民の唯一の合言葉であった。「七〇年安
保」こそ、だったのである。六〇年安保はわれわれの唯一の勝利的

イメージであった。七〇年安保はそれ以上でなければならぬ。少なくとも革命の臭いがしなければならぬ。安保決戦の時は容赦なく近づいて来た。

われわれは、武装蜂起を決意した。「政府危機・政治危機」は作り出さねばならない。「来たるべき日」を待つのではなく、それを引きずり出してこなければいけないのだ。もし、「来たるべき日」を待つという姿勢が自己のうちにあるとしたら、すぐさまそれをすて去るがいい。日々に、なし崩しでもってファシズムは進行し、敵のスケジュールは着実に消化されていってしまうのだ。だが、一たび武装蜂起をわれわれが主張しはじめると、口を閉ざし始めた。もはや指導者達は「安保決戦」を語らなくなり、口を閉ざし始めた。恐慌状態が惹き起こされ、政治技術にたけた古い指導者達は、七〇年代だと言いだめたのである。全戦線が、その頭が、少なくとも武装蜂起に意思一致したならば、確実に六〇年安保は越えられ「何かが生まれる」はずであった。だが、今や、われわれそんなわけには行かない、期待などすべきではないことを認めなければならぬ。ロシア革命型の「何かが起こる」ことを期待することは修正されねばならぬ。そのような期待の上に政治(軍事)路線を決めることは修正されねばならぬ。そして、そのことは、われわれの従来の政治路線そのものの根底的点検でなければならぬ。だが、われわれはそうしなかった。そうする代りに、「捨石」になる覚悟を決めたのである。「安保決戦」を「決戦」として闘うことは動かしてはならないという方針であった。これを動かすことは、ブンドと同じであり、中核派と同じであり、何よりも恐ろしい屈辱であった。

「安保決戦を前段階蜂起として貫徹し、世界革命戦争を開始する」

道を力強く歩んでいる。それは、現代過渡期世界にあって、唯一の正しい階級闘争の方法であり形態であることをはっきりとわれわれに指し示している。われわれが知らなかったただけのことなのだ。従来日本にこの政治軍事路線がなかっただけのことなのだ。「現実的なものが合理的であり、合理的なものが現実的である(ヘーゲル)」とは限らないのである。

問題はこうである。われわれは安保決戦を媒介に、その戦術を契機として、この新しい政治軍事路線(革命戦争)を発見したのであるが、それはたとえば、われわれ赤軍派にとっては、安保決戦を母として生まれた子供という関係にある。だが、この子供に母親とへその緒でつながっている限り危険であり、へその緒を切り離して一人立ちさせねばならぬのである。

安保決戦を第一におくのか、革命戦争を第一におくのか、われわれはこのように問題をたてることをしなかった。それは「前段階蜂起」という単一の方針であった。そして、この、安保決戦を第一におくのか、革命戦争を第一におくのかという問題は「前段階蜂起」を避けるものとして、ブンドの日和見主義者、中核派等と同じであることを意味したのである。だが今や、また、行動が共にあり、そして時間が物事の真の姿形を浮き彫りにしてくれている。安保決戦を第一におくという意味において、われわれは依然として日和見主義者と同じ政治路線に身をおきながら、新しい政治軍事路線である革命戦争を開始しようとしたのであり、これは革命戦争にとって致命的であり、自殺行為の結果である。そして、敢えて言えば、この安保決戦を契機として生まれようとしている戦術の中に、その恐ろしい深淵をのぞき見たが故に、日和見主義者達は用心深く避けたのである。そしてわれわれは、

という政治(軍事)路線はこのような路線であった。

九月五日の全国全共闘への蜂起宣伝デモ、大阪戦争、東京戦争、一〇・二一新宿闘争、大菩薩峠に至るわれわれの闘いは、この矛盾した路線そのものと同じく矛盾に満ちた闘いであった。一方では「安保決戦」に向けて全左翼戦線の左傾化を促進させるという目的の従来の大衆運動的、政治過程論的闘いがあり、他方では革命戦争の闘いがあった。そして、この革命戦争を示す闘いは全部(〇)失敗と挫折に帰したのである。大菩薩以後、他の同志達が追求している闘いもまた、全く同じ性格を示している。ハイ・ジャック、六月宣伝集会、PBM作戦然りである。

なぜ、われわれはこの矛盾した政治(軍事)路線を自己の路線としたのか? そして、なぜ、今なおしているのか!

それは、われわれがその二つの路線を結びつけようとしているからである。従来の政治路線の延長上に、新しい政治軍事路線としての革命戦争路線をおく時、この矛盾した政治(軍事)路線が生まれるのである。そうではないのだ。従来の路線からの新しい路線への転換を認めなければならぬ。確かにわれわれは、従来の政治路線を真に闘おうとした結果、新しい階級闘争の方法を発見したのであり、これは、この革命戦争という政治軍事路線への一つの道程であった。だが、これが唯一の道程ではないことを認めなければならぬ。従来の闘いの他に、階級闘争のもう一つの、そして真に正しい方法があったことを認めなければならぬ。敢えて言えば、この新しい路線は、一九六〇年代からでも、否、一九五〇年代、四〇年代、三〇年代からでも、ロシア革命以後の過渡期世界においては存在し得たし、そして、中国、朝鮮、ベトナム、キューバ等では現に存在し、またその確立のための

その深淵を感じたが故に、やっきになったのである。われわれと日和見主義者の根本的分裂はここにあり、その皮相な現象の中にはなかったのである。

われわれが前段階蜂起を媒介に臨時革命政府宣言を計画した時、このロシア革命のイメージを利用して、じつは、きわめて今日の現代的な分裂が始まっていたのである。重要なことは、われわれは断固として「権力」を問題にしはじめたのに対して、日和見主義者達はそれよりも怖れたのである。「とんでもない」問題だったのだ。

われわれが従来の政治路線だけしか知らなかった時、この新しい階級闘争の方法形態をめぐる論争は古い言葉で争われなければならなかったのである。そしてじつは、そのことは、日和見主義者を含めてのわれわれ総体の従来の政治路線そのものの「破産」をこそ暴露していたのである。

今また、入管決戦、七二年決戦が恥し気もなく指導者達の口からガナリたてられている。だが、もう誰も踊らない。日和見主義者達は自分で踊るがいい。われわれは、革命戦争を準備しよう。もう、ブルジョアジーのポケットの中で手足をバタバタさせることはやめるだろう。われわれにとってそれらはブルジョア政治路線以外の何ものでもないのだから。「ブルジョアジーの分派闘争」これが、従来の政治路線であり、ブルジョア政治過程(スケジュール)それは、新しい政治軍事路線である革命戦争、武装革命路線にとっては、たんに利用すべき一情勢でしかない。利用しようがしまいが、それは純粹に革命戦争の前進への「有効性」の観点からのみ捉えられる。われわれの挫折、それは今日、余りにも明白である。われわれは準備もできないままに玉砕に追い込まれて行った。そして、そのことは、われわれが前段

階級起を媒介にして開始されるだろう世界革命戦争（なぜ、世界を冠するのかは、この総括の過程で明らかにされるだろう）の形態については何一つ明確なイメージを持っていなかったことに端的に示されている。

B さて、以上でわが赤軍派の前段階階級の自己矛盾した性格を分析したのであるが、これをさらに深めていってみたい。それは、始めに述べたように「なし崩しファシズム侵略Ⅱ反革命戦争との闘いを世界革命戦争へ」というわれわれの綱領的スローガンの検討になるだろう。そして、このことの検討は、直接に、中核派の「侵略を内乱へ」、M L派の「アジア革命との大合流を」、その他多かれ少なかれ全左翼戦線の戦略・戦術の検討になることと思う。勿論、嗚呼偉大なる(カ)日本共産党をも含めてである。

この検討の材料に最も適している本年九月十九日付読売新聞朝刊第二頁に載っている一つの記事をここに引用しよう。

「中国の攻撃に反論、日共が赤旗で」——共産党は、去る三日に中国の人民日報と解放軍報が社説で日本共産党を『日本軍国主義の弁護をしている』と批判したことに対し、十九日付けの機関紙「赤旗」に編輯局員の論文をのせ『中国側の日本共産党攻撃こそ対米従属下の日本軍国主義に反対する防壁を弱めるものとして強く反論する。日共によると、中国側の新聞は『日共が現憲法は海外派兵を禁じており、このために日本軍国主義は復活していない』と判断しているように報道しているが、日共としては『現憲法の制約のもとでは対米従属下の日本軍国主義は全面的には復活が完了したとはいえない段階』と指摘しているのであって、中国側の日共攻撃は逆に日本の海外派兵を公然となしうる軍事体制をつくり出す現在の支配者側の策動を強める

結果を招く、とのべている」

武装革命路線を否定し、平和革命に幻想を抱く時、ブルジョアに対しては、なんと卑屈になることを余儀なくされることか。だが、この論争は、日共と中共だけの論争ではない。われわれとバンド日和見主義者達との論争でもある。すなわち、安保決戦の戦術をめぐる論争、分裂と直接結びついた論争として存在したのである。なし崩しファシズムというわれわれの権力規定に対しての、いやまだファシズムではない、その前段階である、時期尚早だと主張し、そのことによって権力闘争の開始を避ける論拠を作りだそうとしたバンド日和見主義者達との論争である。

この二つの論争は、全くその性格を同じくしているのである。ローマの奴隸行進にも似た恐怖のデモ規制に慣れ親しみ、それでも、「武器を手にする」よりはまだよい、とする奴隸の発想がそこにはあるのである。

だが、この論争はどうやって判定するのか？ 二つの主観的判断は、その精神構造を判定するには、他に何の証明も必要としないだろう。だが、われわれはそれだけでは満足するわけにはいかない。論争は、決着をつけなければならないのだ。それは、科学的、客観的でなければならぬ。そして、その証明は九人のわが赤軍派同志達が日本海上空から下界を見おろすことによって与えられたと言わねばならない。世界党と国際根拠地を建設するために飛翔した九人の同志達が見たものは何だったか？ 井の中の蛙、大海を知らずということであった。世界党、すなわち、新しいインターナショナルは現に存在し、そして、現に闘っていることを発見したのである。世界は、平和ではなかった。それは、止むことのない、革命と反革命の戦争であり、たゞわれ

われだけが奴隸の平和を求め、そして、であるが故に、現に存在して

いる国際プロレタリアートに対する国際ブルジョアジーの同盟者であるという現実であった。確かに、このインターナショナルは形式的には確認されていない。だが、現実には存在し、そして活動しているのである。われわれはこれを認めなければならぬ。これを認めることを恐れてはならない。そして、そこから一步を踏み出さなければならぬのだ。私は、われわれ日本の左翼諸組織の政治路線が、いずれもこの「客観的現実」から出発することなく、帝国主義大國の民族的特殊性の中の「平和」から出発していることに、今、啞然としている。そして、その特殊な、一國的特殊性の平和から世界を見て、そして「三度目の大戦が近づいている」「三度目の大戦は体制間戦争に違いない」と予想し、それに警鐘を乱打し「民主主義」的反帝国主義の闘いを組織する路線であり、そこでは、「一九七〇年の現実」は忘れられ、ロシア革命を生み落した第一次大戦前夜を夢想し、レーニンのあらゆる文章が引用されると言うわけである。

たしかに、特殊にかかる状況は、三度目の帝国主義の不均等発展の中から生み出されつつあることは一つの事実である。だが、それは「一九七〇年の世界」の中の一つの現実であり、一九一七年前の現実ではないのだ。

今や明らかである。侵略を内乱へ（中核派）アジア革命との大合流（M L派）、すべて正しい。だが、それは一面なのだ。皮相な正しさなのだ。重要なことは、根底的な現実を認めることである。世界革命戦争という客観的な現実を認めることである。この世界革命戦争に対する反革命戦争の根拠地にわれわれが存在していること、そのことを認め、それと対決しなければならぬ。口先ではなく、具体的に実践

として。

われわれは「階級的立場」から、全ゆる闘いを押しすすめてきた。一時たりとも、この「階級的立場」を忘れたことはなかった。しかし、それはあくまでも、この帝国主義本國の特殊な平和という現実の中でそうであったのである。そこから生み出される国際連帯は、しょせん小ブルジョアの反戦でしかない。明らかにそこは、革命戦争の「場」ではないのだ。

われわれは、客観的にブルジョアと同盟していたことを認めなければならぬ。レーニンが「第二インターナショナルの崩壊」で明らかにした、日和見主義の物質的基礎を、われわれは今、この世界革命戦争の時代に再び読み返さなければならぬ。

「日和見主義とは、大衆の根本的利益を労働者のうちのとるに足りない少数者の一時的な利益の犠牲にすることであり、言いかえれば、プロレタリアートの大衆を敵として、一部の労働者とブルジョアとが同盟することである。戦争は、このような同盟を、とくに判然とした、また強制的なものにする。日和見主義は特権的な、労働者層の比較的平和で文化的な生存が彼らをブルジョア化し、彼らに自國の資本の利潤のおこぼれを与え、零落させられ貧窮している大衆の災厄や苦難や革命的気分から彼らを分離させた、資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年の間に生み出されたものである。帝国主義戦争は、このような事態の直接の継続であり、完成である。なぜなら、これは大國民族の特権のため、彼らが他民族を支配するための戦争だからである。小市民の『上層』または労働者階級の貴族（および官僚）としての自分の特権的地位を擁護し強化すること、——これが、ブルジョアの日和見主義的希望とそれにふさわしい戦術との、戦時に

おける自然の継統であり、これが今日の社会帝国主義の経済的基礎なのである。(一九一五年五月)

安保決戦を契機として争われた全論争は、まさに、従来の政治路線の中にひそんでいた革命戦争路線と、ブルジョア政治路線との根本的分裂であった。それは、軍国主義が復活しているか、また全面的に復活していないのかという皮相な論争ではなく、「場」を異にするブルジョア政治路線かプロレタリア政治路線かの分裂であった。ただ、その根本的な論争が、従来からの政治的言葉をもって闘われていたのである。なぜなら、われわれは井の中の蛙だったからである。だが、われわれだけが行動し、そして、大海を見ることができた、見ることに成功した、——それが、赤軍派の全結果である。

レーニンはまだ、次のようにも言っている。

「日和見主義ときっぱりと手を切り、日和見主義が、かならず失敗することを大衆に説明しなければ、現在、社会主義の任務を遂行することはできないし、労働者の本当の国際的団結を実現することはできない。」(戦争と社会民主党(一九一四年五月日))

「日和見主義者は自分の信念を裏切るといふ代価を払って合法組織を『守る』がよい。だが、革命的な社会主義者は、社会主義のための危機の時代にふさわしい非合法闘争形態をつくりだすために、また、自国の排外主義的ブルジョアアジアではなく、すべての国の労働者と労働者を結合するために、労働者階級の熟達した組織能力と組織上のつながりを利用する。プロレタリア・インターナショナルはほろびはしなかつたし、またほろびはしないであろう。労働者大衆は全ゆる障害をのりこえて新しいインターナショナルをつくり出すであろう。」(同上)

世界的な革命戦争の終戦ではなかつたのだ。それどころか、ますます激化してきている。日本軍国主義と蔣介石一派によって行なわれた、中国共産党の指導する抗日根拠地と八路军、新四軍に対する「殺しつゝくし、焼きつゝくし、奪いつゝくす」三光作戦は、朝鮮で、ベトナムで、全世界で今なお継続されやむことを知らない。

今や、なんの躊躇もなく、従来の政治路線から訣別しなければならぬ。革命戦争路線、武装革命路線の下に新しい闘いへ、プロレタリアート・人民を組織しなければならぬ。それがいかに困難であろうともである。

ルカーチは、「一定の時期に、客観的に存在する『階級意識』の最高の可能性を、明確に作り出してゆくこと、したがって意識的前衛が組織上独立することは、この客観的可能性と事実上の平均的意識状況との開きを、ある方法で、つまり革命を促進する方法で埋めてゆく手段にはかならない。」(ルカーチ・「階級意識」一九三三年)と云って、一八年および一九年のドイツ革命の敗北と、一九年にルカーチ自身、中心的に参加して敗れたハンガリー革命の後に、党と階級の生きた関係を総括している。

レーニンもまた、同じように言っている。

「重要なのは、人数ではなくて真に革命的なプロレタリアートの思想と政策を正しく表現することである。肝心なことは、国際主義を『声明』することではなくて、もつとも困難な時期にさえも実際の国際主義者である能力を持つことである。」(四月テーゼ)

国際主義こそは、プロレタリアートの前衛の唯一の客観的な鏡である。この鏡の前で、すべての前衛を自認する組織は点検されねばならないのだ。そして、鏡がくもっている時、自らの手でそのくもりを拭

「現在の帝国主義戦争を内乱に転化せよ」ということは、コミンテルンの経験によって指示され、パーゼルの決議(一九二二年)がその輪郭を示し、高度に発展したブルジョア諸国間の帝国主義戦争のすべての条件からでてる。ただ一つの、正しいプロレタリアのローガンである。このような転化の困難が、ある時期にはどんなに大きく見えようとも、社会主義者は、戦争が事実となった以上はこの方向をめざして、系統的に、ねばり強く、ひたむきに準備活動することを決してやめないだろう。ただこの道によって、はじめてプロレタリアートは排外主義的ブルジョアアジアへの従属を脱することができ、諸国民のほんとうの自由への道と社会主義への道を、形はちがいで速度のちがいはあっても、断固としてすすむことができるであろう。」(同上)

今日、このレーニンの思想は、一九七〇年の客観的現実、世界革命戦争の中に翻訳されねばならない。一九七〇年の現実には、パリ・コミューンの経験を直接夢見ることが、いかにブルジョア独裁下での平和思想であるかは余りに明らかである。中国革命戦争、ベトナム革命戦争、朝鮮革命戦争、キューバ革命戦争、アルジェリア革命戦争、そして現に、全世界の日本と西ヨーロッパ以外では日々闘い抜かれてる全ゆる事実を見なければならぬ。地球儀を前にして、世界を見るがいい。そうすれば、やれ入管決戦だ、やれ七二年決戦だ、という政治路線が日本だけの特殊な、極めて皮相な、小ブルジョアアジアの政治路線であることがわかるであろう。プロレタリアートの根本的な利益、世界社会主義への根本的なプロレタリアートの闘いとは無縁な、ブルジョアアジアの自滅や恐慌を待ち望むきわめて無力な闘いであることがわかるであろう。

一九四五年八月十五日とは、帝国主義戦争の終戦ではあったが、世

い去らなければならぬ。

さて、結論を整理してみよう。

我々の綱領的スローガンである「なし崩しファシズム侵略に反革命戦争を世界革命戦争へ」の中に内在する従来の政治路線を精算しなければならぬ。すなわち、日和見主義者に反対している点、正しいと同時に日和見主義者達と「場」をかえなければならぬ。客観的現実としての世界革命戦争に政治路線を転換しなければならぬ。

中共と日共との軍国主義論争は、たんに日本軍国主義が復活しているかないかの論争ではなく、より根本的な、立脚している現実認識の対立なのである。

「全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者とすべての手先ぎを打ち破ろう。いま、全世界的範囲において、アメリカ帝国主義に反対する闘争の新しいたかまりがあらわれつつある。第二次大戦後米帝とその追随者はたえず侵略戦争をおこし、各国人民はたえず革命戦争によって侵略者をうち負かして来た。新しい世界大戦の危険は依然として存在しており、各国人民はかならず備えがなければならぬ。だが、当面の主な傾向は革命である。」(毛沢東・人民日報33)という毛沢東の現実認識、立脚している場所と日共のそれとは、プロレタリアートとブルジョアアジアの違いなのである。

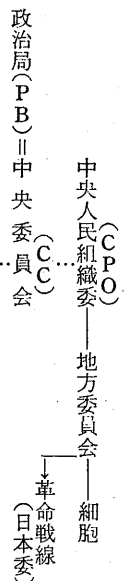
C 結論。「前段階蜂起」のスローガンは、古い従来の政治路線から新しい革命戦争路線への過渡期に性格を持っており、この過渡性は、新しい革命戦争路線にとっては精算されるべきである。すなわち、依然として一九七〇年の世界革命戦争の客観的現実立脚せず、帝国主義大国の特殊性に立って、そこから一九一七年前のロシアを夢みる、レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」の機械的適用の、いわゆる後段

階革命とも言うべき待期主義に対するアンチテーゼとしての位置そのものを、今や止揚すべきである。

クラウゼヴィッツは、その「戦争論」の中で戦争を「他の手段もつてする政治の継続」と言っている。もちろん、他の手段とは暴力的手段・軍事のことである。私がこの(一)で考察し、総括してきたことは、このクラウゼヴィッツの定義の原点に戻ること、この定義の「逆も又真なり」と言うことである。すなわち、「政治とは、他の手段をもってする軍事(暴力的手段)の継続」に他ならないことの確認である。

レーニンは一九〇五年七月一日(西紀六月二十七日)『プロレタリア』第7号で、オデッサの蜂起、戦艦「ボチョームキン」の革命の側への移行に対し、ただちに革命軍と革命政府の実践的指針を提起しているが、その中で「革命軍も革命政府も、きわめて高度な型の『有機体』である」と指摘している。政治と軍事、戦争と平和の関係はメダルの裏表であり、特に階級戦争においてこの有機的関係を忘れることは、プロレタリア階級の指導者にとって、指導者失格を意味する。今、日本で行なわれている新左翼の「政治」は、この意味では牙のない「政治」と言わなければならない。それは、有機的生命のない骨の髄までの奴隸的政治である。そこでは、全ゆる集会、デモ、ストライキは死んでいる。

だが、プロレタリアートの政治は必ず復活されねば、させねばならないのだ。広野を焼きつくすにはマッチ一本もあれば足りるのであり、一握りのゲリラ軍を人民勢力に与える時、その政治は復活する。(これについては次の(二)で明らかにされるだろう)その時こそ、労働者のストライキが、三里塚の農民が、在日被抑圧民族が、そしてすべ



この我々の組織の特徴を見てみよう。

① P B — C C — C P O — 地方委 — 細胞という右側の組織は従来の平和的大衆闘争のための党組織であり、いわゆるマルクス・レーニン主義の普遍的組織形態である。その理論的根拠はレーニンの「何を為すべきか」である。今日では、日共から新左翼に至るまでの共通の組織である。

② ①を根幹とする革命戦線(日本委)は、その形態においては従来通りの大衆組織である。ロシア革命においてはソビエトへ転化発展するプロレタリア独裁権力を示す。

③ 左側のCAO(中央軍事組織委員会) — 中央軍が、従来の平和的、大衆闘争の党組織に存在しなかった新しい組織である。どの点で新しい組織なのか? それはCAO — 中央軍が恒常的組織となっている点である。なぜなら、一時的には従来も存在していた。従来の平和的大衆闘争の中ではあれ、合法的枠内のぎりぎりの「実力闘争」のたびに、最も戦闘的な活動家の擬似軍隊的突撃組織として組織されていたからである。

④ 党中央の下に中央軍がありながら、党地方組織の下に、地方軍、またゲリラ軍が存在しない。これは経験的に否定されていることを示している。というのは、論理的には当然つくられるべきであるからである。

ての人民が、真に生き生きと呼吸し始めるのだ。また、不毛な裁判闘争を闘っている無自覚は多くの革命的學生連が、その時から、二度と法廷に戻ることもなく「自由か殉教か」の誓いをたてて、武器をもって闘い始めるのだ。我々は、今こそ自らを牙をもった猪としなければならぬ。飼いならされた養豚場の豚は、しよせん敵の食卓にポークンターとしてのせられる運命なのだから。

現実には暗号で綴られている。それを解読するための乱数表、暗号解読書の入手は大きく遅れるのが常であり、それなしでの解読には多大の時間が費やされるのが、また常である。だが、我々はドン・キホーテの如く行動し、遂にその暗号を解く鍵、解読書意識を自らの手で作り上げることができた。そして、現実は今、我々の目に、はっきりとその真の姿を映じているのだ。

ラ・マンチャの男、ドン・キホーテ。俗物だけが軽薄にも、真理に満ちあふれている彼、ドン・キホーテの行動を笑うのである。

(二) 組織路線について

我々は、(一)で我々の政治路線である前段階蜂起路線の根本的な矛盾、その二元論を総括し、革命戦争路線への路線転換を獲得しなければならぬことを結論した。

ところで、政治路線は、直接組織路線と結びついているのであり、組織こそは目に見える政治路線である。政治路線の転換を実践するためには、どうしても組織路線の転換を避けられない。そのために、まず我々の実際の組織の点検から始めよう。

A 我が赤軍派の実際の組織は次のように図式化することができる。



⑤ 中央軍、革命戦線内組織の根幹が、P B — C C — C P O — 地方委 — 細胞という党組織であり、これは基本的に従来の党組織そのものである。たしかに、CAOという新しい機関が存在しているけれども党組織の一つの分岐でしかないので、党組織そのものの性格には変化はないのである。

さて、以上のような特徴を持つ我々の組織路線を分析し、考察してみよう。

まず第一に、我々のこの組織が、従来の平和的大衆闘争の組織の量的発展として存在することである。それは(一)で明らかのように、従来の一時的擬似軍隊の恒常化として存在することである。このことは、我々とフロント日和見主義者達との分派闘争が端的に示している。一九六九年四・二八闘争の突撃隊の安保決戦に向けての維持・恒常化としてのR・G(共産主義突撃隊)建設こそ、七・六分派闘争の引き金であった。だが、この量的発展は質的転換を直接意味するであろうか? すなわち、平和的大衆闘争の擬似軍隊的突撃隊が、ほんものの軍隊に直接転化するであろうか? すなわち、それが革命戦争を闘う軍に、成長転化するであろうか? 事実(すなわち、大阪戦争、東京戦争、大菩薩峠、ハイ・ジャック、P B M作戦の事実である)否定的である。だが、結論はひとまず後に回して、ここでは次のことだけを確認しておく必要がある。この一時的擬似軍隊の恒常化という量的発展は、質的転換を要求しているということである。そして、七・六の分裂は、実は、この質的転換が従来の党組織そのものの否定を要求していることを証明しているのである。

だが、もっと分析してみよう。

第二に、この従来の平和的大衆闘争の党組織が、武装大衆闘争の組織への質的転換を獲得したことがあるであろうか？ 歴史は、我々のこの設問に対して、肯定的な解答を与えている。すなわち、ロシア・ボルシェヴィキの歴史である。そして、だからこそ、今日、マルクス・レーニン主義党は普遍的な形態として存在しているのである。だが、よく考えてみなければならない。ロシア革命は、この転換をいかにして為しとげたのか？ 帝国主義戦争を内乱へ、であった。帝国主義戦争こそは、この転換の助産婦であった。今日、我々は、この平和的大衆闘争の組織から武装大衆闘争の組織への、量から質への、転換のための助産婦を持っているだろうか？ 否といわねばならない。このことはすでに(一)において明らかにしてきたので詳しくは触れない。我々は、レーニン型の革命を受動的革命と呼ぶ。我々はロシア革命以後の、現実の世界革命の過程という条件下にいたのであり、そこでは、階級闘争は革命戦争の形態をとるのである。レーニン主義は、新しい現実の中に発展させられねばならないのである。そして、それは助産婦の助けを借りず、自らこの転換を獲得しなければならぬのである。我々は、この現代革命を攻撃型革命と呼ぶ。

マルクス・レーニン主義者は、全ゆる真理が相対的であり、条件的であることを認めなければならない。

(一)で我々は、従来の平和的大衆闘争が、直線的に武装大衆闘争に転化発展するのではないことを証明してきた。それは、階級闘争の二つの方法であり、そして後者だけが唯一正しいプロレタリアートの方法であることを見てきた。今、我々は、組織についても同じことを証明することができた。従来の党組織は平和的大衆闘争の組織であり、これがそのまま武装大衆闘争の組織に転化発展することはあり得ないの

である。何の疑いもなくそれを可能と信ずるということは、政治路線と同じく一九七〇年の客観的現実である世界革命戦争を忘れた、帝国主義本国の特殊な奴隷の平和に耳たぶまでもどっぷりとつかっている者の見る一九一七年の白昼夢である。

だが、もっと細かい点まで見ておこう。

第三に、(三)の事実である。すなわち、論理的には、中央軍を持つことは地方軍、ゲリラ軍(この場合、ゲリラ軍の概念はロシア内戦時の正規軍に呼応して、正規軍を補助するバルチザンと同じである)もまた、持たなければならないにもかかわらず、我々の実際の経験はそれが不可能であることを示している。何よりも、内戦状況が現出し、限り、地方軍、ゲリラ軍の存在は考えられないのである。それは、次のことを意味する。すなわち、従来の党組織が内戦を創り出す組織でないということである。助産婦を待つ、受動的な組織なのであり、そしてそのことはまた、次のことを明らかにする。党地方委、党細胞が地方軍、ゲリラ軍を創り出す能力を持たないことは、党中央もまた、中央軍を創り出す能力を持たないことを意味する。ここに、我々の矛盾が存在している。我々は、中央軍を持っているからである。

ここに、我々は我々の組織の二元論を発見する。明らかに、従来の党組織と中央軍は別の組織であり、この二つは互いに矛盾し対立する組織である。この二つの組織の接ぎ木、それが我々の実際の組織なのである。

新しい酒は、新しい容器に入れなければならない。我々の七・六以来のすべての挫折の組織上の原因は、この二元論にあったのである。

このことに無自覚のまま、まるでそれを一つの有機体の如くに錯覚し、「党一軍」とか「党一軍 革命戦線」といって、あるべき組織と

それを混同する時、惨憺たる結果が伴ったのである。「党が鉄砲を指揮する」(毛沢東)「政治が軍事を指導する」(レーニン)という真理が、この二元論の組織に焼きうつし的に適用される時、デモ学生がベトナム戦争を指揮、指導する如きことになるのである。なんとということか！

第四に、我々が、一九一七年ロシア革命の助産婦であった帝国主義戦争に代るものとして、「前段階蜂起」を位置づけていた傾向のあったことを指摘しなければならない。

我々の綱領的文章である赤軍のNo.4の四二ページに次のように書かれている。「世界革命戦争を開いとる問題は、何よりも、この帝国主義階級闘争の不可避の転換が、どのように質として獲得されるかにかかっている。我々はそれを世界革命戦争Ⅱ自国帝国主義打倒を開始する前段階武装蜂起と規定する。この前段階武装蜂起の実現とそれを通してのヘゲモニーが世界党―世界赤軍―世界革命戦線へと物質化されること、このことよってのみ世界革命戦争は開始されるのである。」

すなわち、我々の従来の平和的大衆闘争の組織そのものが「前段階蜂起」を助産婦として、武装大衆闘争(すなわち、世界革命戦争)の組織である世界党―世界赤軍―世界革命戦線へ物質化されるかの如く考えていたのである。これは依然として、我々が、ロシア革命の白昼夢を見ていたことを証明している。前段階武装蜂起とそれを通してのヘゲモニーとは、追悼集会でしかないのだ。

さて、以上で我々は我々の実際の組織を見てきた。我々の実際の組織は従来の平和的大衆闘争の組織であり、この組織は決して、直線的に、武装大衆闘争の組織に転化することはできないということを、再

度、確認しておこう。この不可能事を可能にしようとすることは、まさしく自殺行為であり、我々の前段階蜂起路線が自殺路線であると同じく、その組織もまた、自殺組織であるとあえて言おう。それは、決して革命戦争の組織ではないのだから。

B 我々は、Aにおいて我々の実際の組織の二元論を分析してきた。そして、今ある古い従来の平和的大衆闘争の党組織は、一九一七年ロシアの如く帝国主義戦争という助産婦を持つことができない石女(いしむすめ)ではないことが明らかになった。不産女の夢は終わった。

では、Aでなお未解決の問題として残っている、中央軍という、従来の実力闘争の、一時的擬似軍隊の恒常化という量的発展の要求している質的転換、すなわち、真性の軍隊はいかにしてなしとげられるか？ 従来の平和的大衆闘争の中から生まれた一時的擬似軍隊の指揮・指導の根幹である党組織が、今や指揮・指導の転換をなし得ない、不産女の、五〇年遅れの姥姥であることが証明された以上、すなわち、助産婦がいけないことがはっきりした以上、そこに自ら解答は用意されている。すなわち、自ら転換すること、これである。

自ら、質的転換を獲得することは、すなわち従来の党からの完全な独立である。(一)で結論された政治的独立は今、組織的にも解決されたと言うことができる。我々の実際の組織に存在した二元論の矛盾は、新しく発生した戦闘組織に一元化されたのである。この六九年の国際階級情勢と安保闘争によって押し上げられ、促されて発生した新しい戦闘組織、大菩薩峠にその輪郭を、事実をもって示した新しい組織は今、意識的姿をとることに成功した。

我々は、日和見主義者達がいま全ゆる「思いつき」と「処方箋」をもって、革命の正規軍だとか恒常的武装闘争などを我々に提供してく

れ、明日にでも社会主義が実現するかのような大仰な態度とは全く別な態度でこのささやかな総括を書いている。

我々の態度はレーニンが「パンチザン戦争」で指針とした態度と同じである。それは、

「第一に、マルクス主義は、運動を何か一つの特定の闘争形態にしばりつけない点で、全ての原初的な形態の社会主義とは違う。マルクス主義は、多種多様な闘争形態を認めるものであるが、その際、それらの形態を『思いつく』のではなく、運動の過程で自ら生ずる、革命的諸階級の闘争形態を普遍化し、組織化し、それに意識性を与えるにすぎない。全ゆる抽象的な公式、全ゆる空論的な処方箋に、無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大衆闘争——それは運動の発展、大衆の自覚の成長、経済的および政治的危機の激化にともなつて、たえず新しく、ますます多様な防御と攻撃の方法を生みだす——に對して注意深い態度をとることを要求する。……第二に、マルクス主義は闘争形態の問題を、かならず歴史的に考察することを要求する。具体的な歴史的情勢をよそにしてこの問題を提起することは弁証法的唯物論の初歩を知らないことを意味する。……」(「マルクス主義軍事論」二二一—二二ページ)

全ゆる日和見主義を合理化し、待機主義を合理化し、不毛な自己絶対化とその結果としての古い、従来の党組織は文字通り革命家達のゴミ箱、便所となり、そのことによって、革命的プロレタリアートの隊列をととのえることを可能にしつつある。この新しい前衛の組織は、過渡的にとつた二元論的形態——古い、従来の党の傭兵としての姿——を脱けだし、自立し、一人立ちすることができ、この組織は完全な非合法形態であり、一時的・過渡的に二元論的誤りから必然化され

た、合法と非合法の未分化な形態である「政治警察との鬼ゴッコ主義」あるいは「非合法ゴッコ」とも言われるべき不毛な形態から脱けることができるのである。政治路線における二元論が、どこかの基地の近くで「火遊び」を必然化するように、組織上の二元論は「非合法ゴッコ」を必然化するものであり、そこから脱けてた組織上の独立は、従来の公安のマン・ツ・マン方式を何ら根拠のないものとすることも可能にする。

一見、この一握りのゲリラ軍(新しい戦闘組織はいま、こう名づけられるべきである)の独立は、プロレタリアート・人民からの孤立にみえる。だが、それは弁証法を理解しない者にとのみであり、事実上、この時から真のプロレタリアート・人民とその前衛との結合が始まるのである。この時から、プロレタリアート・人民は初めて真に本質的運動を開始するのであり、一つの有機体の如く新陳代謝の収縮運動を始めるのである。この結合は闘いの前進とともに、目に見えない形から目に見える形へと急速に発展するであろう。だが、次のことを銘記していなければならない。つまり、この闘いは徹底的な闘いであるというのである。たんに、一国的なものでは終らないというよりも、むしろ、直接に世界革命戦争であり、敵味方ともに「最後まで」の意志を持っている闘いであり、始めから終りまで意識的な闘いであり、その進行とともにますます自然発生的条件は失われ、「主観と主観の戦争」の様相を呈してくる闘い、ということである。

この闘いは、クラウゼヴィッツが戦争の絶対的形態と呼んだ形態をとって行くであろう。

「戦争が政治の一部であるとすれば、それは政治の性格をおびることになる。政治が大規模かつ強大になるや否や戦争もまたそうなる。

そしてついにはこの関係は高まると、戦争がその絶対的形態にまで達するようになる(「レーニン、クラウゼヴィッツ「戦争論」ノートより)のであり、「戦争の動員が大規模かつ強力になるにつれて、この動員が諸国民の全存在にまでかかわるにつれて戦争の目標と政治的目標とはますます一致し、戦争はますます純戦争的となり、ますます政治的・なくなるように見える。」(同上)のである。

我々が闘わなければならない革命戦争の性格は、まさにこの通りである。今、その全過程を予測することは不可能であり、かつ無意味である。重要なことは、もはや、キューバ革命は二度と起り得ないことであり、中国革命以上の血の河を避けられないに違いないことを確認し、引き受けることである。周知の通り、キューバ革命においては、バチスタ軍の五百分の一の殲滅をもつて、その政治体制をくずすことができたが、それはクラウゼヴィッツの定義から言えば、戦争という観点からは極めて中途半端であり、それだけ政治的性格をもつた革命であつたと言ふことができる。

戦争とは、敵の戦闘力の消滅を目標とするものであり、その政治的・目的は敵の意志の破砕である。

我々は、敵味方ともに歴史上類例のない「敵の意志」の破砕を目的としなければならない。我々の闘いの徹底性はおのずと明らかである。それは文字通り、目に見える形態をとつた、「世界革命戦争」となるであろう。

今日、帝国主義世界戦争はあり得ない。全世界のプロレタリアート・人民の単一の闘いは明らかに具体的問題となりつつある。一日一日と進行す全世界の客観的現実はこのことを示している。中共・北鮮の日米軍との戦争準備、ゲバラの「二つ三つの無数のベトナムを、」

すべて客観的・具体的事実であり、単なるアジェンダではなないのである。世界革命戦争の力関係と構造を明らかにすることはこの原稿の枠を越えることであり、これについては別の機会にしたい。我々は、ただ、我々の現実の闘いの任務が、政治的には世界革命戦争の端初を、組織的には世界赤軍(世界武装プロレタリアートの最高の組織形態)の端初的形態を実践的任務とすることである。

今、現に敵階級が保有している二十万の軍、二十万の警察、数十万の米軍の消滅では足りないだろう。そして、それ以上のプロレタリアートの血が流されるだろう。だが、自らの血がその一滴だとしても恐れてはならない。それは、階級社会の廃絶と同じく、避けることのできないことなのだ。我々の任務は、恐れることなく、この闘いを始めることであり、この一握りの最初のゲリラ軍とプロレタリア・人民の結合を死を賭けて組織することである。

本物のゲリラ軍を登場させよ、敵を愛をこめて殺すこと、かつ、自己の死を芸術家の愛をもつて受け入れること、この枯れた覚悟こそゲリラ戦士の精神でなければならない。すさまじきまでに冷静な、水の如き魂だけが戦争の芸術を築くことができる。

日和見主義者の代表者である似非ヒューマンリストの日向翔吾は、性来のおつちよこちよいと厚顔無恥なふうてんの精神をもつて、日和見主義者の精神構造を告白している。「死ぬのか否か」の二者択一の前に赤軍派は英雄の如く顔を上げ、それに対して彼ら(日向君らである)は「眼を抜した」と。(理論戦線)彼がその時もらしたかどうかは書いていないので定かではないが、あり得ることである。新宿の古巣に帰るがよい。

武士道とは死ぬことと見つけたり(葉陰)、これは何も右翼だけの

特権ではない。古今東西を問わず、戦士達の常に持つべき覚悟なのである。

プロレタリアートは、明白な展望がひらかれる場合だけ、かつ、先見の明を持つ、不屈の確信ある指導部が自分達の上に存在していることを感ずる場合だけ、はじめて変革のための確信に満たされるのである。プロレタリアートは「火遊び」や「非法法ゴッコ」は一目でにせ物だと見抜く、天性の才をもっている。それは、歴史に培れた本能なのかもしれない。このプロレタリアートの本能の前にのみ、我々は自己を点検しなければならぬ。そして、年若いゲリラ戦士達の、愛に満ち英知に満ち毅然とした戦いはまもなく開始されるだろう。若きゲリラ戦士達、それは一握りのゲリラ軍であり、これが中央軍が我々の目指さねばならない組織なのである。

自ら、革命戦争を切り拓き、かつ、自ら指導することである。そして中央軍は従来の党組織から訣別しなければならぬ。自ら、新しい党の形成過程であること、そのことを自覚し、組織して行かなければならないのである。

解答は与えられた。政治路線における二元論の克服は、直接、組織路線における二元論の克服となつて結実した。

中央軍、自ら政治的前衛とならねばならないのである。

C 再び、この組織における二元論が、一体どこから発生して来たのか、を考察して見よう。

我々が政治路線において二元論の秘密がどこから来たのかを明らかにしたように、組織における二元論の発生の歴史的根拠を見てみなければならぬ。政治路線における二元論の秘密は、我々が従来の平和的大衆闘争路線、すなわち、政治過程論をマルクス・レーニン主義の

政治路線だと思ひ込みながら、じつは、一九七〇年の過渡期世界における現実の世界革命の過程、世界プロ独への世界革命戦争という客観的現実を忘れ、帝国主義大国の特殊性に立ち、そこから一九一七年前のレーニン主義を教条的に、機械的に適用していることから発生してきたのであり、客観的には、帝国主義ブルジョアジーと同盟していたことを明らかにしてきた。そこから、この全く対立・矛盾する二つの政治路線を結合しようとしたことが、我々の政治路線上の二元論の根源であった。

組織上における二元論も、この政治路線上の二元論と直接に結びついている。

今日、全世界に存在するマルクス・レーニン主義党の組織は、いわゆるスターリニスト党も、またトロツキスト党も、その他様々の諸組織も、それがマルクス・レーニン主義をかかげている限り同じ党組織を持つていたのである。その一つ一つを点検することは無駄である。だが、一つだけその共通の党組織に分裂が存在するのである。それが、これまで何度もくりかえし強調してきた、平和的大衆闘争路線と武装大衆闘争路線の分裂である。日本や西ヨーロッパでは平和的大衆闘争路線がマルクス・レーニン主義党の客観的な政治路線である。

(主観的には無数の相違はあるのだが「重要なことは、口先ではなく手足である」レーニン)そして、東南アジア、中南米、中近東、アフリカ、また北アメリカ合衆国のブラック・パンサー党などの、一つの全世界的潮流、一つのインターナショナルとなりつつある政治路線、武装大衆闘争すなわち革命戦争路線である。この根本的な分裂を見ることなく、党組織の同一性をもって、それを同一視しては誤りである。誕生以来、一貫して武装大衆闘争(革命戦争)の党であった中国

共産党、インドシナ共産党(ベトナム労働党)などと日本共産党や従来の我々を同一視することはできないのである。

確かに、党一革命戦線(または統一戦線)という構造は正しいのである。だが、それは武装大衆闘争路線の中でのみ実現されるのであり、平和的大衆闘争の中でもなければ、その転化・発展の中からでもない。この二つの路線は全く別の、対立・矛盾するプロレタリア政治路線とブルジョア政治路線であり、同じようにその組織もまた全く対立・矛盾する別々の組織なのである。このことに無自覚のまま、一九七〇年の現実からではなく、一九七〇年の帝国主義大国の特殊性から出発し、一九一七年的な組織の転化・発展を夢みる時、二元論的組織が生み出されるのだ。そして、それは、我々の綱領の中に次のような転倒となつてあらわれている。

「過渡期世界の成熟とともに、社民は帝国主義との恒常的同盟II構成要素へと転化し、レーニン主義の修正派IIスターリン主義を過渡期世界II現代帝国主義の補完者として生み出し、マルクス・レーニン主義は反スタ共産主義運動を形成し、受けつがれた。そしてその発展止揚が、共産主義者同盟を普遍的形態とし、ゲバラIIカストロ、毛沢東を地方的形態として成熟してきたのである。」(赤軍 No.4の四二ページ下)(傍線、著者)

逆である。我々こそが、まさに世界革命戦争の現実から離れ、帝国主義大国の民族的特殊性の中の地方的形態として客観的に存在し、そこから世界革命戦争の現実接近する部分であり、ゲバラIIカストロ、毛沢東こそが、まさに普遍的形態なのである。

キューバ革命を最も科学的に解明したレジス・ドブレはその著書「革命の中の革命」で次のように言っている。

「ゲリラとは生成過程にある党である。」

「ゲリラは自らを政治的前衛に変革するとの条件の下でのみ、軍事的にも発展できるのである。」

ドブレはまた、

「今日、強化すべきものは何か、党か、それとも人民軍の胚種であるゲリラか? 決定的な鎖の環はどちらか? 主要な努力をどこにむけるべきか?」という一見矛盾しているかにもみえる設問を置き、そして「この問題は、他の国の闘士達にも提起されるだろう」と予言し、自ら解答を与えている。

「ラテン・アメリカのある地域では、弁証法的にいえば、長期的にみて、前衛党と人民軍の間に二者択一する必要はない。しかし、さしあたっての問題としては、歴史的に根拠のある任務の順序がある。人民軍は党の核であり、その逆ではないだろう。ゲリラは『胚芽状態』にある『政治的前衛』であり、ただその発展のみから真の党が生まれることができるのだ。だからこそ、政治的前衛を發展させるためにはゲリラを發展させなければならない。だからこそ、現在の局面では、主要な力点はゲリラ戦争の發展におかれるべきであつて、既存の党の強化あるいは新しい党の創設におかれるべきではない。だからこそ、反乱のための努力が、今日、第一の政治的努力なのである。」

これは、決してラテン・アメリカだけの結論ではない。彼ドブレが予見したように、まさに「他の国の闘士達にも提起されて」いるのである。

我々の歩まねばならない道はすでにキューバが示してくれているのだ。

(三) まとめ

私は、(一)と(二)において、我々赤軍派の政治路線と組織路線を総括してきた。今、その総括のまとめを書いてみよう。

私は、この総括に至るまでのささやかな自分の闘いに一息ついて、昔まだ小さい頃体験した一つのエピソードを思い出している。

—ある晩のことであった。真夜中に、小便をしたくなかった私は、寝ぼけ眼で起き上り、足元の方の両戸を手探りで開け、そこから放出しようとした。ところが、いくらやっても両戸は一向に開かない。手にひっかかるところがまるでないのだ。得体の知れないひんやりした平面を、むなしく手がすべるだけである。しだいに下の様子が悪化し、苦しくなり、泣きたくなってきた。意を決して、天井からぶら下がっている裸電球を探り、はやる気持ちと震え出した下をおさえてあかりをつけた。ところが、私の目の前には開くのではなく反対側の土壁だったのだ。空しく私のひっかいていたのは開くはずもないひんやりとした土壁だったのだ。寝ている間に、まるで反対にひっくり返ってしまったのである—。

今、我々にとって一番重要なことは、電球をつける、このことである。

ドブレは、フィデル・カストロの言葉をもってこう言っている。

「『誰がラテン・アメリカで革命を行なうのか？ 誰が？—人民であり、革命家達だ、党があろうとなかろうと』(カストロ) フィデルカストロは、ただこう言っているにすぎないのだ。—前衛なしに革命はあり得ないこと。この前衛は必ずしもマルクス・レーニン主義党であるとは限らないこと。さらに革命を行なおうと欲する人々はこれ

らの党とは別の前衛に自らを組織する権利と義務をもっていること。

事実が伝統に反する場合、ありのままに、堂々とこれらの事実を認めるのは勇氣のいることである。その時、前衛はマルクス・レーニン主義党という形而上学的等価は存在しない。ただ弁証法的な結びつきが、一定の機能—歴史における前衛のそれ—と一定の組織形態—マルクス・レーニン主義党のそれ—との間にあるだけである。この結びつきは、それ以前の歴史に由来し、それに依存する。党はここの地上に存在しているであり、この現世の弁証法の厳しい試練にさらされるのである。党が生まれるということは、党が死ぬことであり、他の形態で再生することがありうるということである。」(革命の中の革命)

今日、政治路線においては依然として従来通りの平和的大衆闘争路線(政治過程論)をとっている新左翼諸組織が「党のための闘い」「党としての闘い」という形而上学的空文句を叫んでいる。それは、現在の旧態依然とした政治路線を維持せよ、そのための合法組織を維持せよ、と言っているにすぎないのだ。もし、そうではなく、あるべき党のため、あるべき党としての闘いのためであるならば、それは現在の政治路線と現在の合法組織を否定する闘いではなければならない。今日、一万部の「前進」「戦旗」が一億の人民を代表しうるか？ 否、一万人のオルグという名の新聞売り子の対話人間が一億の人民を代表しうるか？ 否である。それに対して、一回の警察襲撃殲滅は一億の人民の生きた階級教育であり、十人のゲリラ兵は一億の人民を確実に代表するのである。

従来政治路線、それは世界革命戦争という客観的現実の前に、ブルジョアジーとの同盟者の闘いでしかないことも意味し、従来組織、それは同じくブルジョアジーの許容する組織でしかないのだ。

今、この総括を終えるにあたって、一つの原理を打ちたてねばならない。

『自ら武器をとること、それは革命家にとって最低条件でなければならぬ。』苦々しいことではあるが、革命家達がいつの間にか文人になってしまった以上、歴史の弁証法はこの原理を打ちたててることを要求しているのである。

「純粋な『政治家』、しかもいつまでもそうありたいと欲する『政治家』達は、人民の武装闘争を指導するためには少しも役に立たないのだ。だが、純粋の『軍人』達は役に立つ。なぜなら、ゲリラを率いて、ゲリラとして生きることによって、彼らは『政治家』にもなるからだ。」(ドブレ『革命の中の革命』)

私は、このつたない文章の題をサルトルの『自由への道』から借りてきた。「奇妙な友情」が書かれたまま、遂に流産してしまった第四部『最後の機会』では一体どういふ物語がくりひろげられるはずだったのか、穿鑿しようというのではない。ただ、私は、我々にとっての『最後の機会』は、前段階、蜂起であったと考えているといたいのである。自由への道、それは一つの道であり、銃を手にすることである。この道に向って全ゆる道が通じている。だが、この自由への道はただ一つなのだ。そして、だから、サルトルは、サルトルの全同時代人にこの第四部の最後の機会と、それに続く自由への道を任せただけではないだろうか？

「党なんかくそくらえだ。君だけが僕の友だ。」と叫ぶブリュネは昨日の我々である。

再起への権利(敗者の)

「窮地にたつものが最後の頼みの綱とするのは、およそ勇者ならば絶望がかれに与えてくれる精神的優越であろう。かれは、最高の勇敢が最高の英知であるとみなして、やむを得なければ詭計をすら運用するであろう。そして、それでも効果をみないときは、名譽ある敗北のうち将来の再起への権利をみいだすであろう」クラウゼヴィッツ

「戦争論」ノート(レーニン)
この引用を、同志のために書き記す。

勝利への道

●統一赤軍の総括

花園紀男

この小論の完成直前に、兄弟たちの偉大な闘いが始まった。「あと一カ月早く完成していれば……」この想いがこびりついて離れない。この小論を最初に献げなければならなかった兄弟たちの多くは、米日反動に真に恐怖を与え、人民に真の勇氣とその進むべき勝利への道を教えて倒れてしまった。この小論では、兄弟たちの偉大な闘いには直接何も触れていない。すべて兄弟たちの闘い以前の統一赤軍の総括である。だがこの小論は、あくまでわが兄弟たちの闘いの総括である（細部において必要な修正もすべて省略する）。

1 はじめに

現在奇妙な光景があらわれている。一方には、親マルクス主義的市民組織の革共同中核派や、チンコロと呼ぶにふさわしい学生組織のブント日向派の武装闘争を恐怖し、肝をつぶした日和見主義の人々が、勿論実際には爆弾など手にならずともいらない人々が、爆弾闘

争に追随している。他方には、実際に爆弾を手に入れている人々、もともと革命的な人々が爆弾闘争に否定的態度をとり、「これは武装闘争ではない！」こうつぶやいている。何かおかしい。われわれは今まで、革共同中核派や日向派が賛成するものに反対し、反対するものに賛成してきた。今度だけ一致するはずがないのだ。われわれの前にある奇妙な光景とはこうである。誰もが武装闘争、ゲリラを認めているように見える。だが実は、ほんの少数の人々以外には、誰も認めていないのだ。二組の人々がそれぞれ別々の言葉で武装闘争について話しているのである。

2 統一赤軍の総括

A 問題提起

現在、日本革命はある一つの壁に突きあたっている。これは日本革

命を真剣に考えている真の実践的革命家たちには誰にでも感じられている。問題は何よりも現実の具体的方針にかかわっている。この壁の正体は何か、そこにかくされている問題は何かをえぐり出さなければならぬ。問題をえぐり出し、提起することに成功するならば、おのずとそこに解決策と進むべき道が見出されるに違いない。口先きだけの、たださわがしいだけの革命家たちと異なり、この不可解な壁の前にじっとたたずみ、苦悩している真の革命家たちの直感している問題、確かにそこに存在している問題を明るみに引きずり出さねばならない。

問題は次のように提起されている。われわれ赤軍派が一九六九年秋の前段階蜂起挫折の総括のなから、また、日共（革命左派）（われわれはなんと素晴らしい人々と出会ったことであろう！）の兄弟たちが政治ゲリラ闘争の総括のなから引き出したところの、従来の平和的・人民戦争の政治（軍事）・組織路線から武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の新しい政治・軍事・組織路線への転換という結論は、その後の日本革命の具体的実践のなかでどのように試されてきているのか？と。七〇年の一二・一八闘争、七一年の銃奪取闘争、M作戦、機動隊殲滅の六・一七爆弾闘争、朝霞基地襲撃、九月三里塚闘争、一連の爆破闘争——われわれの転換総路線はこの一年近い具体的実践を通して徹底的に点検されなければならない。弁証法的唯物論、史的唯物論は、それをわれわれに要求し強制する。

この一年近い闘いに対して、「こんなもんじゃない！」とつぶやき続けたのは果して私だけであろうか？ 後衛を前衛ととり違え、大衆の後方から、大衆の後尾に追随することしかできない口先きだけの革命家たち、大衆が右に行くや否や、後方から「右に行け」と「指導」

し、左に向くや否や後方から「左へ行け」と「指導」する革命家たちのことはいうまい。前衛の何たるかを知り、革命の問題を手足の問題と考えている者ならば、誰でも皆「こんなもんじゃない！」と、口には出さないまでも胸の内でもつぶやいたに違いない。右の一連の勇敢な闘いを実際に担ったのは、勿論日本人民の最良の息子たちであり、娘たちであることはいふ必要もない。まさにこの一年の闘いを遂行した年若い革命家たちこそ、もともと痛苦の想いをもって「こんなもんじゃない！」こうつぶやいたはずであり、また現につぶやいているに違いない。われわれにかくつぶやかせているものは一体何なのか？ それをえぐり出さなければならない。

われわれのこのつぶやきは、それを分析すれば、次のようなつぶやきである。つまり、右の一連の闘いは全面的に防衛しなければならぬと同時に、積極的に満足することができないことである。われわれの転換総路線の観点をもってこの一年間の具体的革命実践を点検しようとし、そして同時にこの具体的革命実践をもって、われわれの理論、すなわち転換総路線を点検しようとする時、このような自己矛盾したつぶやき（困難）が引き起されているのである。したがってわれわれのなすべきことは、この理論と実践の相互関係の内的関連を分析することによって、この自己矛盾の内容（諸側面）を浮き上らせることとでなければならない。われわれの突き当たっている問題とは、この自己矛盾に他ならないからである。

この一年の革命実践をわれわれの理論（転換総路線）に照らして分析してみよう。そのためにはまず最初に、その具体的な材料であるこの一年間のわれわれの革命実践を、事実のままにわれわれの理論（転換総路線）に照らしてみることから始めなければならない。そうすれ

ば、われわれはこの一年間の一連の「武装闘争」(カッコつきであること)の理由はこの小論の進行が明らかにするであろう)のなかに、性質の異なる二種類の「武装闘争」が存在していることに気づく。一つの「武装闘争」を具体的に、しかもはっきりと、その性質をいずれか一方に区分することは、たとえば一連の爆破闘争などは困難であるが、それらは一応おくとして、全体を大雑把に二種類に区分することは、少しでも大衆運動の経験と実践の判断能力のある革命家ならば容易であろう。すなわち、一方における一二・一八闘争、銃奪取闘争、M作戦、六・一七機動隊殲滅の爆弾闘争、一連の強力な爆破闘争であり(私はこれを以下の叙述のためにA種とする)、他方における朝霞基地闘争、総監公舎爆破闘争、九月三甲塚闘争等である(同じくこれをB種とする)。前者(A種)は、われわれ統一赤軍の転換総路線にもとづく闘いであり、その性質において、われわれは権力闘争の目的意識性を持った建軍武装闘争、目的意識的軍事闘争の初歩的性質を持つて指摘することができる。後者(B種)は、われわれの総路線とは異質の、というよりもわれわれの路線転換以前の平和的大衆実力闘争の激化した形態、すなわち反権力闘争的な、建軍なき「武装闘争」、自然発生的軍事、テロリズムの性質を持つて指摘することができる。両者の性質の違いは、その政治的・軍事的側面においては、この小論の今の段階では、われわれは未だ不十分にしか区別できていないことを認めなければならない。この小論の進行がその区分を明らかにしていくであろう。だが、それでもすでに両者の区分は明確であり、それはその組織的基礎を、建軍におくのか否かで明白である。

さて、われわれは、この一年の「武装闘争」のなかに、従来の平和

的大衆実力闘争段階の歴史的発展としての路線であるところの、建軍を組織的基礎とする新しい政治・軍事・組織総路線の闘い(A種)と、従来の平和的大衆実力闘争の政治(軍事)組織路線のままの、武器だけのエスカレート(激化形態)としての、それ自体一つの論理矛盾である建軍なき「武装闘争」というまったく性質の異なる、というよりも相対立する二種類の「武装闘争」を区分することはできた。この二種類の「武装闘争」の具体的統一である日本革命の現実・現状が、われわれをして「こんなもんじゃない!」とつぶやかせているものである。これが日本革命の困難の具体的な現実である。これが問題である。この問題を分析していくことにより、解決策とわれわれの進むべき道を見出しなければならない。

B 分析と解決

Aで提起された問題を解決していく。われわれは、a第一に、Aで明らかにされた性質の異なる二種類の「武装闘争」の具体的実践のそれぞれを、われわれの理論(政治・軍事・組織の転換総路線)に照らして、そのそれぞれの理論と実践の相互関係を見なければならぬ。そしてb第二に、この二種類の「武装闘争」の相互関係を分析・把握し、そしてこの二種類の具体的統一、総体としてのこの一年間の革命実践によってわれわれの理論がいかに試され、そしていかなる問題を提起されているのかを分析・把握しなければならぬ。そこにおのずとわれわれの現在直面している困難を突破する解決策とわれわれの進むべき道は与えられるに違いない。

a 二種類の武装闘争とわれわれの理論

① われわれの理論(転換総路線)とA種の武装闘争の相互関係について

このA種の武装闘争は、われわれの総路線を意識的に追求した画期的な闘いである。この闘いによって日本革命ははっきりと現実的に新しい段階に入ったとすることができる。だが、それを詳しく分析せねばならない。この闘いは確かにわれわれの理論(政治・軍事・組織の転換総路線)を意識的に実現しようとして闘われたことはまちがいない。とはいえわれわれは、それがわれわれの転換総路線を完全に実現しているとはいえない。われわれの転換総路線を実現しようとして追求している(これが肯定的側面である)にもかかわらず、完全に首尾よく実現することができていない(これが否定的側面である)。こう分析しておかねばならない。ここでこの偉大な闘いを担ったわが統一赤軍の兄弟たちの未熟、不決断、不徹底を批判することはしばらくさしひかえなければならぬ。問題はこの革命実践、武装闘争の二つの側面の相互関係において、未熟、不決断、不徹底の否定的側面の優位を結果している原因を見つけ出すことにあるからである。

ところでこのA種の武装闘争は、そのあるべき姿・形態においては、つまり肯定的側面による否定的側面の克服においては、いかなる闘いを追求したのか? それは、たとえ完全には果されていないとはいえ、このA種の武装闘争(一二・一八闘争、銃奪取闘争、M作戦、六・一七機動隊殲滅爆弾事件、一連の強力な爆破闘争)がはっきりとその輪郭を示しているのである。それは、真のゲリラ軍(武装遊撃軍)の公然たる登場であり、それによって敵軍隊(権力)とのあいだに、

双方ともに敵の消滅・味方の保存をその軍事的目標とする戦争状態を作り出すことである。その政治目標(目的)は、この軍事を媒介として、このひとにぎりの本物のゲリラ軍(武装遊撃隊)を政治的中核として、日本革命運動総体を、従来の平和的大衆実力闘争の政治的發展段階から、新しい武装大衆闘争(革命戦争・人民戦争)の政治的發展段階に高め、転換させ、日本革命運動の現段階に客観的に存在している武装大衆闘争(革命戦争・人民戦争)の潜在的可能性をば現実性に変化することである。統一赤軍のわが兄弟たちの追求しようとして完全に果していないものは、この転換のための触媒としての自己の任務である。

さて、われわれの転換総路線とA種の武装闘争実践の相互関係のなかに、ただA種の実践がわれわれの転換総路線(理論)を不十分にしか実践・実現していないということであり、そこにはまだ何の矛盾もない。このA種の実践だけを単独に、われわれの理論(転換総路線)に照らし合わせての結論は、兄弟たちの未熟、不決断、不徹底ということでしかなく、そこから引き出されるべき方針は、実践をわれわれの理論に合わせることで、理論に行動を一致させる勇氣と決断だけである。理論(思考)をその最後の帰結(実践)にまで首尾一貫させること、これは真の共産主義者(弁証法的唯物論者、史的唯物論者)だけが持つことのできる勇氣と決断をいつでも要求する。だがわれわれはこの結論がA種の実践とわれわれの総路線との単独の相互関係から引き出された結論である。したがって未だ抽象的であることを確認しておかねばならない。何故なら、具体的現実においてはA種の実践は単独には存在していないからである。

② われわれの理論(転換総路線)とB種の「武装闘争」の相互関係

このB種の「武装闘争」は、われわれの理論（総路線）の実現ではない。それは、このB種の「軍事」が、建軍を組織的基礎としないところの、それ自体一の論理矛盾、言語矛盾であるところの軍なき、武装なき「軍事闘争」、「武装闘争」であることよって明らかである。これは、日本革命の従来の平和的大衆闘争の政治的發展段階における政治・（軍事）組織路線に立脚している。したがってこの「武装闘争」は眞の武装闘争ではなく、テロリズム、自然発生的軍事である（これが否定的側面である）。これはわれわれの理論（転換総路線）に照らすならば否定的対象であり、われわれはこれを、やけどをするだけの「火遊び」として強く警告しなければならぬ。

と同時に、われわれは次のこともまた確認しておかなければならない。すなわち、このB種の「武装闘争」の発生は、それ自体日本革命が従来からの平和的大衆実力闘争の政治的發展段階における政治（軍事）組織路線がすでに歴史的に大衆の自然発生性によつてはつきりとのりこえられつつあることを示しているということである。言い換えれば、このB種の「武装闘争」はその発生によつて、従来からの平和的大衆実力闘争の政治的發展段階における政治（軍事）組織路線の新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織路線への發展・飛躍・転換を要求しているのである。これがこのB種の実践の肯定的側面である。われわれの転換路線の歴史的な正しさは、このB種の「武装闘争」によつても証明されているのである。

このB種の実践とわれわれの理論（転換総路線）との相互関係をもつと見ておこう。われわれの理論（転換総路線）は、従来からの平和的大衆実力闘争の政治（軍事）組織路線が一九六〇年代後半にその極限

階にある大衆により支持されることなく、孤立し、發展の契機は失われ、自滅する。武器が生きてくるためには、それを持つ主体（人、政治、思想）がそれにふさわしくなければならぬ。主体の転換のないままの武器のエスカレートは「火遊び」として否定的側面として反対されなければならない。それは、この闘いを口先きではなく実際に担っているのが自然発生的であるとはいへ、日本人民の最良の息子たち、娘たちであるだけに一層強く警告しなければならぬのである。そして同時に、武器のエスカレート自体がすでに歴史的事実として登場したことは、われわれに従来からの路線がすでに歴史的にその役割を終え、その転換（われわれの転換路線への転換）を日本革命の現下の緊急な任務としているのである。このことを要求していることがこのB種の実践の肯定的側面である。次のように言い換えておくことも無駄ではあるまい。すなわち、親マルクス主義的市民組織の革共同中核派やブント日向派のチンコロ等の、前衛を後衛ととり違えていた大衆に追随するか、あるいは大衆をうしろへ引っぱらうとすることしかできない現代の経済主義者は、このB種の「武装闘争」の否定的側面（従来からの平和的大衆実力闘争のままでの武器のエスカレート）に追随するのに対し、われわれはこのB種の否定的側面には断乎として警告し、反対し、このB種の自然発生的軍事が新しい転換路線への転換を要求している「目的意識性の萌芽」である点において断乎として支持し、指導しなければならない、と。

さてわれわれは、われわれの理論（転換総路線）とB種の実践とを照らし合わせて、その相互関係を見てきた。そしてこのわれわれの理論とB種の実践の相互関係の分析からは、B種の実践の自然発生性を克服し、われわれの転換路線へと意識化しなければならぬことを結

の發展段階にのぼりつめ、そのことよって歴史的に新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織路線への転換を要求したことを、これを根拠としている。したがってわれわれの転換路線は大衆運動総体を、新しい政治的發展段階へ入らせる路線である。政治的中核としてのひとにぎりのゲリラ軍（武装遊撃隊）の公然たる登場は、従来からの平和的大衆実力闘争の政治情勢を新しい武装闘争（革命戦争・人民戦争）の政治情勢へ高めるであろう。そのことよつてこのゲリラ軍（武装勢力）（魚）は、大衆の政治勢力（人民の海）に支えられ、不敗の勢力となるであろう。ところがこのB種の「軍事」闘争、「武装」闘争は、従来からの平和的大衆実力闘争の政治情勢を、武装闘争（革命戦争・人民戦争）の大衆的的政治情勢へ転換することはできない。何故なら、それは建軍を組織的基礎としていないが故に、敵権力との間に戦争状態（戦争の運動法則・ルール）を形成しないからである（革共同中核派やブント日向派のチンコロは、戦争にはルールがないなどと「過激な」ことをいって自己の卑劣な心情を暴露している。あらゆる闘いには、それ独自の運動法則・ルール・掟がある。実力闘争には実力闘争のルールがあり、武闘には武闘のルールがある。革命家の任務はこのルールを使いこなすことであつて、このルールを無視することではない。この掟を破るものは常に卑怯とされる。ロシアのテロリストは自らの命を献げた。だからこそ、それはテロであつた。革共同中核派の市民やブント日向派のチンコロの論理は、非公然に交番を爆破しながら、前進社や戦旗社が反対に爆破されないことを前提としており、敵権力に期待するというような代物である）。

政治は依然として平和的大衆実力闘争の政治のままでの軍事のエスカレート（激化形態）は、依然として平和的大衆実力闘争の政治的發展段階にのぼりつめ、そのことよつて歴史的に新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織路線への転換を要求したことを、これを根拠としている。したがってわれわれの転換路線は大衆運動総体を、新しい政治的發展段階へ入らせる路線である。政治的中核としてのひとにぎりのゲリラ軍（武装遊撃隊）の公然たる登場は、従来からの平和的大衆実力闘争の政治情勢を新しい武装闘争（革命戦争・人民戦争）の政治情勢へ高めるであろう。そのことよつてこのゲリラ軍（武装勢力）（魚）は、大衆の政治勢力（人民の海）に支えられ、不敗の勢力となるであろう。ところがこのB種の「軍事」闘争、「武装」闘争は、従来からの平和的大衆実力闘争の政治情勢を、武装闘争（革命戦争・人民戦争）の大衆的的政治情勢へ転換することはできない。何故なら、それは建軍を組織的基礎としていないが故に、敵権力との間に戦争状態（戦争の運動法則・ルール）を形成しないからである（革共同中核派やブント日向派のチンコロは、戦争にはルールがないなどと「過激な」ことをいって自己の卑劣な心情を暴露している。あらゆる闘いには、それ独自の運動法則・ルール・掟がある。実力闘争には実力闘争のルールがあり、武闘には武闘のルールがある。革命家の任務はこのルールを使いこなすことであつて、このルールを無視することではない。この掟を破るものは常に卑怯とされる。ロシアのテロリストは自らの命を献げた。だからこそ、それはテロであつた。革共同中核派の市民やブント日向派のチンコロの論理は、非公然に交番を爆破しながら、前進社や戦旗社が反対に爆破されないことを前提としており、敵権力に期待するというような代物である）。

b A種の武装闘争とB種のそれとの相互関係について

われわれはaで、この一年間の闘いにおける性質の異なる二つの革命実践のそれぞれを、われわれの理論（転換総路線）に照らし、そのそれぞれについて、肯定的側面と否定的側面を見てきた。しかし、これではまだわれわれの理論（転換総路線）と、この一年間の革命実践との相互関係は抽象的關係である。何故なら、この一年間の具体的な革命実践は、この性質の異なる二つの種類の革命実践の統一として存在するからである。われわれの理論（転換総路線）を、この一年間の具体的な革命実践との相互関係を通して具体的に検証するためには、われわれは次にこの一年間の闘いを、その性質の異なる二つの実践がいかなる相互関係にあり、いかなる具体の統一の關係にあるのか、を分析せねばならない。分析をはじめよう。

まず事実即して、事実がそれ自身において直接指示していることをつかみとろう。この一年間の革命運動の事実経過は大雑把に次の①②③④の四点にまとめられる。①A種の武装闘争は不完全・不徹底ではあれ、確かに萌芽的・端緒的に、われわれの理論（転換総路線）の実現形態を示したこと、このことを事実として第一に押しておくべき

である。② A種の実践が従来の平和的大衆実力闘争の政治的發展段階の枠を突破したこと、つまり従来のタブーを公然と破ったこと、平和的大衆実力闘争の運動法則を通して生長・發展してきて、もはやその運動法則の形式Ⅱ形態では一歩も前進できないまでに發展・生長してきた日本労働者階級・人民の歴大な自然発生性をその枠から解放したこと、その結果が B種の実践（警視總監公舎爆破闘争、朝霞基地襲撃闘争、九月三里塚闘争、一連の反権力的爆破闘争等）である。この B種の実践はこの意味で、つまり従来の平和的大衆実力闘争の枠から解放されているという意味で、その枠のなかにいて、そこからその枠を突破しようとしたわれわれの階段階起と性質を異にしている。われわれがここで歴史的な事実経過として把握しておかなければならないことは、この B種の実践が A種の実践と無関係に発生してきたのではなく、A種の実践の後に、A種の実践のインパクト（衝撃）によって、A種の実践を触媒として発生してきたということである。A種の実践と B種の実践の相互関係が触媒と反応液の相互関係、内的関連にあるということである。このことをしっかりと押えていなければならぬ。③ さらにこの一年間の革命実践の事実はこのことを示している。すなわち、A種の実践は一二・一八闘争、銃奪取闘争、M作戦で行き詰まっていること、つまり従来の平和的大衆実力闘争から、内容・形式ともに突破し、新しい内容・形式を追求して果していないこと、そして、にもかかわらず、行き詰まったまま変形され、その質（内容）は堅持したまま B種の実践と現象的には同じ闘争形態（形式）へ後退して持続されていることである。つまり、六・一七機動隊殲滅爆破闘争、一連の強力な交番爆破闘争、クリスマス・ツリー爆破プレゼント、報復政治テロ等である。現象的には B種と同じ闘争形態

闘いのなかに政治的發展の契機を喪失していることである。このままであってはならないことは誰の目にも明らかである。事実がそれを示しているのである。

以上、④⑤⑥の四点として、この一年間の革命実践について、事実即して、事実が直接に指示している A種の実践と B種の実践の相互関係の材料、内的関連の材料を大雑把につかみだした。われわれはこの④⑤⑥の四つの材料によって、A種の実践と B種の実践の統一であるこの一年間の日本革命の具体的実践を具体的にその内的関連において把握しなければならない。そこにおのずとわれわれの直面している困難の解決と、われわれの進むべき道があらわれるに違いない。では、この④⑤⑥の四つの事実の材料を調査し、この一年間の総体における革命実践、現実の指示していることを一つ一つ浮き上らせてこよう。

「I」 ④の材料の分析

A種の実践は、われわれの理論（転換総路線）、われわれの主観的意図（計画、イメージ）の文字通りの実践である。たとえ未熟、不決断、不徹底、不完全、不十分であるにせよ、われわれの理論の実践であるという事実は何ら変更されない。そのあるべき実現形態との相違は量的なものであり、本質的には変らないのである。ところで、われわれはこの A種のわれわれの実践においては、われわれの主観的意図・計画においてはいかなる結果を想定・予想していたのか？ それを簡単に描写すれば次のようなものである。すなわち、建軍をその組織的基礎とする、文字通りの真のゲリラ軍（武装遊撃隊）を公然と登場させること（私個人は少なくとも各遊撃軍の指揮者は、名前を名乗るべきだと考えていた）、そうすれば、この公然たるゲリラ軍を、政治

（形式）のなかに性質の異なる（つまり、こういってよければ、腰の入った闘いと腰の入り切らない闘いとも呼べるだろう）、われわれの転換路線の実現を追求しながら行き詰まっているところの A種の建軍武装闘争の変形と、従来の平和的大衆実力闘争の武装大衆闘争への転換に無自覚な B種の実践の二つが相互に結びつき並存していることを見抜くことは、少しでも大衆運動の経緯と実践的政治判断能力のある者ならば誰にでも容易にできるはずである。

われわれは事実問題として、第一に、A種の建軍武装闘争が不徹底・不決断のままに行き詰まっていること、つまり A種の建軍武装闘争をその理論（総路線）の要求する最後の実践的帰結にまで押し進め、それ独自の、その新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織総路線の内容にふさわしい運動組織形態（形式）、闘争形態（形式）を形成することが要求されているにもかかわらず、実現できていないことを、第二に、その結果としてわが統一赤軍の実践が、従来の平和的大衆実力闘争からの目的意識的転換の建軍武装闘争の質が従来の平和的大衆実力闘争の枠の自然発生的突破（はみだし）の形態（形式）（建軍なき軍事）を不本意にもとらざるを得なくなっていることを、以上二つの点を確認しておかねばならない。⑤ 事実問題の最後に、次の点を確認しておかねばならない。すなわち、⑥で見た事実の結果として、総体としての日本革命はいま従来の平和的大衆実力闘争の歴史的Ⅱ政治的發展段階への転換の、その実現の段階（人民戦争）の歴史的Ⅱ政治的發展段階への転換の、その実現の段階で、それ自身の運動・組織形態（形式）——闘争形態（形式）を獲得できず、その目的意識性（意思・意図）は堅持されておりながら、自然発生的軍事の闘争形態をとらざるを得なくなっており、そのため

的中核Ⅱ政治的前衛として、日本革命は従来の平和的大衆実力闘争の政治的發展段階から武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治的發展段階へ転換していくに違いない。ひとにぎりのゲリラ軍の公然たる存在は、敵権力とのあいだに相互に敵の消滅・味方の保存をその軍事的目的とするところの、新しい政治的發展段階が形成されるであろうということであった。従来の平和的大衆実力闘争の段階における指導と被指導の関係、目的意識性と自然発生性、党のための闘争（Ⅱ党内闘争、人民内部の矛盾の解決形態）と党としての闘争（敵対矛盾の解決形態）、党形成と階級形成の相互関係が、このひとにぎりのゲリラ軍によるゲリラ戦争の開始を政治的・軍事的・組織的触媒として、新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治的發展段階における指導と被指導、目的意識性と自然発生性、党のための闘争と党としての闘争、党形成と階級形成の相互関係へ転換するに違いないということであった。このわれわれの主観的意図は実践によって、事実によってどのようになされたか？ それはその意図を実現し、その意図の正しさを実践によって、事実によって、結果によって、証明したか？ 肯定されたか？ 事実が否定的である。だがでは、どのように否定的なのか？ まだ実践によって、事実によって試されていない、まだ結果は出ていないという意味で否定的なのか？ つまり統一赤軍の兄弟たちの A種の実践における逡巡・不決断によってわれわれの理論は実践され、試されていないという意味でそうなのか？ そうだとすれば、われわれのなすべきは兄弟たちの逡巡・不決断を責め、批判し、決意を促さなければならないことだけである。

確かに兄弟たちの実践はその最後まででの帰結を示していない。中途にして逡巡している。そのことがわれわれの理論（転換総路線）の検

討をきわめて困難にしており、その実践から巨大な教訓を獲得し、急速に正しい具体的方針を作り上げ、練り上げることが困難にしており、その後の一連の火遊びは自然発生的軍事（非公然矮小軍事、こそそゲリラ）はテロリズムへの後退を結果すると同時に、兄弟たち自身と自然発生的な先進の大衆に巨大な犠牲という代価を支払わせている。そして政治的に米日反動に主導権を奪われつつあるように見える。世界史はわれわれに次のことを教えている。前衛部隊の断乎たる前進と徹底性はいつでも前衛部隊に多大の犠牲を強いるものである（何故なら、前衛はいつでも手探りで前進しなければならぬからである）。と同時に、それは人民の犠牲を最小に止め、正しい針路へ導くのに対して、前衛部隊の不決断、不徹底、逡巡はいつでもその前衛部隊はもとより、人民を悲しむべき血の海に溺れしめる結果となるということである。

さて元に戻ろう。同志たちによるA種の実践は確かに不完全であるとしても、それはわれわれの理論がまだ試されていないことを意味するか？ 私はそう考えない。同志たちの実践は未だ不完全であるとはいえ、同志たちはすでに後戻ることのない地平へ突入しているからである。この点で、それはわれわれの六九年秋の前段階蜂起からすでに大きく前進している。統一赤軍の兄弟たちの逡巡、それは従来の平和的大衆実力闘争の政治的發展段階から新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治段階への飛躍を前にした逡巡や半歩の跳躍による退却、見せかけだけのアライバイ跳躍のたぐいの不決断・不徹底ではない。わが統一赤軍の兄弟たちに日和見主義は無縁である。わが同志たちの逡巡は、たとえればグランマ号のキューバ上陸直前における接岸地点の選択をめぐる逡巡、迷いであるといえよう。同志たちはすでに

における不徹底と不完全性はここでは重要ではない。たとえ不徹底・不完全な、萌芽的な方法手段の貫徹・適用であっても、それはそれに照応する不徹底、不完全、萌芽的な形での結果をかならず伴うはずだからである。ここで問題なのは、方法手段自体の不徹底性、不完全性、その徹底性、完全性との関係ではなく、方法手段とその結果との相互関係だからである。したがってわれわれがここで確認しなければならぬのは、われわれの主観的意図（理論、転換総路線）は、その実践によって否定的に検証されたということである。

これはわれわれに次の結論を強制する。つまりわれわれの主観的意図（理論、転換総路線）は実践によって試された結果として修正を要求されている、と。何だと！ われわれの理論（転換総路線）が修正されなければならないだと！ 驚くべき結論といわなければならない。だがこの結論はわれわれ自身の実践が指示し、うむをいわず強制していることなのだ。われわれにここで問われているのは、ただ総括の思考を中断することなく継続することではなければならない。思考を首尾一貫させ、その最後の帰結にまで押し進めてゆく勇氣（然り！勇氣である！）と頑強だけが要求されているのである。続けよう。

われわれの主観、理論、転換総路線は、ではいかに修正されなければならないのか？ われわれの主観、意図、理論、転換総路線の何が誤っているのか？ 今までの分析だけではこの問いに対する解答は与えられていない。この解決のためにはさらに事実をして語らせなければならない。わが統一赤軍の兄弟たちによるA種の実践はその意図した結果を生みださなかった。つまりこうである。日本革命は従来の平和的大衆実力闘争の政治（軍事）組織の総路線をその最高の到達段階である前段階武装蜂起にまでのぼりつめ、押し上げ、そのことによつ

後戻ることのない闘いを始めていたのである。勿論現実の闘いは、上陸をもって始まることはいうまでもないとしても。たとえそれが中途にして逡巡していても、そのことは戦闘を開始してはいない（実践してはいない）ことではない。闘いの萌芽形態は端緒形態から直接に、その完全な帰結形態を細部に至るまで導き、描き出すことは困難であるとしても、にもかかわらず、あらゆる萌芽形態はその完成形態の輪郭を示しているものである。したがってわれわれは次のように考えなければならない。わが統一赤軍の同志たちのA種の実践は、われわれの転換総路線の完全な形での実践は実証ではないが、その萌芽的（端緒的）な形での実践は検証である、と。

さて右の考察によって、兄弟たちのA種の実践を導いたわれわれの理論（転換総路線、主観的意図）がまだ試されていないのではないことは明らかにされた。われわれの主観的意図は、わが兄弟たちによるA種の実践によってすでに試されているのである。このことをしっかりとつかみとり、確認しなければならない。それだけがわれわれに総括の扉を開く鍵を提供しているのである。そしてその結果として、われわれの主観的意図（理論、転換総路線）は否定的に検証されたのである。ではいかに否定的か？ このことを分析しよう。

すなわち、われわれの主観的意図は、われわれの意図した通りには実現されなかったのである。われわれが、こうすればこうなると意図し計画したことは、計画通りには実現しなかった。われわれはわれわれの意図が否定的に検証されたといったが、それはわれわれの意図がその意図した結果を生み出したということである。つまりわれわれの、こうすればという方法・手段は、その予定した、こうなるという結果を伴わなかったのである。わが兄弟たちの、方法手段の貫徹

て新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織の総路線への質的飛躍・転換を客観的歴史的要求していること、したがって、意識的前衛政治的中核をゲリラ軍（武装遊撃隊）として組織し、そのゲリラ軍による公然たる革命戦争の開始は、人民を人民革命軍に組織し、人民戦争の可能性を現実性に転化してゆくであろう、というわれわれの意図は、たとえ萌芽的・端緒的形態であれ、実現しなかった。また実現する証拠を示していないということである。これは何を明らかにしているのか？ 次のことである。すなわちこれは、われわれがわれわれの主観的意図の前提としていたところの、人民戦争の客観的可能性の存在の否定を意味している。

一点の火花が広野を焼きつくすには、広野が乾燥していなければならない。広野は乾燥していなかった。だが広野は乾燥していなかったが、一点の火花は消えたであろうか？ 否、火花は消えていない。くすぶり続けている。これは誰の目にも明らかである。このことをよく分析しなければならない。現在直接に人民戦争を政治的・軍事的・組織的に現実化する客観的可能性が存在していないということは、現在の日本革命の政治的發展段階が従来の平和的大衆実力闘争の政治的段階にあることではないということ、このことをわれわれは改めて確認する必要があるであろうか？ 私はこの小論ではそのことは省略し、前提としなければならない。従来の平和的大衆実力闘争の政治的發展段階は、新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治的發展段階への質的転換を要求しているのである。にもかかわらず、われわれの転換総路線（理論）は修正されなければならない。問題（矛盾・困難）はここにある。①の材料がわれわれに指示していることの分析を通して、われわれは問題の所在にたどりついた。さらに事実の分析を

通して、この問題の解決に迫らねばならない。

「II」②③④の三つの材料の分析

さて、②③④の三つの事実材料は、前に①の事実材料の分析を通して問題の所在にたどりついたわれわれをば、ただちに問題の核心に連れていく。②の事実は次のことを示している。統一赤軍の兄弟たちによる、萌芽的であるとはいえ断乎たる建軍武装闘争の実践、つまり人民戦争の客観的可能性を現実性に転化するための「客観的に存在する階級意識の最高の可能性の意識的前衛政治的中核への組織化」(ルカーチ「階級意識」としてのひとにぎりのゲリラ軍(武装遊撃隊)による方法・手段としてのゲリラ戦争、触媒としてのゲリラ戦争の開始は、その予期した結果(反応・触媒作用)をもたらず、予期したものは質的に異なる)ところの、建軍なき自然発生的軍事行動を引き起している。そして、③の事実が示しているように、わが統一赤軍の兄弟たち自身もまた本能的・無意識的にはあるが、理論的に要求されている建軍武装闘争の、その実現における困難性・非現実性と建軍なき自然発生的な「軍事行動」のカッコつきながらの「現実性」という、現実の力に強制され、あるいは圧倒されて、建軍武装闘争の目的意識的・共産主義的軍事の質を堅持したままではあるが、この建軍なき自然発生的「軍事行動」に後退している。そしてその結果、④の事実が示しているように、総体としての日本革命は従来の平和的大衆実力闘争の歴史的・政治的段階から新しい革命戦争の歴史的・政治的段階への質的転換・飛躍を要求しながら、そのための新しい運動組織形態、闘争形態を獲得できず、つまり新しい内容がその自己展開・発展成長のために古い形式を脱ぎ捨て、新しい形式を要求しているにもかかわらず、新しい形式を獲得できないために古い形式を脱ぎ捨てる

ことができず、自己展開・発展・生長できないでいる。これが先に「I」で私が、日本革命の火花が決して消えたわけではなく、くすぶっている状態にあるといったことの事情である。

②の事実材料、すなわちわが統一赤軍の兄弟たちによる萌芽的であるが断乎たる建軍武装闘争の開始が、その予期した結果(人民戦争と人民の軍隊への結集)の意識的・共産主義的・革命的軍事を引き出さず、建軍なき、自然発生的「軍事」を引き出したということ、これは次のことを明らかにしている。すなわち日本革命の客観的・政治的・歴史的現実とは、大衆的に意識的軍事(人民戦争)を現実化し結果するところの客観的可能性の段階ではなく、大衆的に自然発生的軍事を現実化し結果するところの客観的可能性の存在する客観的・政治的・歴史的現実の段階にあるということである。

さてわれわれは、問題の解決のための真の核心にたどりついているのではなからうか？ だがあと一歩深く事実として語らせなければならぬ。われわれは右の分析によって、日本革命の客観的・政治的・現実的・大衆的に意識的・革命的軍事闘争の結果・現実化するところの客観的可能性の発展段階にないことを認め、われわれの主観がこの客観的現実と一致していないこと、われわれが主観主義の誤りを犯していることを認めなければならない。そしてそれと同時に、日本革命の客観的・政治的・歴史的現実が大衆的に自然発生的「軍事」の結果・現実化するところの客観的可能性の存在する発展段階であることもまた認めなければならない。だがわれわれは、この二点の確認で満足することができるか？ 否、われわれはこれだけで満足することはできない。われわれはあくまで真の武装闘争、意識的軍事闘争、共産主義的・革命的軍事闘争を追求しているのである。われわれの追求してい

るのは自然発生的「軍事」、建軍なき「武装闘争」などでは断じてない。そういうのは親マルクス主義的市民組織の革共同派や、チンコロ左翼フロント日向一派にこそふさわしい(彼らはこれすらも恐れている!)。われわれの欲しているものはただ一つ、世界を逆さまに引っくりかえすこと、「革命」なのだ！ けちくさい火遊びなどでは断じてないのだ。わが統一赤軍の兄弟たち、スバラシイ兄弟たちが今とっている闘争形態、自然発生的な「軍事行動」形態は、あくまでも不本意にとっている闘争形態である。われわれはすでに、この自然発生的軍事の無力・破産は六九年秋の前段階蜂起の挫折とその総括において確認しているのである。まさにわれわれの転換総路線こそは、この従来の平和的大衆実力闘争の最高極限発展形態としての前段階蜂起が自然発生的「軍事」でしかなかったこと、そのことの確認から生みだされているのである。わが統一赤軍の兄弟たちが現在この自然発生的「軍事」の闘争形態をとっているのは、ただただ不本意にとっているだけである。つまり、われわれは従来の平和的大衆実力闘争の政治(軍事)組織から、武装大衆闘争(革命戦争・人民戦争)の政治・軍事・組織へ転換・前進しなければならぬにかかわらず、そのための運動、組織形態、闘争形態を獲得することができないこと、この困難こそが、わが統一赤軍をして、従来の平和的大衆実力闘争の政治(軍事)組織の枠からの自然発生的突破形態であるところの自然発生的軍事闘争形態をとることを余儀なくさせているのである。②③④の事実材料の示しているものは、このわれわれの格闘、もがきである。このわれわれの格闘、もがきこそ、われわれが解決しなければならぬ対象である。

さて、この格闘の要求しているもの、すなわち、われわれがこの小

論的分析で追求し、追いつめてきた問題の解決のための真の核心を明らかにしななければならない。

われわれは先に日本革命の客観的・政治的・現実的・今現在、真の革命的・共産主義的軍事、目的意識的武装闘争を実現・現実化することができないことを確認した。そして現実に現実化している自然発生的軍事、建軍なき「武装闘争」は、日本革命の従来の平和的大衆実力闘争の政治的発展段階から武装大衆闘争(革命戦争・人民戦争)の政治的発展段階への質的転換・飛躍を保障する運動・組織形態(形式)、闘争形態ではなく、従来の闘争形態の最高形態・極限形態、あるいはその自然発生的突破形態ではないこと、それ故この闘争形態は、新しい政治的発展段階を切り開くものではなく、その桎梏であり、拒否されなければならないこともまた確認しなければならない。われわれが獲得しなければならない運動(闘争)・組織形態は、従来の平和的大衆実力闘争の政治的発展段階から、新しい武装大衆闘争(革命戦争・人民戦争)の政治的発展段階への日本革命の質的転換・飛躍を保障すると同時に、その必然的・不可避の発展が真の武装闘争、革命戦争、人民戦争、言い換えると、目的意識的・共産主義的軍事闘争であるところの運動(闘争)・組織形態(形式)でなければならない。この条件を満たすところの運動(闘争)・組織形態(形式)とは何か？

われわれは次のことに気づく。すなわち、自然発生的軍事闘争は従来の平和的大衆実力闘争の自然発生的政治闘争の必然的・不可避的発展・継続であるということである。ではその必然的・不可避的発展・継続が真の武装闘争、革命戦争、人民戦争、意識的・共産主義的・革命的軍事闘争であるところのものとは何か？ 今やわれわれは一年以上の、否、一九六九年夏以来の苦しくそして長かった理論と実践の統

一のための闘いが生み出したもの、その結論を示さなければならぬ。

従来の平和的・大衆実力闘争の質的発展・転換を保障すると同時に、その必然的・不可避の発展・継続が真の武力革命、人民武装蜂起、目的意識的・革命的軍事行動であるところのもの、それは目的意識的・政治的・真の共産主義政治闘争である。これがわれわれの結論である。

今ここに、われわれの転換総路線は、その展開様式・運動（闘争）組織形態を前軍事的・平和的発展段階における目的意識的・政治・組織闘争、共産主義的政治・組織形態として定めることができた。クラウゼビッツはその『戦争論』において、戦争を、他の手段をもってする政治の継続であるといっている。われわれの誤りはこの原則を正しく適用できなかったことである。われわれは六九年秋の前段階武装蜂起の挫折の総括において、従来の平和的・大衆実力闘争の最高極限形態としての軍事が、真の革命的軍事でないこと、そしてそれが真の革命的軍事を要求していることに気づきつつも、それが真の政治闘争の必然的・不可避の発展・継続としての実現・現象化しうること、したがって、まず真の目的意識的・共産主義的政治闘争への質的転換・飛躍を獲得しなければならぬことを結論できず、直接に、真の革命的軍事を実現しようとしたのである。このわれわれの主観主義的誤りは、多大の犠牲（何と大きな犠牲であることだろう！）という代価を支払ったわれわれの理論と実践の統一のための闘いによって、正しく修正されたのである。われわれが、前段階蜂起・挫折の総括で定めた、われわれの路線・転換の基調であるところの、平和的・大衆実力闘争からの武装大衆闘争への質的転換・飛躍の図式は、次のように修正され書き換えられなければならない。即ち、自然発生的政治（軍事）闘争からの目的

意識的・共産主義的政治（軍事）闘争への質的転換・飛躍の図式としてである。われわれの新しい闘いは、平和的形態ではじめられるからである。われわれはここに、わが統一赤軍の兄弟たちの逢着している困難を解決し、その進むべき道を見出したのである。

3 前段階蜂起の再総括

われわれは2で、この一年近いわが統一赤軍の転換総路線の具体的実践の総括を通して、われわれの転換総路線が未だ抽象的であることを結論してきた。われわれが従来の平和的・大衆実力闘争の武装大衆闘争への質的転換・飛躍として前段階蜂起の総括のなかから獲得してきたところの、武装大衆闘争の転換総路線が未だ抽象的であり、その実践化のためにはこの総路線を具体化・意識化しなければならないこと、このことをわれわれは2で結論した。そしてそれはわれわれに前段階蜂起の再総括を要求している。同時にこの2の結論、すなわちわれわれの転換総路線の抽象性の克服・具体化・意識化という要求は、それ自体において前段階蜂起の再総括のための方法をも直接に指示している。つまり、われわれのなすべき前段階蜂起の再総括は、われわれのすでに獲得されている転換総路線の抽象性の具体化・意識化のためであることである。したがってそれは、従来の自然発生的政治闘争の最高形態、集中的表現としての六九年秋の前段階蜂起の自然発生的性のなかにすでに萌芽的に存在している目的意識性をつかみとり、プロレタリア革命に関するマルクス・レーニン主義の普遍的学説、普遍的真理によって論理化することだけであるということである。何故なら「自然発生性とは目的意識性の萌芽である」（レーニン「何をなすべ

きか）からである。問われているのは「平和的・大衆実力闘争の武装大衆闘争への質的転換・飛躍」としてなされてきたわれわれの前段階蜂起の総括をば、「自然発生的政治（軍事）闘争の目的意識的・政治（軍事）闘争への質的転換・飛躍」として総括し直すことである。そのため、すなわち理論的労働の対象・材料は従来の平和的・大衆実力闘争（自然発生的政治闘争）の最高極限形態・集中的表現であるわれわれの六九年秋の前段階蜂起が代表している、従来の日本革命の具体的実践であり、その理論的労働のための生産手段は、プロレタリア革命に関するマルクス・レーニン主義の普遍的真理（学説）である。すなわち、「階級闘争を承認するにすぎない人は、まだマルクス主義者ではない。そういう人はブルジョア的な思考とブルジョア政治との枠をまだでいていないこともありうる。マルクス主義を階級闘争の学説に限ることとはマルクス主義をきりとりそれを歪曲し、それをブルジョアジーにもしうけいられるものに引き下げることの意味する。マルクス主義者であるのは階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認にまで押しひろげる人だけである。この点にマルクス主義者とありふれた小ブルジョア（大ブルジョアはもちろん）とのもっとも深い相違がある」（レーニン）「労働者革命の第一歩はプロレタリアートを支配階級に転化すること、民主主義を闘い取ることである」（「共産党宣言」）この、言い換えるならば革命の問題とは、政治権力の問題であるという、プロレタリア・民主主義・独裁の学説と、日本革命の具体的実践を正しく結びつけることである。私はそれを2の結論が直接に指示している再総括の方法に従って簡単に叙述していくつもりである。一切の細部は捨て、核心点だけをA政治路線について、B組織路線についての二つの項目で叙述していく。

A 政治路線について

① 再総括のための前提

ここで確認した再総括の方法を適用して再総括を行うために、その方法を適用すべき対象の整理をこの①で行おう。それはわれわれの今までの総括の到達点を整理することである。それは次のようにまとめることができる。

① 総括の第一段階、前段階蜂起の直接的・即目的・抽象的総括の段階

われわれの前段階蜂起に至る政治路線は、①安保決戦を前段階武装蜂起として貫徹し世界革命戦争を開始せよ！ ②なし崩しファシズム侵略・抑圧・反革命戦争との闘いを世界革命戦争へ！ の二つの政治スローガンに代表される。この二つの政治のスローガンに代表されるわれわれの政治路線は、矛盾する二つの政治路線の未分化な二元論的政治路線である。つまり一つは「安保決戦を前段階武装蜂起として貫徹する」政治路線であり、もう一つは、「前段階蜂起を貫徹し世界革命戦争を開始する」という政治路線である。前者は、日本革命の従来の平和的・大衆実力闘争の政治路線であり、その政治路線の最高極限形態である。後者は、安保決戦を政治的契機として、すなわち従来の平和的・大衆実力闘争の政治路線の最高極限形態である前段階武装蜂起を契機として、従来の政治路線の質的転換・飛躍により新しい生れつつある日本革命の新しい政治的発展段階の政治路線である。この後者の政治路線こそ真の革命路線であり、権力闘争の政治路線である。この二つの政治路線は、それぞれ異なる特殊な、かつ独自の運動法則

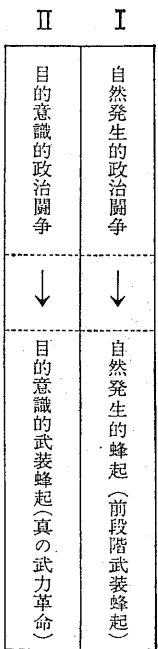
を持つている。確かにこの二つの政治路線相互の関係は、後者が前者の量的発展・生長の極限のなから、その質的転換・飛躍として発生した相互関係、内的関連にあるが、そのことからわれわれが引き出さなければならぬ結論は、前者の政治路線からの後者の政治路線への転換をめぐりなすに逐げることであり、決してこの二つの政治路線を折衷主義的・二元論的に結びつけることでありはならない。この二つの路線の折衷主義的・二元論的結合は、前者の政治路線にとつては、後者の政治路線へのバトンタッチによって自己の歴史的役割を果たすことなく死に絶えることであり、後者の政治路線にとつては、敵の土俵で闘うことであり、これもまたそれ自身の特殊かつ独自の運動法則を自己展開できないことを意味する。

一九六九年秋の前段階蜂起の挫折をもちたわれわれの政治路線は、この前者の政治路線から後者の政治路線への過渡的未分化な路線であったことの原因がある。つまり、断乎たる跳躍が問われた時、われわれは半歩しか跳ぶことができなかったのである。だが、にもかかわらず、われわれのその半歩の跳躍は、後退するためではなかった。われわれはすでに二度と後退することのできない新しい戦場へ踏み込んだのであり、われわれに問われているのは、この踏み込んだ戦場で自分の傷口を自分の舌でなめとりながら、断乎として前進することであり、そのために、まさにそのためにこそ、われわれはわれわれの過渡性を克服するために総括を徹底しなければならぬのである。事をあいまいにしてはならないのである。従来の平和的大衆実力闘争の最高極限形態としての前者の政治路線は清算されなければならない。新しい武装大衆闘争の政治路線へきっぱりと路線転換しなければならぬ。以上が総括の第一段階である。

④ 総括の第二段階、統一赤軍の総括

この段階は、④の総括による新しい武装大衆闘争の転換総路線の実践による検証の段階である。この過程がいかなる結論となったかは十二分に明らかにされている。その結論だけを簡単にまとめよう。第一に押えておかなければならないことは、われわれの転換総路線は、従来の平和的大衆実力闘争の政治的段階から武装大衆闘争の政治的段階への質的転換・飛躍を不可避としたということを指示しているかぎりにおいて、それはまったく正しいということである。第二に、しかしそれは、日本革命が今直接に武装闘争の政治的發展段階にあるということの意味しない。すなわち、日本革命の現段階は、従来の平和的大衆実力闘争の最高極限の到達段階から直接に発生したばかりの、新しい武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治路線のはじまりの段階、つまりその必然的不可避的發展・継続が真の武装行動（人民蜂起）となる真の革命路線である武装大衆闘争政治路線の第一段階に他ならない。それは現在、直接には非武装的運動（闘争）組織形態Ⅱ平和的・非軍事的闘争形態からはじまり、またはじめなければならぬ。言い換えるならば、現在の日本革命の客観的Ⅱ政治的發展段階は、今ようやく真の政治闘争、共産主義的政治闘争を生み出すに至った段階にあるということである。したがって、第三に、われわれが前段階蜂起の総括のなから、直ちに直接・実践的に武装闘争段階に突入しようとしたことは、われわれの主観主義的誤りであるということである。このことはわれわれの路線転換による転換総路線、すなわち武装大衆闘争（革命戦争・人民戦争）の政治・軍事・組織路線の誤りを意味しない。われわれの誤りの根拠は、われわれの転換総路線が未だ抽象的であること、したがってこの抽象的な転換総路線から直接に実践

闘争方針を無理に具体化した時、われわれの主観主義的誤りが引き起されているのである。問題はわれわれの転換総路線の抽象性にある。これを具体化しなければならぬ。そのためにわれわれのなすべきことは、われわれの転換総路線を直接に生みだしたところの、従来の平和的大衆実力闘争の政治路線の最高極限形態、集中的表現としてある軍事的段階の、前段階武装蜂起の自然発生性を意識化することだけではない。何故なら、前段階武装蜂起は、たとえ自然発生的であるとはいえ、従来の平和的大衆実力闘争の政治路線の必然的不可避的發展・継続の帰結であり、集中的表現であるからである。われわれの転換総路線の必然的不可避的發展・継続の帰結、すなわち、われわれの転換総路線の戦略目標は、この従来の平和的大衆実力闘争の政治路線が自然発生的に生みだしたところの、その最高極限形態、集中的表現である軍事的段階を、新しい形で、つまり意識的な形態（真の武力闘争、暴力革命）として達成するものであるからである。図式化すれば次のような対応関係にある。



日本革命は、今やIの戦場からIIの戦場へ踏み込まなければならぬ。そして手探りですでに踏んでいるのである。このIIの戦場を勝利的に前進するためには、Iの戦場でのすべての教訓を意識化（総括）することが必要である。何故ならIはIIのための、いわば予行演習であったからである。IIで現われたすべは（そこで一人一人の革

命家がどのような姿勢をとったかも含めて）IIで必ず本格的に繰り返されるからである。われわれがIIの戦場を勝利的に前進することは、何よりもIIの戦場における戦略目標とそれに至る道程（路線、方法、手段、戦術）をはっきりと意識し、自覚してのみ可能である。革命家をしてあらゆる困難を克服し、奇蹟を実現させるものこそは、自己の偉大な戦場目標を確固たるものとして自覚していることであり、そしてその戦略目標への正しい道（路線、手段、戦術）を選んだという確信である。この確信が革命家をして巨大な人民革命の断乎たる水先き案内者とするのである。

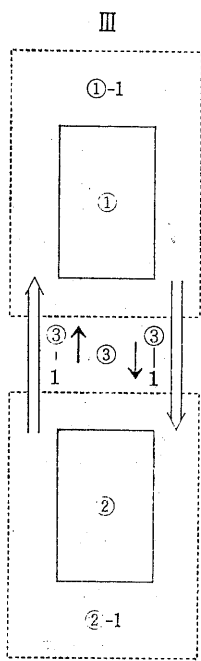
われわれは、われわれの転換総路線の抽象性を克服し、その戦略目標と戦術（手段、方法、路線（道程））を具体化しなければならない。そのため、われわれは、今までのⅡ平和的大衆実力闘争の武装大衆闘争への転換のⅡ図式による総括の抽象性を、Ⅱ自然発生的政治（軍事）闘争からの目的意識的政治（軍事）闘争へ再総括しなければならないのである。それはI図とII図の対応関係において、従来の自然発生的政治（軍事）闘争の戦略目標と戦術（手段・方法）の自然発生性を、革命の問題は国家権力の問題であるという、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命に関する普遍的真理によって意識化Ⅱ論理化することだけではないのである。以上である。

以上④⑤がわれわれの再総括の第一段階と第二段階のまとめである。再総括を具体的に始めよう。

⑤ 再総括の核心の叙述

④ 前段階蜂起の見解

ただちに再総括の核心点に入っていくために、私は③の②で図式化したところのⅠⅡ二つの戦場の未分化な過渡期的なものであったわれわれの前段階蜂起路線を、その内的関連を目に見える形で浮き彫りに叙述するために、自己流の図式化を試みてそれを説明していくことにしたい。それがもっとも適当な叙述方法だと考えるからである。



【註】①は機動隊政治(軍事)、②は平和的大衆実力闘争のデモ隊政治(軍事)・革命戦争の政治(軍事)、③は平和的大衆実力闘争のデモ隊政治(軍事)・組織(古いデモ党→デモ党派軍団→デモ統一戦線)、②-1は世界革命戦争の建軍政治(軍事)・組織(世界党→世界赤軍→世界革命戦線(臨時革命政府))、③は敵味方の攻防関係(↓はデモ規制、↑は実力デモ)、③-1は敵味方の攻防関係(↓はなし崩しファシズム→侵略・反革命戦争、↑は前段階蜂起→世界革命戦争)

右に示したⅢ図がわれわれの「安保決戦を前段階蜂起として貫徹し世界革命戦争を開始せよ!」「なし崩しファシズム→侵略・反革命戦争との闘いを世界革命戦争へ!」の二つの政治スローガンによって集中的に表現された、六九年秋の「前段階蜂起→世界革命戦争」の政治(軍事)組織路線の図解である。多くの説明は不要であろう。①は機動隊政治(軍事)と②は平和的大衆実力闘争のデモ隊政治(軍事)組織(従来の古いデモ党→デモ軍団→デモ統一戦線)の直接的な闘争関係(攻防関係)、つまり③の細い矢印で示されている街頭実力

政治デモとファシズム的デモ規制の攻防関係のなかで生長・発展してきた日本革命の現実の発展、大衆運動の歴史的な自然生長の発展が、一九六九年秋の佐藤訪米時に煮つまった安保決戦を政治的契機としてその最高極限の発展形態である前段階武装蜂起を必然化し、①-1はなし崩しファシズム→侵略・反革命戦争の政治(軍事)と②-1は前段階武装蜂起→世界革命戦争の政治(軍事)組織(世界党→世界赤軍→世界革命戦線(臨時革命政府))の直接的な闘争関係(攻防関係、つまり③-1の太い矢印で示されているところの、なし崩しファシズム→侵略反革命戦争と、前段階武装蜂起→世界革命戦争の闘争関係(攻防関係)への質的転換・飛躍を要求したこと、以上のことをⅢ図は浮き上らせている。

私は今、①と②の直接的闘争関係が①-1と②-1の直接的闘争関係(攻防関係)への転換・飛躍を必然化したと書いた。ここにわれわれの総括の核心がある。ここに日本革命の歴史的発展段階の全核心がある。権力問題、国家と革命の問題が直接・実践的に日本革命の日程にのぼったのである。日本革命の歴史(六全協前の日本共産党の歴史、そしてその後の日共(学生細胞)→共産主義者同盟→赤軍派・日共(革命左派)→統一赤軍→日本人民革命党(?)の全歴史)の、中心を貫いて走る一本の赤い糸、それこそこの権力闘争への目的意識性に他ならない。現実の日本革命の政治攻防関係のなかにあり、労働者・人民の前衛の位置を守り続け、その攻防の不断の質的発展自体が現実提起するあらゆる困難を、人民革命への熱望とそれが与える岩をも砕く政治的かつ理論的勇気を土台として、権力闘争への目的意識性で解決し、正しい針路を示しつづけた、その前衛こそわれわれである。人民革命への唯一の通路は大運衆動である。われわれは、この通

路をいかなる困難(それは死をも要求するものである)があろうともよけて通ろうとはしなかった。何と多くの日和見主義者たちがこの幾多の困難の前にこの通路をさげ、前衛の位置から退いていったことであろう! われわれをして、この前衛の位置を守らしめ、また今現に、統一赤軍としてその責任を果させているものこそ、この道が人民革命への唯一の通路であること、不動の確信である。勿論、多くの誤りは避けることができない。だがわれわれはその誤りを人民の前衛にふさわしいやり方で、すなわち自己犠牲の高価な代価を支払うという形で自己批判する姿勢を堅持している。われわれは前衛の自己批判を自己犠牲以外の形では絶対に認めない。われわれは、自己犠牲以外の形でのあらゆる自己批判が、すべて軽蔑すべき日和見主義の自己弁護と欺瞞にすぎないことを、経験によって知っているからである。そしてわれわれは、この前衛部隊のさけられない自己犠牲こそが、人民にとってもっとも安くつく犠牲であることに不動の確信をもっているからである。だからこそ権美智子の犠牲は、柴野春彦の犠牲は、富士山よりも高く、人民革命の頭上に人民革命の道しるべとして不滅の光をもって、輝いているのである。われわれには世界史のなかに日和見主義指導部を持つことになった人民革命の運命が、いかなる血の海を伴う敗北でもって終ったかを知っている。

①と②の直接的攻防関係が①-1と②-1の直接的攻防関係への転換・飛躍を必然化したということについて、少しくわしく見てみよう。このことは、従来、①-1と②-1の攻防関係がなかった、存在しなかったということの意味しているのではない。そうではない。①と②の攻防関係と、①-1と②-1の攻防関係の相互関係は、①-1と②-1の攻防関係の二つの政治的發展段階を示しているにすぎない

い。従来、①-1と②-1の闘争関係が①と②の直接的な闘争関係の背後にぼんやりとしか認識し得なかったということである。私はそのことを、Ⅲ図では点線(……)と直線(——)の区別で図示した。①-1と②-1の闘争関係を、具体的・意識的に認識するためには①-1と②-1の闘争関係を具体的・意識的に認識しないでは現実の日本革命の実践が一步も前進し得なくなることが、すなわち日本革命の客観的Ⅱ政治的發展段階が①-1と②-1の直接的攻防関係(国家と革命の問題)を具体的・実践的な日程にのぼらせるまで待たなければならなかったのである。つまり日本革命の具体的実践自体が建軍武装闘争を日程にのぼらせなければならなかったのである。もう一度言い換えよう。日本革命の具体的実践が従来の警察・機動隊のデモ規制と戦闘的街頭実力デモの攻防関係の狭い枠を突破しなければならなかったのである。この狭い枠こそ、現代日本における組合主義政治(自然発生的政治)と共産主義政治(目的意識的政治)との分界線である。共産主義政治はこの狭い枠の外からのみ獲得できるのである。

第一次共産主義者同盟が力尽き倒れたのも、この狭い枠の前であった。そしてその敗北は、当時の日本革命の具体的実践段階からして実に歴史的にさけられない必然であったのである。ここで第一次プントの中央指導部としてただ一人旧プント敗北の総括の責任を果たし、われわれの進むべき道を示した人、佐久間元の総括を見ておくことは無駄ではあるまい。

「プント綱領草案を準備するための拡大中央委員会(一九五九年七月)の席上において提唱されたもの、現代の政治闘争の把握に関する主張は、多かれ少なかれプント全体の気分を反映するものであった。すなわち、次のように言われたところの理解である。『革命的

学生からの結集——それは公認されたマルクス主義の理論的潮流への全面的批判が絶対に必要であったが故に、必然であった。この革命的学生の結集は、革命的労働者の結集へ進んだ。すでに部分的に労働運動の現実の指導部隊としてさえ、登場するに至った。基幹全産業への同盟は確立された。さらに進め！ 極度に集中化された国家を有し、国家独占資本主義として発展している日本資本主義の現状では、地方グループの形成から全国組織化の過程はロシアポリンエヴィキとは比較にならない速度をもって進んだ。しかも全国的な強固な学生運動を指導下において現在の段階では、われわれはロシアの経験を実行する必要はない。だが満足するな！ 現在では一つの企業の経済闘争でも、一つの工場の労働者の闘いも直ちに国家権力と衝突する！ 闘いは全産業の統一された闘いなしには進みえない！

『共産主義』第四号、巻頭論文、現代の国家独占資本主義下の闘争が、プロレタリアートの集中化を容易にし、国家権力の存在を速やかに意識化する条件を持つてゐることは事実であるとしても、このことは逆にプロレタリアートの闘いを自然生長性の前に押し止めるようにも作用する。……ただ単に権力と衝突し、現存秩序をぶち破るというだけなら、それを共産主義的実践、革命的変革と呼ぶことが出来ないのは云うまでもないことである。……ブンドとこれに指導された全学連がいち早く『戦闘的国会デモ』の方針を宣伝し、自らデモの先頭に立って、指導したことは事実である。それに又、これらの前衛的部分が労働者階級の解放と資本主義秩序の革命的転覆とを熱烈に希求していたことも事実であったのである。しかしながらこの情熱と意志がいかにかにしてブルジョア権力を打倒するかの革命的戦略によって科学的に裏付けされない限り、そのこと自体は闘争の自然発生的性格を打ち破れないばかりか、逆にこの自然発生的な闘争をそのまま指導することによって自らをその限界に押し止めてし

まう結果になるだけであつた。……自然発生的な闘争が革命的意識的な闘争の直接の源泉であり、革命の深部の力がここに横たわつてゐるといふことを理解しなければならぬ。このことのうちにいかにゆる運動の力学を看取し得ない勢力は単にこのことだけによって大衆闘争を指導し自らの革命戦略を物質化する能力を喪失した思想団体にとどまるほかにあつた。しかしながら自然発生的な闘争が革命闘争の直接の源泉であるといふことは、それが革命的闘争にまで発展しうろためには科学的な革命戦略として表現された共産主義的意識性の媒介を必要とするといふことを意味している。……革命家の任務は自らの指導によってそれを革命闘争へと媒介する自然発生的な闘争の昂揚の渦中であつてその先頭に立ち、この現実的な運動そのものの中に革命闘争への必然的な通路を発見することなのである。……われわれはこの簡単な総括においてブンドの破産の根拠を探ってきた。それは安保闘争の渦中に自らを投入することによって、政治主義的偏向に犯され、プチブル的急進主義を真のプロレタリア運動ととりちがえてしまふことによつて打ち破りがたき壁に頭をぶつけて孤立し、その事からくる焦燥のために崩壊してしまつた。ここにわれわれは反スターリン主義左翼における革命戦略の具体化を焦眉の問題として提出せざるを得ない。何よりもここにブンド破産の理由をみることによつて、このことはいさう切実な課題として浮び上つてくるのである。プロレタリアートの前衛隊が、プロレタリアートを大衆的に把握しうるのはその方針が情勢を正しく把握しうろものであり、プロレタリアートの直感によつて把握されて一つの物質力となつたときなのである。原理は宙に浮いたものでは決してなく、階級としてのプロレタリアートを把握するためには何よりもその方針の具体性においてでなければならぬのである」

(佐久間元「日本における反スターリン主義運動と共産主義者同盟」—その

組織論的総括」一九六三年七月、『新左翼運動資料集』収録、傍点引用者)

最善をつくして闘い倒れた第一次ブントがその崩壊の事実そのものによつてわれわれに残した課題、日本革命の具体的戦略の獲得は、今こそ獲得されなければならないし、またわれわれは獲得することができ。日本革命の客観的歴史的发展段階、日本革命の具体的実践の発展が、それを可能にしているのである。われわれは日共(革命左派)の兄弟たちとともにすでに第一次ブントが「頭をぶつけた打ち破りがたき壁」であるところの、ただ国家権力に衝突するだけの、従来の機動隊政治(軍事)と街頭実力政治デモとの組合主義的、自然発生的攻防関係の狭い枠(壁)を、死の跳躍(従来のブルジョア・イデオロギーの死であり、プロレタリア・イデオロギーの生の誕生である)によつて、突破したからである。すなわち、われわれは客観的にも主体的にも、革命戦略を具体化しうる段階にあるのである。毛沢東は次のように言っている。

「一般的に言つて、自然を變革する実践においても、社会を變革する実践においても、人々があらかじめもつていた思想、理論、計画、成案がなんの変りもなしに実現されることはきわめてすくない。これは現実の變革にたざざる人々がたえず多くの制約を受けてゐること、たんに科学的条件、および技術的制約をたえず受けてゐるだけでなく、客観的過程の發展とそのあらわれる度合いの制約(客観的過程の側面、および本質がまだ十分に露呈してゐない)をも受けてゐることによるのである。このような状況の下では、まゝもつて予想できなかった事情を實踐の中で見出したことによつて思想、理論、計画、成案が部分的に改められることがよくあるし、全面的に改められることもある。……多くの場合、何回も失敗をくり

かえてはじめて、あやまつた認識を改めることができ、客観的過程の法則性に合致させることができ、したがつて主観的なものを客観的なものに合致させることができる」(毛沢東『実践論』、傍点引用者)

この引用文は、2の統一赤軍の総括でもあることを注意しておきたい。われわれは客観的にも主観的にも、今、日本革命の戦略(そして戦術)を具体化しうる段階にあるが、ただ、われわれは広大な新しい戦場、真の革命と反革命の戦場に踏み込んだばかりであり、そのため未だわれわれのこの戦場を勝利しぬく革命戦略(戦術)は抽象的であることである。2の統一赤軍の総括において見てきたように、われわれはこの新しい戦場を今、手探りで前進しており、そのため多くの誤りを犯し、高い代価を支払つてゐるのである。そしてこの高い代価と犠牲こそがわれわれの戦略、すなわち「なし崩しファシズム」侵略・反革命戦争を世界革命戦争で打ち破れ！、あるいは「米日反動の侵略・反革命戦争を革命戦争で打ち破れ！」というわれわれの戦略の抽象性を、実践とその結果が事実において指示しているところに従つて具体化しなければならないのである。

さてわれわれは、機動隊政治(軍事) ①とデモ隊政治(軍事) ②の攻防 ③の弁証法的發展のなから、その狭い枠を突破したにもかかわらず、なし崩しファシズムの侵略・抑圧・反革命戦争の政治(軍事) ②-1と前段階峰起-世界革命戦争の政治(軍事) ③-1の攻防関係 ③-1が抽象的であることをすでに2で確認してきた。すなわち、われわれは前段階峰起の総括を通して従来の①と②の攻防関係 ③-1から①-1と②-1の攻防関係 ③-1への轉換の過渡性、つまり③と③-1の結びついたままの二元論的誤りを克服し、①-1と②-1の攻防 ③-1関係である新しい轉換総路線

を「なし崩し」ファシズム—侵略・抑圧・反革命戦争を世界革命戦争で打ち破れ！」米日反動の侵略・反革命戦争を革命戦争で打ち破れ！」として獲得してきたが、しかし2で見てきたように、この一年以上の実践により、このわれわれの転換総路線が実際具体的にはこの新しい戦場（①-1と②-1の攻防（③-1）の戦場）が、二つの発展段階、すなわち、平和的Ⅱ前軍事的な政治闘争段階とその必然的Ⅱ不可避の発展である、武装闘争段階の二つの段階の統一である、具体的な政治路線の未だ抽象的把握であることを分析してきた。「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である」というクラウゼヴィッツのテーゼこそわれわれの分析の支点である。この観点によって、われわれの転換総路線の抽象性を政治的に意識化し、具体化すること、これがわれわれの課題である。革命の問題とは国家権力の問題であるという観点によってこそ、この課題は解決される。打倒すべき政治権力は何か？これが①-1の意識化である。実現・樹立すべき権力は何か？これが②-1の意識化である。そのための闘争方法・手段、すなわち革命戦略・戦術は何か？これが③-1の意識化である。この問題の解決にすぎなければならぬ。

④ — 前段階蜂起の再総括、その結論

まずはじめに、Ⅲ図の総体をそのまま直接に意識化する観点をはっきりさせておこう。われわれ赤軍派の自然発生性を批判した日共（革命左派）の『解放の旗』の次の指摘こそそれである。

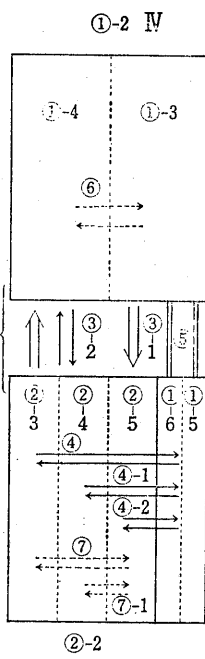
「赤軍派は『一瞬の蜂起』論を『政府中枢の一挙的殲滅からプロレタリアート人民のそれへの合流』と主張する。赤軍派は経済制度—政府官僚機構—暴力装置の關係がわかっていない。政治は経済の集中のあらわれであり、軍事は政治の集中のあらわれである。従って革命左派の『解放の旗』の次の指摘こそそれである。

権力と民族民主勢力の政治的攻防関係（その平和的發展段階）（↓は政治的反動、↑は民族解放・民主主義の平和的形態での政治闘争）、③-1は米日反動と民族・民主勢力の間の政治的攻防関係（その実力による決着をつける段階）（↓は武力強圧、↑は人民武装蜂起）、④-1・④-2はプロレタリアート・小ブルジョアジー・ブルジョアジーと米系資本・親米売国独占資本との間の経済矛盾、⑤は米系資本・親米売国独占資本と国家との融合（国家独占資本主義）、⑥は米日反動内部の矛盾、⑦・⑦-1は民族・民主勢力内部の矛盾、⑧は現在の資本主義の社会・経済的基盤

Ⅲ図の無意識性（点線で図示している）の直接の意識化であるこのⅣ図はわれわれに少なからぬとまどいを起させる。何故なら、従来のわれわれはⅢ図で示したところの、機動隊政治とデモ隊政治の自然発生的攻防関係の直接的延長上に社会主義革命（プロレタリア革命）、すなわちプロレタリア独裁の実現樹立とそれによる社会主義の組織化をほんやりと考えていたり、あるいはそれ自身、民主主義革命と社会主義革命の区別と連関のきわめてあいまいな「コンミュニオン」「ソビエト」「臨時革命政府」等々の実験をほんやりと考えていたからである。総じてわれわれ、日本の革命的左翼と呼ばれている部分は、第一に、権力問題について、国家と革命の問題について、直接当面するプロレタリアートの政治的任務について、直接当面の人民革命の性格と任務について、第二に、この直接当面の人民革命とプロレタリアートの終局目標（プロ独の実現による社会主義の組織化）との区別と連関について、以上二点について、きわめてほんやりした考えしか持っていなかったことを確認しておくべきである。それは、われわれの現実に実践している全人民的（全人民的であり、プロレタリア的でないこと）に注意せよ。政治闘争のことごとくが即自的性質を帯びていることにはつきりと示されている。われわれは日韓条約反対闘争、ベトナム

の問題は、国家権力の問題であり、国家機構の主要な構成部分はいくらでもなく、暴力装置であり、『鉄砲から国家権力が生れる』のである、しかし、現実には定義だけでは仕方がない。日本の具体的な現実に具体的に分析しなければならぬ。日本人民を武力をもって支配しているのは誰か。それは米侵略軍であり、その指揮下にあるカイライ自衛隊であり、警察・機動隊である。そして暴力機構がこうなっているという事は、政治的にも経済的にもアメリカ帝国主義が日本民族を支配し、親米売国の日本軍国主義が日本民族を売り渡し、日本人民を支配していることを示している。又、このように強大な暴力装置が背後にある以上、この暴力装置を打ち砕くことなど、政府中枢を一挙に殲滅することは不可能である」

この観点にしたがって、Ⅲ図の総体（点線部分）を意識化するとⅣ図の如く示される。



【註】①-2は米日反動権力（日米安保体制）、①-3はアメリカ帝国主義（米侵略軍）、①-4は日本軍国主義（政府官僚機構、カイライ自衛隊、警察機動隊）、①-5は米系資本、①-6は親米売国独占資本、②-1は民族民主統一戦線（反米愛国統一戦線）、②-2はプロレタリアート、②-3は小ブルジョアジー、②-4はブルジョアジー、②-5は米日反動

ム反戦闘争、入管法反対闘争、米軍基地・「自衛」隊基地反対闘争、沖縄奪還闘争、安保紛争闘争等々のありとあらゆるわれわれの現に実践している革命の大衆実力闘争の全人民的政治闘争が、それ自身のうちに直接に指示しているところの日本人民の直接当面の革命の任務と性格について、その論理的帰結にまで考え抜いたことがあるだろうか？ 否である。このことは④でその客観的かつ主観的原因を歴史的に根拠のある必然性において分析してきた。今、われわれはⅣ図によってわれわれの従来の政治闘争の自然発生性Ⅱ即自性Ⅱ無意識性を浮き彫りにすることによって意識化Ⅱ対自化することができぬ。

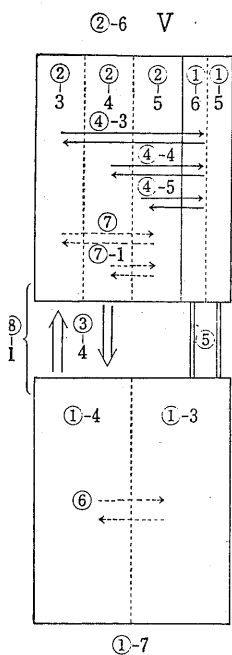
今私は、われわれが従来、第一に、日本における直接当面する政治的Ⅱ経済的任務と革命の性格について、そして第二に、この日本人民の直接当面する革命とプロレタリアートの終局目標（プロ独樹立による社会主義の組織化）との区別と連関について、きわめてほんやりとした考えしか持っていなかったと書いた。このことはしっかりと押えておかなければならない。われわれは決してまちがっていたわけではない。問題はこうである。われわれは現実の大衆実力闘争の全人民的政治闘争をその先頭で闘い、それを首尾一貫して権力闘争への目的意識性で指導してきた。われわれはプロレタリアートの終局目標（プロ独の実現を通しての社会主義の組織化）への唯一の正しい通路が革命の大衆運動の深部にあることを知っていた。この点でわれわれは社会党・共産党をはじめとする一切の新旧の日和見主義（議会主義・改良主義・修正主義）（「現代の批判」であるトロツキズムも同じである）指導部と明確な分界線を引きつけた。まさに、現実の大衆運動、それも第一に全人民的政治闘争における人民と権力の攻防関係のなかに、革命の、つまり打倒すべき権力と実現樹立すべき権力の攻防が集中的

に表現されることを把握することができると否かこそが、真の革命指導部と一切のニセ指導部との第一のもっとも根本的な分界線である。国家とはある階級が他の階級に対して系統的に武器を使用することである。現実の大衆運動をこの観点で内的に把握しなければならぬのである。そしてプロントの歴史的誕生から、わが赤軍派の誕生、そして統一赤軍の誕生に至る日本革命の中心を貫いて走る一本の真紅の糸こそ、以上の現実の大衆運動に立脚しての自然発生性と目的意識性、階級形成と党形成、党としての闘争（敵対矛盾の解決形態）、党のための闘争（党内闘争、人民内部の矛盾の解決形態）、被指導と指導の生きた相互関係を、不断に、一が分れて二になる観点で、不断に発生する新しい形の日和見主義をたたきつづすことによって継続・発展させてきた歴史である。現実の階級闘争の発展が提起しつづける、つまり不断に新しい形で生長していく大衆運動の自然発生性の発展が提起しつづける指導の転換・発展にこたえつづける闘い、この闘いこそが不断に真の革命指導部を試し、不断に新しい形で発生する日 and 見主義（正直な日 and 見主義はめったにない。日 and 見主義のもっとも普通の形態は、弁証法を折衷主義、二元論にすりかえることである）、二が合して一となる黒い階級協調路線を持ち込むことである）をはじき飛ばしてきたのである。そして、①で見えてきたように、われわれは今よりやく、この赤い糸の継続の結果として、歴史的に客観的にも主観的にも、第一に、われわれの従来の自然発生的な、即目的な、全人民的政治闘争がそれ自身のうちに直接に指示しているところの、日本人民が直接・当面している革命の性格と任務について、そして第二に、この革命と社会主義革命との正しい相互関係について考え抜き、意識し、対自化するすることができる段階にきているのである。

る全人民的政治闘争の革命的大衆運動としての展開の直接的延長上（われわれのスローガンである「安保決戦を前段階起として貫徹し世界革命戦争を開始せよ！」のなほ崩しファシズム侵略・反革命との闘いを世界革命戦争へ！」の直接的延長上にもある）、プロレタリアートとその党（共産党）の終局目標であるプロ独の実現と社会主義の組織化をぼんやりと想定していた、そのわれわれの政治意識を検討することである。

そしてわれわれは「革命の問題は国家権力の問題である」観点によって、われわれの従来の安保闘争等の全人民的政治闘争の論理的帰結を、IV図の如く意識化した。そこで問題は二つである。第一に、われわれの従来の全人民的政治闘争がそれ自身のうちに直接に指示しているところの人民革命の問題（すなわち直接・当面の打倒すべき反人民的支配権力と、実現・樹立すべき人民権力とそのための方針・手段、つまり、戦略戦術の問題）の意識化に對自化である。IV図の最終的論理的帰結は何か？そして第二に、そのIV図の論理的帰結と、われわれ労働者階級とその党の終局目標（社会主義革命）との関係はどうか？

私はこの二つの問題をIV図からの発展としてV図によって解決していくのが、もっとも適当な叙述方法であると考える。

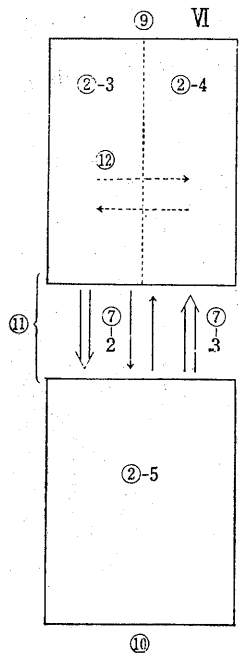


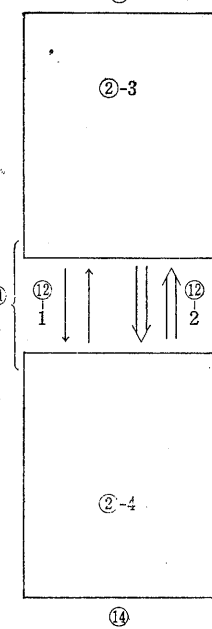
すなわち、複雑に、だが有機的な内的関連にある現代世界の四つの基本矛盾（被抑圧民族と資本帝国主義、社会帝国主義とのあいだの矛盾、資本主義国・修正主義国の内部のプロレタリア階級とブルジョア階級のあいだの矛盾、資本帝国主義国と社会帝国主義国とのあいだ、各帝国主義国のあいだの矛盾、社会主義国と資本帝国主義・社会帝国主義国とのあいだの矛盾）の発展過程の一部分としての日本プロレタリアート・人民と米日反動とのあいだの矛盾の発展段階が、現在、実践的に政治的に国家の問題を具体的日程にのぼせつつある。いいかえれば、支配・従属関係と相互反発の、それ自体矛盾した関係にある米帝と日帝の経済的関係を基礎とする米帝の反革命戦略体系の一環としての日本侵略体制下の日本軍国主義の復活という政治的反動に反民主主義的傾向と、発展しようとする日本資本主義を経済的根拠とする日本労働者階級・人民の民族・民主主義的傾向とのあいだの敵対の激化が、現在理論的にも、実践的に政治的にも、国家と革命の問題を押し出しているのである（米軍の日本支配を単なる政策として把握し、その経済的基礎において理解できない現代カウッキ主義者についての批判は省略する）。国際プロレタリア革命（この点はこの小論では省略する）とその一環である日本プロレタリア・人民の革命は明らかに生長しつつある。

われわれは、日本におけるわれわれの革命的大衆運動が具体的に実践的に提起した問題に答えなければならない。それはつまり、われわれ自身の従来の自然発生的に即自的政治意識を、国家と革命の問題として意識化に對自化することである。意識化に對自化すべきわれわれの従来の自然発生的に即自的政治意識とは何か？それは「安保粉砕・日帝打倒！」というスローガンや、われわれが安保闘争等のあらゆる

【註】このV図はIV図の論理的に政治的帰結である。すなわち①・②と②・①の地位（支配・被支配の地位）の転倒に革命である。それを②・①と①・②の関係として図示した。そしてこの転倒の通路が③・④の人民武装蜂起の勝利（③・④）による攻防関係の転化である。この①・②と②・①の②・①と①・②の関係への地位の転化により、日本の政治的社会的性質は対米従属の日本軍国主義国から独立・民主・平和・中立の人民民主主義共和国となる。勿論未だその社会経済的基礎（⑧・①）は依然として資本主義である。したがってこの革命は、プロレタリア革命ではなくブルジョア革命である。そしてこの①・②と②・①の、②・①と①・②への矛盾の地位の転化（民族民主革命）の完成とともに、従来の主要矛盾（米日反動と民族主義勢力の間の矛盾）は消滅し、民族民主勢力に存在するブルジョアとプロレタリアとの間の矛盾（⑦・①）が主要矛盾の地位を占め、その矛盾の解決のための社会主義革命が日程にのぼる。

なおIV図の④・①・①・②はV図で④・③・④・④・⑤となつてゐるのは、IV図の段階での米系資本・親米売国独占資本と、ブルジョアジー・小ブルジョアジー・プロレタリアートの間の経済矛盾の解決、すなわち国有化を示すが、この国有化は未だ人民民主主義共和国への国有化であり、プロ独下の社会主義的国有化ではない。ブルジョア民主主義的国有化である。





【註】Ⅶ・Ⅷの二つの図は、それぞれ社会主義革命（すなわち収奪者の収奪）の第一段階、第二段階を示している。したがって日本の政治的・社会的性質⑩と⑪は、すでに社会主義民主共和国であり、プロレタリア民主主義独裁の二つの発展段階を示している。勿論⑩⑪はすでにその社会・経済的基礎（⑩と⑪-1）を社会主義経済においている。⑩と⑪-1はその社会主義経済の組織化の二つの発展段階を示している。

さらに注意しておくべきは、私は社会主義革命の二つの発展段階にそれぞれ二つの闘争形態、平和的闘争形態と暴力的闘争形態を細い矢印と太い矢印で示したが、これは勿論あくまで理論的なものである。現実はそのような形で進行するか、われわれは今予測できない。だがわれわれはあくまでこの二つの矛盾の解決形態（闘争形態）を考慮に入れていなければならない。ソ連と中国におけるプロレタリア独裁の歴史的经验は、われわれにそのことを強く要求している。⑩⑪はそれぞれの段階における反革命を示す。Ⅷの段階が最終的に勝利する時（勿論この勝利は世界革命の勝利に帰すべきである）その時、共産主義の太陽は中天にのぼるのである。

さて以上の図解と註による叙述によって、われわれは従来のわれわれの自然発生的政治意識（すなわち、安保闘争や日韓闘争等々の諸全人民的政治闘争の直接的延長上にほんやりとプロ独の実現とそれによる社会主義の組織化を考えていた意識性）の、真の、つまり実際の具

ジョア民主主義革命（人民民主主義革命、新民主主義革命、民族民主革命、小ブルジョアの民主主義革命）であるということである。第二に、Ⅳ・Ⅴは、日本における対米従属の軍国主義統治形態の独立・民主・平和・中立の民主共和制への政治的変革の実現、つまり民族・民主革命は勝利した人民蜂起の結果としてのみ可能であるということである。そして第三に、この勝利した人民蜂起の機関が民族民主連合の臨時革命政府であり、この臨時革命政府の任務は、打ち破った米帝と日本軍国主義を、最後まで粉碎・弾圧・独裁し、すべての反革命的企図と容赦なく闘争し、同時に勝利した民族民主革命を最後まで押し進めることである。第四に、Ⅳ・Ⅴの二つの図は、反米反軍国主義の民族民主革命が達成されるや否や、そしてその徹底性に比例して日本の政治的・経済的な主要矛盾は米日反動と民族民主勢力との間の矛盾から、民族民主統一戦線内部のブルジョアジーとプロレタリアートの間の政治的・経済的矛盾（Ⅳ図とⅤ図において点線で副次的矛盾としてある⑦・⑧-1の間の政治的・経済的矛盾）となることを示している。このことが民族民主統一戦線内部においてブルジョアジーを不徹底な翼とし、プロレタリアートを徹底的に革命的翼とする。何故なら、ブルジョアジーは民主主義の段階で立ち止まろうとするのに対して、プロレタリアートは民主主義以上に進もうとするからである。ここからプロレタリアートは動搖的・反徹底な同伴者から手をしばられないために、自らを独立自主の政党に組織しなければならない（一九五〇年代後半に誕生したプロレタリア民主主義派「フロント」はついに、プロレタリアートの党へ前進したのである！）と同時に、民主主義革命の先頭に立ち、その指導権（ヘゲモニー）を握らなければならないし、また握ることができるのである。そしてこのブルジョアジーとプロ

体的内容を意識化することに成功した。

われわれの従来の政治路線、つまり、Ⅲ図に図示したところの機動隊政治とデモ隊政治の攻防、いにかえるならば自然発生的な全人民的政治闘争の直接的延長上にプロレタリア社会主義革命を想定していたわれわれの政治路線は、その真の、つまり実際の具体的な内容を図式化（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ）することにより、次のように意識化することができる。すなわち、われわれの従来の政治路線は今やその自然発生的・抽象性・即自性を、民族解放・民主主義革命（人民民主主義革命、新民主主義革命、ブルジョア民主主義革命、小ブルジョアの民主主義革命）（Ⅳ・Ⅴ）の社会主義革命（Ⅵ・Ⅶ）への強行転化の二段階連続革命戦略として意識化し、具体化しなければならない、と。言い換えると、労働者階級・人民の直接当面する民族解放・民主主義革命における革命的戦術（プロレタリア民主主義派の戦術・共産主義的戦術）の獲得、と。従来われわれが日共（代々木）の二段階戦略に対して、一段階戦略を対置したのは誤りである。革命的二段階戦略と日和見主義的・修正主義的二段階戦略との対立であり、民族民主革命における革命的戦術と日和見主義的・議會主義的戦術の、二つの戦術の対立である。くわしく見ていこう。

Ⅳ図の論理的・政治的帰結であるⅤ図、そしてⅥ図、Ⅶ図の四つの図が示しているものは、第一に、日本の労働者階級・人民の直接・当面する革命がプロレタリアートにのみ利害関係のある社会主義革命ではなくて、米系資本と、親米売国独占資本を除く、ブルジョアジー、小ブルジョアジー、プロレタリアート全体の政治的・経済的利害の一致を基礎とする、つまり現在の資本主義的・経済的基盤の上での政治的・経済的変革を達成するところの反米反日本軍国主義の、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの矛盾は、プロレタリア社会主義革命の方法によって解決される。このプロレタリア社会主義革命はまた大きく二つの発展段階を持つていて、Ⅵ・Ⅶの二つの図は示している。第五に、Ⅳ・Ⅴの図示している民族民主革命の展開は、ただこの革命を最後まで押し進め、そしてそれ以上にⅥ・Ⅶの図示している社会主義革命にまでおし進めることのできるプロレタリアートがⅥの段階まで進むことのできる都市・農村の小ブルジョアジー（農民）との同盟により、その圧倒的大衆の力（日本人人口の九〇％）によって民族民主革命のヘゲモニーを握ることにかかっているということである。

以上、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶの四つの図式が示している五点から、われわれは次のプロレタリアートの革命的任務と戦術を導き出すことができる。すなわちこうである。プロレタリアートは、全人民の前衛として、全人民の直接・当面する目的と利益のための革命、民族民主革命の先頭に立ち、全人民を団結・連合・統一しなければならない。プロレタリアートは自らの直接・当面の目的と利益（最小限綱領）も、また終局的な目的と利益（最大限綱領）も守るために、自らを独立・自主の共産党に組織しなければならない。以上こうである。そしてプロレタリアートは、革命の各々の段階において主要打撃をひとにぎりの主要敵に集中し、中立化できる勢力をことごとく中立化させ、結果できる全勢力を注意深く結集しなければならない。そしてわれわれは反米反軍国主義の民族民主革命の社会主義革命への強行転化に対して次のようにまとめることができる。プロレタリアートは実力で米帝をたたきだし、親米売国の日本軍国主義の抵抗を押しつぶし、ブルジョアジーの動搖性が働く余地のないようにするために、農民と、都市・農村の小ブルジョア大衆を味方に引きつけて、民族民主革命を、最後

まで、すなわちプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁にまで押し進め、遂行しなければならぬ。プロレタリアートは実力でブルジョア階級の抵抗を打破し、農民と都市・農村のブルジョア大衆の動揺性が働く余地のないようにするために、半プロレタリア分子の大衆を味方に引きつけて社会主義的変革をやりとげなければならない。これが日本労働者階級の任務と戦術である。

以上によって、私は大雑把ではあるが、再総括というこの小論の枠内において、われわれの従来政治路線の意識化を革命戦略(戦術)の具体的意識化として獲得できたと考ええる。

c 補足

最新の自然発生性の拜腕の形態である「国独資型」経済主義を粉砕せよ！

われわれは a b でわれわれの従来政治意識の即自性Ⅱ自然発生性(すなわち安保闘争等の諸全人民的政治闘争の直接的延長上にプロレタリア社会主義革命をほんやりと考えていた政治意識)を、民族民主革命の第二段階革命への転化の二段階革命戦略として意識化Ⅱ具体化してきている。われわれがこの政治路線の前進を闘いとしている現在、われわれ内部に、この前進に対して「あまり早く前進するな」とぐちをこぼし、うしろへ引き戻そうとする人々がいる。この人々の主張は勿論何一つ新しいことではない。昨日までのわれわれの主張をくりかえしているだけである。だが、まさにそのことが、日本革命の飛躍・前進にとり、従来政治路線の即自性Ⅱ自然発生性が極端となりつつある現在においては犯罪的なのである。この人々の主張は直接当面する日本革命の性格はプロレタリア社会主義革命であり、ブルジ

歩も後退することなく、断乎として堅持し、確固たるものとする、まさにそのためこそ獲得されたのである。「階級闘争を承認するにすぎない人はまだマルクス主義者ではない。……マルクス主義者であるのは階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認にまで押しひろげる人だけである」(レーニン『国家と革命』)「労働者革命の第一歩はプロレタリアートを支配階級に転化すること、民主主義をたたかいてることである」(『共産党宣言』)日本革命の具体的実践をこのマルクス・レーニン主義のプロレタリア革命に関する普遍的真理Ⅱ学説と具体的に結びつけること、つまりプロ独、プロレタリア民主主義独裁への道は、現実の全人民的政治闘争(ブルジョア民主主義闘争)の通路を通じてのみ可能であること、直接・当面している民族民主革命にプロレタリア民主主義派として参加し、その先頭に立ち、それを最後まで押し進め、そしてブルジョア民主主義の枠をこえる道を通じてのみ可能であることを意識化したこと、それがわれわれの六九年から現在に至る苦闘の結果である。革命の問題とは権力問題であり、政治闘争のことであること、このことをわれわれはついに闘いこったのである。このことをはっきりさせておかなければならない。そして、現在の反米愛国闘争(民族民主闘争)の政治スローガンをめぐる深刻な論争の真の根源が、現実の日本革命の歴史的發展・飛躍、すなわち従来の平和的大衆実力闘争の擬似的革命運動から、武装大衆闘争の真の革命運動への転換を真に闘い続けるのか否かに存在していること、このことをしっかりと押えていなければならない。この論争の真の根源から離れてはならない。従来自然発生的Ⅱ即自的政治闘争を目的意識的Ⅱ対自的政治闘争として、すなわち政策反対闘争ではなく革命として闘いとうとするのか否か、従来デモ隊政治の建軍政治への転換を真に

ブルジョア民主主義革命ではないということに尽きる。これに対してわれわれは次の質問を行うことによって片づけよう。すなわち、「諸君自ら現に実践している諸全人民的な政治闘争とは一体何か?」「それはプロレタリアートにだけ利害関係のあるものか?それともそれは全人民的性格を持っているのか?」と。そして「諸君は、それらの全人民的政治闘争を通じて以外に社会主義への道があるのか?」と。もし、これらの諸政治闘争の性格が全人民的なものであるならば、それはその最終的な論理的Ⅱ政治的帰結Ⅱ革命において、ブルジョア民主主義革命であることになる。それともこの人々は、これらの政治闘争が革命なしに解決されるとも考えているのであろうか?

さて、これ以上この問題に触れることは必要ないであろう。ここで触れておかなばならないのは次のことである。それは、われわれに對して、従来政治路線の即自性Ⅱ自然発生性を克服し、二段階戦略として意識化Ⅱ具体化することを要求し、かつ可能にしたものこそ現実の日本革命が、こういってよければ従来擬似的革命運動の真性の革命運動への歴史的転換・飛躍を強制したという事情であるということである。この現実の大衆運動の歴史的な要求に敢然と応えるために、われわれは従来政治路線の即自性に気づかざるを得なかったのである。何故なら、武装闘争をシュプレヒコールとしてではなく、現実的に銃撃戦として遂行するためには、敵権力の政治的総体を具体的に意識化し自覚しないでは一步も前進できないからである。従来安保闘争を中心とする諸政治闘争をば、革命の問題として、すなわち反米愛国闘争の政治スローガンを中心とする民族民主革命として意識化し、具体化したことは、現実の大衆運動の歴史的到達地帯、すなわち従来平和的大衆実力闘争からの武装大衆闘争(革命戦争)への転化を、一

闘い取るのか否か、建軍なき「武装闘争」でなく建軍武装闘争を真に闘い取るのか否か、これが反米愛国闘争(民族民主闘争)の政治スローガンをめぐる現下の論争問題の真の核心である。

さて、以上の点を踏まえて問題をもっと深めていこう。私は今、われわれの従来政治路線の自然発生性を二段階戦略として意識化することに反対し、直接・当面の日本革命が民族民主革命であることに頑固に反対し、社会主義革命であると考えなしに主張する人々に対して、もし彼らが今現に彼ら自身実践している、安保闘争を中心とする諸政治闘争の全人民的性格を認め、しかもこれらの政治闘争を革命にまで押し進めることを認めるならば、そのことによって彼ら自身の主張を粉砕していることを指摘した。しかしこれだけではまだ不十分である。彼らの主張、つまり直接・当面の日本革命の性格が社会主義革命であって民族民主革命ではないという主張が「帝国主義的経済主義」「現代国家独占資本主義型の経済主義」であり、政治闘争の否定にいきつかざるを得ないことを示さなければならない。

この人々の主張は、一言でいえば「日本は帝国主義国である。したがって直接・当面の日本革命は社会主義革命である」ということに尽きる。帝国主義を資本主義の独占段階という意味で使用するならば、日本が帝国主義国であることに誰も異論があるはずがない。そして独占資本主義が社会主義の組織化のためには経済的に十分に成熟しているということ、このことにも誰も異論はないであろう。だがそのことから、直接当面する日本革命の性格が社会主義革命であるということにはならない。政治問題を正しく考えることのできない俗物にはこのことが理解しにくい。手品のように見える。しかし俗物の思考で理論問題を解決することはできない。革命とは政治的上部構造の変革のこ

とである。直接・当面する革命の性格とは、直接・当面する政治的上部構造(政治権力)の変革の性格、つまり打倒すべき権力と実現・樹立すべき権力によって決まる問題である。日本の労働者階級が直接打倒すべき権力は何か? ヤンキー帝国主義(侵略軍)であり、親米売国の日本軍国主義である。この日本の労働者階級の直接当面する革命の対象は単に労働者階級だけが打倒すべき権力なのか? そうではない。もともと広汎な全人民的な民族・民主勢力共同の事業である。ここから革命の性格は決まるのである。それはプロレタリア社会主義革命ではなく、民族民主革命である。ブルジョア民主主義革命、いいかえると人民民主主義革命、新民主主義革命、小ブルジョアの民主主義革命である。この革命は未だ現在の資本主義の社会経済的基礎に手をつける革命ではない。現在の資本主義の社会経済的基礎の上で実現される民主主義革命である。そして、まさにこの革命が、プロレタリアートには、その終局目標(プロ独の実現による社会主義の組織化)へ接近するために必要なのである。

「マルクス主義者は民主主義が階級的抑圧を排除するものではなく、ただ階級闘争をいっそう純粹に、いっそう広範に、いっそう公然と、いっそうはげしくするにすぎないことを知っている。そしてそれがわれわれにとって必要なのである」(レーニン「マルクス主義の漫画と帝國主義的経済主義」)『もしこの世に何か確かなことがあるとすればそれはわが党と労働者階級とが、ただ民主共和制の形態のものでだけ支配権に到達することが出来るということである。この民主共和制は、すでにフランス大革命が示したようにプロレタリアート独裁に独自の形態でさえある。』(エンゲルス「エルフルト綱領草案の批判」)エンゲルスはここでマルクスの全著作を一本の赤い糸のように貫ぬいている根本

思想、すなわち民主共和制はプロレタリアート独裁のまじかに接近することであるということ、とくにはっきりとした形でくりかえしている。何故なら、このような民主共和制は——資本の支配を、したがってまた大衆の抑圧と階級闘争とを少しも排除するものではないが——不可避に階級闘争の拡大展開、発現、激化をもたらすので、ひとたび被抑圧大衆の根本的利益を満足させる可能性が発生するや否や、この可能性は不可避的に実現される。しかもプロレタリアートの独裁によってのみ、プロレタリアートによるこれら大衆の指導によってのみ実現されるからである」(レーニン「國家と革命」)

わが「現代国独資型」経済主義者の誤りは、帝國主義が社会主義革命の前夜であるということ、いかにしてそれを実現するかということとを正しく思考することができないところにある。帝國主義は社会主義革命の前夜である。このテーゼの経済的意義を説明する必要はないであろう。問題はこのテーゼの政治的意義である。それは次のようにまとめることができる。帝國主義の経済的本性は独占資本主義である。この帝國主義の経済的本性は帝國主義の政治的本性を規定する。つまり政治の独占がその本性である。対外的にも対内的にも、ブルジョア民主主義の否定による金融寡頭制政治的反映への傾向が帝國主義の政治的本性である。ここで押えておくべきは、この帝國主義の経済的かつ政治的本性は、決して資本主義の経済的發展と人民のあいだの政治上の民主主義的傾向の發展を押しとどめるものではなく、これらの民主主義的傾向と独占の反民主主義的傾向とのあいだの敵対矛盾を激化させるということである。ここからわれわれは次のような結論的公理を引き出すことができるし、引き出さなければならぬ。すなわち、帝國主義はそれ自身の發展によって、対外的にも対内的にも

うる。その時にはその部分を否認しなければならぬ。諸國のうちの一個國での共和主義的運動が、他の諸國の教權主義的または金融的君主主義的陰謀の道具にすぎない場合もありうる。そういう場合には、われわれはこの具体的運動を支持してはならない」(レーニン)例えば、バングラ問題をめぐる印、戦争において、われわれは断乎としてパキスタンを支持し、バングラの民族運動を支持してはならないのである。パキスタンの民族自決権を断乎として支持し、ソ連社会帝國主義に支えられた、インドの擴張主義に反対することだけが、バングラの民族運動に長期的に見た場合の眞の方向を与えることができるのである。百年の大計を見失ってはならない。

経済と政治の関係を正しく区別と連関において把握することができず、経済しか見ることができないことにより、史的唯物論を低めること、これが経済主義の特徴である。マルクス主義党は、これらの経済主義イデオロギー(自然発生性への拝跪)から自己を区別し、分界線を引くことによってのみ労働者階級の意識的前衛として自己を打ちたてることができるであろう。

㊦ まとめ

一言でいうならば、われわれの再総括は、先進資本主義國の政治闘争における、自然発生性の克服による共産主義政治の獲得ということができる。つまり日本革命の具体的実践を、マルクス・レーニン主義の普遍的真理に具体的に結びつけることができたことである。ここにわれわれ赤軍派と日共(革命左派)の歴史的合流による統一赤軍の誕生の秘密がある。これがどれほどの年月にわたるいかなる闘いによって闘い取られてきたかははいまい。この闘いの最大の困難がどこにあったかについて確認しておこう。それは旧プロントのぶちあたっ

「だから我々がまるで社会主義的変革を延期しているように言う無政府主義的反対論にこたえて、われわれはこう言おう。われわれは社会主義的変革を延期しているのではなく唯一の可能な方法によって、唯一の正しい道をとって、すなわち、民主共和制という道をとって、社会主義的変革への第一歩を踏み出すのである。と。政治的民主主義の道をとらずに別の道をとって社会主義にすすもうとするのは必ず、経済的意味でも、政治的意味でも愚劣で反動的な結論に達する」(レーニン「民主主義革命におけるロシア社会民主黨の二つの戦術」)

國際的にも一国的にも被抑圧人民、被抑圧民族が帝國主義(資本帝國主義、社会帝國主義)のくびきから自らを解放し、社会主義の組織化へ前進するための通路(橋、路線である民主主義(平和五原則の國際民主主義と一国的民主主義のすべて)の意義を理解することができないこと、これがわが現代帝國主義、エコノミック・アニマル型経済主義者の特徴である。

*ここで注意しておかなければならないのは、次のことである。「自決をも含めた民主主義の個々の要求は絶対的なものではなくて、一般民主主義的な(今日では一般社会主義的な)世界的運動の小部分である。個々の具体的場合には部分が全体に矛盾することはあり

た困難でもあった。「現代の国独資本下の闘争がプロレタリアートの集中化を容易にし、国家権力の存在を速やかに意識化する条件をもっていることは事実であるとしても、このことは逆にプロレタリアートの闘いを自然生長性の前に押しとどめるようにも作用する」(佐久間元)——この国独資本下のもつとも現代的な形の自然生長性(それは十九世紀九〇年代にレーニンがのりこえなければならなかった自然生長性Ⅱ経済主義と比較すれば一見目的意識的でさえある)こそが、日本の共産主義者をして自然生長性の前に押しとどめた当のものである。この国独資本という条件が、実践の上では、民主共和制の問題と社会主義の問題がほとんど分離できないような情勢を作りだしているからである。このことがわれわれの政治意識を不断に組合主義政治へ押しとどめたのである。この高次の自然生長性をのりこえるためには、この高次の自然生長性の先頭にありその権力闘争への指導性の恒常的獲得という執拗で困難な闘いを通じて、この高次の自然生長性が自らその限界性を客観的に露呈し、そのことによって不可避にその先頭にある意識的前衛の政治指導に危機を作りだし、そのことによって決定的にその政治指導の転換・飛躍を強制するまで待たなければならなかったのである。そしてわれわれはこの歴史的任務を果すことができた。われわれは実践上ではほとんど分離しないであろう、民主共和制の任務と社会主義の任務を明確に区別することができた。労働者階級の理論的意識はもはや自然生長性の前にくもらされることなく、鮮明であることができる。「歴大な自然生長性と意識的前衛の意識性の欠除」これが今までの日本革命の状態であった。だがこの状態は今や革命される。高次の自然生長性と高次の意識性の結合は、測り知ることのできない物質力となつてとどろくであろう。先進資本主義国にお

イツについてもエンゲルスは一八九一年にエルフルト綱領草案の論評の中で、共和制のための闘争の意義の過小評価をいましめた!……抽象的な真理はない。真理はつねに具体的である」(国民文庫版、一〇四ページ)この短かい一文からドイツ社民の変質のすべての秘密をあばくことは勿論できない。だがこの一文に、ドイツ社民のその後の日和見主義から社会排外主義へ、そして帝国主義社民への歴史の変質の秘密の一端をかきわけることができないであろうか? 先進資本主義国ドイツにおける一定程度のかたわにされたブルジョア民主主義の存在下における高次の自然生長性の前に(ドイツ社民は当時、世界最大の党であった)、ドイツ社民がその政治意識を組合主義政治Ⅱ帝国主義政治へ押しとどめられた事情をかきとることはできないであろうか? われわれはエンゲルスの透徹した批判と、レーニンの危惧(レーニンがオドロキマーク(一))をつけているのは明らかに危惧の表明である)を、正しく革命的に受けとめるべきではなからうか? 先進資本主義国における革命運動の強さは、その高次の自然生長性にあり、その弱さがこの高次の自然生長性に対する意識的前衛による意識的指導性の恐るべき欠除(実際恐るべきことである。こういう比較が適当だとは思えないが、例えば米日反動が歴大に養成しているその政治的代表者と互角に渡り合うことのできる労働者階級の革命的政治家が一体何人いるか考えて見ればよい)であることを、今一度確認しておこう。わが日本における民族・民主の闘いは、明らかに低開発諸国における何十倍、否何百倍も「もっと可能であり、もっと実現性があり、もっとねばりよく、もっと意識的で、もっとうちかちがたい」(レーニン)ものである。ただそこに、意識的前衛の意識性が、労働者階級・人民の高次の自然生長性を自在にするほど強力であるならば。

ける革命運動の歴史はこの国独資本の生みだす高次の自然生長性の前に、プロレタリアートの意識的前衛の意識性が押しとどめられ、それを突破できず、高次の自然生長性が自然生長性であるが故に無力化されてきたことを示している。

われわれは日本における民主共和制の実現は事実上は社会主義革命とほとんど分離できないまでに連続することを予想することができ。ここからわれわれは、わが経済主義者の如く、民主共和制のための闘いⅡ米日反動権力を打倒する闘いを無視したり、第二次的なものとしてプロレタリアートの政治意識をくもらせてよいであろうか? 否、逆でなければならぬ。日本における民族民主革命の実現は社会主義の実現とほとんど分離できないかも知れないということ、またさうすべく努力しなければならぬこと、ここからわれわれは次の結論を引き出さねばならない。民族民主革命と社会主義革命の二つの歴史的Ⅱ論理的段階を弁証法的に、区別と連関において、正しく鮮明に意識化しなければならぬ。日本においては、民主共和制の実現が、事実上、社会主義革命の前途を決定づけるであろうし、またさうしなればならぬ。したがって完全な民主共和制の直接のスローガンをかかげ、徹底した民族民主革命のために、反米愛国闘争のために全人民の先頭に立て! こうである。

【覚え書き】私はレーニンの「二つの戦術」のなかに次の一文を見した。「具体的な政治的任務は具体的な環境のもとでたてられなければならない。全ては相対的であり、すべては流動し、すべては変化する。ドイツ社会民主党は、その綱領の中に、共和制の要求をかかげていない。ドイツでは実践の上で共和制の問題が社会主義の問題からほとんど分離できないような情勢ある。(もっともその下

B 組織路線について

われわれは2でわれわれの転換総路線を、主として政治的・軍事的側面において、この一年近い具体的な政治的・軍事的実践によって点検し、その革命的修正を結論した。それは次のようにまとめることができる。すなわち、「われわれが前段階蜂起の総括によって獲得してきたところの『平和的大衆実力闘争の従来政治路線からの新しい武装大衆闘争』『革命戦争・人民戦争』の政治路線への転換」の結論は、理論的には未だ抽象的であり、具体的Ⅱ実践的には主観主義的・冒險主義的誤りを結果している。「平和的大衆実力闘争の武装大衆闘争への転換」という問題の立て方をば、「自然生長的政治路線から目的意識的Ⅱ共産主義政治路線への転換」として修正・意識化Ⅱ具体化しなければならぬ。われわれの平和的大衆実力闘争からの革命戦争への路線転換は、それが従来自然生長的政治路線から目的意識的Ⅱ共産主義的政治路線への転換である点であくまでも正しい。だが、その革命戦争の転換総路線が、その二つの発展段階、すなわち非軍事的Ⅱ平和的闘争段階と、非軍事的Ⅱ軍事的闘争段階の二つの発展段階を明確な区別と連関において、把握していない点で理論的には抽象的であり、具体的実践的には、非軍事的Ⅱ平和的闘争段階を飛びこえて直接に非平和的Ⅱ軍事的闘争段階を実現しようとしている点で、主観主義・冒險主義の誤りを結果している」以上である。

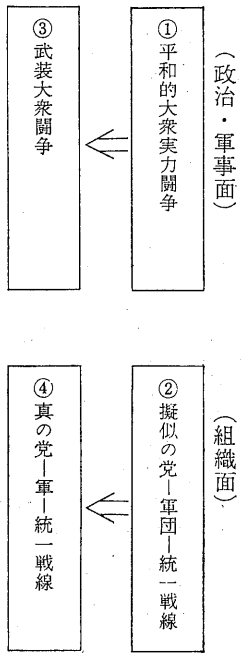
われわれは以上の観点で前段階蜂起の政治路線の再総括をAで行ってきた。では右に見たわれわれの転換総路線の政治路線におけるこの

一年近い実践による点検とその結論修正は、組織面においてはどのよう
に検証されるか？ 私はこの点を再総括の前提として a で簡単に叙
述し、そしてその点検と結論、修正が要求するところの、われわれの
前峰における組織路線の再総括は b で覚え書き的に、簡単に触れるだ
けに止めるつもりである。それ以上のくわしい展開はこの小論の枠か
ら、不必要と考えるからである。組織問題は独立して存在し得ない。
組織問題はあくまで政治問題である。政治内容（綱領、戦略―戦術）
を包むところの形式、それが組織である。この基本はしっかりと押え
ていなければならない。政治が第一である。

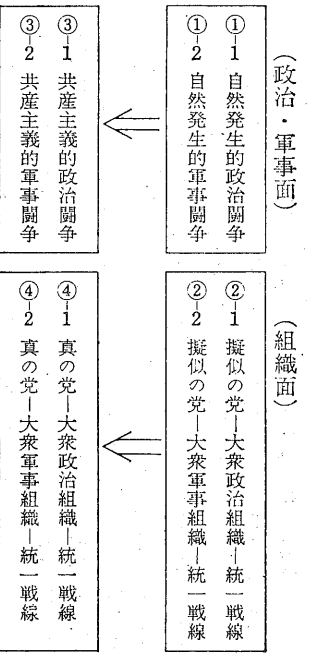
a 転換総路線の組織面での点検・修正——再総括の前提

直接結論に入ってゆくために、私はこの転換総路線の組織面での総
括を、図によって、2 で獲得した政治・軍事面での総括と対応させて
説明しようと思う。それがもっとも適当な叙述の方法だと考えるから
である。

VIII 転換総路線



IX この一年間の実践による修正



Ⅷ図で示されている、①・②の③・④への転換がわれわれの転換路
線である。この転換路線の実践による修正がⅨ図である。このⅨ図と
Ⅷ図の示しているものは次のことである。第一に、Ⅷ図は未だ抽象的
であることがⅨ図とⅧ図の対称で浮き彫りにされている。すなわち、
①は①—1と①—2の、②は②—1と②—2の、③は③—1と③—2
の、④は④—1と④—2の、それぞれ二つの発展段階の統一であるこ
と、それゆえこのことを具体化し意識化していないⅧ図は抽象的であ
り、Ⅸ図はⅧ図の抽象性の克服による具体化し意識化を示している。
ここから次の結論を引き出しておかなければならない。すなわちⅧ図
に示されているわれわれの転換総路線は①・②の日本革命の従来の政
治的發展段階から、③・④の新しい政治的發展段階への転換を獲得し
ていることにおいて正しい、と同時に、それがそれぞれ①—1・①—
2、②—1・②—2の二つの政治的發展段階の具体的統一であること
ろの①・②の、それぞれ③—1・③—2、④—1・④—2の二つの政
治的發展段階の具体的統一であるところの③・④への転換として、具

体的に統一的に把握していない点で抽象的であるということである。
第二に、われわれはわれわれの転換総路線(Ⅷ図)をこの一年間の革
命実践により点検した結果、Ⅷ図をⅨ図に修正(具体化)することが
できたことである。すなわち①・②の③・④への転換を、①—1・①—
2と②—1・②—2の③—1・③—2と④—1・④—2への転換と
してである。そして第三に、われわれの結論である。それは次のよう
にまとめることができる。すなわち、われわれはわれわれの転換総路
線をこの一年間の革命実践によって点検することにより、実際にはそ
れぞれ③—1・③—2、④—1・④—2の二つの政治的發展段階を内包
していたことを具体的に把握できていなかったところの、わ
れわれの転換総路線である③・④を③—1・③—2、④—1・④—2と
して意識化し具体化し、統一的に把握することができたということであ
る。そしてわれわれの転換総路線③・④が未だ抽象的であるが故に、
すなわちそのそれぞれの二つの政治的發展段階を区別して統一に具
体的に把握することができなかったが故に犯したわれわれの主観主義
的冒険主義的誤り、すなわち③—1・④—1の政治組織段階を飛び
こえて、③—2・④—2の政治組織段階を実現しようとした誤ま
りを認めることができたということである。われわれの結論、それは
われわれの現段階の政治的組織的任務は③—1と④—1、すなわち
前軍事的に平和的形態での共産主義的政治闘争と、それを包むところ
の組織、真の党—大衆政治組織—統一戦線、これを包むところ
である。共産党を建設せよ！ 真の労働者党・人民革命党を建設せよ
！ これがわれわれの組織的結論である。

b 前段階蜂起の組織面での覚え書きの再総括

a で見たわれわれの転換路線の組織面での修正は、当然にもわれわれ
の転換路線を導き出した前段階蜂起の組織面での再総括を要求
する。そしてこの再総括は、それが従来の自然発生的政治路線とその
組織路線の総体を対象に入れる以上、誕生以来のブントの運動・組織
理論の総括とならざるを得ない。私はこの小論でそれを試みるつもり
はない。ここでは、われわれの転換路線を獲得した前段階蜂起の組織
面での総括を現時点で整理しておくだけである。それは誕生以来のブ
ントの運動・組織原則(方法)の本質に核心点の意識化でもありと考
える。さて直接、核心点に入らう。以下の叙述もⅧ図とⅨ図を利用し
て説明する。
われわれは a で、われわれの転換路線の組織である「真の党—軍
(ゲリラ軍・武装遊撃隊—統一赤軍)—統一戦線」(Ⅷ図の④)が抽
象的であり、具体的には「真の党—大衆政治組織—統一戦線」(Ⅷ図
④—1)と「真の党—大衆軍事組織—統一戦線」(Ⅷ図の④—2)の二
つの組織的發展段階の統一としてあり、したがってわれわれが直接に
「党—大衆政治組織—統一戦線」(④—1)の組織段階を飛びこえて
「党—大衆軍事組織—統一戦線」(④—2)を実現しようとした限りに
おいて誤りであり、「党—大衆政治組織—統一戦線」(④—1)へ修正
しなければならぬことを結論した。このことは「擬似の党—軍団—
統一戦線」(②)の「真の党—軍—統一戦線」(④)への転換、それ
自体の誤りではない。「擬似の党—軍団—統一戦線」(②)の「真の
党—軍—統一戦線」(④)への転換はあくまでも正しいのである。
われわれは前段階蜂起の挫折の組織総括を党—軍の二元論を克服
し、軍は軍の先頭に立たなかった党、すなわち党としての闘争を放棄
した党から訣別し、自ら政治的前衛とならねばならぬことを結論し

てきた。

この総括は正しかったか？ 私はあくまでも正しかったと考えている。これは決して公式としての『党一軍統一戦線』の正しさを否定しているのではないからである。Ⅷ図でいうならば、従来の『擬似的の党一軍統一戦線』(②)と『真の党一軍統一戦線』(④)の二元論の否定であり、『真の党一軍統一戦線』(④)の一元的關係を獲得するための総括であつたからである。前段階蜂起を担おうとしたのは軍だけであつた。わが党は軍の先頭に立つことを放棄したことにより、政治の舞台、革命の舞台にある市民権を失い、前段階蜂起の総括の対象ですらなくなつた。本質的に批判的であるマルクス主義は、事実上忠実であることを要求する。わが党は前段階蜂起を玉砕として貫徹することを決定しながら、この玉砕を軍とともに、軍の先頭に立つて引きうけようとしなかつた。前段階蜂起を玉砕として貫徹することが誤っていること、そのこと自体はわが党の破産を意味しない。いかなる党であろうとも誤りはさげられないからである。敗北によって再起の権利を闘い取ることは歴史上常にあることである。それが問題なのではない。問題はわが党が前段階蜂起を玉砕として貫徹する方針を決定した時、わが党はこの玉砕を、自らの玉砕として引き受けなければならなかつた。わが党はそうしなかつた。そのまま前段階蜂起は大菩薩で挫折することにより、この最後の事実が、われわれの総括の方法を決定づけたのである。われわれはこの事実を、そのまま総括の対象としなければならぬのである。わが党が大衆運動、すなわち現実の『大衆軍事組織統一戦線』のその前衛の位置を自ら退いたことは、誕生以来のプントの運動組織原則を放棄したことを意味する。現実の大衆運動の前衛の位置を守り抜き(党としての闘争、敵対矛盾の

この前段階蜂起の自然発生性への拜跪(玉砕)の誤りに反対させることは、第一に、前段階蜂起に至る従来の平和的大衆実力闘争の先頭に立ちつづけることによつて、従来の平和的大衆実力闘争の先頭性の無力を骨身にしみつけていること、第二に、にもかかわらずこの大衆運動の先頭に立ちつづけることが革命への唯一の通路であることに不動の本能的なまでの確信を抱いていること、この二つの条件を備へた実践指導部のみ可能であつたといふことである。そしてこの部分による玉砕に対する深刻な反対は現に存在したこと、このことをわれわれは確認しておかねばならない。このことは重大であるからである。確かに結果的には、わが党を色濃くおおつていた敗北主義的気分と、「左」翼日和見主義はこの反対意見を圧倒しきつたとしても、このことの確認はその後の総括活動を決定づけてくるからである。すなわち、わが党の前段階蜂起の組織総括は、右のわが党の誤りを自己批判し、再び日本革命の最高到達段階である大菩薩峠の中央軍とわが党が結合し、誕生以来のプントの運動組織原則を復活させることからはじめなければならなかつた。そのことによつてわれわれは、従来の擬似的な党一軍統一戦線(Ⅷ図の②)から、真の党一軍統一戦線(Ⅷ図の④)への転換をなしとげることができたのである。

「日本階級闘争の主体は、過去の平和期から持ちこした種々のブルジョア的な遺物を今きれいさっぱり投げ捨て、自らの過渡性を克服し、革命戦争を荷うにふさわしい主体に改造されねばならない。……軍隊から離れ、わかつた風に、マルクス主義の生き生きとした生彩に富んだ真理を死んだ教条にすりかえ、若者達の心を曇らせてしまふ『黨員』や『理論家』達を粉碎し、古い経験豊富な指導者達が自らの革命性を唯一維持すべく、軍隊の中にあつて若い兵士と結合することによつて

解決形態)、その前提の上にその現実の大衆運動の発展が不断に提起しつづける指導の発展・転換をマルクス・レーニン主義の普遍的真理(学説)と具体的に結びつけ、対象化し、意識化し論理化し、古い指導の段階に立ちどまらうとする部分と革命的な部分への不可避の党内闘争を革命的に貫徹し(党のための闘争、人民内部の矛盾の解決形態)ていくこと、これがプントの守り通してきた運動・組織原則(方法)であつた。大衆運動の先頭に立ちつづけること(党としての闘争、敵対矛盾の解決形態)がそれだけで大衆運動を革命的に共産主義的運動とするわけではない。そのためにはマルクス・レーニン主義の普遍的真理をもつて、大衆運動の自然発生性が不断に新しくかつ高次の形で生みだし、かつ内包している目的意識性の萌芽をば新しい現実のなかに意識化してゆくことが必要である。だがこの大衆運動から離れて革命運動が他のところにあるわけではないのである。自然発生性と目的意識性は切り離されて存在し得ない。革命運動への唯一の通路は現実の大衆運動のなかにあるのである。この通路からそれではならぬ。革命は常に手探りで前進するのであり、その方向が外的に与えられているのではない。その方向はあくまで大衆運動が萌芽的に指示しているのである。この萌芽的に指示している方向を何があつても意識化する以外にはないのである。例えばわが党が軍の先頭に立つたとしても、前段階蜂起の自然発生性への拜跪である玉砕の決定はさげられなかつたかも知れない。だが確かなことは、わが党がこの玉砕の誤りをさけることは、ただわが党が、それを自ら引き受けるという条件の下でのみ可能であつたのだといふことである。わが党のあやまりはこの条件を失つたことにある。

現在次のことを確認しておかねばならない。すなわちわが党をして再生される方向にこそ勝利の道があるのである(「塩見孝也」『獄中からの決意表明』『FOL』)

以上で前段階蜂起の総括の整理としたい。最後にaのⅧ図とⅧ図によつて、われわれの一九六九年から現在に至る運動・組織面での闘いの軌跡を整理しておこう。われわれの一九六九年から現在に至る運動・組織面での闘いの軌跡は、①一九六九年四・二八闘争直後のR・G建設を契機とするプントの危機・分裂、②一九六九年秋前段階蜂起の中央軍の指揮・指導を契機とする党の危機、③統一赤軍の指揮・指導の苦闘、の三つの組織的發展段階を経てきている。①のR・G建設を契機とするプントの組織的危機・分裂は、従来の平和的大衆実力闘争の、平和的闘争形態から軍事的闘争形態への発展、言い換えるならば、自然発生的政治闘争段階(Ⅷ図の①-1)から、自然発生的軍事闘争段階(Ⅷ図の①-2)への発展を政治的根拠とする組織危機、すなわち従来の擬似的な党一軍統一戦線(Ⅷ図の②-1)への運動組織転換における危機を示している。②の前段階蜂起中央軍の指揮・指導をめぐる党の危機は、従来の平和的大衆実力闘争(Ⅷ図の①)から武装大衆闘争(Ⅷ図の③)への転換を政治的根拠とする組織危機、すなわち、従来の擬似的な党一軍統一戦線(Ⅷ図の②)から、真の党一軍統一戦線(Ⅷ図の④)への運動・組織転換における危機を示している。③の統一赤軍の指揮・指導の組織的苦闘はわれわれの転換総括線、すなわち武装大衆闘争(Ⅷ図の③)とその組織である『真の党一軍統一戦線』(Ⅷ図の4)の抽象性の実践を通じての点検・修正による具体化・意識化、すなわち共産主義的政治闘争(Ⅷ図の①-1)とその組織である『真の党一軍統一戦線』(Ⅷ図の④-1)の獲得のための苦闘である。

われわれがここで確認しておかなければならないのは、この三つの危機を、われわれが突破したところの方法(運動・組織原則)である。それは現実の大衆運動の先頭に立ちつづけることによって、現実の大衆運動(政治・軍事闘争)の発展が要求する組織指導の発展を闘いとるということである。すなわち、党としての闘争(政治・軍事闘争、敵対矛盾の解決形態)の基礎の上での党のための闘争(組織指導の転換のための党内闘争、人民内部の矛盾の解決形態)の貫徹である。一が分れて二になる。この原則の堅持である。

4 総括

私はこの小論を終るに当たり、この小論全体を、A総括の方法について、B総括スローガンについて、の二点にまとめておきたい。

A 総括の方法について

総括とは何か？ それは未来へ前進するために、過去の総体としての現在を確かめることである。現在が現在であるのは、過去の総体としてそのなからである。私はこの総括の方法をマルクスの「経済学批判・序説」とレーニンの「弁証法の問題に寄せて」を手引として試みた。それを整理しておきたい。

「実在的で具体的なもの、現実的前提をなすものからはじめると、したがって、例えば経済学では、社会的生産行為全体の基礎であり、主体である人口からはじめることが正しいことのように思われる。しかし、もっと詳しく考察すれば、これはまちがいだという

ことがわかる。人口は例えば、それを構成する諸階級を無視すれば、一つの抽象である。……だからもし私が人口から始めるとすれば、それは全体についての一つの混沌とした表象であろう。そして、もっと詳しく規定することによって、私は分析的にだんだんもっと簡単な概念に考えついでゆくであろう。表象された具体的なものから、だんだん稀薄になる抽象的なものに進んでいって、ついには最も簡単な諸規定に到達するであろう。そこでこんどはそこから再びあともどりの旅をはじめ、最後には再び人口に到達するであろう。といってもこんどは一つの全体についての混沌とした表象としての人口にはなく、多くの規定と関係とをふくむ一つの豊かな総体としての人口に到達するであろう。……このあとの方々の方が明らかに科学的に正しい方法である。具体的なものが具体的であるのは、それが多くの規定の総括だからであり、したがって多様なものの統一だからである。それゆえ、具体的なものは、それが現実の出発点であり、したがって又直感や表象の出発点であるにも拘わらず、思考では総括の過程として、結果として現われ、出発点としては現われないのである。第一の道では充実した表象が蒸発させられて、抽象的な規定にされた。第二の道では、抽象的な諸規定が、思考の道を通して、具体的なものの再生産になってゆく」(マルクス「経済学批判・序説」)

この経済学の方法は勿論、階級闘争、つまり政治学の方法でもある。というよりもこの経済学の方法の最高の完成形態が政治学である。「経済学は物を取り扱うのではなく、人と人との諸関係を、究極においては階級と階級との諸関係を取り扱うのである」(エンゲルスの書評カール・マルクス「経済学批判」)われわれが押えておかなければならないのは、革命運動の総括の出発点はあくまで現実の革命運動、政

治的实践が、その実践主体に不断に新しい形で提起し、呼びおこす、政治的直感、表象、階級的直感、表象であるということである。

この政治的階級の直感・表象を、エンゲルスのいう下向的分析と、上向的総合の理論的労働思考により、その内包する多くの内的連関において把握し、加工し、生きた具体的現実を再生産すること、これが政治理論政治科学としての総括である。したがって革命的政治家に問われるのは、まず何よりも現実の革命実践のなかで、自らの政治的階級の直感をきたえることであり、そしてその上で、その生きたリアルな直感表象を、その内包している内的連関をえぐり出し、生きた現実を具体的に加工し、再生産する理論的労働に熟達することである。このように訓練された革命家だけが急激に変化する複雑な政治情勢のなかであって、その情勢全体を、自在に、自己の指導の下にまとめ上げ、革命の芸術をきざることができるのである。

われわれはわれわれの政治的直感を基礎として総括作業を進めてきたのであるが、その場合、われわれには勿論詳しい下向分析はもはや必要であった。われわれの長年にわたり築き上げてきた理論的成果(総括)の上に、若干の新しい理論的労働思考を継続し加えただけである。だが、ここで改めてわれわれの総括(政治学)における下向分析の到達点であり、上向的総合の出発点であるところの、もっとも簡単な規定が一体何であるのかを確認しておこうと考える。

「マルクスは資本論でまず初めにブルジョア商品社会の最も単純な、最も普通、最も根本的、最もふんだんな、最も日常的な、何十億回となく目撃され得る事情——商品交換を分析している。その分析は、この最も単純な現象のうち(ブルジョア社会のこの「細胞」のうち)に、現代社会の一切の矛盾、(もしくは一切の矛盾の胚

芽)を暴露する。そのさきの叙述は、この矛盾の発展(生長並びに運動)、この社会の発展を、その根本成分の総和において始めから終りまで見せてくれる。これが弁証法一般(というのはブルジョア社会の弁証法は、マルクスでは弁証法一般の特殊場合にすぎないのだ)の叙述(もしくは研究)の方法でなければならぬ」(レーニン「弁証法の問題によせて」)

このマルクスの『資本論』における商品にあたるもの、それは政治学においては一体何か？ 「(日本)ブルジョア政治社会のもっとも単純な、もっとも普通、もっとも根本的、もっともふんだんな、もっとも日常的な、何十億回となく、目撃され得る事情——それは被抑圧人民の街頭政治デモと抑圧権力によるデモ規制の現象である。われわれの分析は、このもっとも単純な現象のうち(日本)ブルジョア政治社会のこの「細胞」のうち)に、現代政治社会の一切の矛盾(もしくは一切の矛盾の胚芽)を暴露しなければならぬ。そして「われわれの政治学はそのさきの叙述は、この矛盾の発展(生長ならびに運動)、この政治社会の発展をその根本成分の総和において始めから終りまで展開」しなければならぬ。勿論その完成は、実践とともに、あるいは実践におかれてであるとしても。われわれは不断に総括↓実践↓総括↓実践の繰り返しによって前進しなければならぬのである。以上である。

B 総括スローガン

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想万歳！ アメリカ帝国主義をたたき出せ！ 親米売国の日本軍国主義を打倒せよ！ 反米愛国闘争

勝利！ 独立・民主・平和・中立・繁栄の日本人民民主主義共和国を建設しよう！ ソ連社会帝国主義を打倒せよ！ 世界平和・民族解放・民主主義・社会主義の勝利万歳！ マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装した真の革命党を闘い取ろう！ もっとも広汎な反米愛国統一戦線を建設しよう！

すべて日共（革命左派）と同じスローガンである。われわれは総括の一致を基礎として、すべての革命組織共同で綱領の具体化、戦術の緻密化を闘いとり、わが国にふさわしい革命党建設の組織的準備に着手せねばならない。

われわれはすでに銃を手にし、非合法地下革命組織を手にしている。われわれはこの銃と非合法地下革命組織を、二度と手離さないであろう。だがわれわれは、この銃とこの非合法地下革命組織を根拠地として、合法組織、労働組合、共同組合、議会における宣伝と煽動からはじめるであろう。われわれはこの任務がいかに困難な任務であるかを知っている。

「われわれはロシアで余りにも長い、苦しい、血まみれの経験を通じて、革命的気分だけで革命的戦術を打ちたてることはできないという真理をかたく信じるようになった。戦術は、その国家（およびそれをとりまく諸国家と世界的な規模での全国家）のすべての階級勢力にかんする真剣な、厳密に客観的な評価の上にならなくては打たてられなければならない。ただ議会的日和見主義をのしただけで、議会への参加を拒否することだけで、自分の「革命性」を示すことはしごくやさしい。だがこれが全くやさしいことだからこそ、これは困難な上にも困難な任務の解決とはならないのである。ヨーロッパ

（日本と読め！ ——引用者）の議会の中に実際に革命的な国会議員団をつくりだすことは、ロシアの場合よりもはるかにむずかしい。もちろんそうだがこれは、つぎのような一般的真理——つまり一九一七年の、具体的な、歴史的に非常に独得な情勢のもとで、ロシアにとって社会主義革命をはじめめることは容易であったが、革命をつづけ、これをやりとげること、ロシアにとってはヨーロッパ諸国にとってよりも困難であるという真理（同じことは中国とわれわれの場合にもあてはまるだろう——引用者）の特別な言い表わしにすぎない（レーニン『共産主義における「左」翼小児病』）

われわれは、革命が要求するこの困難な任務を引き受けるであろう。そこに勝利への唯一の道があるからである。そしてこの勝利への一本道は、わが統一赤軍の兄弟たちによる偉大な闘いの到達した、まさにその地点からはつきりと、現われているのである。われわれは兄弟たちが指し示しているこの道を前進するであろう。

一九七二年三月三日 桃の節句に

声 明 文

「連合赤軍」の総括と自己批判・闘争宣言

共産主義者同盟赤軍派
日本労働党建設準備委員会

同志、友人、人民各位。

日本人民の偉大な民族解放闘争の中で起った「連合赤軍」の重大な敗北について、我々は徹底した総括と自己批判を行い、更に新たな闘争宣言を発するものである。

I、連合赤軍の総括

我々は連合赤軍の総括を次の方法で行う。まず第一に、我々の総路線に照らして、「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りを点検していく。第二に、我々の路線そのものを、森・永田指導部の犯した誤りに照らして点検していくことによって総括を完全なものとする。以上である。

(A) 我々の路線に照らしての、「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りの点検、総括。

我々の路線は何だったか？ 我々は日本人民の革命闘争は大衆的に、本格的武装闘争段階への突入を要求していると階級情勢を分析した。従って客観的に存在する可能性としての大衆武装闘争段階を現実性に転化していくための方法、触媒としての意識的前衛による武装行動の開始、これが我々が情勢分析から導き出した、我々の行動方針、路線であった。

このわれわれの路線に赤軍派は一九六九年秋の佐藤訪米阻止、日米安保体制打倒！ 前段階全人民蜂起の総括の中から、日共（革命左派）は同じく一九六九年秋の日米安保体制打倒！ 政治ゲリラ闘争、基地爆破宣伝武闘の総括の中から結果しなければならなかった。

(1) 赤軍派は、六九年秋、佐藤訪米阻止、日米安保体制打倒、前だが、日本人民の革命闘争の発展は、あくまでも客観的『歴史的必然性』であって、森指導部の主観によって左右されるものではない。主観に客観を合わせることは出来ない。主観は客観に合わせなければならぬのである。森指導部は主観を客観に合わせる唯物論者の勇氣と決断を選択できず、主観に客観を合わせる史的観念論者の怯懦を選択した。

森指導部の主観的願望にもかかわらず、日本人民の革命闘争は、従来の自然発生的な平和的大衆実力闘争、自然発生的な武装闘争の発展段階から意識的『組織的な段階（真の大衆武装闘争段階）』への発展、転換、飛躍を客観的に、物質的に強制しつづけた。

森指導部はこの客観的・歴史的な日本革命の発展、転換、飛躍の圧力の前に、武装闘争を開始せざるを得なくなったが、しかし、それは、日本人民の革命闘争（現実的反米愛国大衆闘争）総体の新しい発展段階、言い換えると、米日反動と日本人民の間の矛盾、攻防の新しい発展、成熟段階としての武装闘争、つまり、人民戦争、大衆武装闘争の客観的可能性の存在を現実化するを意図的に目的とした、意識的武装闘争ではなく、あくまでも、自然発生的な、平和的大衆実力闘争（自然発生的な武装蜂起路線）の枠内での、或いは、自然発生的延長上での自然発生的武装闘争であった。M作戦、六・一七機動隊滅滅爆弾闘争、一連の爆破闘争、浅間山莊銃撃戦に共通するのは、自然発生的武装闘争という性格である。（但し、これはあくまでも指導路線のことである。M作戦や六・一七闘争を直接に荷った下部同志達の闘いの評価は指導路線の評価とはまた別にす

段階全人民蜂起の挫折をば、次の様に総括しなければならなかった。すなわち、従来の日本人民の大衆実力闘争の最高発展段階である前段階全人民蜂起は、自然発生的武装蜂起であったが故に挫折した。また挫折せざるをえなかった。

これは第一に、従来の日本人民の革命闘争すなわち、米日反動権力と日本人民の間の矛盾、攻防の発展段階（現実的反米愛国の発展段階）が自然発生的闘争段階にあったことを示している。そして、第二に、今や日本人民の革命闘争は第二の段階、すなわち、意識的『組織的な革命闘争の発展段階への突入を要求している』ということである。我々は、これを、日本革命は従来の擬似的革命運動である平和的大衆実力闘争段階から、真の大衆武装闘争段階への突入を要求していると結論した。（注、この結論は半分正しく、半分誤っていたが、それについては、我々の路線の総括のところで明らかにしていく。）

そして、この総括と情勢分析から、我々はこの日本革命の客観的可能性として存在している真の大衆武装闘争段階を現実性に転化するために、日本人民の戦う先頭部隊である、意識的前衛が米日反動権力に対する真の武装行動をまず開始せねばならないことを結論した。大衆を動員するための武装行動である。

(1) ところが赤軍派森指導部は、前段階武装蜂起の総括を避け、日本革命の発展段階が、従来の自然発生的な平和的大衆実力闘争段階から、意識的・組織的な大衆武装闘争段階への発展、転換、飛躍、突入を要求していることを否定し、従来通りの自然発生的な平和的大衆実力闘争、自然発生的武装蜂起路線にしがみついた。

べきである。また浅間山莊銃撃戦は、その闘いの過程において、意識的建軍武装闘争への飛躍を闘い取っていると我々は考える。そこには、客観的に存在している日本人民の革命闘争の新しい発展段階としての、真の大衆武装闘争の可能性を現実性に転化していくため、という、つまり、大衆を動員するという戦術上の目的意識性が全く欠如している。闘争のための闘争である。資金などは、大衆を動員するための意識的武装行動によっていくらかでも集まるのであるが、森指導部は、この政治力学を全く理解できていない。そのため、全行動が、不徹底・不決断に満ちている。

これは、前段階蜂起の総括を避けたことの当然の結果である。前段階蜂起の総括によってはじめて日本人民の革命闘争は、真の大衆武装闘争段階への突入を要求しているという階級情勢分析が導き出されるのである。そして、正しい戦術、確信ある戦術は正しい階級情勢分析からのみ導き出されるのである。森指導部は、現在、日本人民の革命闘争が真の大衆武装闘争段階への発展・飛躍を要求しているという情勢分析がないのである。階級情勢分析から導き出されたものではない戦術、自然発生的戦術に、不徹底、不決断は避けられない。前衛の断固たる行動は、ただ自己が大衆の先頭にある、自己の背後には大衆がいるという確信に支えられてはじめて可能である。大衆路線こそ前衛の力の源泉である。そして、大衆路線としての戦術は、ただ、過去の大衆運動の歴史的総括を通じての階級情勢分析からのみ導き出されるのである。

森指導部はこのように、折衷的に自然発生的な武装蜂起路線（自

然発生のな平和的大衆実力闘争路線)の下に、自然発生のな武装闘争を位置付けた。だが、客観的情勢は折衷主義を許すものではない。獄内・外の意識的、或いは、無意識的な建軍武闘派の批判を直接の契機として、また客観情勢に促されて、自然発生の蜂起路線から、意識的組織的な革命闘争(大衆武装闘争)への指導路線の転換は強制的となった。森指導部はこの指導路線の転換の要求に対して、指導の転換で答えるのではなく、自然発生の蜂起路線にその変形された形である唯銃主義の形でしがみつきの、その指導路線の下にあくまでも武装闘争を位置付けつづけた。恐らくはこの段階で森指導部の自由な思考は完全に停止し、観念論の泥沼に引きづり込まれたのである。(注一)「党組織と名実ともに備わった党指導者を持つ意義はとりわけ次の点にある。——つまりある階級の全ての思考力ある代表者たち、長い執権な、さまざまの各方面にわたった活動にもとづいて複雑な政治問題を早く、正しく解決する上になくはならない知識、なくてはならない経験、なくてはならない——知識や経験の他に——政治的直感をつくり上げることである。(どの階級にも——もとも文化の進んだ国の中にさえ、もとも進んだ階級にさえ、その時の事情で全ゆる精神力がとくに高く引き上げられた場合にさえ、ものごとを考えようとし、ない、または考えられない階級代表者達はいつも存在するし、——そして階級がある限り、無階級社会が自分自身の土台の上には完全にかためられ、しっかりとしたものとなり、発展しないかぎり、彼らは不可避免的に存在するだろう。もし、そうでないなら、資本主義は大衆を圧迫する資本主義ではなくなるだろう。)(「レーニン「共産主義における左翼小児病」)「国際ブルジョアジーを打ち倒すための戦争、すなわち、国家間の普通

の戦争のうちでも、もとも頑強な戦争よりも百倍も困難で長びく戦争」(同)に勝利するためには本質的に革命的な思考の持続が必要とされる。思考の停止は致命的である。)

革命左派は「革命の問題は国家権力の問題である」「鉄砲から国家権力が生れる」という観点によって日本革命の綱領(最低綱領、最高綱領)と民族民主革命の社会主義革命への強行転化という正しい革命戦略を持っていた。しかし、革命左派は、その正しい革命戦略を日本革命の具体的実践と結びつけ、日本人民の革命闘争(現実の反米愛国大衆闘争)の戦術指導に具体化できていなかった。革命戦略は大衆運動の戦術指導を通してのみ物質化されるのである。革命左派はこれにまだ成功して、そのため少数の思想集団、政治グループに止まっていた。また同じ理由のために、その革命戦略は教条主義的であった。

しかし、革命左派は単なる思想集団、政治グループではなく、あくまでも、自己の綱領と戦略を物質化するため、日本人民の革命闘争(現実の反米愛国大衆闘争)と結びつこうとした。日本人民の革命闘争が自然発生の大衆実力闘争の極限的發展段階に、すなわち、自然発生のな、前段階、全人民武装蜂起にのぼりつめた時に、革命

この指導路線を維持するには、一切の指導部への批判を封じる官僚体制以外にない。これが必然的に破綻し、獄内・外の意識的・無意識的な建軍武闘派に対する反党的反革命的粛清は開始された。これが今回の赤軍派の陰謀的清算による新党デッチ上げであり、革命的同志達に対する「総括」、「死刑」、「整風」、「共産主義化」、「党化」である。組織問題は目に見える形での政治問題である。森指導部による赤軍派の陰謀的清算と新党デッチ上げこそ、森指導部が我々の路線に対して、論理的のみならず、実践的にも敵対し、反党的反革命的誤りに転落したことを証明する。ただし、この結論は、あくまでも、我々の路線を前提して、その路線に照らしての結論であり、従って我々の路線そのものの点検、総括がないかぎり、未だ抽象的結論であることを押えておかねばならない。この結論は、我々の路線そのものの総括との統一においてのみ具体的なものになることが出来るからである。

以上が、我々の路線に照らしての森指導部の犯した誤りの点検、総括である。

(2) 日共(革命左派)は、日本人民の革命闘争(現実の反米愛国大衆闘争)の戦術指導の恒常的獲得から出発し、その戦術指導の萌芽的に指示している革命戦略を「革命の問題は国家権力の問題である」という観点によって意識化し、具体化していくことが問われた。

つづけた赤軍派とは逆に、プロレタリア革命に関するマルクス・レーニン主義の普遍的真理、すなわち、「革命の根本問題は国家権力の問題である」「鉄砲から国家権力が生れる」という命題から出発し、それを日本革命の具体的実践と結びつけること、すなわち「革命の問題は国家権力の問題である」という命題が、革命の問題とは大衆運動の問題であり、大衆運動(萌芽的権力)が国家権力に發展することである」とこの意識化であることをつかみとることが問われつづけた。

この闘いには矛盾する二つの側面があった。一つは日本革命の綱領と戦略の宣伝の側面(意識的側面)であり、もう一つは、日本人民の革命闘争(現実の反米愛国大衆闘争)の現実的發展段階である自然発生的大衆実力闘争の狭い枠の自然発生的突破(はみだし)であるいは、延長としての自然発生的武装闘争、しかも、大衆武闘でなく、主観的な党派武闘という側面(自然発生的側面)である。

革命左派の政治ゲリラ闘争、基地爆破宣伝武闘に、意識的側面と自然発生的側面の矛盾する二側面があることは、日本人民の軍事闘争が自然発生的段階にある時に、それと、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を結びつけようとする以上、さげられない矛盾である。この段階では両者は外的に、つまり実践的にはなく、宣伝的にのみ結合しうる。日本人民の革命闘争(現実の反米愛国大衆闘争)自身が意識的組織的段階にまで發展してはじめて、この矛盾は克服解決され、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践は、内的に実践的に結びつこうと出来るのである。

日本革命(現実の反米愛国大衆闘争)が従来の自然発生的な平和的大衆実力闘争の歴史的最高發展段階(自然発生的前段階全人民的武装蜂起)の挫折を媒介にして、意識的組織的段階(大衆武装闘争段階)への突入を要求した時、革命左派に問われた事は、意識的

側面と、自然発生の側面の二つの側面をもつ日米安保体制打倒の政治ゲリラ闘争、基地爆破宣伝武闘の総括をば、第一にその意識的側面を断固として堅持し、第二にその自然発生の側面を正しく総括し、その自然発生性を克服することであった。

つまり、革命左派は、第一には自らの正しいが教条的な日本革命の綱領と戦略を断固として堅持した上で、第二には、政治ゲリラ闘争、基地爆破闘争が、実践的には従来の自然発生的大衆実力闘争の狭い枠からの自然発生的突破（はみだしの党派だけの主観的闘争）あるいは延長であり、客観的には日本人民の革命闘争（現実の反米愛国闘争）の一部分、しかも外野の位置にある一部分であることを正しく総括し、自らの闘いがその中の一部である日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）総体の最高発展段階（自然発生的大衆武装闘争段階）の総括を正しく行い、自らの位置を日本人民、革命闘争の現実の前衛、客観的前衛の位置におきかえなければならなかった。つまり、革命左派の具体的実践である政治ゲリラ闘争、基地爆破闘争がその中の一部である、日本人民の具体的実践総体の歴史的發展段階総体、すなわち、自然発生的大衆実力闘争の最高発展段階としての自然発生的大衆武装闘争（前段階武装蜂起）の総括を正しく行い、その中から日本革命はいまや歴史的に自然発生的段階から、意識的組織的段階（真の大衆武装闘争段階）への発展、飛躍が要求されているという総括（階級情勢分析）を闘い取らなければならなかった。すなわち、革命左派は我々赤軍派と共に、前段階蜂起の総括を共有しなければならなかったのである。前段階蜂起は

かった。すなわち、第一に、政治ゲリラ闘争、基地爆破宣伝武闘の意識的側面である日本革命の綱領と戦略を断固堅持した上で、第二に、その自然発生的側面、すなわち政治ゲリラ闘争、基地爆破闘争が実践的には従来の日本人民の革命闘争の自然発生的大衆実力闘争段階の延長上の自然発生的武装闘争であること、言い換えると前段階蜂起の一部分であることを正しく総括し、日本人民の革命闘争は従来の自然発生的大衆実力闘争の最高発展段階（前段階蜂起）にまでのばりつめたことによって、新しい発展段階、意識的組織的段階（真の大衆武装闘争段階）への発展、飛躍を要求しているという情勢分析を正しくみちびき出し、この客観的に存在する意識的組織的な革命闘争（真の反米愛国大衆武装闘争）の可能性を現実性ある戦術上の政治目的（大衆動員）を持つ意識的武装闘争の開始という結論を出すという課題に答えることが出来なかった。永田指導部は政治ゲリラ闘争の第二の側面、すなわち自然発生的側面を正しく総括し、克服することが出来ないために、第一の側面、すなわち日本革命の綱領と革命戦略をも堅持することが出来なくなったのである。永田指導部は政治ゲリラ闘争が従来の日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）の歴史的發展段階としての自然発生的大衆実力闘争とその最高発展段階である自然発生的大衆武装闘争（前段階武装蜂起）の一部でしかないことを正しく総括し、日本革命は今や従来の自然発生的な革命闘争の段階から意識的組織的な革命闘争（真の大衆武装闘争）の段階への発展・飛躍が問われている。

赤軍派の主観的戦術ではなく、日本人民の現実の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）の自然発生的大衆実力闘争段階の歴史的客観的に必然的な、最高発展段階であるからである。そしてこの総括からみちびき出された情勢分析、すなわち、日本革命はいまや自然発生的な革命闘争（自然発生的大衆実力闘争、自然発生的大衆武装闘争）の発展段階から、意識的組織的な革命闘争（真の大衆武装闘争）の発展段階の客観的可能性の段階にあるという情勢分析から、この真の大衆武装闘争の客観的可能性を現実性に転化していくための方法、戦術としての意識的前衛による真の武装行動の開始を結論しなければならなかった。こうして、革命左派は日本革命が自然発生的段階（自然発生的大衆実力闘争とその最高発展としての自然発生的武装闘争（蜂起）段階）にあった時には、自己の正しいが教条主義的な綱領と革命戦略を、日本革命の具体的実践に外的に宣伝によって結びつける以外になかった矛盾を、日本革命が意識的組織的段階（真の大衆武装闘争段階）への発展、飛躍を要求した段階ではじめて解決し、今や自己の綱領と革命戦略を日本革命の具体的実践に、実践的戦術的に結びつけることが出来たし、又そうしなければならなかった。

(2) ところが革命左派永田指導部は日本人民の革命闘争が前段階蜂起の挫折を媒介にして自然発生的段階（自然発生的大衆実力闘争とその最高発展段階である自然発生的武装蜂起段階）から、意識的組織的段階（真の大衆武装闘争段階）へ発展、飛躍を要求した時に、政治ゲリラ闘争、基地爆破闘争を正しく総括することが出来なるといって正しい日本革命の情勢分析をみちびき出し、そこから、その客観情勢（反米愛国大衆武装闘争段階の客観的可能性の存在）を現実性に転化するのための方法、手段、触媒、戦術、つまり大衆動員を戦術上の目的とする戦術手段としての意識的前衛（大衆の先頭部隊）の意識的な、確固たる武装行動という戦術をみちびき出さなければならなかった。しかし、永田指導部は政治ゲリラ闘争が従来の日本人民の革命闘争の発展段階としての自然発生的な平和的大衆実力闘争とその最高発展段階である自然発生的武装闘争（前段階武装蜂起）の一部でしかないことを正しく総括せず、それをそのまま闘争の延長上の自然発生的武闘でしかなく、しかも自然発生的な大衆実力闘争、自然発生的な大衆武装闘争の一部としての「革命派」の主観的武装闘争である。（注、永田指導部は革命派とは現実の大衆運動の先頭部隊であることを全く理解していない。これは永田指導部のみならず、日共系諸派、すなわち、いわゆる機械的外部注入主義派全てに共通する誤りである。）

永田指導部には日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）の科学的組織的総括と階級情勢分析がないのである。永田指導部の戦術は日本人民の革命闘争の科学的組織的総括と情勢分析からみちびき出されたものではなく、自然発生的に生み出されたものである。だが、自然発生的な革命性で真の武装闘争は闘うことは出来ない。このことは、赤軍派の前段階蜂起の挫折で明白である。そして、まさに、自然発生的に真の武装闘争は闘えないということの反

省から、ただ真に闘おうとする本能だけを武器として我々の前段階蜂起の総括は始まったのである。

永田指導部はこの困難を毛沢東の戦略、戦術論の教条、すなわち「本質的に見、長期的に見、戦略的に見るから帝国主義と全ての反動派をありのままに、ハリコの虎とみななければならぬ。この点から我々の戦略思想がうちたてられる。他方では彼等は、又生きた本物の虎であつて人を喰う。この点から我々の政治戦術と軍事戦術思想がうちたてられる」という毛沢東のテーゼをあてはめて敵大味方の軍事戦術（ゲリラ）を位置付けてのりきろうとした。だが、全ゆるの教条は人民の現実の革命闘争の歴史的科学的総括による具体的情勢分析を無視するなら史的観念論の形而上学となる。永田指導部は敵大味方の軍事戦術（ゲリラ）を提起する前に、まず、日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）の発展段階が真の大衆武装闘争段階への突入を要求しているという具体的情勢分析をこそ日本人民の革命闘争の歴史的総括から提起しなければならぬのである。その情勢分析からはじめて、真の大衆武装闘争の客観的発展段階の可能性の現実性への転化を、戦術上の政治目的とする意識的前衛（大衆の先頭部隊）による方法、手段としての軍事戦術（ゲリラ）が現実的に提起され得るのである。永田指導部は、このように日本人民の革命闘争の発展段階の具体的情勢分析から確固たる戦術上の政治目的（大衆動員という目的）を持った軍事戦術を提起することが出来ないために、その軍事戦術は、戦術上の政治目的のないただ大きな軍事力を小さな軍事力で倒すのだという形而上学観念

的戦術とならざるを得ない。これは史的観念論であり、決意主義、お題目主義を生みだすが真の唯物論者の勇氣と決断は絶対に生み出さない。現実の闘いは現実の論理によってのみ実現することができるのである。

観念の論理では観念の中で闘うことは出来るが現実の場では絶対に動くことは出来ない。
永田指導部は以上のように政治ゲリラ闘争の自然発生的側面を正しく総括し克服することが出来ないために、その意識的側面である日本革命の綱領と革命戦略も堅持できなかった。言い換えると、永田指導部は革命左派に問われつづけてきた日本革命の綱領と革命戦略を日本革命の具体的実践に正しく結びつけるという課題に答えることが出来なかつたにも拘らず、日本革命の客観情勢は永田指導部に対して、政治ゲリラ闘争の意識的側面を断固堅持し、自然発生的側面を正しく総括し、克服して、従来の日本革命の発展段階（自然発生的大衆実力闘争とその最高発展段階である自然発生的大衆武装闘争段階）から、意識的組織的段階（大衆武装闘争段階）への発展、飛躍を戦いとすることを強制した。この困難の前に、永田指導部は政治ゲリラ闘争の意識的側面を投げ捨て、政治ゲリラ闘争の自然発生的側面を克服できないが故に、自然発生的武装闘争の集中的表現である唯銃主義にしがみつき、政治ゲリラ闘争の意識的側面（綱領と革命戦略）の堅持と政治ゲリラ闘争の自然発生的側面の克服による真の大衆武装闘争への指導の転換を、意識的、無意識的に要求している部分を官僚体制でのりきろうとして破綻した。恐らくこの段階

で永田指導部の思考は停止し観念論の泥沼に引づり込まれたのである。（注（一）参照）これが今回の信じがたい陰謀による革命左派の清算による新党デッチあげと、革命的同志達の次々の「総括」「死刑」「共産主義化」「党化」という反党的、反革命的誤りへの転落である。ただし、これはあくまでも我々の路線を前提として、我々の路線から見た結論であり、従つて未だ我々の路線そのものの点検、総括がないかぎり未だ抽象的結論であることを押えておかねばならない。この結論は我々の路線そのものの総括との統一によつて具体化されなければならないのである。以上が我々の路線に照らしての永田指導部の犯した誤りの点検、総括である。

(B) 「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りに照らしての我々の路線の点検・総括
我々はすでに我々の路線に照らしての森・永田指導部の犯した誤りの政治的真相を具体的に分析し、総括してきた。その結果、森・永田指導部の誤りの政治的真相が我々の路線に対する反党的、反革命的誤りであることを見てきた。ただし、これはあくまでも我々の路線が正しいと前提しての結論であり、我々の路線そのものの点検、総括によつて修正されなければならない。次に我々は、この森・永田指導部の犯した誤りに照らして我々の路線そのものを点検し総括していかねばならない。そうしてはじめて我々は連合赤軍の総括を完全なものにすることが出来る。しかし、我々は結論だけを述べることにする。

(1) 我々の路線の総括の骨子
結論は、我々の路線も完全ではなかつた。一面では正しく、一面では誤つていたということである。

我々は六九年秋の佐藤訪米阻止、日米安保体制打倒、前段階武装蜂起の挫折の総括をば、前段階武装蜂起の挫折は、それが、擬似的革命運動である平和的大衆実力闘争の最高発展段階としての擬似的武装闘争（蜂起）であつたが故に不可避であつたと分析することによつて、日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）は真の大衆武装闘争段階への発展、転換、飛躍を要求しているという総括と情勢分析をみちびき出した。この総括と情勢分析から、この真の大衆武装闘争の可能性を現実性に転換することを戦術上の政治目的とする戦術として、意識的前衛による真の武装行動の開始という結論をみちびき出した。

だが、この前段階蜂起の総括とそこからみちびき出した情勢分析と戦術は、理論的には未だ抽象的であり、実践的には冒険主義の誤りを犯していたのである。すなわち、我々が日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）の歴史的発展段階である、従来の平和的大衆実力闘争の最高発展段階の前段階大衆蜂起の挫折をば、それが擬似的革命運動の平和的大衆実力闘争の最高発展段階であつたが故に不可避であつたと総括し、そして日本人民の擬似的革命運動である大衆実力闘争がその歴史的発展段階にまでのびつめたことは、今や日本人民の革命闘争（現実の反米愛国大衆闘争）が擬似的革命運動としての平和的大衆実力闘争とその最高発展段階から、

真の革命運動である真の大衆武装闘争段階への発展、転換、飛躍を要求していると総括し、情勢分析したことは、一面では正しかったが、一面では誤っていたのである。

つまり、我々は日本人の日米安保体制打倒の擬似的大衆前段階蜂起は、長期にわたる平和的な擬似的大衆実力闘争の歴史的に不可避の必然的な発展、成長として発生したのであり、従って真の大衆武装闘争は、長期にわたる平和的な真の大衆実力闘争の歴史的に不可避の必然的な発展としてのみ現出しようというように考えなければならぬのである。

ではこの擬似的革命運動と真の革命運動の区別は一体何か？それは「革命の問題とは国家権力の問題であり、政治闘争の問題である。」この意識性の即自的段階と対自的段階の区別である。日本人の現実の革命運動（現実の反米愛国大衆闘争）は、国家権力の問題に対して即自的（自然発生的）段階から対自的（意識的）段階へ発展してきたのである。これを我々は「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である」（クラウゼビッツ）という観点によって意識化することに成功した。

これは第一には、我々に日米安保体制打倒、前段階大衆武装蜂起の総括をば、擬似的な大衆実力闘争と擬似的大衆武装闘争からの真の革命運動の、真の大衆武装闘争への日本人の革命闘争の発展、転換、飛躍という形ではなく、自然発生的政治（軍事）闘争の段階から、意識的「組織的な政治（軍事）闘争の段階への発展、転換、飛躍として総括しなおすことを要求しているのである。そして、第

誤りの修正要求である。

(1) 我々の路線そのものの総括に照らしての森・永田指導部の犯した誤りの政治的性格の正確な具体化。

我々は右に(B)の(1)で我々の路線そのものを総括してきた。従って、今ここに(A)での我々の路線に照らしての森・永田指導部の犯した誤りの総括の抽象性を、この我々の路線そのものの総括との統一によって具体化しなければならない。(A)で我々は、森・永田指導部の犯した誤りが我々の路線に対する反党的・反革命的誤りであることを見てきた。しかし、(B)の(1)で、我々はその我々の路線自身を日本革命の自然発生的段階から意識的「組織的な段階への発展を闡い」ところとする点で、革命的で正しかったが、その日本革命の意識的「組織的な発展段階が平和的な段階と暴力的な段階の統一であり、現在は平和的な段階であるのに、暴力的な段階を実現しようとした点で冒険主義「左翼日和見主義の誤りを犯していたことを見てきた。従って、森・永田指導部の犯した誤りもまた決して反党、反革命ではなく、我々の路線が日本革命の自然発生的段階から意識的「組織的な段階への発展を闡い」ところとしている点に対する反対である点では右翼日和見主義「勿論この場合、形は「左」の右翼日和見主義、「左翼」日和見主義「極左」日和見主義であることは言うまでもない）の誤りであるが、我々の路線が冒険主義（左翼日和見主義）の誤りを犯していることに対して反対している点では正当である、としなければならぬ。

そして、我々は森・永田指導部の犯した誤りの手段は絶対に許せないが、我々自身の路線が左翼日和見主義（冒険主義）の誤りを

二には、我々の現段階の情勢分析と戦術をば、その発展が不可避に意識的「組織的な大衆武装闘争（蜂起）」となる平和的な意識的「組織的な大衆政治闘争段階である」という情勢分析と、その戦術へ修正することを要求しているのである。

従って、我々の擬似的革命運動である平和の大衆実力闘争とその最高発展段階からの、真の革命運動である真の大衆武装闘争段階への転換という前段階蜂起の総括（と情勢分析、戦術）は、一面においては、すなわち、それが日本人の革命闘争の発展段階（情勢）が自然発生的政治（軍事）闘争段階から、意識的「組織的な政治（軍事）闘争段階への発展、転換を闡い」ところとしている点で、まもなく、正しいが、他面において、すなわち、日本人の革命闘争の意識的「組織的な政治（軍事）闘争段階は、平和的形態での意識的「組織的な大衆政治闘争段階と、暴力的な形態での意識的「組織的な大衆政治闘争（すなわち、真の大衆武装闘争）」段階の二つの発展段階の統一であるが、我々はこの平和的段階を飛び越えて直接武闘段階を実現しようとした点で、理論的には抽象的であり実践的には冒険主義の誤りを犯したのである。これが我々の路線の骨子である。

「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りは、我々の路線が日本人の革命闘争が自然発生的段階から意識的「組織的な段階への発展、飛躍を戦いとることに対する反動的誤りであり、反党的、反革命的誤りであると同時に、その手段は絶対に許し得ないが、我々の路線が冒険主義の誤りを犯していることに対する正当な反対であり、

犯している以上、現実的「実践的には、指導部に対し左翼日和見主義か、さもなければ右翼日和見主義という理不尽な二者択一の選択を強制的に押しつけることになり、これこそが今回の森・永田指導部に絶対に許せない誤りを犯させた真の原因であることを確認しなければならない。従って、我々は今回の「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りの政治的性格を我々の路線、左翼日和見主義の誤りの押しつけによって引き起こされた、形は「左」「極左」の右翼日和見主義の誤りと規定する。我々は、我々の路線の誤りの革命的修正によって、我々の路線の誤り（左翼日和見主義）と森・永田指導部の誤り（右翼日和見主義）を克服しなければならない。

(2) 我々の路線の総括の骨子の簡単な具体化

我々は右に見てきた総括の具体化も、ここでは直接に結論だけを述べることにする。

さて、我々は前段階蜂起の総括である日本人の革命闘争の擬似的段階である平和の大衆実力闘争とその最高発展段階からの真の革命闘争である真の大衆武装闘争段階への発展、飛躍という図式をば、「革命の問題とは国家権力の問題であり、政治闘争の問題である」という観点によって、自然発生的（即時的）政治（軍事）闘争段階からの意識的「組織的（対自的）政治（軍事）闘争段階への発展、転換、飛躍の図式として再総括しなければならない。そして、我々は、この再総括の中から、日本革命の意識的（対自的）な綱領、戦術、戦術、組織の全問題を解決しなければならない。それは、日本人の革命闘争の自然発生的段階（自然発生的大衆実力闘争とその

最高発展段階としての自然発生的武装蜂起（前蜂）において、自然発生的プロレタリア革命派（ブンド↓赤軍派）が自然発生的な形で代表した綱領、戦略、戦術、組織のすべてを「革命の問題は国家権力の問題である」という観点によって意識化することである。簡単に結論だけを述べることにする。

我々は、六九年秋、佐藤訪米阻止、日米安保体制打倒を自然発生的な政治目的として、従来の平和的な形で自然発生的な党——統一戦線の、自然発生的な軍事組織へ発展した。自然発生的組織によって、従来の平和的な自然発生的大衆実力闘争の最高発展段階である、自然発生的な全人民武装蜂起（前段階蜂起）の延長上にほんやりと社会主義革命を想定していた、この中に日本革命の綱領と戦略戦術、組織の全問題が自然発生的に示されている。それをえぐり出し、意識化すると、次の様に簡単にまとめることが出来る。

第一は、日本プロレタリア革命の戦略問題である。日本プロレタリア革命は二つの大きな政治戦略段階をもつこと、すなわち、当面の政治戦略段階は、侵略者米帝とその下僕日本軍国主義を打倒する民族・民主革命であり、そしてこの戦略の達成をもって、第二の政治戦略段階、社会主義革命が日程にのぼるということである。綱領とは、各政治戦略段階における政治、経済上の戦略目標のことである。従って、ここに、日本革命の最低綱領（民族民主革命における政治、経済綱領）と最高綱領（社会主義革命における政治、経済綱領）は具体化できる。そして、この日本プロレタリア革命の政治戦略問題の解決は、直接に日本プロレタリア革命の組織戦略を規定し

を遂行するために闘うことである。……戦略的な指導の任務は、革命の一定の発展段階における革命の基本的目標を達成するために、これら全ての予備軍を正しく利用することにある。」

「戦術は運動の満潮、または干潮、革命の高揚または衰退といった比較的短い期間のプロレタリアートの行動方針を決定することであり、古い闘争形態と組織形態を新しい闘争形態と組織形態にかえたり、古いスローガンを新しいスローガンにかえたり、これらの形態を組み合わせたなどしてこの方針を遂行するために闘うことである。……（戦術の目的は）戦争全体で勝利を占めることではなく個々の会議又は個々の戦闘で勝利を占め、革命の一定の高揚期又は衰退期の具体的な情勢に応じた個々のカンパニアや個々の行動を効果的に実行することに努力するものだからである。戦術は戦略の一部分であって戦略に従属し、戦略に奉仕するものである。戦術は運動の干満にわたって変化する。」

戦術の指導は、戦略の指導の一部分であって戦略的指導の任務と要求とに従属している。戦術的指導の任務はプロレタリアートの全ての闘争形態と組織形態とに精通し、それらの闘争形態と組織形態の正しい利用を保証し、こうしてその時の力関係の下で戦略的成功を準備するために必要な最大限の成果をおさめる点にある。」

ここに、我々は我々自身の経験とその総括を通して、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を日本革命の具体的実践に結びつけ、日本革命は今迄、大きな闘争のたびにその総括をめぐって革命勢

解決する。すなわち、日本プロレタリア革命の組織戦略、言い換えると日本革命における労働者階級の組織戦略は二つの政治戦略段階において、それぞれの主要打撃対象に対して全人民（主要打撃対象に敵対する全階級）を統一戦線に組織することであり、そしてその統一戦線において労働者階級を独立、自主の政党（日本労働党）に組織し、労働者階級による統一戦線の指導権（ヘゲモニー、本質的にはプロレタリア独裁）を確立することである。労働者階級は二つの政治戦略段階を休むことなく、そしてひたすら終局目標（第二段階の社会主義革命）の勝利をめざして前進しなければならぬからである。統一戦線と党のヘゲモニー、これが組織戦略問題である。

第二は、日本プロレタリア革命の戦術問題である。日本プロレタリア革命はその各政治戦略段階において、二つの戦術的發展段階をもっている。すなわち、平和的な形で大衆闘争の発展段階と暴力的な形で大衆闘争の発展段階である。そして、この日本プロレタリア革命の各政治戦略段階における二つの戦術段階は、直接に日本プロレタリア革命の組織戦術を規定し、解決する、すなわち、各戦術段階において統一戦線と党のヘゲモニーは平和的な組織形態と暴力的な組織形態をもつのである。以上である。

スターリンは「レーニン主義の基礎」の中で戦略、戦術について次の様に指摘している。「戦略は革命の一定の段階に基づいてプロレタリアートの主要打撃の方向を決定することであり、それに応じて革命的諸勢力（主要な予備軍と副次的な予備軍）の配置計画を作り上げることであり、革命の一定の段階の全期間を通じてこの計画

力の四分五裂を経験してきた。それは、それらの闘争を闘うに際して、一定の獲得目標（戦術目標）を、日本革命の戦略目的から正しく設定することが出来なかつたから、すなわち、それらの闘いが自然発生的に闘われたからである。だが、最早我々はそれらを過去の思い出とすることが出来るのである。我々は今からは、我々の闘いの一步一步を確かな勝利への一步として確固たるものとして踏み出すことが出来るのである。我々はマルクス主義を今はじめて手にしつかりと握つたのである。「マルクス主義の革命理論はプロレタリア革命闘争の実践が第二の時期、すなわち「意識的、組織的な経済闘争、及び政治闘争の時期」に発展した時、はじめて形成されるものである。」（毛沢東「実践論」という毛沢東の指摘は直接に我々自身の苦闘を総括するものである。

最後に、我々の当面の戦術段階における党綱領を簡単にまとめて我々の路線そのものの総括の骨子の簡単な具体化とする。

- 一、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想で武装した真の革命党日本労働党を建設しよう！
- 二、日本共産党宮本修正主義集団打倒！
- 三、アメリカ帝国主義打倒！ 親米売国の日本軍国主義打倒！
- 四、ソ連社会帝国主義打倒！ 北方領土を奪還しよう！
- 五、独立・民主・平和・繁栄・中立の日本人民民主主義共和国を建設しよう！
- 六、最も広範な戦術的反米愛国統一戦線——民族解放戦線を建設しよう！

七、世界平和、民族解放、民主主義、社会主義の勝利万歳！
八、左右の日和見主義（真の武闘の左翼日と見主義、自然発生的
武裝闘争の右翼日と見主義）を克服し、反米愛国大衆政治実
力闘争を開始しよう！
以上である。

我々は、余りにも大きな犠牲を払ってこのスローガンを手にした
だが、我々がこのスローガンを幾百万の労働者階級と人民の固い隊
伍に物質化する時、我々の犠牲は物のかずではなくなるであろうし、
我々は、必ずやそうするであろう！

II 連合赤軍問題に対する我々の自己批判

我々は、右に連合赤軍の総括を極めて不十分ではあるが、ほぼ全
体的に行ってきた。この総括が客観的に指示するところに従って我
々は徹底的に、科学的に階級的に党派的に自己批判を行うつもりで
ある。我々の自己批判は以下である。

(1) 我々の自己批判

我々は、我々の『真の大衆武裝闘争』路線が日本人民の革命闘争
の自然発生的段階から意識的組織的段階への歴史的発展、転換、
飛躍を切り拓くものであるという点ではあくまでも正しかったが、
その日本人民の革命闘争の意識的組織的な発展段階が、平和的な

(2) 米日反動ともによる「連合赤軍」に対する反革命売国 裁判に対する我々の態度

現在、米日反動ともは「連合赤軍」に対する見せしめ反革命売
国裁判を強行しつつある。これを断じて許してはならない。我々は
同志、友人、人民各位に対して、この米日反動ともによる反革命売
国裁判をきびしく監視するように強く訴える。「連合赤軍」に対す
る反革命売国裁判はとりもなおさず人民の民族革命運動に対する反
革命である。我々は「連合赤軍」の犯した誤りを利用して「連合赤
軍」の切り拓いた偉大な民族革命の地平を裁き、日本人民の革命闘
争を裁き、人民の分裂を組織しようとしている米日反動派の陰謀を
ば、人民の団結によって粉砕しなければならない。「連合赤軍」の
犯した誤りは、あくまでも革命内部の問題であり、人民内部の問題
である。「連合赤軍」の犯した誤りはあくまでも、革命と人民の手
によって、革命の前進のため、人民の団結のため、そのためにのみ
正しく革命的に裁かれなければならない。我々はこのように考える。
米日反動ともによる「連合赤軍」に対する反革命売国裁判を粉砕
しよう！

我々は、以上の総括と自己批判をもって、新たな闘争宣言とする。
我々は未熟の故に大きな誤りを犯し重大な失敗をしてしまった。

しかし、「失敗は成功のもと」である。我々は失敗の全てを教訓と
して断固として前進する。我々は今回の大きな誤りと重大な失敗に

大衆闘争の戦術段階と暴力的な大衆闘争の戦術段階の二つの戦術段
階の統一であることを具体化できていなかった為に、理論的には抽
象的であり、実践的には現実に現在が平和的段階であることを飛
びこえて、直接に暴力的な段階を実現しようとした点で冒險主義
（左翼日と見主義）の誤りを犯していたことを確認し、自己批判す
る。そして、我々は「連合赤軍」森・永田指導部の犯した誤りは、
その手段（同志粛清）は絶対に許せないことを押えた上で、一面で
は我々の路線が日本革命の自然発生的段階から意識的組織的な段
階への発展、転換、飛躍を切り拓くものであることに對する反動的
反応であり、反党的に反革命的誤り（右翼日と見主義）であるが、
他面では我々の路線の冒險主義（左翼日と見主義）の誤りに對する
正当な反対であり、修正要求であること、この両面の性格を持つも
のであることを確認する。そして、この森・永田指導部の犯した誤
りは、我々が森・永田指導部に対し冒險主義（左翼日と見主義）の
誤りを押しつけ、森・永田指導部をば左翼日と見主義か、さもなけ
れば右翼日と見主義という理不尽な二者択一を迫った結果、引き起
こされた誤りであることを確認する。我々は以上の自己批判を我々
の路線の左翼日と見主義の誤りの革命的修正に物質化し、日本革命
の勝利の大道を断固として前進する。
我々はこの勝利の大道を前進することによって犠牲となった同志達
を永遠に弔うつもりである。
これが我々の自己批判である。

よって増々、侵略者米帝とその手先、日本軍国主義に対する憎しみを
強めている。そして、我々は増々、偉大な勝利の確信にふるいた
っている。

「最後の勝利は人民のものである！」前進あるのみ！
アメリカ帝国主義打倒！
親米売国の日本軍国主義打倒！
独立・民主・平和・繁栄・中立の新日本万歳！
共産主義者同盟赤軍派万歳！
日本共産党革命左派万歳！
連合赤軍万歳！

祖国か死か！

一九七二年十月三十日

総括の深化のために そのI

花園 紀男

川島豪「真の革命路線をかちとるために」ブンド系諸君を批判する」(「序章 臨時増刊、人民独裁に向けて」に収録)の中の、基本的政治路線(①敵・味方の規定 ②敵・味方の矛盾の解決方法の戦略問題 ③敵・味方の矛盾の解決方法の戦術問題)に関する、宮本(修)批判とブンド批判への批判的覚え書き。

(一) 川島論文から、宮本(修)批判と、
ブンド批判の核心的部分を引用する。

〔1〕☆「現代修正主義者宮本は、「純粹」プロレタリア独裁権力を樹立するのはまだ時期ではないとして、プロレタリア独裁を遠方に追いやり投げ捨てる。彼らは反米反独占の人民独裁権力が本質的にはプロレタリア独裁

権力であることを否認し、これをブルジョア独裁権力にしてしまふ。そして、人民独裁権力とプロレタリア独裁権力との間に万里の長城を築く。要するにプロレタリアート、人民が蜂起の機関、反乱の権力を準備することを否定する。

☆これに対し、ブンド系諸君は、プロレタリアート以外の被抑圧階級がプロレタリアートと同盟して、プロレタリア独裁権力の政権に参加することを拒否して、具体的な条件を無視して一挙に社会主義革命を實行しようとする。反米反独占の人民独裁権力を否定する。人民独裁権力が本質的にはプロレタリア独裁権力であることがわからない。とどのつまり、ブンド系諸君は蜂起の機関、反乱の権力を準備することに意識的になれないのである。〔「序章」、「日本共産党宮本一味とブンド系諸君につ

いて、(A)ブント系諸君は、宮本修正主義一味を完全に克服してはいない。」から引用。)

〔2〕☆「そもそも、ブント(共産主義者同盟)の登場は、宮本一味による党中央の乗っ取りに由来を發している。すなわち、宮本一味によるプロレタリア独裁思想の否定の歴史に端を發しているのである。『私達は一九五八年晩秋、日本共産党と訣別しました。そして、社会党とは勿論、日本共産党とは別個の潮流として、日本階級闘争の一翼を荷ってきました。』(「われらの対立」)

『この綱領は、一九六一年七月の第8回大会で決定されたものですが、この綱領に規定されているような内容は是非をめぐる論争は古く一九五七年頃から行なわれていました。私達はこの問題の討論の中で、党中央の現状規定及び、革命路線にはっきりと反対の立場をとったのです。』(同) 彼らは日本共産党に加入し、六全協後も、砂川基地闘争、勤評闘争、警職法闘争、などの諸闘争を、宮本修太郎一味の指導の下に闘ってきた。『しかし、その闘いのるつぽの中で、党中央の路線に疑問を感じ、反対し、遂に訣別』した。彼らは宮本修太郎の日和見主義路線について疑問を感じ、この日和見主義路線を克服しようとしたのである。だが、残念ながら、彼らは党中央の路線の誤りを、宮本一味によるプロレタリア独裁の否定として受け取めなかった。この真理がわからず、彼ら

は、日本の現状規定の仕方にもとめ、敵の規定の仕方にもとめてしまい、とうとうこの誤りの主要な原因を経済学上の誤りにもとめてしまった。『私達と共産党中央との対立の第一は、日本の現状規定とそこから導き出される革命路線に關してでした。』(同)

☆ 日本共産党中央を占拠した宮本修太郎一味はアメリカ帝国主義と日本独占資本が日本人民の敵であり、これが当面の革命の対象であるとしながらも、アメリカ帝国主義と日本独占資本との間は、従属関係のみであり、超帝国主義的關係になつてゐるとして、この二つの敵の間に矛盾が存在することを否定し、日本独占資本のプロレタリアート・人民に対する一層の凶暴化を否定し、實質的には日本独占資本を美化し、これとの闘争を回避して、アメリカ帝国主義だけが日本人民の敵であると實質上は規定した。

ブントはこれに反發して、宮本とは全く逆に(鏡に左右が逆に写るように)、アメリカ帝国主義と日本独占資本との間の矛盾、対立面を強調し、彼ら両者が従属同盟關係にあるという事実を否定し、日本帝国主義だけが日本人民の敵であるとして、アメリカ帝国主義と日本民族との間の矛盾を抹殺してしまつた。そして、アメリカ帝国主義との闘争を回避し、アメリカ帝国主義を美化した。☆ 彼らは互いに、自己の敵の規定の仕方が正しいこと

を論証するために、経済学論争へと入つていった。すなわち、日本独占資本はアメリカ帝国主義に從属しており、相互の間の矛盾は存在して、超帝国主義論的關係であり、日本は帝国主義的復活はしていない、とする宮本一味と、否、「日本帝国主義」は復活し相互の矛盾は激化しており、米帝との民族矛盾はすでに解決して存在しないとするブントとの「経済学」での論争が始まつたのである。論争の中心点は「日本帝国主義」が復活したか否か、になつてゐた。

(ブントは言う。『党中央は、日本経済はアメリカに從属している、日本は從属国だ、民族の危機が深まつている』、といつてゐるのですが、これは誤つてゐると思ひます。たしかに終戦後は、日本経済はアメリカの從属下にありました。しかし以後、日本の資本家は再び地力を回復させ、徐々に一本立ちするようになってゐると思ひます。一九五八年当時で日本資本主義はすでに粗鋼生産量において資本主義国第四位に返り咲いてゐます。又、当時でも外国資本の導入率は全資本中2%弱というように減少してゐます。』(「われらの対立」)

(これに対して——引用者) 宮本は一世一代の大ベテンをかけて言う。

『経済的特徴(それもまだ十分とは言えないが)だけ

でなく、政治、経済全体の特徴からみて、日本は依然として、政治、軍事、外交、経済のひろい分野で、全体として、アメリカ帝国主義への從属のもとにあり、アメリカ帝国主義の支配のもとで帝国主義的復活がすすめられてゐます。従つて、主たる側面はいぜんとして被抑圧民族の立場であり、他民族への抑圧と侵略を主たる側面とする、帝国主義の地位、主たる側面が抑圧民族としての地位になつてゐるとはいえませんが。』(「現代の日和見主義の特徴とゆくえ」)

『次に、日本のいわゆる帝国主義的自立、あるいは日本独占資本の軍国主義的帝国主義的復活の問題があります。この問題は以上述べた対米從属と関連して考へていく必要があります。……帝国主義的復活の完了とか、帝国主義的自立といふことは、何を指標としていつてゐるのでしうか。さきに述べた様に、独占資本主義≡帝国主義という意味なら日本は独占資本主義といえる段階から帝国主義国といえます。しかし、問題はとくに世界を改革する革命の見地から、日本の現状をどう規定することがより正しいかという見地から出發するならば、独占資本主義の段階に達している日本で自立的な帝国主義的侵略国という側面が主になつてゐるのか、それとも事實上の從属国の状態が主な側面になつてゐるのかをはつきりさせることが重要です。日本の帝国主義的復活が完

了したか否かの論議は、独占資本主義の段階にあるのか否かと同じ意味の論議ではありません。主たる側面が他民族を抑圧する侵略的な帝国主義として復活したか否かの論議であります。』(綱領草案について―全国都道府県委員長会議での報告)

ここに官本一味のベテンがあるのだ！ すなわち、主たる側面は被抑圧民族の立場、米帝への従属国、従たる側面は他民族の抑圧と侵略を主とする帝国主義国として、アメリカ帝国主義による日本民族の抑圧の問題と日本独占資本のアジア、海外侵略の問題とを絶対的に対立させたのである。対立するはずのないものを対立させた。

☆ 事実はどうなのか。事実はアメリカ帝国主義が日本民族を抑圧しながら、日本独占資本を援助してその帝国主義的復活を助けたということである。『アメリカ帝国主義の支持のもとに日本帝国主義も世界市場における競争者としての地位を再びとり戻してきた。…西ドイツ及び日本の、この二つの帝国主義の再起は重大な戦争の危険をはらむ二つの策源地となっている。…西ドイツと日本はすでにアメリカの市場争奪の二つの強敵になっている。』(「帝国主義が近代戦争の策源であることについて、並びに各国人民の平和を闘いとる道について」千光力)

めに、日本独占資本の帝国主義的復活を積極的に援助してきたのである。一方、日本独占資本もこのアメリカ帝国主義の日本民族支配を容認し、支持しつつ、軍国主義の復活を謀ってきたのである。アメリカ帝国主義による日本民族抑圧は厳然とした事実であり、日本独占資本のアジア、海外侵略も厳然とした事実である。これを誰が否定できよう！そして、反中国とアジア侵略のための日本軍国主義の公然たる復活とその強行は米日反動派の当面一致した基本路線なのである。独占資本相互間の矛盾は敵対的であり、米日独占相互間の矛盾も敵対的である。断じて、「超帝国主義」的關係などではない。だが彼らはアジア人民の革命闘争の前にはどうしても米日反動派は、従属同盟は保持しなければならぬ。米日独占間の矛盾は日毎に激化している。米日反動派に反対するアジア人民の革命闘争も日毎に激化している。彼らは解けない矛盾におちいった。彼らは一層、凶暴にならざるを得ない。それ以外に道はない。

☆ ところが官本修太郎一味は、こうした具体的、歴史的事実を、意図的に否定して、ネジ曲げた。現在では従属同盟関係が主要側面であり、抗争の局面が副次的側面であるという米日独占資本の關係における事実を、官本は日本独占資本の対米従属が主要側面か、アジア侵略が主要側面かという問題にすりかえて、「民族抑圧」が主

アメリカ帝国主義と日本軍国主義が従属同盟を結んで、アジア、海外侵略を行い、反共軍事同盟を結成しているのがまぎれもない事実である。したがって、日本独占資本対アメリカ独占資本の階級同盟の問題、すなわち、アメリカ帝国主義による日本民族抑圧を日本独占資本が積極的に支持し、対米従属關係にあるという問題は次のようになる。△主要側面は日本独占資本のアメリカ帝国主義に対する従属面、副次的側面は日本独占資本対アメリカ独占資本の対立抗争面。ところが官本一味はこの問題を少しばかり手品を使って、副次的側面を入れかえた。△主要側面は日本独占資本のアメリカ帝国主義に対する従属同盟、副次的側面は日本独占資本の帝国主義的侵略(これは日本独占資本とアジア人民との關係なのだ！)すなわち、米日間の矛盾の分析が問題とされているのに、日本独占資本の帝国主義的侵略をもち込み、すりかえを行なった。そして、彼は声高らかに叫ぶ。『君は、日本独占資本主義の侵略性を云々し、非難するが、それならば、君は日本独占資本主義の対米従属を否定し、日本人のアメリカ帝国主義に反対する民族独立闘争の課題を否定する春日(庄)や志賀一派と同じ「復活完了」論者であり、反党分子である』と。だが事実は何よりも明らかである。アメリカ帝国主義は日本民族を抑圧しつつ、自らのアジアにおける手先、番犬、反共の番犬とするた

要側面か、「帝国主義的地位」が主要側面かという問題にすりかえた。このことは、日本独占資本のアジア侵略の事実を見て見ぬ振りをするのであり、アジア侵略の野望を許し、これを美化したということである。それのみではなかった。彼らはアメリカ帝国主義と日本独占資本との間の矛盾をも見て見ぬふりをし、彼らの先輩であるカウツキーと共に「回避」したのである。

ブンドは官本一味のこの観念論、問題のすりかえに同調してしまった。この点で官本とブンドが異なっていたのは陽面と陰面の違いでしかない。ブンドは官本と同じ土俵に上がり、官本に唱和してしまった。「帝国主義的地位が主要側面であり民族闘争などナンセンスである」と。「日本帝国主義」は復活しておりアメリカ帝国主義による民族抑圧の問題など大した問題ではない、沖繩闘争など知ったことではない、帝国主義同士の間で対立抗争こそ現局面を規定しているものなのである、と。

とうとうベテンにかけられてしまった。『世界階級闘争及び日本階級闘争の現局面を根底から規定し特徴づけているものは、アメリカを中心とする資本主義の戦後体制の全面的動揺によって引き起された、帝国主義の対立、激化である。』(「共産主義8号」)

☆ ブンド系諸君はそもそも官本一味の闘わない路線(米帝とも日本独占とも闘わない)に反対し、真に闘う路

線をかちとろうとしたのである。ところがブンドは宮本一味の裏切りの原因がプロレタリア独裁の否定にあることがわからず、敵の規定の誤り、経済学の誤り、帝国主義相互間の矛盾の抹殺（これは一面にすぎない）が原因であるとしかわからなかった。彼らは宮本一味が超帝国主義論のデタラメによって、米帝と日本独占の間の矛盾を抹殺し、日本独占のアジア侵略を抹殺していることに気がついた。これは正しかった。だが、プロレタリア独裁がわからないため、現状規定論争から、宇野ブルジョア経済学の立場に移ってしまった。……そして、宮本一味との経済論争も実は権力構造分析をめぐっておこなわれていることを忘れ去った。彼らは「経済学」にしがみついた。そして、唯経済論者に転落した。彼らは宮本に対抗するために、帝国主義相互間の矛盾を過大視し、そのあまり、これをもって現局面の階級闘争を根本的に規定しているものとしてしまった。……もうこうなってしまうとはブンドは正しい路線をかちとり宮本を真に批判することなど出来ようはずがなかった。……彼らにはもはや宮本の右翼日和見主義路線の眼目はプロレタリア独裁の否定であり、マルクス・レーニン主義の眼目がプロレタリア独裁であるという観点にまで到達しえなくなってしまった。」（「序章、(B)ブンド系諸君は何故、宮本一味の誤りを克服出来ないのか——日帝自立論の発生の

根源」)

〔3〕☆ 「ブンドの発生が宮本修太郎一味によるプロレタリア独裁の放棄に由来していることはすでに述べたが、問題の核心が宮本一味のプロレタリア独裁放棄にある以上、ブンドを批判するにあたっては、まず宮本の裏切りについて最初に若干触れておく必要があるだろう。宮本修太郎一味はプロレタリア独裁を完全に放棄し、「豚小屋」を礼賛している。

『党と統一戦線勢力が国会で絶対的多数を占め、その基礎の上に、アメリカ帝国主義及び日本独占資本と闘って、人民の利益を守る統一戦線政府を適法的に樹立する。』

（「極左日和見主義者の中傷と挑発」）

『労働者、農民を中心とする人民の民主連合独裁の性格をもつこの権力（適法的に樹立した統一戦線政府）は世界の平和、民主主義、社会主義の勢力と連帯して独立と民主主義の任務をなし遂げ、独占資本の政治的、経済的復活を阻止し、君主制を廃止して反動国家機構を根本的に変革して人民共和国を作り、名実ともに国会を国の最高機関とする人民の民主主義国家体制を確立する。』

（宮本一味「党綱領」）（傍線花園）

同志諸君！ この宮本修太郎の「豚小屋」崇拜に驚かなくて欲しい。「豚小屋」で多数を占めて「適法的」に

「統一戦線政府」を樹立する、そしてこの「豚小屋」を「名実ともに国の最高機関とする人民の民主主義国家体制を確立する。」これが宮本一味の至上最高のスローガンであり、願いでもある。「適法的」に「豚小屋」を改造する、これが宮本修太郎のスローガンであり、夢であり、希望である。

宮本修太郎一味の夢と希望は、腹を割って言えば、マルクス・レーニンによる議会制度批判を「わすれられたことば」にすることであり、日本の革命的人民にプロレタリア独裁を放棄させることである。

ここで少し、この宮本一味が「わすれさせようとしてゐる言葉」をここに再録してみよう。

△『マルクスはこう書いてゐる。「コミューンは議会風の団体ではなくて同時に執行府であり、立法府でもあつた」行動的団体でなければならなかった。』……（レーニン）

『マルクスは無政府主義者がブルジョア議会制度の「豚小屋」さえ利用する——とくに革命的情勢があまりにないときは——能力がないというので、彼らと容赦なく手を切ることができた。』（レーニン）▽

宮本修太郎一味は、レーニンのこの「利用」という言葉を「改造」という言葉に入れ換え、革命的情勢も何も

関係なく、「豚小屋改造」を最終目標とした。議会制度を廃止し、コミューンの組織を樹立するために、革命情勢を考慮に入れ、「豚小屋」を利用する——これがマルクス・レーニンの言っていることである。「豚小屋」を改造すればよい、そうすればコミューンの組織は不要である。——宮本のこんなデタラメは、マルクスもレーニンも云っていない。逆に、これを痛烈に徹底的に粉砕しているのである。

△『同時に彼（マルクス）は、議会制度を真に革命的プロレタリア的に批判することもできた。支配階級のどの成員が議会で人民を抑圧し、ふみにじるかを数年に一度きめること——議会主義的、立憲的君主制ばかりではなく、もっとも民主的な、共和制の場合もブルジョア議会制度の真の本質はまさにここにある。』（レーニン）▽

宮本一味はこうした人民抑圧の議会制度を、立憲的君主制から共和制にして、名実ともに人民抑圧の議会制度を確立するというのだ！ マルクス・レーニン主義者であれば、誰でも、このブルジョア議会制度の廃止、プロレタリア独裁権力の樹立を考えなければならぬ。これを否定するものは、間違いなくマルクス・レーニン主義者ではなす。……

ブルジョア独裁の全ゆる形態の「爆破」、プロレタリ

ア独裁権力の樹立、これはマルクス・レーニン主義の普遍的真理である。これは矛盾の普遍性による。そして、このプロレタリア独裁権力の具体的形態がどのようなものとなるかは、各々の国の歴史の具体的条件によって異なる。これは矛盾の特殊性による。だから、宮本一味のように勝手に「国会」を「名実ともに国の最高機関とする」などとブルジョア議会議制度を礼賛し、自らの手をしやるようなことは決してすべきではない。かつて、フランス人民がコミューンを、ソビエト人民がソビエトを創造したように、日本の革命的人民がブルジョア独裁権力に代わるプロレタリア独裁権力の日本の具体的萌芽の形態を、必ず闘いの中で創造するであろうから、マルクス・レーニン主義者は、この人民の闘いの歴史に学び、それを人民とともにプロレタリア独裁権力にまで発展させればよいのである。決して「国会」に手をしばられてはならない。

宮本一味は、革命的人民の鋭い闘争の前に、この豚小屋で多数を占めて、「よりよい」豚小屋にするというベテンが暴露されると、今度は手品を使っていう。豚小屋で多数を占めて、豚小屋の手を借りて、(適法的に)豚小屋をコミューンに改造するのだ、と。だがこのベテンもすぐにばれてしまう。

われていた』(「われらの対立」)のであった。

しかし、ブンドは、この宮本一味の裏切りの本質がプロレタリア独裁の否定であることがわからなかった。彼らは宮本の裏切りを現状規定論争から、敵の規定の問題をめぐって経済学の誤りにもとめ、この帝国主義復活論争を通じて、宇野ブルジョア経済学の立場に移行し、完全にブルジョアの視点に立ってしまった。それ故に、彼らが日共の宮本修正主義集団の誤りがプロレタリア独裁の否定である、と見抜かれる段階にまで到達出来なくなり後退してしまった。彼らは革命の問題は権力の問題であるという観点を捨ててトロツキーに救いを求めた。彼らは一応口ではマルクス・レーニン主義の眼目、プロレタリア独裁を認めるが、トロツキーと同じように、このプロレタリア独裁を「純粋」プロレタリア独裁とし、プロレタリア独裁の多様な形態を否認する。従って彼らには労働独裁、人民民主主義独裁が本質的にはプロレタリア独裁である、ということが理解できない。彼らは労働者以外の階級が一次的にでも、プロレタリア独裁の政権に参加することを拒否し、一挙に「純粋」プロレタリア独裁、プロレタリアードだけの世界を作ろうとする。具体的条件も特殊性も無視して。彼らにはあせる!! 彼らの階級が小ブルジョアジーであるために。」(第一章ブンド系諸君とプロレタリア独裁、(A)宮本一味によるプ

△「この機構は骨の髄まで官僚的であり、骨の髄まで非民主的であって、真剣を改造などは、…実行する能力がないのである。」(レーニン全集第25巻 396ページ)

「この機構は…ブルジョアジーに奉仕することは出来るが改良を実行すること、資本の権利、「神聖な私的所有」の権利を一掃することはさておき、せめて真剣に、それを削減し、制限することは、このような機関には絶対できない。」(同 397ページ)

「このような国家機構の手を借りて、…改革を実行しようとするのは、この上ない幻想であり、この上ない自己欺瞞であり、人民の欺瞞である」(同 397ページ)

「労働者階級はできないの国家機構を、たんにその手ににぎり、それをそれ自身の目的に使うことはできな」(「フランスにおける内乱」)

☆ 宮本修太郎一味がこのように真正正銘の裏切り者であり、背教者であり、修正主義者であり、プロレタリア独裁を完全に放棄しているということは、革命的人民の前に今や明白なことになっている。そしてこの裏切りは今にはじまったことではなく、悪名高い野坂理論を、六全協後、再び復活させてきただけなのである。これについては、ブンドが言う如く、『この綱領に規定されているような内容の是非をめぐる論争は一九五七年頃から行

ロレタリア独裁の否定」より引用。(傍線は花園)

以上

(二) 革命左派(神)の政治路線の点検

川島論文によれば、日共革命左派(神)の政治路線は、宮本(修)の政治路線とブンドの政治路線とを比較、識別、批判しつつ打ち出している。それを、われわれなりにまとめ、図式化してみれば、図一、の如くなる。この図一、を利用しながら、日共革命左派(神)の政治路線を、結論的に点検していく。

図一、川島論文による革命左派(神)の宮本(修)批判とブンド批判の図式化。

A 敵の規定

Bノ① 敵・味方の矛盾の解決方法の戦略路線(=

国家権力をめぐる敵・味方の矛盾の解決方法)

Bノ② 敵・味方の矛盾の解決方法の戦術路線(=

大衆闘争の戦術指導路線)

(注…Bノ②はBノ①に従属し、奉仕する。)

△官本(修)の政治路線▽

A

「アメ帝と日本独占(日帝)」
(注)アメ帝と日本独占との関係は支配・従属関係のみで、矛盾関係を否定する。

Bノ①

「反米反独占の人民独裁」
ブル独(注)プロ独暴
力革命を否定する。

Bノ②

「アメ帝とも日本独占(日帝)とも闘わない」、右翼日和見主義路線

△ブンドの政治路線▽

A

官本(修)のAを否定する。
「日帝」(注)日帝とアメ帝との関係は矛盾関係のみで支配・従属関係を否定する。

Bノ①

官本(修)のBノ①を否定する。「反日帝の『純粋』プロ独暴力革命」

Bノ②

官本(修)のBノ②を否定する。「アメ帝とも日帝とも闘う」(注)ブンドの出发点

△革左(神)の政治路線▽

A

官本(修)が正しい。ただし、官本(修)にも部分的誤りがある。すなわち、アメ帝と日本独占(日帝)との関係は超帝国主義的關係でなく、支配・従属関係が主で矛盾関係が従属関係。

Bノ①

官本(修)もブンドも誤り。「反米反独占の人民独裁」プロ独暴力革命(注)革左(神)の出发点。

Bノ②

官本(修)は誤まり。ブンドが正しい。

(1) 革左(神)の官本(修)批判について。

革左(神)の官本(修)批判はまとめれば、官本(修)の政治路線は、その敵の規定は部分的誤りを含みつつも基本的に正しい(すなわち、アメ帝と日本独占との関係を支配従属関係のみとし矛盾関係を否定しているのは誤りだが、「アメ帝と日本独占」という敵の規定自身は基本的に正しい)が、その敵・味方の矛盾の解決方法は、戦略的にも戦術的にも誤まっている、ということである。

この革左(神)の官本(修)批判は、まずわれわれにその批判の仕方について疑問を起させる。というのは、通常は、敵(味方)の規定と敵・味方の矛盾の解決方法の戦術とは、一つの問題の二つの側面であり、決して別々の問題ではないからである。敵・味方の矛盾の解決方法の戦術・戦術は、敵(味方)の規定によって自ずと決定される問題であり、また逆に、敵(味方)の規定は、敵・味方の矛盾の解決方法の戦術・戦術によって、自ずと逆規定される問題である。従って、革左(神)の官本(修)批判は、敵(味方)の規定と、敵・味方の矛盾の解決方法とは一つの問題の二つの側面という内的関連にある問題であるという観点によって懐疑的に点検されなければならない。官本(修)の敵(味方)の規定とその敵・味方の矛盾の解決方法の戦術・戦術とは、革左

(神)の主張するように相互に矛盾しているのか、それとも相互に固く結びついているのか、これが解明されるべき問題である。

川島論文にそって点検していく。
「官本一味はプロレタリア独裁を完全に放棄し「豚小屋」(ブルジョア議会制度をはじめとするブルジョア独裁の全ゆる形態)を礼賛している。『党と統一戦線勢力が国会で絶対的多数を占め、その基礎の上に、アメリカ帝国主義、および、日本独占資本と闘って、人民の利益を守る統一戦線政府を適法的に樹立する。』」

「労働者、農民を中心とする人民の民主連合独裁の性格を持つこの権力(適法的に樹立した統一戦線政府)は世界の平和、民主主義、社会主義の勢力と連帯して独立と民主主義の任務をなし遂げ、独占資本の政治的・経済的支配の復活を阻止し、君主制を廃止して、反動国家機構を根本的に変革して人民共和国をつくり、名実ともに国会を国の最高機関とする人民民主主義国家体制を確立する。」(傍線は花園)

「現代修正主義者官本は「純粋」プロ独を樹立するのはまだ時期ではないとしてプロ独を遠方に追いやり投げ捨てる。彼らは反米反独占の人民独裁権力が本質的にはプロ独権力であることを否認し、これをブル独権力にしてしまふ。そして人民独裁権力とプロ独権力の間に万里

の長城を築く。要するに官本一味は、プロレタリアート人民が蜂起の機関・反乱の権力を準備することを否定する。」(以上が官本(修)の戦略)(官本一味は)「米帝とも日本独占(日帝)とも闘わなう。」(これが官本(修)の戦術)。

以上の川島論文の官本(修)の敵味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術路線の批判は全く正しい。官本(修)が「議会制度をはじめ、ブルジョア独裁の全ゆる形態の爆破」、プロレタリア独裁の樹立」という、マルクス・レーニン主義の敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術上の普遍的真理である、暴力革命路線、プロ独路線を完全に放棄し投げ捨ててゐることは明白である。

ところで、ではこの官本(修)の敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術の誤り(裏切り)は、官本(修)の敵(味方)の規定とは無関係な誤りであろうか？ われわれは、官本(修)がその敵の規定において、アメ帝と日本独占資本の、日本民族(労働者階級人民)支配のための政治的・軍事的道具であるところの、ブルジョア議会制度をはじめとする国家機構、権力機構(米軍、「自衛」隊、警察、政府官僚機構)と、アメ帝と日本独占資本そのものとを切り離しており、そして政治的・軍事的支配の道具である国家機構・権力機構と切り離されたアメ帝と日本独占資本のみを日本人民の敵とし当面の革命

地からは、政治的・軍事的な敵をこそ、まず何よりも第一に鮮明にしなければならぬ。この見地からすれば、われわれは、日本民族の敵、当面の革命の対象をば、「米独占と日本独占の国家機構・権力機構」あるいは、「侵略者米帝とその手先き売国の日本軍国主義」と規定すべきである。「アメ帝と日本独占」と「アメ帝と日本軍国主義」とは直接同じ規定ではない。官本(修)の敵の規定には大きなベテンが存在するのである。官本(修)は一方において、米独占資本と日本独占資本の日本民族支配の政治的・軍事的道具である国家機構・権力機構と民間の米独占資本と日本独占資本そのものを切り離して、この国家機構から切り離された民間の米独占資本と日本独占資本のみを日本民族の敵と規定し、その実、他方において、その敵である民間の米独占と日本独占の日本民族に対する経済的支配・抑圧・搾取の政治的・軍事的道具である国家機構・権力機構を日本民族の敵、当面の革命の対象としない。それどころか、それら敵の道具をば革命の道具といふ、ゆるめるといふ修正主義者の古くて新しい手品を使って、物の見事に米独占と日本独占の救世主になろうとしているのである。

以上の分析によって、われわれは、官本(修)の敵の規定は、その敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術上の誤り(裏切り)と固く結びついた、誤った(裏切った)

の対象としており、そしてアメ帝と日本独占の日本民族支配の政治的・軍事的道具である国家機構、権力機構を日本人民の敵、当面の革命の対象としていない、それどころか、それらのアメ帝と日本独占の道具をば、そのまま革命の道具にして、ことに気付く。ところで、政治的・軍事的支配の道具と切り離されたアメ帝と日本独占資本とは民間の経済的搾取・抑圧階級にほかならない。確かに民間の米独占資本と日本独占資本は、日本人民の直接の敵であり、当面の革命の対象である。これはまらがない。彼らは、経済的に日本民族(労働者階級人民)を直接に搾取し、抑圧している。しかし、民間の米独占資本と日本独占資本が直接に日本民族を政治的・軍事的に支配し、抑圧しているのではない。政治的・軍事的に日本人民を直接支配し、抑圧しているのは民間の米独占資本と日本独占資本の日本民族支配の政治的・軍事的道具であるところの、それ自身相対的に独自の意思と感情を持つ特殊な人間集団である国家機構・権力機構(米軍、「自衛」隊、警察、政府官僚機構)である。この国家機構・権力機構こそが、日本人民の直接の政治的・軍事的な敵であり、当面の革命の政治的・軍事的な直接の対象である。民間の米独占資本と日本独占資本は、これらの道具を媒介にして間接的に日本民族を、政治的・軍事的に支配し、抑圧しているのである。まさに、革命の見

規定であることが明らかにされたと思う。官本(修)の敵の規定(「アメ帝と日本独占」)は国家機構・権力機構の爆破の問題を避けている経済主義の規定であり、官本(修)の敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術路線上の誤り(裏切り)は、この敵の規定から必然的に導き出されている。反米反独占の人民独裁権力は必然的に、従って本質的にプロ独権力ではなく、ブル独権力になるのである。そして、「プロ、人民が蜂起の機関・反乱の権力を準備することを 否定する」ことになるのである。戦術的にも、「アメ帝とも日帝とも闘わなう」ことになるのである。日本革命の対象(敵)は、「侵略者米帝とその手先、売国の日本軍国主義」として、政治を第一として、革命の根本問題は国家権力の問題である、という観点によって規定されなければならない。そして、この敵の規定から必然的に規定され、導き出される日本革命の敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術は以下の様になる。すなわち、「反米反軍国主義の人民独裁権力」(戦略)こそ、必然的に、本質的に、プロ独権力となる。そして「プロ、人民に対して蜂起の機関・反乱の権力をどうしても(つまり不可避的・必然的に)不

の敵、経済的規定は、反米反軍の、敵、政治的規定に含まれるのであって、その逆ではない。図式化すれば、図二のようになる。(注、蛇足だが、ここで次の事を指摘しておきたい。よく日本帝国主義の大戦前後の歴史の分析に際して「日本独占資本が大戦に日本人民を巻き込み、日本独占が日本人民を米帝に売り渡し、日本独占資本が日本軍国主義を育成してきた云々、」という様に分析されることがあるが、世界を変革する革命の見地からは、「日本軍国主義が大戦に日本人民を巻き込み、日本軍国主義が日本人民を米帝に売り渡し、米帝とその手先き日本軍国主義が日本独占を育成してきた」という様に、政治的敵を常に主語にして分析しなければならぬ。日本軍国主義は一度も消えたことはないのである。ブルジョア民主主義の欺瞞にごまかされてはならない。)

以上の分析によって、川島論文の官本(修)批判、即

図二、日本革命の意識的政治路線

A

「侵略者米帝とその手先き売国の日本軍国主義」(注)米帝と日本軍国主義の関係は支配・従属関係が主で、矛盾関係が従の関係である。

「反米反軍国主義の人民独裁(プロ独) || 暴力革命」

「米帝とも日本軍国主義とも闘う」

Bノ①

Bノ②

「反米反軍の戦術」の萌芽としての自然発生の || 経済主義的政治路線であり、それを、革命の根本問題は「国家権力の問題である」という観点、「政治第一の観点」、「プロ独学説の観点」で、意識化しなければならぬ。

(1)の補足 官本(修)の敵の規定における超帝国主義論の発生の根拠について

これは(1)の点検では触れずに残しておいたものである。何故、官本(修)は敵の規定において、「アメ帝と日本独占が日本人民の敵であり、当面の革命の対象である」とのみならず、アメリカ帝国主義と日本独占の間は従属関係のみであり、超帝国主義的関係になっているとしてこの二つの敵の間に矛盾が存在することを否定し、日本軍国主義のアジア侵略への野望を否定し、日本独占資本のプロレタリアート人民に対する一層の凶暴化を否定したのか? 川島論文はこの官本(修)の敵の規定における超帝国主義論の発生の根拠を明らかにしていない。「実質的には日本独占資本を美化し、これとの闘争を回避して、アメ帝だけが日本人民の敵であると実質上は規定した」という川島論文の指摘は単なる結果解釈であって、超帝国主義論発生の根拠の解明ではない。また、川島論

ち、官本(修)の政治路線は、その敵の規定は正しいが、その敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術は誤まっている(裏切っている)という批判は、正しくない。それは官本(修)の敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術に対するプロ独の観点、革命の根本問題は国家権力の問題であるという観点、政治第一の観点からの正しい批判を、官本(修)の敵の規定の批判にまで首尾一貫しない不徹底な、従って自然発生的で、経済主義的な批判である。従って、革左(神)の政治路線(A(敵の規定)):

「アメ帝と日本独占」、Bノ①(戦術).....「反米反軍の人民独裁(プロ独) || 暴力革命」、Bノ②(戦術).....「アメ帝とも日帝とも闘う。」(図一参照)は、日本革命の意識的政治路線(A.....「侵略者米帝とその手先き売国の日本軍国主義」、Bノ①.....「反米反軍の人民独裁(プロ独) || 暴力革命」、Bノ②.....

文自身が、官本(修)は「アメ帝とも日帝とも闘わな」と正しく指摘しているものであり、何も、日帝だけを、わざわざ美化する必要は官本(修)にはないのである。まわりくどい説明はやめて、結論を述べよう。

(1)で官本(修)の敵の規定におけるベテンの正体(|| 経済主義)を解明したわれわれにとって、この官本(修)の敵の規定における超帝国主義論の発生の根拠の解明は容易である。官本(修)の敵の規定は国家機構、権力機構の爆破の問題を避ける経済主義のベテンであった。官本(修)の敵の規定における超帝国主義論の発生の根拠はまさに、この敵の規定における経済主義のベテンにある。

民間の米独占資本と日本独占資本との間に敵対的矛盾が存在することを認めるならばどうしても、国家機構、権力機構の問題に突き当たる。何故なら、日毎に激化し、発展していく、敵対的矛盾がありながら、民間の米独占資本による日本独占資本に対する支配、搾取、抑圧が維持されるのは、ひとえに、米独占資本の日本独占資本に対する国家支配(侵略者米帝とその手先き、売国の日本軍国主義による政治的 || 軍事的支配)によってである。米日独占資本間の矛盾の日毎の発展・激化につれて、米独占資本による対日国家支配は強まり、深まり、国家権力をめぐる民族革命の爆発は日毎に近づく。我々はこの

我々の分析の正しさを今年の米外交教書によっても確認することが出来る。(資料一を参照せよ)この米独占資本と日本独占資本との日毎に発展・激化していく、経済と経済の敵対的矛盾とそれを原因とする、米独占の対日国家支配と日本独占との日毎に激化していく政治と経済の敵対的矛盾は、侵略者米帝の国家支配・民族支配を打破しなければならぬ日本労働者階級人民にとっては徹底的に利用されなければならない。日本独占のアメリカへの経済的かつ、政治的敵対性は味方にし得るのである。また、真に勝利を考える革命党ならば、必ずこれを味方にする方策について心を砕かなければならない。このように、米独占資本と日本独占資本との敵対的経済矛盾の存在を認めることは、米独占資本とその権力機構に対する日本独占資本の経済的かつ政治・軍事的矛盾の存在を認めることになり、どうしても、米独占資本の対日経済支配だけでなく対日国家支配に対して、それに対する日本独占の敵対性を利用して立ち向かわなければならなくなる。それは、宮本一味の「米帝と日本独占」の敵の規定の経済主義のベテンの破綻に導き、必然的に、宮本一味の、敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術の「反米反独占の人民独裁(ブル独)」「(戦略)」「米帝と米帝とも闘わない」(戦術)の破綻に導く。そしてどうしても「侵略者米帝とその手先き、売国の日本軍国主義

義」の敵の規定の政治主義の真理と、「反米反軍の人民独裁(ブル独)」「(戦略)」「反米反軍の戦う戦術」(戦術)の戦略・戦術の日本革命の意識的政治路線に導く。国家機構、権力機構の爆破の問題を回避しなければならぬ宮本(修)には、従って、どうしても米独占資本と日本独占資本の経済的かつ政治的矛盾の存在は、あつてはならない問題なのである。ここに、米独占資本と日本独占資本の矛盾の存在と発展という、帝国主義の経済的かつ政治的本性を抹殺し、支配・従属関係だけの米独占と日本独占の超帝国主義的關係だけが、恣意的に作り上げられたのである。これが宮本(修)の敵の規定における超帝国主義論の発生の根拠の解明である。

資料一

読売新聞、五月四日夕刊

「米外交教書の内容」

△対日関係▽ワシントン三日発共同

米大統領外交教書の日本関係部分、詳細は次の通り。
一、安全保障の面では、日本は多年日米安全保障条約の核のカサに依存してきた。しかし、日本は自前の通常防衛力を堅実に改善してきた。四次防計画は三次防経費を

倍増している。だが、日本のGNP(国民総生産)が年間一〇%以上成長しているが、日本の防衛費はまだGNPの一%にも達していない。
一、日本はいまや国際組織の中の重要な要素であり、日本の行動は国際組織の安定にとって主要な決定要素である。わたしは就任以来、日本との同盟関係は、これら新しい条件と足並みをそろえなければならぬと思ってきた。

〔両国の同盟とその進展〕

一、我々の全ゆるる同盟関係についての調整が不可避である。今日、我々の政策の調和は自動的に図られるものではなくなった。

一、日本が米国の援助の受け取り人から主要な経済大国であり、また競争者として再生したことは、対外的な政治のわく組みに影響を与えずにはおかなかつた。日本は対米関係で特に、ほとんど排他的な自国の経済成長に専念したり、あるいは年下の同伴者のように振る舞う習慣はもはや必要なくなつたし、また許されもしなくなつた。日本は安全保障を米国に依存して、経済拡張のための財源をほしいまゝにするという特別な利点をいまだに享受している。日本を守り続ける政治関係は、経済関係で大きな相互性を要求する。

一、日本の世界におけるかわり合いの重さは、経済的な打算だけでなく、幅広い政治的土台の上に立つた政策決定を日本に要求する。米国と日本はそれぞれ独自の政策を共通の目的に向けるという問題に直面すべきである。
一、しかしながら、戦後期の日米関係になじんできたため、米国の外交政策の変革は日本に特別の感受性を与えた。このため、日本は自国の政策の多くの面で新しい方向を活発に探求しながら、米国の政策の変化や主導権は制限すべきものと思つていように見える。しかし、米国が同盟国指導者に対して父性的なスタイルをとることをやめたことは、我々が同盟国をより真剣に完全に提携者として扱つたことなのである。

〔共通の議題に関する諸問題〕

一、今日の日米関係における最も緊急な問題は、経済的に日米二国間貿易の膨大な不均衡である。われわれはこの不均衡をできるだけ早く、妥当な規模に縮小しなければならぬ。田中首相も認めているように、これは単に米国の問題ではなく、日本の問題でもある。これは絶え間ない経済問題をめぐる論争が、日米を共に結びつけてきた政治関係の効果を脅かすからだけでは無い。この不均衡は、日本自身が重大な利害関係を持つていて安定した国際組織を脅かすものである。

一、双方の側に機構上、純粹に経済的国益の観点から、あるいは特定の国内経済的利益からくる圧力で、措置がとられたり、政策が立てられる傾向がある。これは日米の経済的、政治的關係の両方を不安定なものにしてきたが、われわれは、もはやこれを甘受する余裕はない。

一、日本の対米貿易黒字の相当程度までは、日本の時代錯誤的な為替レートと、作為的な日本の輸出補助制度、複雑な価格政策、輸入や外国資本の日本進出の抑制などで助成されてきたものである。今日要請されているものは、均衡のとれた方法で相互に貿易を拡大していく公正な組織である。この問題を前向きに取り組み継続的な協力こそ、増大する諸保護主義者の圧力を防ぐ決定的なものとなる。

一、日米の二国間経済關係は問題の核心である。それは規模、重要性、相互性の点で、特別のものである。いま要請されることは、輸出入の面で均衡のとれた貿易拡大に双方が接近する公平な制度をつくることである。将来の問題としては特別の部門における貿易不均衡を測定し、保護主義者の圧力や政治危機に至る前にモニター(警告)したり調整する機関を両国がつくることに関心が出てくる。(この項時事)

一、日米安保条約は「兩國の国際経済政策面での争いを除去する努力を日米兩國に約束させており、兩國間の協

を團結を危機にさらしてはならないという責務、また、われわれの政治連合の共通目標を脅かすような競争目的を持つてはならないという責務がある。

〔未来への挑戦〕

一、政治、経済の両面で、われわれは共通の目的に役立つ方法で、それぞれの目標を追求するという義務を持っている。短期的な経済的・政治的利益を求めた重大決定をさせないためには、政治的決意の意識的な努力が要請されよう。これは官僚的処理では片付く問題ではなく、政治指導性の一つの試練なのである。

(注、傍線は花園による)

(2) 革左(神)のブンド批判について

(I) 川島論文によれば、ブンドの政治路線(敵の規定、敵・味方の矛盾の解決方法の戦略、戦術)は、宮本(修)の政治路線の戦術(「アメ帝とも日本独占とも闘わな」戦術)を批判し、否定することから出発し、宮本(修)の政治路線の戦略と敵の規定を批判し否定するに至って作られた。ブンドの政治路線の形成過程についての川島論文の分析は正しい。

(II) ところで革左(神)は「宮本(修)の政治路線の戦

力を強調している」のは偶然ではない。政治的決意を持った意識的な努力がなければ、日米の経済的論争は、われわれの同盟關係の構成を引き裂くことになろう。

〔日本の新しい外交〕

一、日本が今日多くの面で多極外交の場に踏み出している時、兩國の政策が分岐するものでないことを保障する。また双方の側に政治家としての指導性という、もう一つの試練があるだろう。日本の外交政策は、日本の独自の見通し、目的、そして形式によって、形成され続けるだろう。われわれ同盟国が、新しい時代の中で留意すべきことは、日米が共通して持っている安定の中での基本的な利益に対する絶えざる自覚を持つことである。われわれは、兩國の政策の中でコンセンサス(合意)を維持するため努力すべきである。

一、日本は今、大国としての義務を持っている。それは抑制力、相互性、信頼性をして、全体的關係を安定させることが、日本の圧倒的な利益でもあることに對する配慮であろう。

一、新しい時代における日米同盟關係は、大西洋同盟(NATO)と同様の挑戦を提示している。われわれは同盟を当然のこととして、私利だけに基づいた独自の政策を取ることができない。われわれは短期的政策で中期的

術上の誤り、裏切り(「アメ帝とも日本独占とも闘わな」右翼日和見主義戦術)の原因は、宮本(修)が、その政治路線の戦略である「反米反独の人民独裁権力」が本当はプロ独権力であるのをば、ブル独権力にしてしまっている点にあるのであって、宮本(修)の政治路線の敵の規定(「アメ帝とも日本独占」)にはない。宮本(修)の敵の規定は部分的誤りはあるが、すなわち、アメ帝と日本独占との關係が本当は、支配從屬關係が主、矛盾對立關係が從の關係であるのに、宮本(修)が矛盾、對立關係を否定し、支配從屬關係のみにしてある点は、部分的誤りであるが、「アメ帝とも日本独占」という敵の規定自身は基本的に正しい。Vと主張する。この観点から、革左(神)は、ハブンドが、宮本(修)の戦術上の裏切り(「アメ帝とも日本独占とも闘わな」右翼日和見主義戦術)の原因を、その「反米反独の人民独裁ブル独」の戦略に求めこれを否定し、更にその「アメ帝とも日本独占(アメ帝とも日本独占の關係は支配從屬關係のみで、矛盾關係を否定する)」の敵の規定に求め、これを否定し、それに対して、「アメ帝とも日本独占(日帝)とも闘う」戦術に對応して、「反日帝の「純粹」プロ独」戦略と「日帝(アメ帝と日帝の關係は矛盾關係のみで支配從屬關係を否定する)」の敵の規定とを對置しているVのは誤りだと主張する。

(四) 我々は、(1)で、すでに次の点を明らかにしてきている。すなわち、第一には、官本(修)の戦術上の裏切り(「アメ帝とも日本独占とも闘わない右翼日和見主義戦術」は、戦術上の裏切り)、「反米反独占の人民独裁」プロ独(戦術)とだけでなく、敵の規定の裏切り(「アメ帝と日本独占」の経済主義の敵の規定)とも固く結びついていること。第二には、日本革命の正しい政治路線は、「侵略者米帝とその手先、売国の日本軍国主義」の政治主義の敵の規定、「反米反軍国主義の人民独裁」プロ独(戦術)、「反米反軍の闘う」戦術でなければならぬこと。第三には、以上の第一、第二の点から、革左(神)の官本(修)批判(「官本(修)の戦術上のうらぎりの原因は、官本(修)が、その戦略である「反米反独占の人民独裁権力」が本当はプロ独権力であることをば、プロ独にしてしまっている点にあるのであって、その敵の規定にはないという批判)は自然発生的「経済主義的批判」であって、日本革命の正しい政治路線の萌芽である。従って、革左(神)の政治路線は、日本革命の正しい政治路線の萌芽としての自然発生的「経済主義的政治路線」であるということ。以上三点である。

以上の前提の上に、革左(神)のブンド批判についての点検を結論的に書いていくことにする。

① ブンドが官本(修)の戦術上の裏切りの原因をそのことを押えておくべきである。すなわち、革左(神)のブンド批判の論理には、先に(1)で見た、革左(神)の官本(修)批判の論理と全く同じ論理矛盾があるということである。先には(1)で革左(神)(川島論文)は、官本(修)批判において、その敵の規定は正しいが、敵・味方の矛盾の解決方法(戦略・戦術)は誤っていると、いう論理矛盾におちいったが、今度は、革左(神)はブンド批判において、ブンドの敵・味方の矛盾の解決方法の戦術路線(「アメ帝とも日本独占とも闘う」戦術)は正しいが、その戦略、と敵の規定は誤っていると、する。先のとは形は違いますが同じ論理矛盾を犯している。結論を述べよう。ブンドは「戦術は正しいが、戦略と敵の規定は誤っているのではないのである。ブンドは戦術も、戦略も、敵の規定も自然発生的「経済主義的」なのである。ブンドの戦術と戦略、敵の規定とは、相互に固く内的に結びついているのである。V

さて、ブンドの誤りがどのような誤りであるかは明らかにされた。ブンドの誤りは日本革命の真の政治路線の萌芽としての自然発生的「経済主義的政治路線」であることである。従って、次に、(1)で革左(神)の政治路線についての結論と同じ結論を書かなければならない。すな

の戦略に求め、これを否定し、敵の規定に求め、これを否定したことは正しかった。この点でのブンドの首尾一貫性は革命的である。この点で、革左(神)は首尾一貫せず、折衷主義である。

② しかし、ブンドが官本(修)の戦術上の裏切りの原因をその戦略と、敵の規定に求め、これを否定したことは首尾一貫してあり正しかったが、ブンドがその「アメ帝とも日本独占(日帝)とも闘う」革命的戦術路線に対応して、官本(修)の戦略と敵の規定に對置した戦術(「反日帝の「純粹」プロ独(戦術)と、敵の規定)」「日帝」は誤っていた。これはすでに(1)で明らかにした日本革命の正しい政治路線と対応させて比較・検討すれば明白である。では、ブンドの誤りは、どのような誤りなのか？ 我々がすでに手にしている日本革命の正しい政治路線と比較して、ブンドの誤りを規定すれば次の様に規定される。すなわち、ブンドの「日帝」の敵の規定、「反日帝の「純粹」プロ独(戦術)」「アメ帝とも日本独占(日帝)とも闘う」戦術の政治路線は総路線として、日本革命の正しい、意識的政治路線であるところの「侵略者米帝とその手先、売国の日本軍国主義」の敵の規定、「反米反軍国主義の人民独裁」プロ独(戦術)、「反米反軍国主義の闘う」戦術(総路線の萌芽)としての、自然発生的「経済主義的政治路線」である、と。

わち、ブンドは、その敵の規定、戦略、戦術の自然発生性を、マルクス・レーニン主義のプロ独学説によって、言い換えれば、革命の問題は国家権力の問題であるという観点によって、意識化しなればならない、ということである。◎ そして、そのためには、日本革命の政治闘争・経済闘争の客観的発展段階自身が、自然発生的「経済主義的発展段階から、意識的「組織的」政治主義的発展段階にまで発展する必要がある。つまり、日本革命の戦術的発展段階が国家権力と、真に真向から対峙する段階にまで発展する必要がある。このような客観条件があつてこそ、ブンドは(そして、革左(神)も)その政治路線の自然発生性を、真に意識化することが出来るのである。そして、現実はその証明したし、また証明しつづける。(これについては「勝利への道」と、「声明文」を参照せよ)。

△(1)と(2)双方への補足V

我々は(1)と(2)で、革左(神)の官本(修)批判、ブンド批判と、その政治路線が、ブンドの官本(修)批判と、その政治路線と同じく、自然発生的「経済主義的」である事をみてきた。しかし、本質的には、同じ自然発生的「経済主義的政治路線」であっても、革左(神)の政治路線には、ブンドと対照的な一つの特徴がある。それは、革

左(神)が、マルクス・レーニン主義の普遍的真理である。プロ独学説(=革命の問題は国家権力の問題であるという学説)をば、戦略だけの普遍的真理にしてあり、敵の規定、敵・味方の矛盾の解決方法の戦略・戦術の政治路線の全体を貫く普遍的真理として把握していない(把握できていない)ことである。

これは、革左(神)が、プロ独学説の教条から出発しながら、未だそれを、日本革命の具体的実践と内的に結びつけていない(結びつけることが出来ていない)ということを示している。そのため、革左の政治路線は、敵の規定は官本(修)(もとも、部分的に官本(修)を修正しているが)、戦略は、革左(神)の独自のもの(これ自身、自然発生的に経済主義的の路線)、戦術は、ブンド¹という、つぎはぎ細工になっている。

ところで、プロ独学説が、敵の規定、戦略・戦術全体を貫くところの普遍的真理であるということは、日本革命の具体的実践から出発した、ブンドにとってはおよそ自明なことである。何故なら、実践は、例え、それが即自的、実践であれ、すなわち、自然発生的実践であれ、統一を原理とするからである。これとは対照的に、マルクス・レーニン主義の普遍的真理であるプロ独学説から出発し、それを日本革命の具体的実践と結びつけようとした革左(神)にとって、その結びつけるべき対象であ

(この事については「勝利への道」「声明文」参照)だが、その失敗の総括の中から必らず、この任務を果すであろう。

川島論文への批判的覚え書きを終り。

付記、—この覚え書きを作るにあたって、革左(全国委)、「赤狼火」の「日共(修)二つの敵論を批判する」(パンフ)に、いくつかの重要な点で教えられたことを付記しておく。

追記

革左(神)の川島派は、声明文の中で、革左(神)の永田指導部の犯した「肅清」の誤りについて簡潔に次のように主張している。

「こうした重大な誤りが行われた根源は、政治抜き、軍事路線にあると考えます。…第一に、正しい政治路線を放棄すれば、すなわち、敵は誰か、味方は誰か、その力量、動向はどうかを無視すれば、必ず「左」右の日和見軍事路線=盲動主義や合法主義が発生します。…

…第二に正しい政治路線の放棄は必ず軍の規律を失わしめ、同志への制裁を発生させます。…我々は、今回の重大な誤りを犯した一部旧指導部と、とりわけ、今年の八月以来、政治放棄について激しく闘って来ました。」(傍線は花園)

る日本革命の具体的実践の戦術的發展段階が未だ自然発生的段階にある時、その結合はどうしても外的結合となることは避けがたく、従って、その外的結合の結果、革左(神)にとって、プロ独学説が、政治路線全体を貫く普遍的真理であることを把握し得ず、そのためその路線が右に見たようなつぎはぎ細工の路線となった事は避けがたい帰結であったという事が出来る。

以上みてきたことから、革左(神)は日本革命の具体的実践の戦術的發展段階が、自然発生的に経済主義的段階から意識的組織的段階に迄発展した時実践に媒介されてはじめて、プロ独学説を日本革命の具体的実践と結びつける事が出来るし、又、結びつけなければならず、そして、プロ独学説が、戦略のみの普遍的真理ではなく、敵の規定、戦略・戦術全体を貫く普遍的真理であることを正しく把握することが出来るし、また把握しなければならぬ。言い換えれば、敵の規定においても、官本(修)から完全に訣別し、敵の規定、戦略、戦術とも、ブンドと完全にその位置を同じくすることが出来るし、またしなければならず、その上で、自らの未だ自然発生的に経済主義的政治路線を、ブンドと同じく、プロ独学説によって意識化し、日本革命の真の政治路線をきちんとしなければならぬ、ということが出来る。

(注、革左(神)永田指導部は、この任務に失敗した。

前半の傍線部分「こうした…同志への制裁を発生させます」の主張に関しては、我々は完全に同意する。だが、この前半に、あとの一文「我々は…闘って来ました」が加わる時、右の主張はあたかも、革左(神)が、もともと正しい政治路線を持っていて、永田指導部が、それを放棄して、もともと正しい政治路線を放棄しない川島派と対立したかのように主張されている。しかし、これは永田指導部と川島派との対立の発生という事実を利用した詭弁である。永田指導部と川島派との間に、ある対立が存在するようになったということは、まぎれもない事実である。そして、永田指導部による(注、ここでは、赤軍派、森指導部のことには触れない。)肅清の「誤り」が、明らかに一面においては川島派を対象としていることもまたまぎれもない事実である。このまぎれもない事実から出発せず、この事実を無視して、永田指導部の犯した「誤り」を、そのまま川島派にすりつけようとするのはまちがっている(注一参照)。だが、また、これとは全く逆に、永田指導部と川島派との対立の発生という事実を利用し、その事実の真理がいかなる対立であるかの分析を回避し、あるいはごまかして、もともと革左(神)が持っていた正しい政治路線を放棄した永田指導部と放棄しなかった川島派との対立という形に作り変えるのもまたまちがっている。両者ともに、事実

から出発し、事実の論理の指示するところに指示する、ま
まに従う、唯物論者の真に勇氣ある正しい態度とは相容
れないところの、主観的理由に自己の一面の主観から出
発し、全面的な事実を一面化する観念論者の態度である。
我々にとって重要なことは、もともと川島派以外の何物
でもなかった永田指導部が川島派と対立し、川島派を肅
清するに至ったまぎれもない事実の論理（「真理」）を分
析し、展開する（「意識化する」）ことであって、その他
のことではない。

川島論文への批判的点検を終えた我々にとって、真実
はすでに明らかである。日本革命の具体的実践の戦術的
発展段階が、自然発生的「経済主義的」段階であった歴史
的時期において、マルクス・レーニン主義の普遍的真理
である、プロ独学説（革命の問題は国家権力の問題であ
るといふ学説）から出発し、それを日本革命の具体的実
践と結びつけるべく打ち樹てられたところの、「敵の規
定」「アメ帝と日本独占」（アメ帝と日本独占の関係は、
支配・従属関係が主で矛盾関係が従の関係）、戦術「
反米反独占の人民独裁」「プロ独」、戦術「アメ帝とも
日本独占とも闘う」といふ、革左（神）の政治路線は、
第一に、日本革命の具体的実践の戦術的發展段階が自然
発生的段階であったがために、プロ独学説を、日本革命
の具体的実践と内的に、結びつけることが出来ていず、

革命の具体的実践と結びつけることが出来るし、また結
びつけなければならず、そして、プロ独学説が単に、戦
略のみの普遍的真理ではなく、「敵の規定、戦術、戦術」
の政治路線全体を貫く普遍的真理であることを正しく把
握することが出来るし、また把握しなければならぬこと
と、これが第一の課題であり、そして、この第一の課題
の解決の前提の上で、第二に、革左（神）はその自然発
生的「経済主義的」政治路線をば、プロ独学説、革命の問
題は国家権力の問題であるという観点で、意識的「政治
主義的」政治路線に意識化しなければならぬこと、これ
が第二の課題である。もともと川島派であった永田指導
部が、川島派と対立し、そして川島派を肅清するに至っ
た事実の論理は、この二つの課題を解決すべき任務を川
島派と共通に荷っていた永田指導部が、この二つの課題
を解決することが出来ず、にも拘らず、この二つの課題
の解決を強制されるという事情の下に、「革左（神）」の
政治路線が日本革命の具体的実践の戦術的發展段階が自
然発生的段階であったがために、プロ独学説を日本革命
の具体的実践と内的に結びつけることが出来ず、そのた
め、プロ独学説を戦術だけの普遍的真理にしてしまっ
てあり、プロ独学説が「敵の規定、戦術、戦術」の全体を
貫く普遍的真理である事を把握していなかった欠陥を固定化
してしまい、そして日本革命の、意識的「政治主義的」政

そのために、プロ独学説を戦術だけの普遍的真理にして
しまっており、プロ独学説が、「敵の規定、戦術、戦術」
の政治路線全体を貫く普遍的真理であることを把握し得
ていず、第二に、革左（神）の政治路線は、日本革命の
意識的「政治路線」としての「敵の規定」「侵略者米帝と
の手先き、売国の日本軍国主義」（アメ帝と日本軍国主義
の関係は、支配・従属関係が主で、矛盾関係が従の関係）、
戦術「反米反軍国主義の人民独裁」「プロ独」、戦術「
「反米反軍国主義の闘う革命的戦術」といふ政治路線
の萌芽としての、自然発生的「経済主義的」政治路線であ
る。従って、革左（神）に問われていたことは、次の課
題であった。すなわち、第一には、「革左（神）」の政治
路線が、日本革命の具体的実践の戦術的發展段階が自然
発生的段階であったがために、プロ独学説を日本革命の
具体的実践と内的に結びつけることが出来ていず、その
ため、プロ独学説を戦術だけの普遍的真理にしてしまっ
てあり、プロ独学説が「敵の規定、戦術、戦術」の全体
を貫く普遍的真理を把握していなかった」欠陥を、日
本革命の具体的実践の戦術的發展が意識的「組織的」段
階に発展した段階で、言い換えると、日本革命の具体的実
践の戦術的發展段階が、国家機構、権力機構との真の対
峙、対決を日程にのぼらせるようにまで発展した段階で、
実践を媒介にしてはじめて、克服し、プロ独学説を日本

治路線の萌芽としての自然発生的「経済主義的」政治路線
を固定化してしまつたということである。川島派と永田
指導部が共通のもともとの革左（神）の政治路線自身が
解決されることを（意識化されることを）求めている二
つの課題の真の正しい解決を、あるいは意識的に、ある
いは無意識的に要求した部分に対する、真の正しい解答
を与えることが出来なかつた部分の対立の発生とその官
僚統制の破綻、これが、永田指導部の犯した肅清の誤り
の論理である。従って、正しい政治路線を持つていた川
島派に対する正しい政治路線を放棄した永田指導部の対
立、肅清という川島派の声明文の主張は詭弁である。正
しい政治路線の獲得を要求した川島派に対する、この
要求に答えることの出来なかつた永田指導部の対立、肅
清、これが真実である。川島派も、永田指導部も共に、
今回の貴重な失敗の教訓を正しく総括する中から、正し
い政治路線を獲得しなければならぬのである。

一九七三年五月三十一日

以上

（注一、川島派と対立するに至った旧川島派である永田
指導部の破産の具体的事実の具体的分析を媒介するこ
となく、永田指導部の破産の事実をもって、直接無媒介
に、川島派の破産を云々し、あるいは木下派が正しかつ

たとする木下派系の同志達の総括について、我々は基本的疑問を提出しておかねばならない。このような「総括」は現在のよ様な情勢の下では、極めて容易に説得力を持つような種類の一種のデマゴギーになりかねないと考えるからである。永田指導部は旧川島派であるとともに、明確に旧木下派でもある、もし、永田指導部の破産が無媒介的に、川島派の破産とされるなら、何故、木下派の破産とされないのか？「全ゆる結論は、それに至る過程、媒介を抜きにすれば、無_レ空虚、無内容である」重要なことは、具体的事実の具体的分析を媒介にして結論を論証的に提出することである。具体的事実の具体的分析—これは、マルクス・レーニン主義の魂である。）

総括の深化のためにそのII

花園 紀男

(一)

「声明文」に対するB同志の第一の問題提起、
△何故、これまでの大衆闘争、政治闘争が自然発生的であったのかをもう一步、説明する必要があるのではないか。▽についての覚え書き。

この問題については、国際共産主義運動と日本共産主義運動の主体的条件の形成における歴史的發展の特殊な事情を説明しなければならぬ。すなわち、一九五六年のフルシチョフによるスターリン「批判」によって公然化した国際共産主義運動のスターリン「主義」と現代修正主義の二つの路線への分裂と、現代修正主義による公認の国際共産主義運動指導部乗っ取り（これは、日本共産主義運動でも、六全協を境にして、スターリン「主義」と現代修正主義の二つの路線への分裂、宮本現代修正主

義による日共中央乗っ取りとしてあらわれる）によってはじまった国際共産主義運動の主体的条件の形成における歴史的發展の特殊な事情のことである。ここでは、この事情の全面的説明を与える準備はないので、次の指摘だけに止めておくことにする。

つまり、第一に、国際的にも、国内的にも、公認の共産主義運動指導部が、現代修正主義に乗っ取られ、しかも、第二に、これに対してスターリン「主義」が極めて無力であることが暴露されたこと、この二つの事情によって不可避に各国の共産主義運動は、自分の頭脳と自分の足で立つことを強制されたということである。これは各国の共産主義運動が、マルクス・レーニン主義の普遍の真理の各国革命の具体的実践への機械的適用としての、いわば外国製の運動の段階（これをスターリン「主義」の

段階と呼ぶことが出来る)から、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と各国革命の具体的実践との真の、内的結合の段階への歴史的發展が不可避となったことである。これは、国際、国内共産主義運動の実に偉大な新しい歴史の段階がはじまったことを意味した。この歴史の段階は、不可避に、まず、ヨチヨチ歩きからはじめて成長していかなければならなかった。このヨチヨチ歩きの段階が我々が日本革命運動の自然発生的段階と呼んでいる段階のことである。従って、我々が日本革命運動の自然発生的段階、あるいは、意識的段階と呼ぶとき、それは、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践を真に、内的に結びつけはじめた日本革命の新しい歴史段階における二つの發展段階の事であつた。何か無からの歴史としての自然発生的段階や、意識的段階であるかの如く誤解して考へてはならない。全ゆる自然発生性とは、ある意識的段階における自然発生性である事は自明の事である。一九五六年までの日本革命の歴史の経験を前提した、最も意識的な運動の發展について、我々は分析してゐるのである。

以上の指摘に止めておく。

(一)

「声明文」に対するB同志の第二の問題提起(「声明文」は「連赤」の「誤り」を結局のところ、官僚体制と自由な思考の停止という形で具体的に述べていますが、問題は「連赤」の官僚体制が、大衆から学ぶことを知らない、又学ぼうにもそれを許さない政治路線から不可避に生じた思想(典型として党が「革命的」グループを指導する司令部になったことがある。又、それを生んだ指導する「ことの把え方」)により作り上げられていったものであり、思考は停止したのではなく、全くブルジョア的に生き続けていたと言ふと思ひ、これらについて、「声明文」の総括はやはり分析しきれていないように思ふます。√についての考察・覚え書き。

まず、「声明文」では、「連赤」指導部の犯した「誤り」は、日本革命運動が自然発生的段階から意識的段階への發展・轉換を要求した段階で「連赤」指導部が、自然発生的指導路線にしがみつき、意識的指導路線への轉換を要求した、「連赤」下部同志達を、官僚体制で押え込もうとして破綻した「誤り」である、と結論した。この結論は基本的に正しい。しかし、この結論では「連赤」

指導部の自然発生的指導路線の破綻の「誤り」が、ブルジョア思想によって、遂行されてゐる事実を十分に位置づけてゐない。B同志の問題提起は、この不十分さを指摘してゐるものだと考へるので「声明文」の総括の方法に従ひ、「声明文」の総括を深めるといふ形で「連赤」指導部の「誤り」がブルジョア思想で遂行されてゐる事実を位置づけていくことにする。但し、この小論では、戦術・組織路線の総括にかぎる。

A、我々の路線に照らしての「連赤」

指導部の犯した「誤り」の総括の深化

(A)「声明文」での我々の路線に照らしての「連赤」指導部の犯した「誤り」の点検、の再確認。√

我々は、前鋒の戦術・組織路線が自然発生的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線であつたといふ総括の中から、日本革命運動は、今や意識的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線への發展・轉換を要求してゐる、と結論した。(注)(一)

「連赤」指導部は自然発生的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線にしがみつき、意識的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の發展・轉換を意識的・無意識的に要求した下部同志達を官僚体制で押えつつづけ

たが、それが必然的に破綻し、反革命に転落した。(注)

(一)

注(一)……日本革命運動の歴史的發展が、「連赤」指導部に対し、自然発生的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線から、意識的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の發展・轉換を要求してゐたことは、浅間山莊銃撃戦によつてもっともリアルに証明されたといふことは考へる。浅間山莊銃撃戦は、「連赤」被指導部の質が、自然発生的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線の質ではなく、意識的擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線の質であつたことを否定できない事実をもつて示した。この点にこそ、浅間山莊銃撃戦の、日本革命運動に対する不滅の貢献がある。「連赤」の否定的「誤り」にも拘らず、浅間山莊銃撃戦は、日本革命を確実に一歩前進させた、現にさせてゐる。このことを見てとることの出来ない俗物の「粛清と銃撃戦は一体だ」といふような事しか言えない哀れな政治感情とは対照的に、革命的人民は、「連赤」の粛清を反革命と決めつけると同時に、浅間山莊銃撃戦に限りない共感を寄せせる政治感情を持つてゐる。そして、まさに、革命は革命的人民の事業であつて、俗物の事業ではないことだけは確かである。

注(一)への補足……浅間山莊銃撃戦は注(一)のように評価

すべきであって、従ってこの点において「声明文」が「浅間山莊銃撃戦において「連赤」の指導路線の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への発展・転換がcaちとられてゐる」としてゐるのは不正確である。「連赤」の指導路線の発展・転換は、「連赤」同志達によって、「連赤」の全実践と全理論の具体的かつ主體的総括の中から取り取られるべき、今後の課題である。

注(一)……「連赤」指導部の犯した「肅清」の「誤り」が反革命であることは、この誤りが陰謀による「連赤」新党のデッチ上げによるものであることよって証明されてゐる。陰謀による新党デッチ上げによる「肅清」は、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線から、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の発展・転換の要求に対し、「連赤」指導部がこの要求に応えることが出来なかつただけでなく、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線にしがみつき、それを固定化し、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の発展・転換の要求に対して敵対するに至つたことを示してゐる。ここで次のことを注意しておかねばならない。それは「連赤」指導部の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線は、それが固定化されない限り、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の発展・転換の要求に対して、敵対しな

って、我々は「連赤」指導部の犯した「誤り」に対して陰謀による新党デッチ上げによる「肅清」の「誤り」の前と以後を明確に区別し、前の誤りを、革命内部の誤りと規定し、以後の「誤り」を革命外の「誤り」に反革命と規定しなければならぬ。

注(二)への補足……注(一)の観点から我々が「声明文」において「連赤」指導部の犯した陰謀による新党デッチ上げによる「肅清」の「誤り」をも革命内部の誤りとしたのはまちがひである。

(補足)……意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線の立場に立ってゐた我々は何故、赤軍派森指導部の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の固定化と、それによる意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の転換要求への敵対に反革命化を許したのか？ 答は明白である。我々が自らの意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線と、森指導部の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線との間に、原則的分界線を引くことに明確でなかつたからである。我々が革左(神)永田指導部と同じ「誤り」を許したのも結局は、森指導部に対する、この我々の誤つた対応に帰因する。この点の教訓を明確にしておこう。と言うのも、「連赤」の総括をめぐって日和見主義(清算主義と中間主義連合)と革命主義の党内闘争が現に存在し、日和見主義による公然たる党内闘争の否定(現段階

では、すでに党内闘争の否定の段階ではなく、党の二極分解(分派闘争の否定)を二度と許してはならないからである。何故日和見主義と革命主義の対立がすでに党内闘争の段階でなく、分派闘争段階であるのかといえ、別党派になつた森指導部のこととは別にしても、日和見主義(中間主義)の一部が清算主義に成長したからである。そのことよって、残りの日和見主義は中間主義となり、独自の歴史的寿命はすでに尽きてゐるからである。党的紐帯とは清算主義反対の約束のことであつて、この約束が破棄されるとき、そこにはすでに党的紐帯は存在しない。清算主義反対の約束は紐帯が生きてゐる限り、党は最後の勝利に至る長い困難な道程において、全ゆる敗北、失敗、誤りを自ら乗り越えて進軍することができ

る。

☆……赤軍派において、前鋒の挫折の総括が一定程度すすみ、その中から前鋒路線、すなわち、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線から意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への党同盟の指導路線の発展・飛躍・転換を我々が獄中から提起したのが七〇年八月である。この路線転換に俊巡し、あるいは反対しつづけた獄外指導部に対して、我々が脱党声明を提出したのが七〇年十二月である。

この脱党声明は、獄外指導部の自然発生的大衆軍事闘

争戦術・組織路線と我々の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線との間に、明確な分界線を引いたことにおいて極めて革命的であつたが、獄外指導部が路線転換に対して俊巡し、あるいは反対してゐたといえ、未だ、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線を固定化したわけではなく、路線転換要求に敵対したわけではなかつた。七〇年十二月段階では党内闘争の組織原則を逸脱するものであり、この点で誤つてゐた。党内闘争の組織原則を堅持しながら、獄外指導部の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線と我々の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線との間に明確な分界線を引くこと、すなわち、原則的党内フタクの建設、これが当時我々の取るべき唯一の正しい方策であつた。そして、この方策は当時極めて現実的な力を持つた方策であつたのである。

しかし、我々はそうせず、脱党声明の組織原則上の誤りを自己批判したに止まり、脱党声明以前の自然発生的党内闘争に復帰したに止まつた。これがその後の森指導部による党同盟の私物化をやすやすと許し、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の固定化とそれによる、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の転換要求に対する敵対に反革命化を許したのである。以上が我々の教訓である。(七〇年)七一年の赤軍派敵対部発行。「獄中通信」第一号(第七号を参照すべし)。

(A)で再確認した、「声明文」での「我々の路線に照らしての「連赤」指導部の犯した「誤り」の点検」の中に、「連赤」指導部の犯した「誤り」が小ブルジョア思想によって遂行されている事実を位置付けていく。この問題は、(A)で再確認した「声明文」の総括が、日本革命運動の歴史的發展を中心にした、いわばタテ軸の総括であるのに対して、日本革命運動の内的階級構造の、いわばヨコ軸の問題である。

我々は前鋒路線が、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線であった、という総括の中から、日本革命運動は今や、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線の歴史的發展段階への突入を要求していると結論した。これは、基本的に正しかった。それは(A)で再確認した通りである。ところで、我々が一般的に「日本革命運動」と規定した総括対象は、具体的には、「プロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」である。従って我々が(A)で再確認したところの、日本革命運動の歴史的發展という観点において、一般的に総括した、「声明文」での「我々の路線に照らしての「連赤」指導部の「誤り」の点検」は、プロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の歴史的發展という観点において、具体的に再総括される必要がある。これを結論的に叙述していくことにする。まず前提として、次のことを押えておかなければなら

軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の発展・転換を、意識的・無意識的に要求した下部同志連を官僚体制で押えつつけようとして、破綻した。」と。さて、(A)での「声明文」での「我々の路線に照らしての「連赤」指導部の犯した「誤り」の点検」の再確認を、右のように書き換えてはじめて我々は、その中に「連赤」指導部の犯した「誤り」が小ブルジョア思想によって遂行されている事実を具体的に位置づけていくことが出来る。それをまず、直接に、結論を述べてそれを注で説明することにする。

〔結論〕……我々が「声明文」で「連赤」指導部の犯した「誤り」を、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線にしがみつき、意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の転換を意識的・無意識的に要求した下部同志連を、官僚体制で押えつつけようとして破綻した。」と総括したのは不十分であった。つまり、「連赤」指導部のしがみついた路線は「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線そのものではなく、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織

ない。それは、「プロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の具体的な内的構造についてである。それは一般的に言って「プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」と規定することが出来る。しかし、これはまだ具体的ではない。つまり、「プロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」指導階級、前衛階級としてのプロレタリアートは、それ自身、その先遣部隊である党「共産党」プロレタリアート党によって指導されているのであって、従って、「プロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」とは具体的には、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」である。

右の前提によって、我々は(A)での、「声明文」での、「我々の路線に照らしての「連赤」指導部の犯した「誤り」の点検」の再確認は、次の様に書き換えることが出来る。すなわち、「我々は、前鋒路線が自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線であったという総括の中から、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」は今や意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への発展・転換を要求していると結論した。これに対して、「連赤」指導部は、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線にしがみつき、意識的大衆

路線の一部である、小ブルジョアジーの路線であった。従って、その路線は、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である、小ブルジョアジーの自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織路線と規定することが出来る。(注三、注四)

従って、「連赤」指導部の犯した「誤り」は具体的に、次のように規定される。すなわち、「連赤」指導部は、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である小ブルジョアジーの自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織路線にしがみつき、「プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の転換を意識的・無意識的に要求した下部同志連を官僚体制で押えつつけようとして破綻した。従って、「連赤」指導部の犯した「誤り」には、日本革命運動の歴史的發展に対する反動としての「誤り」と小ブルジョアジーのプロレタリアート、人民に対する自己権力主義的「ファシズムの階級抑圧(大きな観点から言えばブルジョア独裁の変種)としての「誤り」の二つの側面がある。

以上が結論である。

注(三)……「連赤」森指導部の路線が、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である小ブルジョアジーの自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織路線であったことを、森指導部の文書である「(一九七一年)九・一四統一革命軍「赤軍」結成記念集会、基調報告―共産同赤軍派」と「(同集会への)赤軍中央軍アビール」から、森指導部の戦術・組織路線に関する若干の箇所を引用して論証的に説明していくことにする。この資料を使うのは手元に現在これがあるからであって、他意はない。我々の引用が森指導部の戦術・組織路線の典型であって、決して特殊な箇所ではないこと、森指導部のどの資料(注、森指導部の文書資料として我々は次のものを掲げておく。「赤軍特別号」(71/1)「獄中通信七号の序文」(71/2)「赤軍8号」(71/3)「銃火」(71/8)「九一四集会基調報告と中央軍アビール」(71/9)「12/18集会への中央軍アビール」(71/12)によって同じような箇所をたやすく引用し得ることを、を誰でも認めるはずである。

☆「本格的なゲリラ戦争―せん滅戦の幕を切って落した6/17明治公園爆弾闘争以後の、非合法軍事闘争の広がり、深まり」(「基調報告」)

☆「60年代後半の階級闘争を担った多くの先進的労働者、

熊本、沖繩等、地域的なゲリラ闘争とともに、今後一層重要な役割を荷うだろう。特に従来の叛軍、基地闘争と結合し、新たな地域拠点を、政治・軍事的に生み出すこの闘争は、米軍―自衛隊を実際にせん滅―解体することによってアジアの革命戦争の一大拠点に転化し得る条件を保存している沖繩でのゲリラ闘争を我 myself が創出し、これと一体化するためにも必須の課題である。こうして、東京等の都市ゲリラ、三里塚等の地域ゲリラ、軍事基地ゲリラ等を一体化して複合的に発展させていくのが我々の今後の課題である。」(「」)

☆「建党建軍ゲリラ戦―大衆の実力闘争を一体化させなければならぬ」(「中央軍アビール」) (「傍線は引用者による」)

(I)……まず第一に、「連赤」森指導部の路線が「プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部であることを、我々は右に引用した中の次の箇所によって確認することが出来る。すなわち「本格的なゲリラ戦争―せん滅戦の幕を切って落した」とされている「連赤」森指導部の戦術・組織路線の実践としての「6/17明治公園爆弾闘争」が「60年代後半の階級闘争を荷った多くの先進的労働者、学生、戦闘的農民は、武装闘争に移行しつつあり、実際のな軍事闘争批

学生、戦闘的農民は、武装闘争に移行しつつあり、実際のな軍事闘争批判、合法闘争主義の温存の中心であった、いわゆる八派は解体し、各派ボロボロのままに下からの左派―武装闘争への移行がはじまっている。

この中から多くの武装闘争グループが生れている。最も典型的には成田闘争を拠点として闘っている先進的な労働者、学生と農民の、機動隊の拠点包囲に対する内側からの武闘―拠点の内外、いわば成田全域に機動性を発揮して機動隊を逆包囲する様なゲリラ闘争―成田全域と東京を結びつけ同時一体的な多発的な爆弾闘争を行なうゲリラ闘争と地域ゲリラ闘争の特殊性をフルに生かし、すでに、地域ゲリラから恒常的な都市ゲリラ戦線を生む、創造的な発展がcaちとられている。又、都市ゲリラでは権力機関の所在地、警察宿舎やその他の機関を爆破する闘いや、6/17の様に、大衆闘争の前面で一挙に30数名の機動隊を打ち倒し、その内の一をせん滅する闘いがあり、米軍―自衛隊に対する闘争では、基地爆破―警備兵せん滅の闘いに発展している。沖繩での米軍基地解体―米軍政打倒、自衛隊駐屯阻止闘争の闘いとともに、米軍基地の連続的な自衛隊移管(立川基地、横須賀軍港等)に対するゲリラ戦争は、都市での機動隊、治安警察のせん滅―武器奪取、権力機関の破壊を獲得するゲリラ闘争や三里塚、

判、合法闘争主義の温存の中心であった、いわゆる八派は、解体し、各派ボロボロのままに下からの左派―武装闘争への移行がはじまっている。この中から多くの武装闘争グループが生れている。……都市ゲリラでは……6/17のように大衆闘争の前面で一挙に30数名の機動隊を打ち倒し、その内の一をせん滅する闘いがあり、……」として位置づけられていることによってである。これほど美事に、「連赤」森指導部の路線が「プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部あることを浮き彫りにすることはむづかしい。「60年代後半の階級闘争を荷った多くの先進的労働者、学生、戦闘的農民は、武装闘争に移行しつつあり」、そして、60年代後半の階級闘争を指導した「いわゆる八派」が、その指導性を喪失し、「実際のな軍事闘争批判・合法闘争主義の温存」から「解体」に至り、指導を失った「多くの先進的労働者、学生、農民」の「各派ボロボロのままに、下からの左派―武装闘争への移行がはじまっている」こと、そして、「この中から多くの武装闘争グループが生れている」こと、これらのことは全くその通りである。

ところでこれらの事は、我々に次の帰結を引き出すことを要求する。すなわち、「いわゆる八派」の指導の

下に「60年代後半の階級闘争を荷った先進的労働者、学生、農民」が「八派の軍事闘争批判・合法主義の温存」の指導を、自然発生的にのりこえ、「各派ポロポロのままに下からの左派―武装闘争への移行をほじめ」たこと、これは、直接には、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動が「60年代後半の」自然発生的に擬似的大衆実力闘争戦術・組織路線の段階から、その極限段階の自然発生的に擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線の段階へ移行・発展したことであり、従って、これは萌芽的に、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動が今や、意識的に真の大衆軍事闘争戦術・組織路線への上からの、指導路線の発展・転換を要求しているのである。(注)……もともとこれが一面で正しく、一面で誤っていることを我々は(B)でみる。)

ところで森指導部にとって、このような帰結を引き出すことは問題にもなっていない。森指導部は「いわゆる八派」の指導の下に、「60年代後半の階級闘争を荷った先進的労働者、学生、戦闘的農民」の八派の「軍事闘争批判・合法主義の温存」の指導の自然発生的にのりこえ、すなわち、指導性を喪失し、「解体」した八派の「各派ポロポロのまま」の「下からの左派―武装闘争への移行」を、いかえれば、プロレタリアートの指導

の歴史的な一つの戦術的発展段階の中の二つの異った戦術・組織形態であるならば、両戦術・組織形態は「一体化させ」たり、結合させたり、組み合わせたりすること出来るし、又せひとも「一体化させなければならぬ」であろう。しかし、(自然発生的) 建党建軍ゲリラ戦(戦術・組織路線)と(自然発生的) 大衆実力闘争(戦術・組織路線)とは、それぞれ、日本革命の歴史的な二つの異った戦術的発展段階の総路線であり、従って、両路線は「一体化させ」たり、結合させたり、組み合わせたりすることが、そもそも不可能なのである。森指導部の戦術・組織論上の二元論的混乱は明白である。

第(2)に、第(1)で確認したところの、森指導部のこの戦術・組織論上の二元論的混乱は、森指導部の戦術・組織路線、すなわち、自然発生的建党建軍ゲリラ戦、戦術・組織路線がプロレタリアートの戦術・組織路線でなく、小ブルジョアジーの戦術・組織路線であることを暴露する。

つまり、一方において、森指導部の自然発生的建党建軍ゲリラ戦、戦術・組織路線が森指導部の戦術・組織論上の二元論にも関わらず、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部であることは、すでに(I)で確認した通りであるが、他方に

するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的に擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線に、跪拜し、賛美し、そして自らの路線が、その一部であることを、公然と自認してはばからないのである。(II)……第二に「(I)で確認したプロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動」の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である「連赤」森指導部の路線が、更に小ブルジョアジーの自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織路線であることを、先に引用した次の箇所、「建党建軍ゲリラ戦―大衆実力闘争を一体化させなければならぬ。」(「中央軍アビール」)によって説明していくことにする。

まず、この引用文の「建党建軍ゲリラ戦」が意識的なものでなく、自然発生的な、建党建軍ゲリラ戦であることは、すでに(I)で確認した。また、この引用文の「大衆実力闘争」も自然発生的大衆実力闘争であることは自明である。以上を前提して、「建党・建軍ゲリラ戦―大衆実力闘争を一体化させなければならぬ。」という一文を分析していく。

第(1)に、この引用文は森指導部が、戦術・組織論上で、二元論的混乱におちいっていることを示している。自然発生的建党建軍ゲリラ戦(戦術・組織路線)と自然発生的大衆実力闘争(戦術・組織路線)が、もしも日本革命

において、森指導部の「自然発生的建党建軍ゲリラ戦戦術・組織路線と、自然発生的大衆実力闘争戦術・組織路線とを一体化させなければならぬ」とする戦術・組織論上の二元論的混乱は、森指導部の自然発生的建党建軍ゲリラ戦戦術・組織路線が、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の一つの歴史的発展段階としての自然発生的大衆実力闘争戦術・組織路線総体の次の発展段階としての自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線のことではないこと、従って、森指導部の路線が、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動、自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の指導部、すなわちプロレタリアートの路線ではないことを暴露する。すなわち、森指導部の自然発生的建党建軍ゲリラ戦戦術・組織路線は、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の総路線ではなく、プロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部としての、自分たちだけの小衆軍事闘争戦術・組織路線であり、これはプロレタリアートの指導するプロレタリアートと小ブル

ジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争

戦術・組織路線の一部であるところの小ブルジョア階級の
小衆軍事闘争戦術・組織路線であることに他ならない。
これが「連赤」森指導部の戦術・組織路線の具体的規定
である。(注三)終る。)

注四)……「連赤」永田指導部の路線が、森指導部と同
じく、プロレタリアート党の指導するプロレタリアー
トと小ブルジョア階級の統一戦線運動の自然発生的大
衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である小ブルジョア階
級の自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織路線であること
の説明は省略する。注(一)の説明がそのまま、永田指導部
の路線の説明ともなっていることは誰でも認めるはずだ
からである。なお、我々は「川島蒙同志への手紙」(一
九七二年九月)で極めて不十分ではあるが、この点につ
いての若干の説明を与えておいたことを付記しておく。

(補足)……プロレタリアート党の指導するプロレタ
リアートと小ブルジョア階級の統一戦線運動の意識的、大
衆軍事闘争戦術・組織路線の立場に立っていた我々は、
何故、赤軍派森指導部のプロレタリアート党の指導す
るプロレタリアートと小ブルジョア階級の統一戦線運動
の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線の一部である
小ブルジョア階級の自然発生的小衆軍事闘争戦術・組織
路線の固定化と、それによるあるいは意識的、或いは
無意識的なプロレタリアート党の指導するプロレタ

「声明文」に補足修正すべき点はないので省略する。

(B) (B)の中に、「連赤」指導部の犯した「誤り」が小ブ
ルジョア思想によって遂行されている事実を位置づけていく。

結論(その一)……我々が、前鋒路線は、自然発生的、
擬似的大衆軍事闘争戦術・組織路線であり、従って、
日本革命運動はプロレタリアート党の指導するプロレ
タリアートと小ブルジョア階級の統一戦線運動は、今
や、意識的、真の大衆軍事闘争戦術・組織路線への路線
転換を要求しているとした、前鋒の最初の総括は完全で
はなかった。つまり前鋒路線(プロレタリアート党
の指導するプロレタリアートと小ブルジョア階級の統一
戦線運動)の自然発生的擬似的大衆軍事闘争戦術・組
織路線)は、自然発生的擬似的大衆政治闘争戦術・組
織路線の歴史的に不可避の必然的發展として生れたので
あるから、我々が、前鋒の総括の中から導き出すべき路
線は、プロレタリアート党の指導するプロレタリアー
トと小ブルジョア階級の統一戦線運動の意識的、真の
大衆軍事闘争戦術・組織路線に歴史的に不可避の必然的
發展として成長する(成長させる)ところの意識的、
真の大衆政治闘争・戦術・組織路線でなければならな
かった。

従って、我々の路線(プロレタリアート党の指導

アートと小ブルジョア階級の統一戦線運動)の意識的、大
衆軍事闘争戦術・組織路線への指導路線の転換要求に対
する敵対的、反革命化を許したのか? 答は明白である。
我々が自らのプロレタリアート党の指導するプロレタ
リアートと小ブルジョア階級の統一戦線運動の意識的、
大衆軍事闘争戦術・組織路線と、森指導部のプロレタ
リアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョア
階級の統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・
組織路線の一部である小ブルジョア階級の自然発生的小
衆軍事闘争戦術・組織路線との間に、明確な原則的、分界
線を引くことに自覚的でなかったからである。(我々が
革左(神)永田指導部の「誤り」を許したのも、結局は、
我々のこの森指導部に対する対応の誤りに帰因する)こ
の教訓を忘れてはならぬ。

B、**「連赤」指導部の犯した「誤り」に**
照らしての、我々の路線の点検と、それ
による**「連赤」指導部の犯した「誤り」**
の正確な具体化の深化

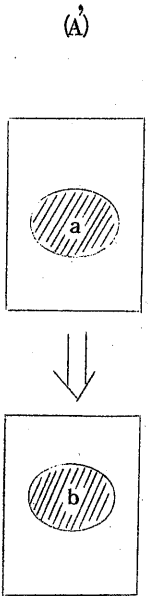
(B) (B)「声明文」での「連赤」指導部の犯した「誤り」
に照らしての我々の路線の点検とそれによる「連赤」指
導部の犯した「誤り」の正確な具体化の再確認。V「

するプロレタリアートと小ブルジョア階級の統一戦線運
動の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線)は、一方
において、それが、プロレタリアート党の指導するブ
ルジョア階級と小ブルジョア階級の統一戦線運動の
自然発生的段階から、意識的段階への発展・飛躍・転換
をかちとっている点で、革命的であり、正しいが、他方
において、それが、意識的大衆政治闘争戦術・組織路線
の段階を飛び越えている点で左翼冒険主義の誤りを犯し
ている。

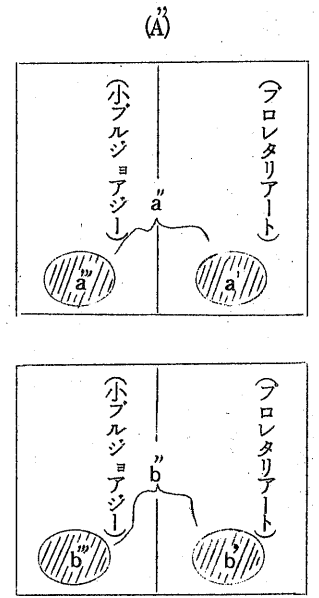
結論(その二)……「連赤」指導部が、プロレタリ
アート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョア階
級の統一戦線運動の自然発生的擬似的大衆軍事闘争
戦術・組織路線の一部である、小ブルジョア階級の自然
発生的擬似的小衆軍事闘争戦術・組織路線を固定化し、
我々のプロレタリアート党の指導するプロレタリアー
トと小ブルジョア階級の統一戦線運動の意識的、真の大
衆軍事闘争戦術・組織路線への指導の転換の要求に敵対
し、反革命化するに至った「誤り」は、一方において、
第一に、プロレタリアート党の指導するプロレタリア
ートと小ブルジョア階級の統一戦線運動の自然発生的
発展段階から、意識的、組織的な発展段階への歴史的、前
進に対する反動としての「誤り」であり、第二に、小ブ
ルジョア階級のプロレタリアート、人民に対する自己権

カ、主、義、的、フ、ラ、ン、ク、の、階、級、抑、圧、(大、き、な、観、点、か、ら、言、え、ば、プ、ル、ジ、ョ、ア、独、裁、の、変、種)と、し、て、の、「誤、り」で、あ、り、他、方、に、お、い、て、我、々、の、路、線、が、左、翼、冒、険、主、義、の、誤、り、を、犯、し、て、い、る、こ、と、に、対、す、る、反、対、で、あ、る、点、に、お、い、て、我、々、の、路、線、に、対、す、る、誤、つ、た、手、段、に、よ、る、修、正、要、求、で、あ、る、と、い、わ、な、け、れ、ば、な、ら、な、い。

C、最後に、(A) (A) (B) (B) のそれぞれの
総括過程を一目でわかるように、簡単に図
式化してしめくくることにする。

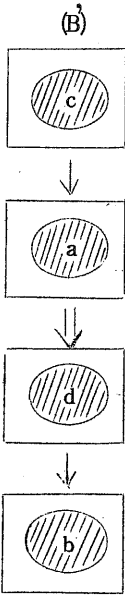


a.....日本革命運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線
b.....日本革命運動の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線

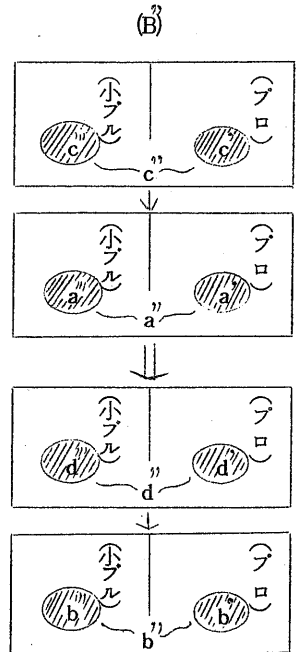


aとa.....プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の自然発生的大衆軍事闘争戦術・組織路線
aとa.....aの一部である小ブルジョアジーの

bとb.....プロレタリアート党の指導するプロレタリアートと小ブルジョアジーの統一戦線運動の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線
bとb.....bの一部である小ブルジョアジーの意識的小衆軍事闘争戦術・組織路線



c.....日本革命運動の自然発生的大衆政治闘争戦術・組織路線
d.....日本革命運動の意識的大衆軍事闘争戦術・組織路線



cとc.....プロレタリアートと小ブルの統一戦線運動の自然発生的大衆政治闘争戦術・組織路線
cとc.....cの一部である小ブルの自然発生的小衆政治闘争戦術・組織路線
dとd.....プロレタリアートと小ブルの統一戦線運動の意識的大衆政治闘争戦術・組織路線
dとd.....dの一部である小ブルの意識的小衆政治闘争戦術・組織路線

(注).....「連合赤軍」には、直接には、aとa、a、bとb、bの四つの路線が、あるいは意識的に、あるいは無意識的に存在していたのであり、そして、それら四つの路線全てが、dとd(dを含む)の路線を萌芽的に求めていたのである。そして、我々は「連赤」に直接に存在した、aとa、a、bとb、bの四つの路線は全て、革命内部の路線であるということを確認しておかねばならない。「連赤」指導部の路線はaであるが、それも固定化されない限り、あくまで革命内部の路線である。「連赤」指導部が、革命外の「誤り」を犯すに至り、反革命化したのは、革命内部の路線であるaを固定化し、「連赤」内に、あるいは意識的にあるいは無意識的に存在し、そしてdとd(dを含む)の指導路線を萌芽的に求めていた、他のaとa、a、bとb、bの全路線が、aの路線の「連赤」指導部に對して、直接には、bとb(bを含む)への、間接的には、dとd(dを含む)への、指導路線の転換を、萌芽的に要求したのに敵対するに至ったからである。注意しておくべきは、「連赤」指導部は、自らの路線であるaを固定化することによって、自らの路線と同じでありながらそれを決して固定化してはいず、萌芽的にはやはり、dとd(dを含む)(直接には、bとb、b)の指導路線を求めていたaの路線にも敵対したの

だということである。革左(神)川島派の路線は固定化してないものの路線であったということが出来る。もともと川島派の中には、aとb、bとc、cとdの路線も一部には存在していたと我々は考える。だが、川島派の主流がであったことはほぼまちがいない。

(以上)

一九七三年六月八日

川島豪同志への意見

花園紀男

(一) 理論的には僕はあなた方(日共革命左派(神))は、前衛党のとらえ方を明確にすべきだと思っています。我々とあなた方との違いの全てはここにあります。これが一致すればすべてが一致してくる。つまり前衛党とは、意識的プロレタリアートです。小ブルインテリ、その他の出身者も前衛となることは勿論できません。しかし、それはあくまでも自己の出身階級から鉄鎖以外に失うべき何物も持たない労働者階級の階級の立場へ「転向」するという条件によってです。プロレタリアートは全人民の前衛階級であり、プロレタリアート党は、その前衛階級であるプロレタリアートの意識的部分です。あなた方は(日共系諸派全て共通ですが)前衛党(革命派)をばこの様にとらえていないように思います。プロレタリアートの外部においているように思います。「解放の旗十二号」に次のような一節があります。

「赤軍派は直ちに武装蜂起を起して直ちに権力奪取が

出来る」と「一瞬の蜂起」論を主張している。赤軍派は「一瞬の蜂起」論を「政府中枢の一挙のせん滅からプロレタリアート・人民のそれへの合流」と主張する。……(略)……米日反動権力が七二年に向けて沖繩ニセ返還を一大頂点として政治的・経済的矛盾を一点に集中する侵略戦争を着々と準備している今日、また増々多くの労働者が武装闘争、実力闘争、政治闘争の先頭に立ち、米日反動権力とまっ向から対決している今日、労働者の広範な武装蜂起は現実的に基盤をもっている。

しかし、労働者が武器をとって決起するかは、革命派の武装闘争・ゲリラ闘争の成長の度合にかかっている。

他方、ゲリラ闘争による軍事的備えがなければ労働者の武装蜂起が決行された際に指導性を発揮することは不可能である。

更に、労働者の武装蜂起が一度で勝利すると考えるのはまちがいであり、強大な米日反動権力を一度ばかりの自然発生的な蜂起で不意をつくことは出来ないし、又敵が強大であることは一度ばかりの蜂起の中で革命派がその指導権を確立できるものではないということであり、強大な米日反動権力との軍事的対決は長期にわたる人民戦争となり、「闘争、失敗、再び闘争、再

び失敗、再び闘争、最後に勝利」という長期の過程をへる以外ない。経済闘争・政治闘争、カンパニア闘争、実力闘争、ゼネスト、自然発生的武装蜂起、その他全ての闘争がゲリラ闘争と直接・間接に呼応して闘われるのである。偉大な人民戦争の一環として闘われるのである。このように赤軍派は……「一瞬の蜂起」論をかかげているためゲリラを意識的に展開できずにいる。」

「労働者の武装蜂起が決行された際に」というこの外的な発言は一体何でしょう？ 労働者の武装蜂起の決行はまさに、労働者階級の先頭部隊である意識的プロレタリアート(前衛党、革命派)が決定することです。ここにはっきりと、あなた方が自らを労働者階級の先頭部分として自覚していないことが、そして、自らを労働者階級とは別個の地点においていることが示されています。赤軍派の「一瞬の蜂起」論は、労働者階級の先頭部分である赤軍派が全労働者階級、人民の現下の唯一の任務として提起しています。そして、赤軍派はこの「一瞬の蜂起」論の総括の中からゲリラを提起したが、それはあくまでも、労働者階級の先頭部分である赤軍派が全労働者階級人民の現下の唯一の任務として提起しています。ところが、あなた方のゲリラは労働者階級の外部にある、あなた方「革命派」の任務、行動方針、戦術にすぎません。自ら

を労働者階級の意識的部分、先頭部隊、文字通りの前衛として位置付けず、労働者階級の外部にある「革命派」として位置付ける限り、そこからは、主観的によりのような戦術も提起することができません。

しかし、プロレタリアート党を意識的プロレタリアートと規定し、位置付けるならば、プロレタリアート党の戦術は、客観的歴史現実に決定されてきます。革命運動とは、意識的プロレタリアートである前衛党（革命派）が即目的自然発生的無意識的プロレタリアートと全人民をその先頭で指導する全プロレタリアート・人民の運動のことです。ここから、もしも意識的プロレタリアートである前衛党の方針が早すぎても遅すぎても、即時的プロレタリアート、全人民はついでこない結果が出てくることとなります。そして前衛党はこの結果によって（実践による検証によって）はじめて、左右の日和見主義を発見することが出来て、それを克服し、正しい戦術を手に行うことが出来ます。もしも、前衛党（革命派）をば、労働者階級の外部におくなら、前衛党の戦術の主観主義（左右の日和見主義）を発見し、克服していく、現実的歴史客観的保証がなくなります。以上です。

あなた方は客観的戦術というものを認めるでしょうか？これにぜひ答えて下さい。マルクス主義者は、それが労働者階級の利益に合致するものである限り、いかなる闘争手段、戦術、闘争形態も認めます。マルクス主義者は、決して、ある闘争手段によって、自らの手足をしぼる様なことはしません。しかし、同時に、マルクス主義者は、歴史上の一時期には、その時期を通じて一貫して押し進める、労働者階級、人民のとるべき、唯一の戦術、闘争手段、闘争形態（客観的戦術）を労働者階級と人民に責任をもって提起しなければなりません。この二つの命題は決して矛盾してはいないのです。この点、あなた方には混乱があると思っています。これも全ては、あなた方は、革命派前衛党のとらえ方に原因があると思っています。この点についてぜひ答えて下さい。

（一）我々は党建設の組織プランを次のように考えています。まず、党建設をめざす全ての連絡と意志疎通の可能な党派、個人によって統一戦線党（党内統一戦線）を作る。これが主体となって現実の大衆政治闘争、大衆経済闘争、大衆理論闘争の三つの革命実践とその指導の烈火の中で、綱領の具体化、戦略・戦術の緻密化、組織理論の確立と組織規約の具体化を進め、適当な段階で、党建設大会（第一回大会）を準備し、この大会を勝利して、党を生む。このように考えています。これに対するあなた方の意見を聞かせて下さい。そして、我々は、出来る

なら、今からただちに、革命左派（神）と労働党フラク、その他、意志一致可能なグループ、個人の党的統一戦線を具体化すべきだし、したいと思っています。早ければ早いほどよい。原則を堅持して活動するならば、必ずや大飛躍は時間の問題です。この点、あなた方の決断を期待します。以上。

今、日本革命の最大の試練の時と思います。断固として、共に革命の大道を前進しよう！

一九七二年九月二十日

川島 豪 同志へ

花園 紀男

A同志への手紙

花園紀男

（一）二段階戦略について。

僕は、すべての資本主義国（低開発諸国から高度に発達した先進諸国（勿論、米帝においても）に至るまでの）において、プロレタリア革命は、普遍的に二段階革命であると考えています。だから、革命左派（神）ともちがうわけです。革命左派（神）はアメリカ革命は社会主義革命だと考えています。（「情況」の渡辺論文、etc）僕は革命左派（神）は、このアメリカ革命の社会主義革命論ともう一つ彼らの党綱領の反米反独占の経済主義の誤りと合わせて考えて、彼らをブンド系の日帝自立論経済主義の裏返し、反米帝経済主義者だと判断しています。第一段階は、資本主義の経済的基盤の上での政治的上部構造の全人民武装を根幹とする民主的変革であり、第二

段階は、この資本主義の経済的基盤の上で可能な最高の民主的の上部構造(国家)の基礎の上での、政治的かつ経済的の社会主義革命です。この二段階革命の内容と形態は各国の経済的かつ政治的特殊性によってそれぞれ独得のものとなります。日本は高度に発達した資本主義国であり、経済的にはすでに帝国主義です。政治的にはアメリカに從属し、その下で軍国主義が復活しつつあります。そして、勿論政治的にも、アメ帝の世界反革命戦略体制の下で、一定程度相対的の独自に、帝国主義的となりつつあります。(日韓軍事条約、六九年の日米共同声明の極東条項、田中内閣の誕生etc)。ここから当面する日本、プロレタリア革命の第一段階の民主主義革命は、全世界人民、とりわけアジア人民の反米反日の民族・民主革命と固く結びついた反米反軍国主義の民族・民主革命となります。以上です。

(※勿論、米帝との経済的相互関係においては、從属面を主要側面とし、対立面を副次的側面としている。)

僕はA同志が革命の問題を経済主義的に思い込んでいるのではないか(マルクス主義をかじったばかりのひよこの時には必ずこの段階を通ります。)と思っています。資本主義国だから(現在、資本主義国でない国は社会主義国以外存在していません)当面の革命は社会主義革命だと。確かに、資本主義の経済的搾取、抑圧は、

ばならないのは、当面の民主主義革命の眼目は、それらの独占資本の収奪ではなく、政治的の上部構造の徹底的な民主的変革による人民主権の確立にあるということです。主権があれば全てを獲得できます。主権がなければ全てを失います。あえて言えば、独占は、労働民主独裁政府の手できちんと買上げていいのです。何も強制的収奪だけが革命的なわけではありません。従って、あくまでも、理論的には、当面の革命はブルジョア民主主義革命なのです。この革命のプロレタリアヘゲモニーをもって、プロ独と呼び、政治的の社会主義革命と呼ぶことも出来ません。つまり、資本主義の経済的基盤の上でのプロレタリア独裁ということです。これはそれほどわかりにくいことではないと思います。社会主義の経済的基盤の上でも、ブルジョア独裁があります(ソ連etc)。これは過渡期には根拠のある現象です。勿論、政治的の上部構造と、経済的の下部構造は最終的には一致するよう作用し合います。上部構造に下部構造が一致していくか、その逆か、またその中間的動揺かetcは、一切、階級闘争だけが決定権をもっているのです。以上で止めます。ぜひ、A同志の「批判」の参考にして下さい。

(二) 反米愛国のスローガンについて

社会主義革命によってしかなくなりません。だから、経済的にはすでに社会主義革命が日程のぼっています。しかし、問題は、その社会主義革命をどのような過程を通り、いかにして勝利するかという事です。現在ただちに、資本家達を経済的に収奪することができるとして、粉砕されるのではないでしょう。我々は、資本家達の経済的収奪のために、まずこの資本家達を政治的に防衛している現在の徹頭徹尾反労働者の、かつ反人民的国家機構を労働者のかつ人民的な国家機構におきかえなければならぬのではないのでしょうか。この点では、恐らくA同志とも一致するのではないのでしょうか。この内容で一致するならば、これを社会主義革命と呼ぶか、それとも、人民民主主義革命と呼ぶか、ブルジョア民主主義革命と呼ぶかetcは第二義の問題となります。と言うよりも、この革命を見る観点によっては、そのいづれも当たっているとも言えるからです。ただ、理論的に押えておくべきは、当面の民主主義革命の眼目は政治的の上部構造(国家機構)の変革にあり、経済的変革にはないということです。政治と経済は勿論いつても複雑にからみあっています。だから当面の革命でも、米系資本や売国独占資本etcは、すぐに強制収奪の対象となると思います。しかし、あくまでも我々の押えておかなければ

(1) このスローガンに対して、このスローガンが、ブルジョアの帝国主義的排外主義のスローガンだと考えて、革命的祖国敗北主義の観点から反対している同志達が案外に多いので、これについて僕の考えを書いてみます。第二次大戦の時の日米帝国主義間強盗戦争の具体的状況において、日本の労働者階級は自己の国際主義の立場と利益を、革命的敗北主義におかねばなりません。つまり、反米愛国のスローガンを粉砕すべきでした。では、現在の米帝支配下の日本軍国主義という具体的状況において、日本労働者階級は自己の国際主義の立場と利益を、革命的祖国敗北主義におくべきでしょうか。反米愛国のスローガンをかかげることは、ブルジョアの帝国主義的排外主義ででしょうか。現在、革命的祖国敗北主義のスローガンは、帝国主義的平和主義者の奴隷のスローガンではないでしょうか。次のように例えられます。つまり、米帝は日本人民の主権を土足で踏みつけておいて、民族主義などは時代おくれだ。国際主義万才!と言っています。これは帝国主義的国際主義であり、ブルジョアの帝国主義的国際主義ではないのでしょうか。ヤンキー帝国主義をたたき出せ!これこそ、日本労働者階級の国際主義ではないのでしょうか。反米愛国のスローガンこそが、真に全世界の反米の人民と、また米国民との真の連帯のスローガ

ンではないでしゅうか？ 米帝と闘う、これこそが、米
国人民との真の団結を生むのではないでしゅうか？ 全
ゆるスローガンは、具体的状況において、具体的に提起
されなければなりません。日本の青年達は、第二次大戦
時の帝国主義的愛国主義のながい経験の思い出が強すぎ
るために「あつものにこりて、なますを吹く」自然な傾
向をもっています。これは十二分に歴史的に根拠のある
ことです。しかしと言うよりも、だからこそ、マルクス
主義者はあくまでも科学的で意識的でなければなりません。
自然発生性に拝跪してはなりません。

(2) 反米愛国のスローガンには反対だが、反米には賛
成という同志たちも、案外多いので、これについても少
し書いてみます。この意見は、反米ということが政治的
には一体いかなる内容を意味するかを何一つ考えること
のできない意見です。反米ということは、米帝の日本侵
略反対ということであり、日本人民の民族自決権を戦い
とるということであり、日本人民の国家主権回復の要求
です。民族解放、民族独立の要求です。愛国というのは、
この民族主権の回復を要求しているスローガンです。だ
から、反米と愛国は、あるいは反米と救国は決して切り
離せません。何人かの同志は、反米愛国と言えば、ブル
ジョアジーの中の反米愛国派と区別がつかないではない

か、否彼等を後押しすることになるではないかと、だか
ら危険だといえます。これに対しては、我々はブルジョ
アジーの反米愛国派と断固手を結び、断固彼等を後押し
すると答えます。ブルジョアジーだから何でも反対とい
うのは全く小児病です。労働者階級の利益に合致するな
ら誰とでも手を結ぶのです。最後に、次のレーニンのべ
・キエフスキー（名代の帝国主義的経済主義者）批判を
引用しておきます。きつと参考になると思います。「彼
（ベ・キエフスキー）はつづけて言う。……『一般に
我々は、帝国主義に対するプロレタリアートの意識を激
化する一連の諸要求を、否定的な定式化の形では完全に
受け入れるが、この場合、現存制度の地盤の上にとどま
りながら、これに照応する肯定的な定式化を選択する何
らの可能性もないのである。戦争には反対だが、しかし、
民主的平和には賛成しない』……これはまちがいである。
最初の言葉から最後の言葉まで……。われわれは、
民主的平和に賛成である。ただそれが、今日のブルジョ
ア政治の下で……。『一連の革命なしに』可能であるかの
ようにいう欺瞞を警戒せよ、と労働者に言う。（注/日
共官本（修）の欺瞞もここにある。）……『帝国主義に
対するプロレタリアートの反抗意識を激化』するだけの
役に立ち、それと同時に、社会民主党が自ら権力を握っ
た場合に、これに該当する問題をいかに解決するか、と

いうことに対して積極的な解答を与えることの出来ない
『否定的』なスローガン、そういうスローガンは、社会
民主党には一つもないし、またありえない。一定の肯定
的な解決策と結びつかない『否定的』スローガンは意識
を激化させないで鈍らせるものである。なぜならこの様
なスローガンは一つの空語であり、叫びというだけのも
のであり、無内容の文言大言壮語であるから。（レーニン
『マルクス主義の漫画と帝国主義的経済について』）以
上です。

一九七二年九月二六日

花園 紀男

A同志へ

出版元 共產主義者同盟赤軍派
日本労働党建設準備委員会救対部

¥500